

---

# 逆転のカプリッチョ！

榎橘

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

逆転のカプリッチョ！

### 【Nコード】

N1593F

### 【作者名】

榎橋

### 【あらすじ】

小学生。子供裁判という子供たちの遊戯は、本当は酷く生真面目で、子供裁判で決まったことは、子供たちは必ず守っていた。子供の頃に出会っていた少年少女たちは、大人になって再会したとき、お互いをすっかり忘れていて、子供裁判の判決だって誰も守っていなかった。再会した少年少女たちの日常で繰り広げられる喜劇の幕が上がります。

逆転のカプリッチョ！

## 第一幕 【転校生の女の子がやってきましたの巻】

新しく越してきた女の子。

全校生徒の前で挨拶をした。

まだ小学三年生。

彼女は体育館のステージ上で、控えめに挨拶をした。

マイクに向かって、俯きながら。

新しくこの学校に転校してきました、山田梅です。

やまだうめ。

全校生徒が爆笑した。

いろんなところから「変な名前」と野次が飛ぶ。

先生が怪訝そうに「静かにしなさい」とマイクに怒鳴る。

山田梅はいたたまれなさそうに、俯いたまま顔を起こさない。

男子生徒がステージ上の彼女に向かって「うめさん、うめさん」

と名前を叫んで、女子生徒が嘲笑した。

山田梅は泣かなかつたし、逃げたりもしなかつた。

その場でじつと耐えている。

たまりかねた先生が

彼女は三年二組です。皆さん、仲良くしましょう。

と、取り繕うように言つて、山田梅をステージから降ろした。

夏目！

全校生徒が整列するほぼ中央あたりでぼんやりしていた夏目に、前に立っていた松太郎が振返つて夏目の名を呼んだ。

変な名前だな。

松太郎が白い歯を剥き出した。

夏目は頷いた。

夏目は確かに変な名前だと思つた。

だけど、もつと変わった名前なら他にもいると思つた。

四年生に伊集院桜子という豪華な名前の女の子がいるし、三年生

に権田原竹彦という、名前だけでなく存在も奇特的な奴がいるし、同じクラスの五年三組には燕子花杉貴という珍しい苗字の男子生徒がいる。

それに比べれば、山田梅なんて平凡なほうだ。

ある日、放課後に夏目が歩いていると、体育館の裏でひそひそと話す声が聞こえてきた。

夏目は裁判に行く途中だった。

なんだろうな、と思いつながら夏目は体育館の裏を通ってみると、三人の上級生がいた。体も大きくて足も太い上級生。

夏目が通ると、急に後ろめたそうにひそひそ話をやめた。じつとしながら夏目が通り過ぎるのを待っているようだ。

上級生は恐いので、夏目はすぐに通り過ぎることにした。その際に、夏目はちらりとだけ上級生達のほうに目をやると、三人に囲まれた女の子がうずくまって泣いているのが見えた。

なに見てるんだよ。

上級生に凄まれて、夏目は駆け足で体育館裏を離れた。

離れても、なんだかとても気になったので、物陰から上級生達を覗いた。

夏目に見られたことに危機感を覚えたのか、上級生達はすぐに居なくなった。

残されたのは女の子一人。

体育館裏の暗くてじめじめした場所で、一人泣いている。

誰もいないので、誰の声も聞こえてこないし、風も無いので木々のざわめきも聞こえてこない。時間が止まったような寂しい場所で、独りむせび泣く女の子がとても心配になった。

夏目は声をかけてやるべきか、知らん振りするべきか考えた。

女の子に声をかけている間に上級生達が戻ってきたら、夏目がい

じめられるかもしれない。

迷ったが、夏目は話し掛けることにした。

近寄っていったら、恐る恐る声をかける。

大丈夫？

女の子は答えない。

夏目は慎重に辺りを見渡しながら訊いた。

どうしたの？

やはり女の子は答えない。

うづくまって顔に両手を当てたまま、うつうつと唸っているばかりだ。

上級生達はもう居なくなったよ。

夏目がそう言うのと、女の子はようやく顔を上げる。

涙と鼻水でいっぱいだった。

見たことのある女の子。

名前は忘れたけれど、新しくこの学校に来た転校生だ。

どうしたの？

改めて尋ねると、女の子はしゃくりあげながらようやく答えた。

名前が変だって。

名前が変？

名前が変だって、自分で変だって言えって。

言い終わりから呂律が回らなくなって、顔面をゆがめながら再び泣き始めた。

名前はなんて言うの？

言いたくない。

女の子は頭を振って、顔をそむけた。

夏目はどうしたものかと悩んだ。

先生の所に行く？

夏目がそう尋ねると、女の子は首を横に振った。

じゃあ、どうする？ 帰らないの？

女の子は答えない。

僕はもう行かないといけないから、このままだと一人になっちゃうよ。

そう言えば行動するかと思いきや、女の子は世の中の冷たさに絶望したかのように、ひときわ大きな声で泣き出した。

だって、裁判に行かなくちゃならないんだ。急がないと怒られちゃうよ。

何を言っても、女の子は声をあげて泣くばかり。

先生の所に行ったほうがいいって。一緒に行こうか？

やはり首を横に振る女の子。

困り果てた夏目は仕方がないので、女の子をその場に置いていく事にした。

僕はもう行くけど、ちゃんと先生の所に行きなよ。

夏目は立ち上がり、女の子に背を向けた。

女の子が見えないところまで歩いていく。

なんだか後ろめたい。

先生を呼んできてあげた方がいいのだろうか。

でも、女の子は先生の所に行きたくないって言ってるし。

夏目はトイレに行って小便をして、少しちんちんを弄くってから裁判に向かおうとして、やっぱり引き返すことにした。

体育館の裏に行くと、女の子は同じところでまだ泣いていた。

夏目が戻ってくると、女の子は顔を伏せたまま身じろぎしている。

帰らないと、日が暮れちゃうよ。

女の子は答えない。

夏目はどうしたらいいか分からない。

一緒に裁判に行く？

夏目はそう聞いた。

女の子は顔を起こすと「さいばん？」と尋ねてきたので「誰が正しいか決めるところ」と答えた。

夏目は女の子の腕を持って立たせた。

素直に立ち上がる女の子。

夏目はたまたま持ち合わせたポケットティッシュで女の子の顔を拭いてやった。

ちーん、と鼻をかむと、ようやく女の子は涙を止めて、夏目の手を握ってきた。

夏目はその手を引いて裁判に向かった。

五年三組の裁判所に行くと、教卓の上にあぐらをかいた山之内松太郎は周囲の机に下級生を座らせて、裁判を行なっていた。

被告人、前へ。

松太郎がそう言うのと、二年生くらいの男の子が松太郎の前に来た。全て本当のことしか言わないことを誓いますか？

松太郎が右手の平を耳の高さに掲げながらそう聞くと「誓います」と男の子も同じように右手を耳の高さに掲げて言った。

君は、いけないと言われたのに、自転車で車道を走ったね。その罪で明日中に良い行いを一つすること。良い行いをしたら、明日の放課後にここまで証人を連れてきて、ちゃんと証明する事。いいかい？

男の子は「はい」と答えた。  
帰ってよし。

そう言われ、男の子は安堵したような表情を浮かべると、ランドセルを背負って帰っていった。

被告人といっても、告訴した人がいるわけではない。

松太郎が半分言いがかりのような罪を並べて、良い行いをしろと通告し、帰らせるのだ。

そういう遊び。

松太郎の大好きな遊び。

被告人、前へ。

松太郎がそう言うのと、今度は燕子花杉貴が松太郎の前に入った。

嘘は言わないと誓いますか。

燕子花杉貴は「はい」と答えた。

みんな、一種の恐怖観念を抱いていて、松太郎の前に立つと本当に嘘は言わなくなる。

ウンチをもらして汚したパンツをトイレに流そうとして、詰らせたのは君だね？

燕子花杉貴は「はい」と答える。後ろめたそうな顔をしている。ウソをついたら、母ちゃんが地獄に落ちると本気で信じている。

それから伊集院桜子をいじめたね。

燕子花杉貴は一瞬黙って俯いたが、小さな声で「はい」と言った。

君は伊集院桜子が金持ちだから、妬んだんだね？

違うよ。あの子が

嘘を言ったら、母ちゃんが地獄行きだぞ。

松太郎がそう言つと、燕子花杉貴は言葉を詰らせた。

罪を認めますか？

はい。

君の罪は重い。だからパンツを詰らせたトイレをぴかぴかに掃除するのと、それから伊集院桜子に許してもらえるまで謝る事。

良いね。

はい。

納得いかなそうな顔で返事をする燕子花杉貴。

それでは、原告の伊集院桜子は前へ。

そう言つと、一人の女の子が恐る恐る前に出てきた。

おかつぱ頭で、頬の辺りが赤らんだ可愛い女の子だった。

燕子花杉貴と、伊集院桜子は松太郎の正面に向かい合って立たされる。

お互いに気まずそうだ。

杉貴、謝れ。

松太郎にそう言われると、燕子花杉貴は口を尖らせて、むすりとしたまま「ごめん」と言った。

伊集院桜子は戸惑っているだけ。

誠意がたりない。

と松太郎に咎められ、燕子花杉貫は今度こそ深く頭を下げ謝った。

松太郎が伊集院桜子に向かって「これでいい？」と尋ねる。伊集院は戸惑いながらもこくりと頷いた。

燕子花高杉が後頭部を掻きながら席に戻る。

その場に残っていた伊集院桜子が、控えめに、本当に控えめに「どうもありがとう」と松太郎に御礼を言った。

松太郎は返事をせず、ただ俯いただけだった。

伊集院桜子が席に戻っていくと、松太郎が教室の後ろの方に立っていた夏目と山田梅に気づく。

遅いぞ！

松太郎が怒鳴った。

それから、山田梅に気づくと「誰？」と訊いたので、夏目は「この間の転校生」と答えると、松太郎は少し頭を悩ませた後「ああ」と言っ、手を打った。

それで？ その子はどんな罪を犯したんだ？

松太郎がそう聞いてくる。

何もしてないよ。名前の上級生にからかわれてたんだ。夏目がそう言うのと、松太郎は口を尖らせて、少し宙を眺めると言った。

君の名前は、確か山田梅だったよね。よし、君の罪は名前が変だつてことだ。さあ、被告人席に来て。

言いがかりのような罪をなすりつけ、松太郎が手招いた。

山田梅が、困ったように夏目を見上げた。

松太郎が言った。

夏目は弁護人だ。その子を弁護するんだよ。

そう言われ、しぶしぶ松太郎の座る教卓の前まで歩いていく。

君は変な名前だ。その罪を認めますか？

松太郎が山田梅に向かって言った。

変な名前じゃないよ。

そう言ったのは夏目だ。

山田梅は俯いたまま、押し黙っている。

よし、じゃ夏目。お前はこの子の弁護を試してみろ。この子の名前はという理由で変じゃない名前なんだ？

山田梅なんて、どこにでもいるじゃないか。燕子花の方が変な名前だろ？

他人の名前を馬鹿にしたって、その子の名前の良さは分かりません。

冷たく言い放つ松太郎。

むっとする夏目。

お婆ちゃんみたいで可愛いじゃないか。

夏目がむきになってそう言つと、梅が「わあん」と泣き出した。

動揺する夏目。

何か悪いことを言ったのだろうか。

あああ、泣かしちゃったあ。

背後から燕子花の非難の音がする。

裁判の内容を変更します。被告人は夏目。女の子を傷つけた罪で、有罪。

なんで俺なんだよ！ もともと……！

裁判官に文句を言つと、法廷侮辱罪で重刑だぞ。

口をつぐむ夏目。

なんでこんな奴の言いなりにならなくちゃいけないんだ、と思いつながらにも反抗できない。

夏目は今後、山田梅の名前を馬鹿にする人間を撃退する事。

それが夏目に科せられた償いです。以上。

なんでだよ！

女の子を傷つけたら重罪なんだよ。

口を尖らす夏目。

納得がいかない。

いつまでこの子を守ればいいんだよ。

山田梅の心の傷が癒えるまでだよ。

松太郎はこのような台詞を言いたいがためにこの裁判をやっているようなものだ。大抵、前の日のテレビドラマや洋画劇場で仕入れた知識をこの場で披露したがる。

泣いてばかりの山田梅に弁解を求めたが、梅はただ泣きじゃくる。その時、新たに教室に入ってくるものがいた。

教室の扉をガラガラと開ける音に、みんなが息を呑んで注目した。入ってきたのは、このクラスの担任。

若い女の先生。

いつまで残ってるの？ 早く帰りなさい。

「はい」と返事をして帰り支度を始める罪人達。

それと、山田梅ちゃんを見なかつた？ この間新しく入ってきた転校生なんだけど。

そう言つて、先生は夏目の隣りで顔を押しえて泣く山田梅に気づいた。

どうしたの？

先生が夏目に非難めいた視線を向けてくる。

夏目はその視線が気に入らなくて、むすりとして「知らない」と答えた。

その態度に不審さを感じた先生はさらに訊いた。

知らないわけないでしょ。どうして泣かしたの？ 苛めたの？

山田梅が上級生に苛められていた事を言おうと思つたが、山田梅が知られたくなさそうにしていたのを思い出し、口を閉ざした。

知らない。

そう言つて、帰ろうと背中を向けると先生に肩を掴まれた。

謝りなさい。

なんでだよ。

女の子を泣かしたら謝るの。

確かに、いま山田梅が泣いているのは夏目の「お婆ちゃん」という発言が原因かもしれないなかった。

夏目はなんだか気に入らなかつたが「ごめんなさい」と謝ると、先生が山田梅に「ごめんなさいだつて。許してあげるよね？」と訊いた。

ところが、山田梅は首を横に振った。

先生はきりつと夏目を見る。

この子になにをしたの？

何もしてないよ。

うそを言いなさい。この子はあんまり泣いてると身体の調子が悪くなるの。

だから、何も知らないよ。

教室にはもう誰もいなかった。

松太郎も裏切つて先に帰つてしまった。

いい？

先生が目力を込めて夏目を見た。

子供ながらに、この先の説教を予感してうんざりした。

この子は心臓が悪いの。わかる？ 心臓の病気。だから脅かしたり、苛めたりすると死んじゃうかもしれないんだよ。分かつた？

夏目は答えなかった。

心臓の病気と言われても、ぴんと来ない。

ただ、無償に不安を感じただけだ。

まったく、この子は。

呆れたように額を撫でる先生。

先生は山田梅の頭を撫でると、なだめるように言った。

ママが迎えに来てるわよ。さあ一緒に帰ろうね。

山田梅がこくりと頷く。

先生は山田梅の肩を抱くと、夏目に背を向ける。

教室を出る間際、先生は振り返って言った。

今度ちゃんと話をするからね。

そして、教室からいなくなった。

それからまた数日経って、夏目はほとんど山田梅の事を忘れ去っていた頃、再び彼女に会った。

夏目はその日、一人学校に残ってプール裏のゴミ捨て場で本を読んでいた。

ここは放課後になると誰も来ない。

夏でなければプールには誰もいないし、とても静かで居心地が良かった。

そんな時、例のごとく誰かの話し声が聞こえ、夏目は興味に惹かれるまま、こっそりと声のするほうに忍び寄っていった。

プールへの渡り廊下の端で山田梅が上級生に囲まれていた。

前と一緒にだ。

山田梅は上級生に囲まれて、うずくまっている。

山田梅は胸の病気。

夏目は思い出す。

はらはらしながら、その様子を眺めていた。

松太郎の言葉も思い出した。

山田梅の名前を馬鹿にする人がいたら、撃退する事。

しかし、あの上級生達が山田梅の名前を馬鹿にしているとは限らない。

上級生達に逆らったって痛い思いするだけだし、夏目はしばらく様子を見ることにした。

山田梅は泣いている。上級生たちはやにやして山田梅に何か言っている。

そうか。

夏目は思った。

山田梅はとても可愛らしい女の子。

男の子は可愛らしい女の子をいじめたがるものなのだ。  
しばらくすると上級生達が散らばり始めた。

夏目は上級生達が戻ってこないことを確認すると、ようやく山田梅がうずくまる所まで歩いていく。

大丈夫？

夏目が声をかけると、山田梅がうずくまっただまま後退りする。

もう上級生達、いなくなったよ。

そう言っても前回同様、顔も上げないし返事もしない。

それでも夏目が山田梅のことをなだめていると、不意に背後から声がかかった。

こら！

夏目は肩を震わせて振り返ると、鬼のような顔をした担任の女性教師が慌てて走ってくるのが見えた。夏目は先生が迫ってくる様子に恐怖して、思わず後ずさった。

先生は夏目のことを荒々しく跳ね除けると山田梅を抱きかかえた。

大丈夫？ 落ち着いて。もう大丈夫だから。

先生はきつい目を夏目に向けて、ヒステリックに言った。

分かっているの？ 心臓が悪いつて話したでしょ？ このことを殺す気なの！？

殺す？

泣きすぎて心臓に負担がかかったら死んじゃうのよ！ あなた、そうなら責任取れるの？

理不尽に責められて、夏目が口を尖らせた瞬間だった。

女といえども、大人の大きな手のひらが夏目の頬をしたたかに打ちつけた。

かなり強い力で、夏目の目の前に火花が飛んで、気づくと頬を押しさえながら夏目は通路に尻餅をついていた。

夏目は呆然としながら先生を見た。

先生は目に涙をためて言った。

痛い？ でも、この子のもっとも痛いよ。

夏目は涙をこぼした。

この子は普通の子よりも、何倍も痛みを感じるのよ。君は残酷だわ。

夏目は悲しくなった。

先生の非難めいた目は、夏目のことを残忍な人間だと訴えていたし、叩かれた頬も痛かった。だけど何よりも、理不尽さと罪悪感が胸を押しつけて、苦しくなって泣いた。

なぜかとても後ろめたくなる。

無性に謝りたくなって「ごめんなさい」と謝った。

こっちに来なさい。

先生は山田梅を抱え込み、荒々しく夏目の手を引いて、そのまま職員室へ向かった。

職員室につくと、夏目は身体の大きな教師達に威嚇的に囲まれた。腕組をする体育の先生。

冷やかな視線を落としてくるほかのクラスの教師たち。

少し離れたところで、担任の女性教師が山田梅をなだめていた。

全く困ったもんだな。

体育の先生が、太い腕を組んで呆れたように言った。

病気の事を知ってながら、苛めたんですって？

名前の知らない先生がそう言った。

子供の残虐性っていうんですか？ こっついのを目の当たりになると気分が落ち込みますね。

俯いて押し黙る夏目の頭上で交わされる会話。

夏目はちらりと山田梅のほうを見る。

山田梅を抱きしめている女性教師に睨まれて、夏目は視線を外した。

夏目、お前は どうして何もしてない梅ちゃんを苛めたりした

んだ？

夏目は答えられない。

苛めてはいないのに、答えられる質問ではない。

あるいは「苛めたのか？」と尋ねてくれれば、「苛めてない」と答えることができたかもしれない。

答える！ お前は人殺しになるところだったんだぞ！

体育教師の意図的な刃物じみた言葉。

夏目の胸に突き刺さった。

夏目の怯えように、体育教師は満足したようだ。

不意に夏目は襟首を掴まれて持ち上げられた。

脚が浮く。

そのまま体育の先生の視線の高さまで、顔を持っていかれた。まるで猫扱いだ。

体育教師が、緑茶が腐ったような口臭で言った。

黙ってちゃ分からんだろ。お前は梅ちゃんに一生モノの傷を与えたんだぞ。大人になっても、お前に苛められた傷は癒えないし、あの子は一生、お前に苛められた事を思い出してはいちいち悲しまなくちゃならないんだ。この馬鹿野郎が。泣いてたつて分からん。

夏目は床に下ろされた。

下唇をゆがめながら泣いても、大人達は許してくれなかった。

頭上から言葉が降り注ぐ中、夏目はいつこれが終わるんだろうと考えていた。

しばらく経って、山田梅の母親が職員室に現われた。

不安そうにしていたが、うるたえることなく山田梅の傍まで歩いてくると、女性教師に事情を訊いていた。

山田梅は泣き止み、じつと床を睨みつけていた。

お前はこつちを向け。

体育教師に窘められて、夏目は自分の膝の上に置かれた手の甲を眺めた。

それからしばらくすると、山田梅の母親が悲痛そうな表情でこち

らに歩いてきて、教師達に頭を下げた。教師達もお辞儀をする。

この子とお話をしてもいいですか？

母親は控えめに言うと、体育教師は少し考えた後「構いませんよ」と答えた。

椅子に座る夏目の視線に合わせて、しゃがみ込む山田梅の母親。

じつと夏目の顔を見た。

夏目が目をそらすと「私の目を見て」と言われ、仕方なく山田梅の母親の目をじつと見た。

母親が話し始める。

梅はね。生まれたときから心臓が悪いの。狭心症って言つて、心臓の血管に塊があつて血の巡りが悪いの。だから人に伝染したりはしないし、迷惑はかけないの。ただ、運動をしたり感情的になつたりすると、血の流れが速くなるから心臓にも負担がかかっちゃうのね。だからできるだけ梅を刺激しないで欲しいの。分かるよね？

山田梅の母親は、夏目が山田梅の心臓の事だからかと思つている。

それでも夏目はこくりと頷いた。

教師達は顔を見合わせる。

山田梅の母親はにこりと笑つて、立ちあがると言った。

今回は、これでこの子を許してやってください。

不満そうな教師達。

悪そうな子には見えないし、後は家に帰って梅と話し合いますから。どうか。

……分かりました。

体育教師はそう言つて夏目の髪の毛を掴むと「ほら、謝れ」と言われたので「ごめんなさい」と謝つた。

謝れば済むと思つてるのか……。

名前の知らない教師が、そうつぶやいたのが聞こえた。その日はそれで済み、夏目は帰された。

あくる日の放課後、夏目は山田梅を苛めていた上級生と廊下ですれ違った。

下品な笑い声を立てながら、三人組が歩いていく。

脇を通り過ぎて三人組を夏目はじっと見つめた。

何を話してるのか分からない。

夏目は無性に腹が立った。

夏目。

後ろから松太郎が声をかけてきたが、夏目には聞こえなかった。

夏目は走り出した。

三人組みの真ん中にいる上級生に向かって走っていった。

夏目！

松太郎が叫んだが、夏目は既に上級生にタックルを食らわしていた。

上級生は「おお」と声を立てたが、少し体制を崩したくらいで倒れなかった。

なんだ、こいつ。

両脇にいた上級生が夏目を引き剥がそうとしたが、夏目はその手に噛み付いて阻止した。

いってえ！ こいつ！

夏目は掴んでいる上級生の脚を払って転ばせると、倒れた上級生に馬乗りになった。

その時、他の上級生二人に引き剥がされて、両腕を掴まれた。

その後、倒れこんでいた上級生に腹を蹴られて夏目は苦しくて動けなくなった。

それで終りだった。

慌てて駆けつけてきた教師に首根っこを掴まれ、夏目は再び職員室で説教を受け、めでたく「問題児」の称号を得た。

その日に、山田梅の母親が放課後の学校に出向いてきた。

母親は、喧嘩で呼ばれていた夏目と入れ代わるように職員室に行くくと、夏目の担任の女性教師を呼んだ。

どうされました？ また夏目君が何か？

不安そうな女性教師がそう尋ねると、母親は顔を伏せがちに首を横に振った。

いいえ、そうじゃないんです。実は先日、どうやら誤解があったようでした。

母親が丁重にそう言うと、女性教師は職員室内まで母親を招き、別室で話を聞いた。

夏目はふて腐れながら教室に戻っていくと、松太郎がいつものように裁判を開いていた。

教卓の上に座る松太郎の周りには、数人の生徒達が困んでいる。

教室に帰ってきた夏目に気づくと、松太郎は教卓の前まで呼びつけた。

なんで上級生に向かって行ったりしたんだよ。

松太郎は訊いてきたが、夏目は答えなかった。

松太郎は気にいらなそうに言った。

お前はいつもそうだ。暗い奴だ。言い訳でもいいから何か言えよ。弁護士がいないんだから、被告人が自分で弁解しなくちゃいけないんだから。

別にいいだろ。

むすりとして答えた。

なんだか、このままでは泣いてしまいそうな気がした。

いろんな人に責められて、夏目は鼻の奥が抓られたみたいに痛く

なった。

ひどく悲しい気分になりながら、帰ろうとバックを手に持ったとき、机に山田梅が座っているのに気づいた。

伊集院桜子と燕子花杉貴と、新顔の権田原武彦と、そして山田梅。夏目は一瞬動きを止めたが、すぐに帰ろうとした。

お前は罪人なんだから帰るなよ。

振り返って、夏目が言った。

俺が何をしたんだよ。

上級生にタツクルしたじゃないかよ。

俺は悪くない。

だったら弁護しろよ。そうしないと罪は罪だ。

その時、山田梅が恐る恐る手を上げた。

それに気づいた松太郎が山田梅を指差して「どうぞ」と言った。

山田梅はしきりに周囲を気にしながら、立ちあがった。

私は罪を犯しました。

どんな罪？

私の罪は、心臓の病気になったことです。

それは……本当なんですか？

夏目の担任の女性教師は険しい表情で額を撫でていた。

梅に問いたただいたんです。そしたら、苛めていたのは夏目君

よりも年上の上級生で、夏目君は梅のことを助けてくれたそうです。

女性教師は、頭を抱えてうな垂れた。

じゃあ今日の喧嘩騒ぎも……？

女性教師は独り言のようにつぶやく。

喧嘩騒ぎ？

母親が聞くと、しばらくの放心状態の後、女性教師が答えた。

え、ええ。実は今日、夏目君が上級生三人に突っ掛かっ

ったんです。……そうですね、あの子はそんなことをする子じゃなかった。苛めとか喧嘩とかする子じゃなかったんです。とても正義感が強くて……なのに、わたしたち決め付けてたりして……。とにかく私も夏目君に謝らないと。彼はどこにいますか？

母親がそう言うと、女性教師は逡巡する。

確か、あの子達はいつも放課後になると裁判の遊びをしていたから……。

裁判？

ええ。ただの遊びです。裁判官役の子供がいて、悪いことをした子供がいると教室に呼んで、罪を償う為に良い行いを一つさせるんです。

へえ……。とにかく、そこへ行ってみましょうか。  
二人は立ち上がった。

どうして心臓病だと罪になるの？

松太郎が山田梅に尋ねると、山田梅は小さな声で答えた。

だ、だから、私、心臓が悪いと、みんなが心配するんです。

心配させたら罪なの？

心配するのは、すごく大変な事なんです。

山田梅がそう言ったとき、教師と母親が教室についた。

立っている夏目を発見した女性教師は教室に立ち入ろうとしたが、母親が慌てて制止した。

女性教師が母親を振り返ると、母親が「少し様子を……」と言った。

女性教師は教室を見る。

山田梅が話をしていた。

いつ、私が心臓を詰らせて死ぬか分からないから、いつもはらはらしてないといけないんです。それに、私が心臓病だと分かる

とみんな優しくなる。優しい声をかけてくれたり給食を持ってきてくれたり、一緒に帰ってくれたり。でも優しくするのは心配する事くらい大変なんです。だから、みんな疲れちゃう。だから、みんな私に近寄らなくなる。私のせいで、みんなが大変になる。だから私は罪を犯してるんです。

さすがの松太郎も、台詞のボキャブラリーが不足して押し黙った。女性教師は呆然と山田梅を見ている。

母親は女性教師の陰に隠れるように、自分の娘の言葉を聞いていた。

私が心臓病のせいで、ママは毎日迎えに来なくちゃならないし、パパはたくさんお金を払わなくちゃならないし、教室のみんなは私が驚かないように、大きな声を出さないようにしているし、私は居るだけでたくさん罪を犯してるんです。

母親が思わず口を抑えた。

女性教師が振り返ると、母親が顔をしわくちやにして目を潤ませている。

お兄ちゃんにも迷惑をかけました。

山田梅の言うお兄ちゃんとは、夏目のことだ。

私を助けてくれたのに、私が泣いてばかりいるからお兄ちゃんが責められて、先生に怒られてました。ごめんなさい。

女性教師は夏目を見る。

夏目は口を尖らせて黙っていた。

私は、いけないことをたくさんしてきました。

いけないことなんて、なにもしてない。

女性教師はそう心の中で訴える。

山田梅にそう思わせたのは自分だ。

私が不甲斐ないばかりに、あの子にそんなふうに思わせただ…

罰をください。罪を償います。

山田梅が唇をわななかせながらそう言うと、松太郎が教卓の上に

勢いよく立ち上がった。

山田梅、有罪。あなたは重罪です。罪を償うには、まず、もう二度と泣かないこと。それに心臓病を治すこと。心臓が治るまでは、夏目が君の事を守ります。

松太郎は自分の吐いた台詞に満足したかのように夏目を見た。

俺が？

夏目が自分の鼻先を指差す。

そうだ。お前が梅ちゃんの心臓病を治せ。

なんでだよ。そんなことできないよ。

勉強して医者になれ。それで梅ちゃんを手術しろ。

医者？

お前の罪だつてまだ償ってないんだから。お前の罪が許されるときは、梅ちゃんの心臓を治したときだ。

松太郎が教卓から飛び降りて、ずかずかと夏目に詰め寄っていた。

誓え！

そう怒鳴られ、夏目は山田梅を見た。

山田梅は、じつと夏目の事を見ていた。

その視線の意味はわからない。

分かったよ。

夏目がそう言うと、松太郎は夏目の手を引いて梅の正面に立たせた。

お互いがお互いの左肩に手を置くんのだ。

なんでだよ。

いいからやれ。

松太郎に命令されるがまま、夏目は山田梅の右肩に手を置いた。

梅ちゃんも。

松太郎がそう言うと、梅がほとんど真上に手を上げるように夏目の肩に手を置いた。

もう一度誓え。医者になって、梅ちゃんを治すって。

夏目は仏頂面で言った。

医者になつて梅ちゃんを治します。

そう言つと、松太郎が梅に言った。

それでいい？ 梅ちゃん。

梅は戸惑いがちに視線を泳がせた後、俯いて「はい」と言った。

松太郎は返事を聞くと、教卓に飛び乗って叫んだ。

一件落ちゃ

松太郎は「一件落着」と言いたかった。言えなかった。言えなかったのは、教室の後ろの方に、担任の女性教師と山田梅の母親が立っていたのを発見してしまったからだ。

女性教師が鬼のような顔をして突然走り出したので、松太郎は慌てて教卓から飛び降りて「ごめんなさい」と謝ったが、女性教師は松太郎に目もくれず、夏目の元に駆け寄ると「ごめんね」と言った。母親は山田梅のもとに駆け寄ると、やはり「ごめんね」と言った。

山田梅も夏目も戸惑うしかない。

女性教師が言った。

誤解してた。あなたはこんなにいい子だったのに、私はあなたが苛めたつて決め付けたりして……。私を許して。

母親が山田梅を抱きしめながら言った。

ごめんね、私は知らず知らずあなたを苦しめていたのね。

あなたは何も悪くないのよ。何も気にしないで。悪いのは全部ママなのよ。

呆然とする一同の中、女性教師と母親がおいおいと泣き始めた。

生徒達は啞然としながらお互いを見合った。

大人の女がおいおいと泣く、異様な現状の中、松太郎だけが笑みを浮かべると、教卓に上つて言った。

なんだ先生も罪人じゃん。裁判やってく？

松太郎がそう言つと、女性教師は一瞬驚いたような顔を見ると、手のひらで涙をぬぐつてから「そうね。やってもらおうかしら」と言つて松太郎の前に立った。

すると母親が「私も罪人ね」と言つて、女性教師と並んで立つた。松太郎は満足げに腕を組むと言つた。

じゃあ、まずは罪状を教えてくれ。どんな罪を犯したんだい？

山田梅はそれから一ヶ月近く、松太郎の開催する放課後の裁判に顔を出した。

その間、山田梅は良く喋つたし、よく笑いもした。心臓が悪い事など、忘れてしまつてくれた。

山田梅の母親も、裁判のために少し遅く迎えに来るようになり、夏目は梅に笑顔が戻つたと、母親に何度もお礼を言われた。

山田梅も伊集院桜子も、みんな松太郎の事を「裁判チヨー」と親しみながら呼び、夏目のことを「夏目ちゃん」と呼んだ。

可愛らしい声で夏目のことを「夏目ちゃん」と呼ぶ山田梅に対し、夏目は胸を苦しくするようになった。夏目は山田梅の傍に行くと胸が締め付けられるのだ。

山田梅の病気が伝染したのかと夏目は心配になり、山田梅の母親に相談した。

相談された山田梅の母親は、にこりと優しく笑つて「大丈夫よ」と言つただけだった。

きつと山田梅の苦しさを夏目も体験しているのだと思つた。神様が、こんなに山田梅は苦しんでいるんだと教えてくださっているのだと思つた。

一ヶ月が過ぎると、山田梅は突然、裁判に顔を出さなくなった。夏目は心配したが、しばらくして山田梅は他の学校に転校していったと、担任の女性教師に聞いた。

なんの突拍子のない別れ。山田梅は何も夏目に伝えることなく、そばから居なくなつた。

胸の苦しみは、それからしばらく続いた。

その苦しみは山田梅と夏目を繋ぐものであり、しかし、その繋ぐものが目に見えないことに夏目はとても悲しく思った。

後に夏目は、山田梅の母親から伝言をもらった。

梅ちゃんのこと、良くしてくれてありがとうって言ってたわよ。

女性教師がそう夏目に伝えた。

しかし山田梅からの伝言は、とうとう聞くことはなかった。

夏目の心には、拭い去れないシコリが残った。

喉の奥のほうに刺さった、大きな魚の骨のようだ。

夏目は最後に山田梅と交わした会話を必死に思い起こした。

裁判が終わってみんな帰った後、迎えの遅い母親を待つ山田梅に、

夏目は付き合った。

誰も居ない教室で二人、他愛もない会話を交わしていた。

不意に山田梅はある話を始めた。

夏目ちゃん、「逆転の聖水」っていう話知ってる？

夏目が首を横に振ると、山田梅は話し始めた。

## 第二幕 【あなたのお名前なんてゆづの？】

むかしむかし、ずっとむかし。卑弥呼が邪馬台国の王に君臨していたくらいの時代。ある田舎町の農民の男と、お姫様が恋に落ちました。

街灯明かりの元で立ちすくんでいるスーツ姿の女を発見したのは、就職活動の帰りに公園の前を通りかかったときだった。あんな所になにをしているんだろう、というのが彼女の最初の疑問。

この国立公園の敷地は大きく、中央に大きな池や広大な芝生などがあつて、昼間には子供や主婦の楽園になっている。だが、ひとたび日が暮れると、腐れた若者や人生を間違つた中年の悪意のクモの巣と変貌する。そのことは公園入り口に立てかけられた立て札が説明してくれた。

「夜間、痴漢、暴漢、強盗に注意」

あんな所に突っ立っていたら、それこそ狙つてくれと言っているようなものだった。

彼女は迷う。

公園に立ち入って、あの女性に声をかけるべきか。それとも、その他大勢と同じように見なかったことにするか。

それにもし、自分も立ち入って暴漢に襲われでもしたら……。

迷つた拳句に、彼女は立ち入る事にした。

慎重に辺りを見渡しながら。

逆転のカプリッチョ！

今夜、彼女は急いで帰らなければならなかった。子供が熱を出している。携帯電話に心細そうな声で彼女に訴えてきた。

早く帰ってきて、苦しいよう。

胸が掻き毟られる。

父親はいない。

子供をわずらわしいと思ったことは一度や二度ではないし、頭ごなしに怒鳴りつけてしまったり、ヒステリックに手を上げてしまったりすることもあった。

だけど、もし、あの子を失う事を考えたりすると、自分は全ての希望を失う事に気づき、ぞっとする思いでひどく後悔するのだ。

電話の子供の声はか細く悲痛だった。

苦しみながら心細く母親を待つ子供のことを考えると、彼女はどうしてもこの道を通らなければならなかった。

地域の国立公園。

今は夜の九時。けっして早くも遅くもない時間だ。しかし公園前には恐ろしい事の書かれた立て札がある。

「夜間、痴漢、暴漢、強盗に注意」

確かにこの公園を突っ切った所で、家に帰る時間はほんの二、三分程度早くなるだけ。それでも一刻も早く子供に顔を見せ、頭を撫でて安心させてやりたかった。

彼女は意志を固め、国立公園に足を踏み入れた。

走れば大丈夫。

そう思った。

彼女はヒールの乾いた音を、人気のない暗闇の公園に響かせながら必死に走った。

ヒールの踵が折れたのは、その後すぐの事だった。

彼女は倒れこんだ。

ひどく膝を擦り剥いた。

泣きたい思いで傷口を見る。

バックからハンカチを取り出して傷口に当てがる。

すぐに立ち上がった。

子供が待っているし、何よりこんな所に座り込んでいるのは危険

すぎる。

どうして公園を横切るくらいで、女はこんなに多くのプレッシャーを感じなくてはならないんだろ。

取りとめのない理不尽を感じる。

立ち上がるうとして膝がずきんと痛んだ。

不本意だったが目に涙が溜まる。

恐れていたことが起こったのは、彼女が気を取り直して立ち上がったときだった。

彼女の背後から影が伸びた。

彼女はぞつとして鳥肌を立てた。

足音もせず忍び寄ってきたその影に、明らかに悪意を感じたのだ。

彼女は金縛りにあった。

影は徐々に彼女の前方へと伸びる。

それは近づいていることを意味していた。

襲われる！

彼女は目だけを動かして辺りを窺った。

誰もいない。ひっそりとした暗闇の公園が見えるだけ。

やっぱり、こんな所に入っただけなら良かった！

胸に渦巻く恐怖と後悔。

どうか、どうか、ただの通行人でありますように。

どうか、通り過ぎてくれますように。

彼女は願った。

願いは受け入れられなかった。

次の瞬間だった。

彼女はまず背後から羽交い締めにあい、手で口を抑えられた。明らかに無骨な男の手。

彼女はぐもった悲鳴を上げたが、悲鳴は口の中で消滅する。

必死に抵抗した。

だが屈強な男の腕で羽交い絞めにあつたら身動きができない。

こういうとき、どうするんだっけ！？

脚を踏む。脛を蹴る。噛み付く。携帯電話のアンテナの部分で攻撃する。

彼女の頭の中に、痴漢撃退方法はぐるぐると回転するもの、それを実行できるような冷静さはなかった。

とにかく暴れる。

いつか自分を押さえつけ腕が振り解けることを期待して。

その期待も、目の前に突き出されたナイフにより崩壊した。

彼女は悲鳴を上げる事も、暴れる事もできなくなった。喉から勝手に細い呻き声もれるだけ。

嫌らしいことをされて、最後に殺されるんだ。

彼女は漠然と感じる。

「大人しくしてくださいね」

重低音の男の声がした。

「大人しくすれば傷つけるようなことはしませんから」

彼女は頷いてみせる。

「今から手を放しますが、くれぐれも大声などはあげないように」

彼女は頷いてみせる。

男は口に当てた手をゆっくりと離れた。

「……あの……私、生理だし……」

彼女は口の中で呻くように訴える。実際、言葉にはなっていない。

「財布を出して」

財布を出したら、その後にはいたずらされ、殺される。

そう思った。

彼女は「殺さないで」と何度も訴える。

男は不適な笑い声を上げた。

老婆のような引き笑い。

「殺しませんよ。嫌らしいこともしません。財布が目当てですから」

殺さない？ お金が目当て？

彼女は慌ててハンドバックのジッパーを開き、中をかき回して財布を取り出した。

男がそれを奪い取ると、再び彼女の口を再び押さえる。彼女の口の中に川の手袋の苦い味が広がった。

「いいですか、絶対に動かないでください。一分間だけここで立つててください。振返つても駄目です。一分経ったら悲鳴でも何でも上げて結構。一分以内にあなたが悲鳴を上げたら、私はすぐにここへ引き返してあなたを殺します。いいですね？」

男は丁寧な言葉を並べた。

彼女は口をふさがれながら何度も頷く。

男の手が離れる。

助かる。

そう思ったから悲鳴は上げなかった。

一分を待つ。

それを忠実に守ろうと思った。

彼女の前に伸びていた影がゆっくりと遠ざかる。

男は言った通り、自分には何もしなかった。

そんな男に対して感謝の気持ちさえ抱く。

財布だけでありがとう。

そろそろ一分経ったかな。

まるで分からない。

影が見えなくなって随分経つ。

膝が笑っている。今すぐ座り込んでしまおうさうだ。

だけど一分間は突っ立っている約束。

まだなの？

もう、いい？

子供の所に行かなくちゃならないの。

もういいでしょ？

そのときだった。

再び背後から影が現われた。

彼女は絶望的な気持ちで肩をすくませた。

「……ひっ悲鳴は上げてません。そ、それに、ずっと立ってました

し……。お約束はちゃんと……」

彼女は震える声で訴えたが、影は無言だった。近づいてくる影。

「や、やめ、やめ、やめて！」

「なにをしてるの？」

「……ひっ……」

彼女は肩をすくめた。

肩に手を置かれる。

彼女は身体を震わせながらも、必死に悲鳴を我慢した。

逃げたら追いかけられると思って、逃げようともしなかった。

「お、おねがいです。先ほども言いましたが、私、生理だし……」

「生理？」

「はい。それと、殺人……とかも……できればやめていただきたいなあって」

「そんなことしないよ。それより、大丈夫？」

声は女だった。

彼女は必死に思い起こす。

さっきの自分を羽交い絞めにしていたのは男でなかったか。

「ふ、振り替えてつてもいいですか……？」

「う、うん。いいけど」

彼女は恐る恐る振り返る。

彼女の視界にちよつとだけ背後の人影が見える。しかし慌てて視線を外す。

だが次には背後の人物が彼女の目の前に回ってきて正面に立った。女だった。

彼女は目を丸くして、その女を凝視した。

目の前の女が心配そうに、彼女の顔を覗き込みながら言った。

「なにかあったの？」

この人は味方だ。

彼女はそう思うと、安堵に膝から崩れ落ちた。

「ちよつと！」

崩れ落ちた彼女を慌てて抱きかかえる。

彼女は憔悴しきった声で言った。

「こ、殺されるかと……」

「殺しなんかしないよ」

「……あなたじゃなくて……」

彼女はその立ちすくんでいた女の事情を聞き、直ちに公衆電話から110番した。

公衆電話脇のベンチで、震えながら呆然としている彼女の肩を抱く。

「もうすぐ警察の人が来てくれるから」

「私、家に子供がいるんです。早く帰ってあげないと……」

目を虚空に泳がせながらそう答える女。

すっかり怯えきってうろたえてしまっている。若いように見えたが、子供がいるらしい。日本人形のようなおかつぱ頭で、北国の人によく見られるようなほお骨の辺りが赤らんでいるのが、田舎娘という印象を与えた。確かに強盗に狙われやすそうだ。

「でも、ナイフで襲われたんでしょ？ お財布取られたんでしょ？ 怪我だっしてしてるじゃない」

「でも、この怪我は自分で転んだだけだし。子供が家で熱を出して寂しがってるんです。早く帰ってあげないと」

そう言って立ちあがろうとした彼女を肩を押えて止めた。

「分かるけど、でもちゃんと警察にも行かないと駄目だよ。子供の  
お父さんは？」

「……いません。私と二人暮らしです」

それじゃあ子供は心細いだろうなあ。と思うが、このおかつぱ娘は足を怪我しているみたいだし、何よりナイフを突き立てられて強

盗に遭っているのだ。すぐに警察に被害届を出さなければ、犯人にだつて逃げられてしまう。

自分がここに残つて、彼女の代わりに事情徴収を受ける訳にもい  
かないし。

そう思っていると、彼女達は突然ライトで照らされた。

おかつぱ娘は小さく悲鳴を上げた。

眩しそうに渋い顔でライトを見返していると、やがて声がした。

「なにやってるの、こんな所で」

懐中電灯のライトが顔面から逸れたので、彼女は相手の顔を見た。  
制服姿の警官だ。

早い到着だ。と思つたが、どうやら様子が違った。

「足を怪我してるみたいだけど」

巡回の警官だ。たまたま通りかかったのだ。

彼女は言った。

「この子、強盗に遭つて財布を取られたみたいなんです」

「君は？」

「私は通りがかったものですけど」

警官は無表情におかつぱ娘の顔面をライトで照らした。体を縮め  
るように怯えるおかつぱ娘。

「110番はしたの？」

「はい、しました」

警官はむすつととしてあたりを見渡してみる。

彼女はその警官の態度を不愉快に感じた。

もつと被害者を気遣つたり、もう大丈夫とか気の利いた台詞  
を吐くものではないのか。これでは、いたずらにおかつぱ娘を不安  
にさせるだけではないか。

「それで、何を盗られたの？」

警官が尋ねてくる。その度にライトを向けてくるのを止めて欲し  
かった。

「財布です」

「君に訊いてないよ。そつちのお嬢さん」

警官がおかつば娘を顎でしゃくつてみせた。

おかつば娘は戸惑って救いの視線を送ってくる。仕方なく代弁する。

「ナイフを突き付けられて、怯え切ってしまったてゐるんです」

「申し訳ないが黙つててくれないか？ 直接被害者に聞かなければ、犯人の特徴も分からないだろう」

煙たそうに氣つて落とされる。

だからといって、もっと思いやりのある尋ね方は出来ないものなのか。

彼女は不愉快に思いながらも、おかつば娘に説明するように促した。

「う、後ろから突然、口を抑えられて、それからナイフで脅されて、それから財布を出せつて言われて、立つてろつて言われて、私しばらく立つてたんですけど、あ、その前に悲鳴を上げるなども言われて、それと、えっと」

「ああ、もういいよ。どうも要領を得ないね」

警官はうんざりしたように手をはためかせる。

「じゃあ名前は？」

警官に尋ねられ、おかつば娘は戸惑いながら答える。

「伊集院桜子です」

あ、なんか綺麗な名前……。

呆然とそう思った。

「そつちの姉ちゃんは？」

姉ちゃん？

最初、自分の事を言われているとは思えなかった。

我に返つたように警官を見ると、警官はライトを向けて、少し強い調子で「あんただよ」ともう一度言った。

「わ、私は関係ないでしょ」

「名前を言えないのか？」

「私は通り掛かりのものよ」

「そのどこからが姓で、どこからが名？ 『私は・通り掛かりのもの』っていう、世にも珍しい名前なのか？」

警官のつまらない皮肉。

むっとする。

何なんだ、この失礼な警官は！

ところが口に出して強くは言えない。

正直、彼女は憚然と構えている目の前の警官が恐ろしかった。

苛苛とし始めたとき、遠巻きにパトカーが公園に入って来るのが見えた。パトカーは彼女たちの随分手前で車を止め、車内から二人の制服警官が降りてきた。

目の前の警官同様、彼女たちの顔をライトで照らしてくる。

パトカーから降りてきた警官が額の前に手刀を作り「ご苦労様です」と敬礼した。目の前の警官も敬礼を返す。

傍まで来た警官二人は彼女たちの前に立った。

「巡回中ですか？ 藤本さん」

「ああ、通りかかったら二人がいた。少し事情は聞いたが、どうも要領を得なくてな」

藤本と呼ばれた男がそう言うと、後から来た若そうな警官がクスリと笑った。

またか、という態度だ。

こっちは大変な思いをしてるのに笑うなんて。

これまで、あまり警察にはお世話になった事が無かった。だから警察官というものをよく知らなかったし、親切までは期待しなくとも、不謹慎な態度などは決してとらないものと思っていた。

警官三人が彼女たちの目の前に立ちはだかる。

いくら平和を守る警官といえども、男三人集まって囲まれれば、かなり威圧的だ。

伊集院桜子は男に殺されるという思いをしたんだ。

もっと気遣いはないのか。

「立川巡査。被害者はこちらのお嬢さん、……名前は何だったけ？」

「い、伊集院桜子です」

「豪華な名前だな」

立川巡査と呼ばれた若い警官がそう言った。

あるいは冗談を言っただけで被害者を和ませようという配慮かもしれない。しかし伊集院桜子にとって不信感を抱かせるに過ぎない軽率な言葉。

「そっちの君は？」

「通り掛かりのものです」

「それが名前？」

立川巡査は藤本という男と同じことを言った。集団というものは得てして同じような言動をするものだ。

立川巡査は隣にいた警官に耳打ちした。

隣にいた警官はこくりと頷く。

内緒話を終えた立川巡査が言った。

「とりあえず被害者の方に現場で状況を聞きたいんですが。そちらの通り掛かりの人は、こちらの夏目巡査が相手をするから」

桜子が戸惑った。

その不安そうな顔を『通り掛かりの人』に向ける。どうやら離れるのが不安ならしい。

私はあなたの保護者じゃない。

と、胸の中でそう呟く。

結局、伊集院桜子は藤本という警官と立川巡査に連れられて、被害に遭った現場で事情を聞く事になった。後ろ髪引かれる思いで桜子は何度も彼女を振り返った。

連れて行かれた後、そこに夏目巡査が残った。

手帳を開きながら彼女に訊ねてくる。

「とりあえず名前を教えてください」

「私は本当に通りかっただけですから」

「名前を聞くのが規則だし、答えるのも義務です。答えないと怪し

んじゃいますよ」

「怪しむって……」

「それじゃあ住んでる場所と職業を」

「住んでるのは近所です。それと……フリーターです」

「無職ね」

「ずきん、と胸を突く言葉。」

「名前は？ 答えてもらえないと任意同行してもらおう事になるんですけど」

「どうして？」

「名前は言わない、それに無職。明らかに怪しいですから、やましいものを隠してる、と受け取られても仕方が無いですよ」

「私が伊集院さんから財布を奪ったっていつの？」

「うーん、そうじゃなくて、たとえば麻薬を所持してるとかね」

「……」

確かに、名前を言わない、それに無職は怪しいかも。

「……山田……です」

「はい？」

「山田です」

「山田さんね」

そう言つて、手帳に「山田」と書き込む夏目巡查。

「山田、何さん？」

「は？」

「は、じゃなくて、下の名前は？」

「それに答えないといけないんですか？」

「いや、別にいいいたくないのならいいけど、そのかわりー」

「分かりました」

彼女は意を決する。

「山田梅です」

「やまだうめ？ 年寄りみたいな名前だな」

「それを言われなくなかったのよ！ 絶対言うと思つたわ！」

彼女は思わず声を荒くした。

離れた場所にいた警官二人と伊集院桜子がこちらを振り返ったが、すぐに再び事情徴収に戻った。

なんでこんな目に。

人を助けるといふのは、こんなに面倒だから誰も見て見ぬふりをするんだ。と彼女は納得した。

「犯人を見ましたか？」

夏目巡査は何事も無かったように尋ねてくる。

梅はすっかり不機嫌になって、むすりとしながら首を横に振った。

「わたし、もう帰りたいんですけど」

「はい。でも交番まで来ていただいて、いろいろ書いてもらいたんですけど」

「人が困ってるのを助けようと思っただけなのに、どうしてこんなにいるいる聞かれなくちゃならないの？　こんなだからみんな見てみぬ振りするのよ」

「私もそう思います」

夏目巡査の返答。梅は戸惑いながら言った。

「そ、そうよ。だから帰して」

「でも、事件はいろいろな性質があるんです。どう展開していくか分からない。もしかしたらあなたが犯人の仲間かもしれないし、逆に伊集院さんとあなたが仕組んで虚言しているのかもしれない」

「そんなこと」

「それに、脅すわけではないんですが、あなたは犯人に見られているかもしれない。あなたが自分の顔を見たのではないかと思った犯人が、あなたを付けまわすかもしれない」

「な、なんで？」

「すみません。脅してるわけじゃないんです。そんなことは希です。でも、きつと山田さんは家に帰って心配になると思います。犯人がどこからか見ているんじゃないか。夜道が恐くなる。でも私たちが犯人を捕まえたら、必ずあなたのところに連絡が行くはずですよ。犯

人が捕まったという連絡が入ったらあなたも安心するでしょう」

脅されてる。私はいよいよに脅されて、交番まで行くように誘導されている。いいのか、警官が一般市民に脅迫紛いな事をして、そう思った梅だったが、夏目巡査の思惑通り交番に付いていく事になった。

パトカーの中で伊集院桜子に引っ付かれながら、梅は交番にやってきた。

交番で書類に名前や住所を書かされる。

「へえ、同じマンションなんだ」

住所を書いた書類を見ながら、立川巡査が口ずさむ。

この立川巡査と同じマンションなのかと、梅は一瞬ぞつとしたが、そうではなかった。

桜子と同じマンションだった。

桜子が梅を見て、恋する乙女のような瞳を向けてきた。

その視線が何を意味するものか分からなかったが、とりあえず一通りの事は済んだようだ。

その後、伊集院桜子が立川巡査に電話を貸してくれと懇願したが、断られたので梅が携帯電話を貸してやった。

電話も貸してくれないなんて。

理不尽に思う梅の横で、桜子が泣きそうな声で子供と話しをしている。

心配しないで、すぐ帰るから、温かくして寝て。

そんな声が聞こえる。

桜子が電話を切ると、梅が言った。

「カードは財布の中？ 財布の中ならカード会社に差し止めとかの電話をしたほうがいいと思うよ」

本来、警官が言う台詞だ。

「カード? 何カードですか?」

何カード? そんなことを訪ねられるとは思わなかった。

「キヤッシュカードとか、クレジットカードとか」

「……ビデオレンタルのカードとか、商店街のポイントカードとかは大丈夫ですか?」

「……私に訊かれても……」

「子供のお気に入り入りの写真があつたんです。かわいいのが」

被害額三千元。彼女にとって痛手は写真だけ。

犯人もしけた財布に中身に舌打ちしながら、今ごろごみ箱に財布を放り投じている頃だろう。

「写真は定期入れに入れておけば?」

梅がそう言うと、桜子が笑って頷いた。だいぶ落ち着いたようだった。

幼く見えるが、今年二十五歳になるらしい。梅の一つ歳上だった。

立川巡査がぶつきらぼうに言った。

「それじゃあ財布が見つかったら連絡が行くと思いますんで。それと犯人が捕まったときも。今日はもういいですよ。お疲れさま」

酷い目に遭ったけど元氣出してとか、犯人は絶対捕まえるから安心してとか、そういう氣遣う台詞は聞かれなかった。

二人は交番を後にして、同じマンションへの家路を向かった。

すぐに後ろから声を掛けられる。

振返ると、帽子を取った夏目巡査が自転車を転がしてやってくる。「巡回ついでにお送りします。パトカーは出せませんが、夜道不安でしょう」

正直、梅はこの夏目巡査の厚意を煩わしく思ったが、警官の事情も察し、受け入れる事にした。

桜子は無反応だ。梅がいればそれでいい、そんな様子。とんだきっかけで慕われてしまったようだ。そんなに私は頼りがいあるように見えるのだろうか。

交番からマンションはそう遠くない。歩いて十分かそこら。

「今日は公園や周辺を重点に巡回しますから、どうか安心してお休みになってください。何かあったら連絡いただければすぐにでも向かいます」

初めて思いやりのある台詞を吐いた警官。それでも表情は硬いし、通り一遍で用意された台詞を棒読みしているかのような印象も受けた。

梅はそう思ったが、桜子はその言葉に安堵したようだ。夏目巡査に何度もお礼を言ってお頭を下げていた。

「これ、お子さんが熱を出してるようなので、よろしかったらどうぞ」

無表情に夏目巡査が差し出したのは、インスタントの生姜酒。

胡散臭い。妙に親切だ。

梅はすっかり警官不信に陥っていた。

夏目巡査は説明した。

「私も子供の頃風邪を引くと、おばあちゃんにこれを飲まされました。これ飲むと温まるんですよ」

「まあ、ご親切に」

桜子にはこやかに受け取った。

私だったら受け取らない、梅はそう思った。

「警部さんは、お歳はお幾つなんですか？」

桜子が歳を聞いた。夏目は頭を掻く。

「私は警部じゃないんですよ」

「えええ！？」

桜子が驚愕した。

桜子は慌てて梅の陰に隠れる。

梅は一瞬と惑ったが、どうやら桜子は警官の総称として「警部」と言う言葉を使ったようだ。妙な思い違いをする娘だ。

少々呆れ気味に夏目は答えた。

「いや、何か勘違いなさってるようで。私はただの巡査でして、警部ってというのは私より階級の高い人を言うんですよ。巡査の上が巡

査長とか巡査部長で、その上が警部補で、その上が警部。警部って言うのは階級のことなんですよ。課長とか部長と一緒に」

「そ、そうなんですか？」

「お巡りさん、っていうのが言われなれてますね。お巡りさんでいいですよ。ちなみに歳は二十七です」

桜子はようやく安心して頷いた。

「本当に犯人を捕まえる気があるんですか？」

そう尋ねたのは梅だ。梅はこの質問をぶつけるタイミングを狙っていたのだ。

突然の質問に、夏目はあやふやな顔をした。梅は続けて言う。

「なんかお巡りさん達、態度があいまいで、やる気がなさそうに見えるから」

「ううん、私は新人なんでよく分からないんですが、やる気はありますよ。あの人たち結構優秀なんです。検挙率も高いし」

夏目巡査も自分の上司の怠慢は告白できないようだ。

ただし夏目巡査もまともだとは思えない。

だいいち、この警官は笑わない。表情が変わらないのが不気味だ。何か企んでいるように見えるのは梅の勘違いであろうか。

「お巡りさんにとってはいつもの事だから、おざなりになっちゃってるだけなのよ。ねえ、梅さん？」

桜子が的を射たような事を平然と言い放った。梅が言いたくても、角が立つから言わないでおいた事を、おかつば娘は無邪気に口走る。梅は戸惑いながら、ぎこちなく頷く事しかできなかった。

夏目は頭を掻いている。

それに梅さんと呼ぶのは止めて欲しかった。自分に出会う人みんな、なぜか下の名前で馴れ馴れしく呼びたがるのは経験上分かっていたが、どうかやめて欲しい。呼びやすいのは分かるが本当にやめて欲しい。

マンションが見えてきた。

桜子が言った。

「いつ頃、犯人は捕まりますか？」

この質問にはさすがに夏目も渋面するしかない。いつ捕まえるなどという決まりはどこにもない。

犯人も特定できていない状況で、逮捕する事さえ難しかった。

梅は怪しみの視線を夏目に向ける。

おそらくは、捕まえようという気すらないかもしれない。巡回中に怪しい人物を職務質問し、交番に同行させ、あれこれ尋ねると自分は今しがた泥棒をしてきたと自供する。余罪はないかと問い詰めると、その余罪の中に桜子の強盗事件があった。きつと桜子を襲った犯人が捕まるのは、そんなケースになることだろう。

「なるべく早く捕まえます。努力します、としか言いようが……」

梅が言った。

「どうせ送ってくれたのだから上司に命令されたんでしょ。心配するとか犯人はちゃんと捕まえるとか、そんな台詞を吐いて心象良くして来いって言われたとか？ 自分達の怠慢が表沙汰になるのが心配になっちゃったんだ」

「そうですよ」

梅の皮肉に、あっさりとその答える夏目巡查。

梅は夏目が瞬時に嫌いになった。

マンションに着いた。桜子が何度もお辞儀をしていたが、梅はむすつとしていた。

マンション前で夏目巡查は敬礼を残すと、自転車に乗って高層マンション街の隙間に消えていった。

### 第三幕 【 やっぱりお名前の問題は奥が深くて 】

夏目巡査は巡回を終え、交番に戻った。

交番に戻ると、立川巡査がお茶を啜りながら雑誌を読んでいた。

その後ろで藤本巡査長が椅子にのけぞりながら、いびきをかいていた。

立川巡査が夏目巡査の帰りを確認すると敬礼した。夏目巡査も敬礼し、異常が無かった旨を報告する。

敬礼で上げた腕を下ろすと、立川巡査が言った。

「送りになんかいかなくてもいいんだよ。いちいち被害者を送りにいったら他の事件の対応が出来ないだろ」

「はい、すみません。それで現場の様子はどうでした？」

「応援を呼んで公園周りを搜索したけど何も見つからなかった。酔っ払いの喧嘩と未成年の補導くらいだ。今も数人の警官が巡回警備してるみたいだけど、ありや無理だね。別件で捕まえて、余罪の方面で出てくりや運がいいほうだ」

そう言つて立川巡査は腰を上げた。

「大した事件じゃないけど、事件はお上に渡った。俺達はまたいつもの職務だよ。それじゃあ地域パトロールに行つてきます」

立川巡査が交番を出て行った。

夏目巡査は帽子を脱いで、どっかりとパイプ椅子に腰掛けた。コヒーを入れようと立ち上がり、藤本巡査長をちらりと見た。

ため息しか出ない。

後半年の我慢だ。後半年で交番勤務から抜けられる。

夏目はそう思つて納得するしかなかった。

その時、夏目巡査の携帯電話が鳴った。

慌てて電話に出る。

「あ、栗子ちゃん？ どうしたの？ うん、うん」

夏目は慌てて交番を出た。

「え？ 迎えに来て？ 無理だよ、だって今、夜間職務中だもん。え？ ちょっと待つて。もう会わないってどういうこと？ そんな、ちょっと、切らないで。切らないで！ あ」

通話が切れた。

茫然自失。

電話を掛け直したが、話し中だった。

今ごろ他の男に電話しているに違いない。

せつかく会えるチャンスだったのに。

他の男に迎えに来てもらっているところを想像すると、胸が掻き  
窺られるような嫉妬を覚えた。

なんで警官なんかになったんだろう。

うな垂れながら交番に戻ると、いつのまにか目を覚ましていた藤  
本巡査がじいつと夏目巡査を見ていた。

「そんなに栗子ちゃんっていう女はイイ女なのか？ おまえ、ただ  
の便利君じゃないのか？」

「違いますよ」

「やったのか？」

「やった？」

「やったって言ったら、セックスの事しかねーだろ。いつやった？  
何回やった？」

「いやだな、藤本さん。俺達、まだ、そんな」

夏目は恥ずかしそうに鼻を掻いた。

「やっぱりやってねえーのか。そんなこつたるうと思った。止めと  
け、お前には高嶺の花じゃねーのか？」

藤本はそう言いながらタバコに火を点けた。

「そんなこと無いですよ。最近、ちょっと手応え感じてきてるんで  
すよ。あともう少しです。後もう少ししたら……。見ててください  
よ」

「若いうちはわがままな女にハマるもんだ。悪い事は言わねえから、  
今のうち引き返しとけて」

優雅に煙草を吹かしながらそういう藤本。夏目はその言葉と態度に少しむっつとして言った。

「分かったような口を利いて。藤本さんだって、そんなモテなかったでしょ？」

「なんだと！」

ガタンと音を立ててパイプ椅子から勢い良く立ち上がる藤本。

「人のことは放っておいてくださいよ」

「俺だってなあ、モテないほどじゃなかったんだぞあ。若ければ、それなりにモテるもんなんだよ。その頃は、こんなに腹だつて出張つてなかったし」

いじけたように腹をさする藤本。悪い事を言ったかな、と夏目は少し申し訳なく思った。

夏目はコーヒースプーンをすすりながら、今日何度目かの溜息を吐いた。

「梅さん、ちょっとお茶でも飲んでいかれないですか？ ……あの、助けていただいたお礼に……」

「でも、もう遅いでしょう。また今度でも」

「……そうなんですけど……、私の家、子供と私の二人暮らしで、なんだか心細くて……」

桜子はもしもじと身体をくねらす。梅は迷ったが、こんないじらしい態度を取られたら心配にもなつてくる。

「じゃあ、少しだけお邪魔しようかな」

梅がそう言うと、桜子が子供のよう to 喜んだ。

桜子の部屋は408号室。梅の部屋は502号室。階を隔てているもののこんな近くに住んでいたとは妙な偶然だ。

桜子は部屋のカギをカギ穴に挿し込んだ。

ゆっくり開くと、正面に廊下があり、そこから小さな人間が現れた。眠い目を擦りながら、よたよたと歩いてくる小さな人間。

「八潮お」

桜子は切なそうな声を出して、玄関で男の子を抱きしめた。

「ごめんね、ママ、ちよつと用事があつて遅くなつちやつた」

少年は母親の胸の中でこくりと頷く。

それを背後から眺める梅。

その目にたたえられる淀んだ光。

女の母性欲を満たす無償の娼児は抱きかかえられながら部屋の奥へと連れて行かれる。

桜子に促されると、梅は部屋に立ち入った。

桜子の部屋は、まるで子供部屋の様相だった。超合金口ボが無造作に転がっているし、ポスター、カレンダー、タペストリー、絨毯、布団、カーテンなどがアニメのキャラクターで彩られている。

呆然としながら梅は部屋に入っていく。

「ごめんなさい。ちよつと待つててください。八潮、熱があるみたいだから挨拶も出来なくて、本当にごめんなさい」

よく謝る子だと思った。どう見ても年下にしか思えないが、恐ろしい事にあれでもひとつ年上だ。世の中の摩訶不思議を体験しながら梅は部屋を見渡していた。

梅はテーブルの上に置かれたテーブルクロスに目をとめた。彼女はそのまま目が離せなくなった。

テーブルクロスは、少し前に流行ったスーパーヒーローの特撮番組のキャラクター達にぎやかそうにプリントされていた。この特撮番組は確か、様々なグロテスクモンスターが登場しては、五色のスーパーヒーロー達とわいわい戦いあうものだった。梅は思い出す。今でも実家には、このスーパーヒーロー達のビデオが仏壇に置かれている。弟が熱狂的に大好きだった特撮番組。

もう五年か。

彼女は月日の流れを思い起こした。

「ごめんなさい、お酒は飲む？」

桜子が訊ねてきた。いつのまにか目の前にいた事も気づかなかつ

た。

「ああ、お酒は飲めないの。ごめんなさい」

「紅茶は？」

「出来れば、お水をください」

「お水？ お水が好きなの？」

「うん」

「私も大好き。何がいい？ 山形の天然水と、静岡のアルカリイオン水、南極の雪解け水、どれがいい？ 山形の天然水は硬度が高いの。静岡のアルカリイオン水のほうが柔らかいお水よ。それに南極の雪解け水は、少しだけ癖があるのよ。だから好みがあるから、無難に静岡のアルカリイオン水がいいかな？」

嬉しそうに説明する桜子。梅は一体何が違うのか、よく分からなかったが頷いておいた。

出された静岡のアルカリイオン水に口をつける。普通の水だ。

「私のは南極の雪解け水。飲んでみる？ ちょっと苦みがあるの」

梅はそれを丁重に断ってから、子供の八潮の事を聞いた。

「お子さんは大丈夫なの？」

「うん、ちよつと風邪気味なだけ。朝からちよつと調子が悪かったの」

「お父さんは何してるの？」

梅のその質問に黙り込む桜子。あまりプライベートに立ち入るのは失礼か。

だが、桜子は口を開いた。

「パパは海外に行ってるの。お仕事で海外に。ドルとか英語とか電話で喋ってた事があるから、多分、英語の国」

「多分て、分からないの？ 夫婦でしょ？」

「結婚はしてないの。約束はしてたけど、まだ結婚はしてない」

「まだ？ これからするの？」

「……どうかな」

「電話とか手紙とかは？」

「もう四年も連絡とって無い」

「四年!？」

梅は驚愕する。八潮は何歳くらいだったか。梅には四、五歳に見えた。

桜子がコップの水を見詰めながら言った。

「四年前、私、初めて男の人とお付き合いましたの。とっても優しい人で、私とても幸せだった」

梅は予感した。これから延々と身の上話を聞かされるのではないか。

「初めて私たちが結ばれて、そして子供が出来たの。初めての契りで、子供が出来たの。運命だと思った。でも彼、すぐに海外に転勤しなくちゃならなくて、帰ってきたら必ず結婚するって約束したの」

帰ってきたら結婚。連絡の無い男。

桜子は頬を赤らめながら話しを続ける。

「あの子が、八潮がかわいく育つたのを彼が見たら、どんな顔をするかな? 早く見せたいんだけど、彼、なかなか帰ってこないの」

梅は恐る恐る聞いてみた。

「ちなみに、その彼にはお金なんかを貸さなかった?」

「……? うん、貸したけど。何で分かったの?」

「……いくら?」

「五千万くらい」

「五千万!? ど、どこからそんなお金が……!？」

「パパに借りたの」

親はお金持ち?

だから、名前が立派なのか?

「どうしても、新しい事業に一億必要で、だけど五千万足らなかつたんだって。だから、貸した」

「そんな大金……」

梅は絶句した。五千万を縦に積んだら天井に届くかな、なんて想像して思わず天井を見上げる。

「早く帰ってこないかなあ」

桜子が梅と同じようにぼんやりと天井を見上げてそう言った。

騙されてる。この子は絶対騙されたんだ。なぜ気づかないんだろう。

いつのまにか時を忘れ、桜子と話し込んでいた。

「だから私はせめて、せめてよ？　せめて最後に「子」を付けて欲しかったのよ。たった三画よ。線が三本。それさえあれば「梅子」で、ちよつとはマシになったのに、なんでよりによって「梅」だけなのよ」

会話は花が咲いていた。

桜子がうんうんと頷いている。

「物心付いたときから、おばあちゃんみたいな名前だって何度も苛められたのよ。みんな優香とか、奈々香とか、明日香とか、最後に「か」が付くかわいい名前ばかり。私だけ「うめ」。だからみんな梅さん梅さんって呼ぶの。どこかの刑事ドラマの、味のある中年刑事じゃないんだから、梅さんはやめて欲しいの。せめて「子」ね。

「子」が欲しい」

桜子が妙に神妙な顔で言った。

「私は子が邪魔なの。だって女の子の名前に四文字って変でしょ？　私は「さくら」がかわいくて良かったのに「子」なんて余計なものが付くから「さくらこ」ってなんだか、奇特的な名前になっちゃって」

「なによ、かわいいじゃない、贅沢ね。子が要らないなんて。私にちようだい」

「そうよ、そうすればいいのよね。そしてら桜に梅子。なんだか縁起も良さそうだし」

「うめ、の二文字のせいで私の人生は傷つけられてばかり。あなた

はかわいらしい名前がいいよねえ」

「そんなこと無いよ。だって伊集院だよ？ そんな名字、町中で呼ばれたら赤面ものなんだから」

「私は山田よ。山田梅。売り物みたい。赤赤してて、すっぱそう」

「伊集院桜子だってそうでしょ。名前を書くときいつも長くて大変。一生で一番たくさん書く文字なんだから、もうちょっと簡単な方がいい」

「私たちの名前を足して二で割ったら、バランスとれるのにね」

「ねえ」

桜子が同調して頷いた。

そこで会話が途切れる。

しん、と静寂が訪れた後、最初に口を開いたのは桜子だった。

「ねえ、梅さん。……梅ちゃんがいい？」

「梅ちゃんがいい。本当は「子」が付いてそうな呼ばれ方だから」

「梅ちゃん、彼氏いるの？」

「いないよ」

「どうして？」

桜子が目を丸くする。

「どうして？ 不思議？」

「うん。どれくらいいいなの？」

「どれくらいかな。二年くらい」

「そんなに！？」

「桜子ちゃんは？」

梅はそう訊いて、すぐに後悔した。その様子に気づいてか、桜子にはこりと笑って再び訊ねてきた。

「どうして別れちゃったの？ 振ったの？」

「振られたの」

「どうして？」

「そんなに気になる？」

桜子が真面目な顔をして頷いた。

「どうしようもない事ってあるんだよ」

「どのくらい好きだったの？ 今でも好き？」

「理想の人だった。これ以上無いくらい理想の人。お金持ちで優しく、強くて思いやりがあつて、何より私の事を愛してくれて、今でも大好き」

梅はそう言つて恥ずかしそうににんまりした。

桜子が泣きそうな顔をして言った。

「もしかして、その人死んじゃつたの？」

桜子がどうしてそう思ったのか分からないが、梅は「生きてるよ」と答えた。

「なんか、とつても幸せなカップルだったみたいだから、なんで別れちゃつたのか分からない。だから死んじゃつたのかなって……」

「元気に生きてるよ。今は恵比寿に住んでるの」

「住んでる場所も知ってるんだ。その人は結婚しちゃつたの？」

「してないよ」

「じゃあ、またチャンスがあるかも」

「ないよ」

「どうして？」

「どうしても」

梅が急に真顔になつたので、桜子は戸惑つて、それ以上訊けなかつた。

梅が時計を見て目を丸くする。

「こんな時間だ。すっかり話しちゃつたね。わたし、もう帰らなくちゃ」

そう言つと、梅より先に立つ桜子。玄関まで送ってくれるようだ。

「お水、ご馳走様」

梅がそう言つと、桜子がつこりと笑つた。

可愛い子だった。こんな女の子が男に癒しを与えたり、その見返りに幸せを与えようと考えたりするのだろうか。

私は楓につらい思いをさせてばかりだった。

「今度は、お食事にも招待するね」  
桜子が言った。梅は頷いて返事をした。

梅が部屋に戻ると竹彦がいた。

梅は上着を抜いてハンガーに掛けながら言った。

「まだこんな時間にいるなんて珍しいじゃない？」

「今日は同伴出勤なの。夜中の二時出勤からだから、ゆっくりしてるの。なによ、一人で優雅に過ごしてたのに」

タバコを吹かしながら、帰ってこなければ良かったのに、と悪態を吐く竹彦。

竹彦はルームメイトだ。普段は夜の十時には家を出る。出勤先は新宿歌舞伎町の二丁目だ。

竹彦はソファーに腰を掛け、ぼんやりテレビを眺めていた。

純白のガウンを身に纏い、振返った竹彦の風貌は美しさからは駆け離れていた。

顔には乳液が塗りたくられていて、てかてかと光っている。頭には網をかぶっており、カツラをかぶる前らしい。

彼はオカマだ。シンガーを目指す、夢あるオカマ。

「ごめんね、竹彦」

「何を謝ってるの？」

「私の事、心配して待っていてくれたんでしょ？」

「違うわよ。それに竹彦って呼ばないで。私は「サリー」。さすらいのシンガー、サリーよ」

そう言いながらマイクを持つ仕草をして、遠くを見詰めてみせる。  
「今日、ちよつと強盗事件に巻き込まれて」

竹彦が振返って男の目を剥ける。

「でも大丈夫。襲われたのは私じゃなくて他の人。助けたら交番に連れて行かれて、あれこれ書かされたから時間食っちゃった」

梅は着ていた服を脱ぎ出した。

「どうせなら、男の用事で遅くなりなさいよ。毎日毎日、家でグータラしてないでさ。今日の面接だってどうせ駄目なんですよ。だったら男の一人でも作って遊びまわってれば？」

「私は竹彦だけで十分よ」

「寒気がするわ。二度と言わないで」

自分の肩を抱いて身震いする竹彦。

梅はクスリと笑って、バスルームに向かった。最初は抵抗があったものの、彼の前で裸になる事が最近はまるで気にならない。逆に竹彦に文句を言われるほどだ。

「お風呂はぬるめにするのよ」

竹彦が今から大声を上げた。「はぁーい」と返事をする梅。

竹彦とは小学からの付き合いである。

長い付き合いと言えども、ルームメイトのプライバシーは守りあるというのがルールだ。だから遅くなっても竹彦に連絡をいれたりする事はないし、竹彦も何の文句も言わない。だが、それでも今日のように心配して待っていたりする。

梅の生活を支えているのは間違いなく竹彦だし、竹彦がいない生活を考えて梅は絶望的な気持ちになる。

結局、竹彦は梅が風呂から出るまで出勤しなかった。

#### 第四幕 〔展示会の警備のお仕事とあいなりました〕

それから数日後、夏目巡査は世界の古代遺跡品展覧会の警備に当たっていた。どこかの資産家が趣味で開いた展覧会だ。夏目巡査は古代遺跡品の事など全く分からなかったが、知らなくとも仕事に差し支えはない。警察官の仕事は出入り口にむすつと突っ立ていれればいいだけだし、威嚇的に展覧会場を歩き回っていればいいだけだ。夏目巡査の役割は主に交通整理。慣れればそれほど難しい仕事ではなく、他の仕事より多少忙しいだけだ。

交番勤務は色々させられると聞いていたが、本当に色々させられる。警官の仕事の基本的な部分を網羅するため、研修期間の勉強にはもってこいの部署なのだ。

だが、あくまでも基本的な部分だけ。

展覧会は随分な盛況を見せていた。昼ごろには展覧会場の駐車場はいっぱいになり、会場前の国道は混雑の兆しを見せていた。

夏目巡査は警笛を吹き鳴らし、貧血になりながらも誘導灯を振り回していた。

なんで、こんな遺跡品展なんか人が集まるんだろう。

夏目は不思議でならない。

確かにマスメディアで多少：騒がれたみたいだった。

ただの遺跡品の展示会ではなく、無数の展示品には一つ一つ逸話が存在するのだ。

それから二時間程度、交通整理をしているとようやく車の波が落ち着いてきた。

遺跡品展は十八時まで。

十六時近くなって交代の警官がやってきた。憔悴し切った夏目巡査が交通整理が変わると休憩時間になった。

展覧会に民間の警備会社のガードマンではなく、警察官を配備されたのには理由があった。ミーティング事にも釘を刺されたが、爆

弾テロの予告があつたらしい。会場を調査をして爆弾なんて発見されなかった。いたずらと判断されて展覧会は開催された訳だが、さすがにこれだけの人が集まれば、所々で小競り合いが少なくなかった。爆弾予告した奴等が嫌がらせに騒動を起こしている。と休憩室にいた制服警官がそう漏らしていた。

右翼左翼と騒がしい世の中。日本が国内紛争を起こさないのは何でだろう。

休憩を十五分とって、夏目巡査は展覧会場内の警備を命じられて重い腰を上げた。

中年夫婦がたむろして歩き回つてる中、無線で随時「異常無し」と報告をいれながら、尻の後ろで手を組んで懽然と突つ立っていた。「こちらは磨製石器といつて、砥石で刃を磨いたものです。石器の大部分は、打製石器と呼ばれる、打ち欠いて作ったものですが、この打製石器と磨製石器は、旧石器時代と新石器時代の区別する指標にもなるわけです。実は、この磨製石器は三万年前という日本でもっとも古いの地層から発見され、世界的に見ても珍しい遺跡品なんですよ」

中年の男が老夫婦に説明していた。

その中年は展覧会を開催した主催者の大隈三朗だ。白黒の頭髪をオールバックに撫で付けて、頭髪と同じような髭を貯えていた。気位の高そうな中年で、あちこち歩き回つては自分の収拾品を自慢してまわっているようだった。

どれも国宝級だというが、しかし胡散臭い。

胡散臭いのは、この展示会が客寄せに使った「つかみ」の部分だ。ガラスケースに入ったどの遺跡品にも紹介プレートが張つてある。その紹介文を読むと遺跡品にまつわる伝説が書かれているのだ。

書かれている伝説がとて胡散臭い。

この日本古来の装飾品の勾玉は、当時の王女を愛してしまつた側近が命を懸けて手に入れたものである。竜の住むといわれる悲涙山に登り、竜との死闘の拳げ句、竜に涙を流させ持、ち帰つた涙を加工して作られたとされている。かなわぬ恋をせめて勾玉に込めて、王女の傍においておきたかつた側近の贈り物である。

馬鹿馬鹿しい伝説。

爆弾テロも考古学会のアンチ大隈派の仕業だとも噂される。

どこから、こんな伝説が湧き出してくるのか。

無線で状況報告を繰り返しながら夏目巡査は突っ立っていると、見た事のある人間を見かけた。その人物は目の前を通りすぎていく。

あれ、誰だっけ。

呆然と考えていると、その人はうろろしながらある遺跡品の傍で立ち止まった。

その様子をぼんやりと眺めていると、その人間はおもむろに口を手を当てると涙を流し始めた。

不審そうに眺めていた夏目だが、職務上、声を掛けなければならぬ事を思い出し、近寄っていった。

背後に回って「どうされました？」と声を掛けると、肩を震わせ振りかえつた。

思い出した。

「夏目は思わず口を開く。

「梅さん？」

梅はおもむろにむつととして、涙目で夏目を睨んだ。

「その呼び名は止めて」

「どうしたんですか？」

「どうして私の名前を知ってるの？ お巡りさん、誰？」

「先日、強盗の件で担当した者ですけど、大丈夫ですか？ 気分が優れないとか」

「ああ、あの、胡散臭い……」

梅はそこまで言つて口をつぐんだ。慌てて涙を拭いて、夏目巡査

から顔をそむける。

「気分が優れないのなら、あちらに部屋を設けてありますし、よろしかったら」

「大丈夫です」

きつぱりと断る梅。

「それより、犯人は捕まえてくれたんですか？」

「いや、まだ」

「やつぱり、ちゃんと捕まえてくれる気はなかったんですね」

「そんなことはありません。現在も犯人を捜索中です。捕まえ次第、連絡はきちんと」

「やる気が無いのは分かってます。なんとなく警察の事が分かったから」

「ちゃんと捜索してます。公園周りの警備も増やしたし。何しろ犯人の特徴が分からないから、地道にやるしかないですし」

「嘘ばかり。本当は、犯人が別件の犯罪をするのを待ってるだけなんでwしょ。警察なんて後手後手よ。犯罪が起こるのをじっと待ってるだけ」

「違いますよ」

「絶対そうよ」

「そんなことはないって！」

思わず夏目が大声を上げると、周りが一瞬静まり返って二人を注目した。周囲が元の騒がしさを取り戻した頃、梅が口を開く。

「とにかく、わたし、失礼します」

梅はそう言い残すとそそくさその場から消えて失せた。梅の消えていった残像を憤然と見詰める夏目。

「あ、頭きた」

夏目は言い知れぬ憤怒を覚えた。

何を涙して見てやがったんだ？

夏目は梅の見ていたガラスケース越しの遺跡品を見た。小汚い筒状のもの。

紹介プレートを見る。

逆転の聖水。

何だそれは。

気にしない事にし、夏目は肩を怒らせながら持ち場まで引き返していった。

展示会の職務を終え、交番に帰ってロッカールームで私服に着替えた。

「どうした？ 鼻息が荒いぞ」

ロッカールームに入ってきた立川巡査が夏目に声を掛けてきた。

夏目がぎらついた目を向けると、立川は少しうるたえたように後ずさる。

「どうした、お前」

「立川さん、今日、俺と夜勤変わってくれませんか？」

「何だよ、お前今日は展示会の警備してきたんだろ？ それにもう私服に着替えてるじゃねーか」

「駄目ですか？」

「そう簡単に変わるもんじゃねーよ。コンビニのバイトじゃないんだから」

「内密、ってことで」

「馬鹿な事を言うな」

夏目は肩を落とす。

「やっぱりだめか」

「あさつての夜勤なら、変わってやれるぞ」

「本当ですか？」

夏目が詰め寄ると、立川がこくこくと頷いた。

「よし」

夏目はそう言うつと、肩を怒らせながらロッカールームを出て行っ

た。

入れ替わりに入ってきた藤本巡査長が呆然としながら言った。

「なんだ？ どうしたんだ夏目の奴」

立川は首を傾げながら言った。

「熱血に目覚めたんじゃないんですかね」

「交番勤務なんて、熱入れたところで空回りするだけなのにな」

藤本巡査長は、そう呆然と呟いた。

そして二日後。

夏目は二日間、熱冷めやらぬまま交番に出勤した。ロッカールームに入って制服に着替えると、呆然としながら夏目を眺める見張りや立番に「地域パトロールに行つてきます」と告げて、自転車を走らせながら夜の住宅街を巡回した。

一通りの管轄地域の巡回を済ませると、国立公園に向う。

夏目は公園内を走り回って、手当たり次第の不信人物を職務質問した。

あるいは不信人物でなくとも詰問したかもしれない。

茂みを覗くと、尻を出しながら野外セックスに励む若者に驚愕の表情で振返られたし、ゴミ捨て場を覗いたら野良犬に追い掛け回された。

ベンチで舐めあう男女にも忖度無しに職務質問をぶつけ、夜間の犬の散歩をしている老人にまでに目撃情報を聞きまわった。

ふうふう、と息を付きながら公園内を走り回っていると、いよいよ本格的に怪しい不信人物に出くわした。

探し物を探し当てたような高揚した感情が湧きあがる。

あからさまに怪しい人物が、拳動不審にうろつきまわっているのを発見したのだ。

夏目は遠目にうろつきまわる人影をじっと眺めていた。

あいつが犯人か。

睨み付けていると、人影が不意に立ち止まる。

人影はしきりにあたりを見渡して、人の気配が無い事を確認しているようだ。

怪しい。

夏目が目が据わらせていると、その人物は不意に物陰に隠れ出した。

いよいよ、夏目の不信が確信に変わった。

後はあの人影が行動に移すのを待つだけ。何らかの行動に移した瞬間、飛び出して検挙だ。

夏目は交番勤務に属して半年。まだ一人も検挙した事はない。新人が一年以内に犯人を検挙したなどという話しはあまり聞かないが、別に不安はない。むしろ興奮的だ。

新人巡査が極悪強盗犯を検挙。警察本部長賞をもらって新聞に載るかも。

夏目は固唾を飲んで見守った。

その時、誰もいない公園内に一人の女性が歩いてくるのが見えた。

あれが獲物か？

女性はあたりを気にしながら早足に歩いてくる。

いよいよだと夏目は身構えた。

女性が小走りに歩く。

徐々に夏目に近づいてくる。

そして夏目の脇を通りすぎ、公園を出て行った。

あれ？

夏目はいなくなった女性の背中を眺めながら放心した。

あれは獲物じゃない？

夏目は不審人物の隠れていた茂みのあたりを見ると、そいつはのそりと姿を現した。

再び拳動不審にあたりを見渡す。

すると何かに気づいたように、再び茂みに身を隠した。

歩いてくる女が見えた。携帯電話を手に持って、何かを話しながら歩いてくる。

今度こそ、と思って夏目は緊張する。

それでも何も起こらなかった。女は夏目の脇を通りすぎ、公園を出て行った。

何をやってるんだ。やるならさっさとやれ。

しばらく時間が経って、夏日も交番に帰らなければならなかった。いつまでも待っていられない。

夏目は諦めて、その不審人物を職務質問する事にした。怪しい、だけで交番に任意同行できる特権がある。

夏目は不審人物が隠れる茂みまで行き、ライトを照らした。

ライトを照らすと、茂みにうずくまる人間がいた。

怯えたような顔を夏目に向ける。

「な、なんか用ですか？」

夏目はむすりとしながら答えた。

「なんか用ですかじゃないよ。やるならやれよ。とりあえず交番まで同行してもらおうよ。ほら立って」

男の腕を掴んで立たせようとする、それを振り解いて男が言った。

「お、俺が何をしたって言うんだよ。何もしてないじゃないか」

「何もしてなくても、怪しい奴は取り調べするんだよ。この辺は暴漢が多いんだ。そんな所で拳動不審にしてたら職務上放っておけないだろ」

「俺のどこが拳動不審だって言うんだよ」

「女が通ったら茂みに隠れて、こっそり覗いてたりしたら充分不審だろ」

「み、見てたの？」

うるたえる不審人物。

「違うんだ。誤解だ。そうじゃない」

「だから、そういうのは交番で聞くから」

「本当に違っただ。俺はただ強盗を捕まえようとしただけなんだよ」  
「は？」

「ここで、何日か前、知り合いの女性を襲った奴がいたんだ。そう  
だ、お巡りさんなんだから知ってるだろ？ 桜子さんを襲った犯人  
だ。俺、そいつを捕まえようとしたんだ」

「……その、桜子さんって人はお前の何なんだ？」  
不審人物は押し黙る。目を泳がせてから言った。

「……恋人です」  
「嘘付け」

「……う……。やっぱりあの人の事を知ってるのか？」

「俺が通報を受けたんだ」

不審人物は夏目の顔を凝視する。言い訳を考えてる顔だ。どうに  
かして、この場を逃れようとしている。夏目はそう思った。そうで  
はなかった。

「お前、夏目か？」

突然、不審人物に名指しされ、夏目はいぶかしげにその男を睨み  
付けた。

「俺だよ、松太郎だよ。お前、夏目だろ？ 小中高って学校が一緒  
だったじゃないか。ほら受験勉強を教えただろ？ それに、あの海  
の思い出」

夏目は顔を洪らせた。

それは、目の前の人物を思い出したからだ。

「お前なんか知らない。とにかく交番までこい」

「待つて夏目。話を聞いてくれ。友達だろ。知らないなんて嘘っ  
ぱちだ。十年ぶりくらいになるけど忘れるわけが無い。親友の俺が  
犯罪者に見えるっていつのか？」

どんな人間でも犯罪者になりうる、なんてことを言えるほど、夏  
目の警官人生は長くない。

夏目は重い重いため息を吐いた。

「松太郎、何してたんだよ、そんな所で」

松太郎は救われたような顔を夏目に向けた。

「思い出してくれたのか？ そうだ、松太郎だよ。ほら学生時代、俺がお前にしてやった事を思い出せ」

「ちゃんと覚えてるよ。ちくしょう。だから何だって言うんだ」

「いいんだ。だから何だってことはない。俺とお前の仲だ。そんな些細な事はどうでもいいんだよ」

夏目はうんざりしたように言った。

「とにかく何してたんだよ。俺だって警官になったんだ。事と次第によつては逮捕しちゃうぞ」

「だから桜子さんを襲った犯人を捕まえよう」と

「桜子さんとどんな関係なんだよ」

夏目がそう訊くと、松太郎は再び押し黙った。

「もしかして身内とか？」

松太郎は首を横に振る。

「会社の同僚？」

首を横に振る。

「そもそもお前、仕事何やってるんだ？」

「バイク便」

「バイク便？ まさかお前が？ 嘘付いてるんじゃないのか？」

「嘘じゃないよ。しかたがないから言うけど、俺はいつも書類をバイクでいろんな会社に運びまわってるんだ。それで、ある雑誌社に出入りするんだけど、いつもそこに桜子さんがいるんだ」

「それで？」

「それだけだよ」

「それだけ？」

それだけで何が悪い？ とでも言いたげに、無然と構える松太郎。「なんで会社にいるだけの女の子を襲った犯人なんか捕まえようとしてるんだ？」

「そんなのー」

そう言つて松太郎は口をつぐむ。

聞かなくともなんとなく察しが付いたが、夏目はそれを指摘したくない。

「分かった分かった。見逃してやるから、もう帰れよ。この辺巡回してるのは俺だけじゃないんだから、他の巡回警官に見つかったら今度こそ連行されるぞ」

「夏目には悪いけど、警察は頼りにならないんだ。だってそうだろ。俺は知ってるんだ。ちゃんと捜査してないだろう」

おそらく捜査はしている。夏目に警察の事情が分かるほど警官歴が長いわけではないので良く分からないが、たぶん捜査一課の刑事が犯人探しをしているはず。ただし交番の仕事は、大体犯人が特定されてからだ。

「どうして捜査してないなんて思うか分からないけど、まだ犯人探しをするっていう気なら本当にしょっ引くぞ」

「ま、待ってってくれって」

「俺はもう行くからな。一応警戒態勢はかかっているんだから、この辺警官がたくさん通るぞ。他の警官に捕まっても、俺はもうフォロ―してやれないからな」

「ちよつと待ってって」

夏目は無視をして松太郎に背を向けると、自転車のところまで引き返しはじめた。

「おい、夏目。どうなんだよ。本当に捜査してるのか？」

松太郎が後を付いてきた。

「してる。心配するな」

「しかし、お前が警官なんてなあ。どうして警官なんだ？」

「ころつと調子を変えて尋ねてきた」

「付いて来んなよ」

「だって、久しぶりじゃんかよ」

「俺は職務中なんだよ。お前と一緒に歩いていたら変だろ」

「待ってって。久しぶりの再会を祝して、今度飲みにも行かないか？ ほら、積もる話もあるだろ？」

「ないよ」

「冷たいな。お前そんな冷たい奴じゃなかったはずだろ？　ん？」

後ろからぎゃあぎゃあ耳触りだったので、拳銃でも突き出して「失せる」なんて言ってるやられたかった。

うんざりして夏目が言った。

「分かった。飲みに行こう。だからいまは居なくなってくれ」

松太郎がにこりと笑って言った。

「携帯の電話番号教えてくれよ。携帯。持ってるんだろ？」

なんで制服着ながら、男と携帯の番号を交換しなくちゃならないんだ。

そう思いながら、空で覚えていた番号を口で言ってみせた。

一瞬で暗記する松太郎。

そうだった。

松太郎は天才だった。

松太郎は、確か高校の頃、知能指数の高い高校生のセミナー合宿に参加していた事がある。松太郎は数学の小難しい問題を計算式など用いず、暗算で解くという恐ろしい特技を持っていたし、広辞苑の丸暗記や円周率七万桁暗唱なども平気でこなす、ものすごく奇特な奴だった。

そいつが今ではバイク便か。

大学卒業からの年月を振返ってぞつとする。

みんな、思わぬ方向へ進んでいるものだ。ただし自分も例外ではないが。

「それじゃあ、必ず電話するからな」

そう言っつて、去っていく松太郎。

そろそろ、交番に戻らなくては。

松太郎なんか時間を取られるから捜査が進展しなかったじゃないか。

## 第五幕 【ピンクのお財布の行方を捜してください】

その後、夏目は交番の前で立番していると、不意に女性に声を掛けられた。

いや、女性ではなかった。

「ねえ、お巡りさん」

妙な調子で声を掛けてきたのは、美しさからはかけ離れた、やたらに筋肉質のオカマだった。

「何でしょう」

内心の戸惑いを隠して夏目は意識を向ける。

「お財布落としちゃってえ」

「それなら、中にいる警官に訊ねてください」

「そう、ありがとう」

女より女らしい歩き方で交番に入って行く。

駅前の交番には、深夜になるとああいう人間も出入りしてくる。しばらくすると、不機嫌そうなオカマが交番から出てきた。

「何だつて言うの！ ちょっと態度悪すぎだわ」

悪態を吐きながら出てきたオカマは、まだ女らしさを保っている。ぷりぷりと起こりながら、尻を振って交番を後にして行った。

またか。

この交番を訪れる一般市民は、必ず憤慨して交番を後にして行く。夏目が交番を覗くと、若い佐藤巡査がポケットテレビを眺めているた。

この交番は、国立公園の痴漢暴漢置き引き強盗がいなければ、ほとんど出勤もしなければ立ち寄る市民も無い。都内のだ真ん中の交番でなければ、一晩中忙しいなんてことは有り得ない。なので佐藤巡査のように、鼻くそをほじりながらポケットテレビを眺めて、研修期間といえる交番勤務の時間を費やすのだ。佐藤巡査はノンキャリアだが、立川巡査などはキャリア組みで、ほとんど職務中の時間

は教材を開いて勉強している。新人はテストの点数を稼いでいればいい。犯人検挙などしなくともいいのだ。

夏目は立番の持ち場を放棄してオカマを追いかけた。

怒り冷めやらぬようで、ハンドバツクをくるくる回しながら歩く彼に声を掛けた。

振返ったオカマの目が据わっていて、夏目は少なからず恐かった。「お財布、どこで落としたんですか？」

「何よ。電話も貸してくれなかつたくせに。罪悪感でも感じた？」

それとも、警察の信用問題にでも関わるとか思っちゃったわけ？」

「そうです」

「……あっさり言わないでよ。『市民を助けるのが本官の義務であります!』とか言わないの?」

くだらない皮肉は無視しよう。そう決めて、改めて質問する。

「財布はどこで落としたんですか? カード会社には連絡しました?」

「何よ、探してくれるの? タクシーに忘れてきたの。『届は出て

いません』で突っぱねられたわ。カードは入ってない。現金だけよ。

私、カードは別の入れ物に入れてるの」

「どこのタクシーだか分かりますか?」

「……わかんない。たしか緑色のタクシーだったような。探してくれるの?」

「運転手の名前とかは? 特徴とか。どこで乗って、どこで降りたんですか?」

「運転手は中年の男だったし、乗ったのは駅前で、降りたのは自宅マンションの前。財布を置いてきちゃったのに気づいて、慌てて駅に戻ったんだけど、タクシーはいっぱいあるし、ぜんぜん分からないから交番に寄ったのよ。ねえ、探してくれるの?」

「財布の特徴は?」

「ピンクのけばけばが付いた超可愛いやつ。ねえ、財布の中には大切なものが入ってるの。探してくれるの?」

夏目は携帯電話を取り出した。

まず、タクシーの近代化センターに問い合わせた。ピンクのけばけばが付いた財布が届いてないか訊ねたが、そのよ  
うなものは届いてないと言われた。

次に県警の会計係に連絡を取り、財布の落とし物が届いてないか  
訊いたが届いてないようだった。

電話を切ると、目の前の男に言った。

「紛失届は出されました？」

「出したわよ」

「見つかったら連絡が行くと思いますので、今日のところはお帰り  
ください」

「ねえ、あんた親切ね。下心があるの？ わたし、こう見えても難  
いのよ」

何が難いのが分からなかったが、聞きたくも無かった。

「冗談よ。ちよつとは笑ったら？ なんて、そんなにむすつとして  
るのよ」

「職務ですから」

夏目は敬礼をして、オカマに背を向けた。

竹彦は帰るなり、梅に愚痴をぶつけた。

「聞いてよ、梅。駅前の交番ったら態度悪いのよ！ 財布を落とす  
たつて届けたら書類か書かされてえ、それで帰されたの。挙げ句  
の果てには私の不注意が招いたんだって逆ギレされてえ」

と、居間に飛び込んだ竹彦の目には梅ともう一人、見知らぬ女が  
いた。

その見知らぬ女はソファーに腰掛けており、お茶をすすろうとし  
た体勢で固まったまま、怯えたように竹彦を見上げている。

梅が慌ててフォローした。

「ほら桜子、話したでしょ？ 彼が竹彦」

「さすらいのシンガー、サリーとは私の事よ」

と、竹彦が気取って見たところで、桜子はようやく自分を取り戻した。

「あ、ああ、あなたが竹彦さん？ あまりの迫力に、ちょっと放心状態に……」

「サリーよ。竹彦さんはやめて」

「ご、ごめんなさい」

萎縮する桜子。

「だあれ？ この可愛い子は」

「この間、話したでしょ？ 強盗に遭った女の子」

「ああ、聞いたわよ。大変だったわね、桜子ちゃん」

「……どうも」

桜子は恐る恐る頭を下げる。

梅が言った。

「化け物じゃないから安心して。ああ見えても優しいのよ」

「化け物よ私は。こう見えても、実はわたし男なのよ」

言われなくても分かる。

内心の桜子の言葉。

竹彦は上着を脱ぎながら言った。

「ねえ、それじゃあ桜子ちゃんも駅前の交番に行ったわけ？ あそ

このお巡りさん、ちよっと感じ悪くない？」

「あ、そうですね」

桜子は遠慮がちに同調した。

竹彦は鏡台の前に立ち、化粧を始める。

「竹彦、今日の仕事は？」

「お休みよ。でも、お昼からデートしようと思ってたんだけど、お財布落としちゃったから無理」

竹彦のお昼とは、真夜中の十二時の事を言っている。

「それに梅、ごめんなさい」

「なあに？」

「お財布の中に明日の映画のチケットも入ってたの」

「ええー！」

梅はうめいた。

竹彦は両手を合わせて、済まなそうに謝った。

「本当にごめんなさい」

「特別試写会だから、当日券じゃ入れないのに」

口を尖らせている梅に、竹彦は何度も頭を下げた。

「いいじゃない。ちゃんと上映されてから観れば」

「だって、誰よりも早く観るのがいいんじゃない」

そんなこと言っても、チケットが戻ってくるわけではない。梅はぱったりと床に倒れ込んだ。

「何もかも、あのお巡りさんのせいよ。すぐに探してくれば見つかったかもしれないのに。ねえ、桜子ちゃん」

「はああ」

「可愛い子ね。抱きしめていい？」

と竹彦が言うと、桜子が顔を引き攣らせて尻で後ずさった。

梅が慌てて言った。

「冗談よ、桜子。あんまり真に受けないでね。困ったら、えへへって笑ってればいいから」

桜子は引きつった笑顔を見せた。

「そう、そんな風に」

「ああ、もう！ 本当にあの態度は腹が立ってしょうがないわ！

警察に苦情の手紙書こうかしら」

「竹彦、隣の部屋で子供が寝てるの。声のトーンを落として」

「まあ、子供？」

竹彦が目を輝かせた。

桜子は言い知れぬ不安を表情に表す。

「見せて見せて。子供大好き」

桜子に子を守る防衛本能が働く。桜子は慌てて言った。

「また後で挨拶させますから」

「あら、そう？ 残念だわ」

そういふ竹彦に、胸をなで下ろす桜子。

それから、しばらく雑談を交わしながら過ごしていると、竹彦は警官達の怠慢に対する腹立ちがぶり返してきて、再びぷりぷりと怒り出しながら言った。

「桜子ちゃん、あのお巡りさん達に何か言われなかった？ 桜子ちゃんを傷付けるような事を言ったら私、本当に苦情の手紙書いちゃうから」

「私は何も……」

桜子の代わりに梅が言った。

「確かに態度悪かったよ、あそこの警官。財布盗まれたっていうのに、気の利いた言葉も掛けないし、電話も貸してくれないし、ちょっと常識じゃ考えられないよね」

「じゃあ苦情書いちゃう」

竹彦が化粧を落とし終えて、てかてかの顔のまま、棚の引き出しから便箋を取り出した。

「なんて書くのかしら」

「竹彦が書いたらラブレターみたいになっちゃうじゃない。真面目な文章なんて書けるの？」

「書けなあい。梅え、書いてえ」

舌を出しながら、竹彦が身体をくねらせてみた。

全身に鳥肌を立てる桜子をよそに、梅が言った。

「私はやーよ。字、下手だもん。桜子は？」

梅に振られて戸惑う桜子。竹彦にも注目され、気絶しそうだった。「わたし、別に苦情はないから。それにいい人もいたじゃない。ほら、このマンションまで送ってくれた人」

「違うわよ、桜子。あいつはもつと深いところで嫌な奴なのよ。怠慢警官より、したたかなだけ」

竹彦が不思議そうに「誰、それ」と訊いた。

「親切にマンションまで送ってくれた人です。この辺の警備も強化してくれるって言ってたし」

「ああ、多分、あの人ね」

竹彦がそう言った。

「会ったの？」

梅が訊くと、竹彦はおもむろに真顔になって言った。

「会った。なに考えてるか分からないし。警官を嫌々やってる顔してたわ。交番勤務みたいな下積みなんかしたくない、さっさと上に行きたい、って思ってるのかも。梅の言う通り、したたかなのかもね」

そんなこと無いと思うけどなあ。

桜子はそう思ったが、言葉にはならない。

「とにかく苦情の手紙を書くのよ。こう、とても不愉快だった事が伝わるように、絶望的な文章を」

絶望的な文章って何だろう、と梅は思いながら、竹彦に苦情の手紙を押し付けられて嫌々ペンを握った。

夏目巡査は駅前のロータリーに縦列するタクシーを一つ一つ覗いて、オカマの客を乗せたか訊ねていった。

あのオカマ、緑色のタクシーに財布を置いていったと言ってたな。緑色のタクシーは少なくない。

一時間ほどタクシーを覗きまわっていると、オカマの客を乗せたというドライバーにでくわした。この駅を利用するオカマも少ない。財布を落としたオカマの特徴を教えると、やはり分からないと言つ返答が返ってきた。

後部座席を調べても何も見つからない。

再び、搜索を開始した。

タクシードライバーに質問しようとすると、「さっきもあんに質

問を受けたよ」と罵られた。

不景気のご時世、ピンクの財布をドライバーが見つけたとしても、ドライバーが自分の懐に仕舞ってしまってもおかしくない。

出てこないかもしれないな。

夏目はそう思ったが、もう少しだけ探してみようと思い、緑色のタクシーを捜してまわったところオカマを乗せたタクシーに出くわした。

オカマの特徴を教えると、ぴったり合った。

タクシードライバーに断りを入れて後部座席を覗く。一見して何も無いように見えたが、助手席の下をライトで照らしてみると、ピンクのけばけば財布があった。

これか。

タクシードライバーに協力のお礼を言うと交番に戻った。

「持ち場離れてどこ行ってたんだよ。また栗子ちゃんか？」

という佐藤巡査の言葉を無視して紛失物が発見されたと伝えると、紛失届に書かれた住所を確認した。

所定の手続きを済ませ、多少承認フローを間引きしてピンクのけばけばの財布を掴む。

交番を出て自転車を走らせる。

時間は十一時。

家を訪ねるには遅い時間だろうか。そんな心配もあったが、住所に書かれたマンションまでやってきた。

オートロックの扉の前で部屋番号を押してインターホンを鳴らすと、目の前のスピーカーから声が聞こえた。

どなた？

確かに、さっきのオカマの声だ。

「駅前の交番のものですけど。紛失なさっていたものが見つかりました」

……。

返事が無い。

ガチャリと、受話器を置く音がスピーカーから漏れる。次に目の前にあつた自動ドアのロックが外れ、左右に開いた。入れ、と言う事だ。

夏目は立ち入り、エレベータで五階まで登った。

部屋の前に立ち、改めてインターホンを押すと、しばらくしてカギが開いた。

夏目は少しだけ開いたドアから中を覗き、手刀を額に当て敬礼した。

「見つかったの？ 財布が？」

中から、確かにさっきのオカマがそう言ってきた。ただし、化粧を落としているようで風貌はまるで違った。

「はい」

オカマは鎖を外そうとはせず、十センチの隙間から不審そうに覗いている。

「財布は？」

夏目がピンクのけばけばがついた財布を掲げてみると、オカマがドアの隙間から手を伸ばし、それを掴もうとしたので夏目は慌てて財布を引いた。

「なによ、私の財布でしょ？ 返しなさいよ」

「書類に受け取った旨のサインをしてください」

中から不審そうに睨みつけてくるオカマ。

ボタンとドアが閉まると、中から鎖を外す音。

開かれた扉にはネグリジエを身に纏った男が現れた。

「どれにサインすればいいって？」

「こちらに」

クリップファイルに止められた書類を差し出した。

「サインと印鑑を。印鑑が無ければ、拇印でもいいですよ」

オカマはいぶかしげに書類にサインをして拇印を押すと、財布を受け取った。

「財布、どこにあつたの？」

「タクシーの後部座席に」

「随分早く出てきたのね」

「そうですね。落としたのがタクシーの中じゃなかったら、中身は返ってこなかったかもしれないね。一応中身を確認してください」

「ふーん。運が良かったわね」

「そうですね」

「私じゃなくて、あなたがよ」

「私が？」

「財布がタクシードライバーから交番に届けられたんで、慌てて持ってきたんでしょ？ 警察に苦情の手紙を出されたらたまらないもんね？」

「苦情の手紙？」

「そうよ。いま書いてるの。交番でとても不愉快な思いをしたってもちろん、名指しで警察署に届けるつもり」

「どうしてそんなことを」

「困る？」

「ええ、まあ……」

「じゃあ、謝って。無礼を謝罪して」

「済みませんでした」

夏目は頭を下げた。

突然、目の前でドアがボタンと閉まる。

頭を下げたことについて、一切のコメントはないようだ。

呆然と立ち尽くす夏目。

一体何だったんだ、ちくしょう。俺は警察官だぞ。

ドアを蹴っ飛ばしたい衝動にかかったが思いとどまって、しぶしぶ交番に帰る事にした。

警官やってても何一ついい事ない。

夏目はエレベータを降り、表に止めた自転車の傍まで来た頃、携帯電話が鳴った。

栗子ちゃんだ。

淀んだ心に一点の光。

「もしもし？ 栗子ちゃん？ どうしたの？ え？ 迎えに来て？  
だって俺、いま勤務中だよ。え？ 今日には休みだって言ってた？」  
そうだった。今日は本来非番の日。立川巡査に勤務を交代しても  
らったのであった。

「ごめん！ ごめん栗子ちゃん。先輩にどうしても交代してくれっ  
て言われて、下っ端だし断れなくて、あれ？ 栗子ちゃん？ 栗子  
ちゃん！？」

通話が途切れた。

同時に希望も途切れた。

ああ、酷い……。

夏目の今夜は、とても深い深い暗闇に見えた。

この夜は明ける事がないんだ。きつと、このまま夜のままなんだ。  
なんの理由も無くそう思った。

星空が夏目の代わりに一筋の涙を流した。

「財布戻ってきたの！？」

そう歓喜の声を上げたのは梅だ。

「中身は？ チケットは無事？」

「無事よ。お金も無事。明日は試写会にいけるわよ」

梅が目を潤ませて感激した。

竹彦がその様子を眺めながら言った。

「財布が戻ってきたら、本当はそうやって喜ぶのが普通よね」

「え？」

「ああ、なんだか罪悪感が……」

「どうしたの？」

「何でもない。それより苦情の手紙は？」

「あらかた書けたよ」

梅が竹彦に手紙を差し出す。

「よく出来ました。お礼はこのチケット」

竹彦がチケットを梅に手渡す。梅はそれを胸に当てて喜んだ。

「この苦情の手紙は、明日試写会に行くときポストに放り込んでいきましょ」

「私、そろそろおいとまします。もう夜も遅いし」

「えええー！ 帰っちゃうのお？」

そう声を上げたのは竹彦だ。

「今夜は桜子ちゃんと添い寝しようと思ったのに」

ぞつとする桜子。梅のアドバイスを思い出して、ぎこちなく笑ってみせた。

「それじゃあ、梅ちゃん」

桜子がそう言って梅を見たとき、ぎよっとした。

「梅ちゃん？」

梅の顔が蒼白としていた。ひどく苦しそうに息を付いて、額に玉のような汗をかいている。

「どうしたの！？」

驚いた桜子は梅に近寄った。

「触らないで、桜子ちゃん」

そう言ったのは竹彦だ。

「……だいじょうぶだから……」

そういう梅は酷く苦しそうだった。何より、さっきまでとは考えられないほど顔面が蒼白としている。尋常ではない様子に桜子は戸惑った。

「竹彦、ごめん、薬取って」

悲痛そうに訴える梅。

突然の事態に桜子は慌てふためいたが、竹彦は悠長な動きで棚から小さなアルミのボックスを取り出すと、梅に手渡した。

梅はそれを受け取ると、アルミの小さな缶から小さな錠剤を二粒取り出して口に含んだ。

すると、見る見るうちに蒼白だった顔に赤みを取り戻しはじめた。  
「梅は狭心症なのよ。時々こうやって発作が起きるの。でも薬を飲めば、すぐに発作はおさまるから心配ない」

「薬って……そんなすぐに効くの？」

桜子が不安そうに竹彦に訊いた。

「効くらしいいね。私も梅と会うまで知らなかったんだけど、二トログリセリンっていう錠剤を舌の下に入れるんだって。舌の下の粘膜から薬を吸収するみたい」

「もう大丈夫」

梅が顔を上げた。桜子の不安げな顔が覗き込んでいる。

「本当に大丈夫？」

「大丈夫。そう言えば今日、薬を飲むの忘れてたから発作が起きちゃったみたい。普段はこんなことないんだよ」

「苦しそうだったよ」

「本当は薬を飲まなくても発作はおさまるんだ。そんな深刻にしないで」

梅がにっこりと笑うと、桜子もようやくやく微笑んだ。

「そんなに心配だったら泊まっていく？ それだったらサラー、ちよつとうれしい」

「ひい、と悲鳴を上げる桜子。少し傷つく竹彦。」

梅が立ち上がって元気なところを見せると、桜子も少し安心した。その後、桜子が眠ったままの八潮を抱いて、帰り支度を済ませた。竹彦が子供を見て、あまりの可愛さに抱きしめたくてやきもきした。竹彦に子供を食われると思った桜子は、必死に守りながら梅の部屋を後にした。

梅と竹彦は桜子を見送った後、居間に戻った竹彦が口を開いた。

「あんた、いい加減、手術したら？ いつまでそんな不便な心臓を抱えてるつもり？」

「うん」

梅は発作を人に見られた事がショックだった。他人は自分が心臓

逆転のカプリッチョ！

病だと知ったとき、妙に優しくなり、優しさが持続できないから梅の傍から離れたりする。

「竹彦、あなただけよ、私の心臓を不便だなんて言うの」

「不便は不便。多少難しい手術だろうと、治る可能性があるのなら、私だったら手術するわ」

梅はくすりと少し笑った。

第六幕 【 苦情のお手紙を書きましよう 】

翌朝、夏目が交番前で立番していると、前の通りに梅と竹彦が通りかかり、憎しみの一瞥を夏目に投げかけていった。

夏目はむっとして逮捕してやろうと思ったが、睨まれたくらいで逮捕出来るはずも無い。

携帯電話が鳴る。

夏目は慌てて電話に出た。

「あ、栗子ちゃん？ え？ 迎えに来て？ まだ午前中だよ？ だって、いま勤務中だって。え？ 昨夜勤だったから今日は休みだと思った？ いや、本当はそうなんだけど、あ、ちょっと待って、くり、あ……」

呆然と通話の切れた携帯電話を眺める夏目。

夏目は人生に付いて、深く考えはじめていた。

「ああ、良すぎだね。なんてすばらしいお話なの……」

感涙して、空に向かってそう呟いたのは竹彦だ。

「あんな愛の形があったなんて」

試写会を終えて、会場を後にしたところだった。

「素敵なストーリーだったね。どうしたらあんな熱い恋愛が出来るのかな」

「世界中のどこかで、あんな美しい恋愛が繰り広げられているのかしら。恋愛映画なんて、人の作り出した願望でしょ？ 世界中がこの愛のストーリーに共感したとしたら、誰かが同じような恋愛を演じてても不思議はないわ。ああ、きっと私も……」

「演じるって？ 恋愛を演じるって言ったわね」

「何よ。恋愛は演じるものよ。男が演出を謀って、女が演技をして、

一つの舞台を作り上げるものなのよ」

「男は脇役？」

「違うわよ。男は裏方。女は主演」

「演技じゃつまんない。真実の愛がいい」

梅をじろりとみる竹彦。

「真実の愛？ たとえはどんなの？」

「ものすごく相手を愛して、ものすごく相手から愛されて、いつまでも手をつなぐだけでドキドキして、見詰め合ってるだけで時間を忘れてしまうような」

「あんたはそれを想像するとき背景は？ 美しい森の中？ お城のようなおうちの中？」

「うーん、そうねえ。限りなく広がる大草原。太陽の恵みで光り輝く小さな花々」

「それが演出だって言ってるのよ。あんたが造った舞台」

「わかんないよ」

「わかんない奴は女じゃないわ。自分が恋愛を演じてる事に気づいてない女は、幸せを逃すだけよ」

「難しいわねえ」

「私は誰よりも女心の分かるオカマよ」

その後二人はファーストフード店に立ち寄り、二時間ほどさつき見た映画の議論を交わし、まだ喋り足りなかったので、ぶらりとシヨッピングモールをうろついていた。

「あんたも、そろそろ男を作りなさいよ」

「なによ、やぶからぼうに」

「男がいらないから真実の愛だの、秘密の花園だの口走るようになるんでしょ。要するに欲求不満なのよ」

「よっ 欲求不満なんて……！」

「誰かいい人いないの？」

そう言いながら、竹彦は梅の腕を引っ張ってブランドショップに入り込んだ。

「いつまでも昔の男に捕らわれてるから、他の男が寄ってこないのよ」

「別に男なんて」

「十代の小娘みたいな事を言わないの」

ブランドバックを舐めるように睨み付ける竹彦。店員がいぶかしげに竹彦を見ている。

「思春期の少女じゃないのよ。正直になりなさい。男が欲しいでしょ？」

「絶対、竹彦のほうが欲求不満だと思うわ。こんな上品なお店でする会話じゃない」

二人はあれこれ言葉を投げ交わしながら、ショッピングモールを歩き尽くし、足が疲れてきたので帰ろうと言う事になった。

夕方になって再び夏目が立番をしていると、駅のほうに梅と竹彦が見えた。二人は夏目に気づくと、糞でも握ってしまったような顔をしてタクシーに乗り込んだ。

「何だつて言うんだ。俺が何をした？」

夏目が苦々しくつぶやいた。

西日が穏やかで、夜勤からの連続勤務を思い出し、眠けも思い出してきた。

夏目は眠い目を擦って、あくびを一つする。

その時、携帯電話が鳴った。

慌てて電話に出る。

「もしもし？ 栗子ちゃん？」

栗子ちゃん？ 何言ってるんだよ、夏目。俺だ、松太郎だ。

お前、今夜暇か？ 飲みに行こうぜ。

「松太郎？ この不審人物め、何の用だ」

なんだ、ひどいな。今夜だ今夜。飲みに行こう。何時に終わ

るんだ？

「六時に上がる」

それじゃあ、駅前の「猿轡のお姫様」っていうレストラン・バーを知ってるか？

「ああ、ここから良く見える」

そこに六時半。いい？

夏目は眠っていない。早く帰って、布団に包まりたかった。

「今日は勘弁してくれ」

なんでだよ。用事なんかないだろ。

「きめつけるな」

思い出せ、あの夏の海を。そして、受験勉強を教えてやった恩を。

夏目は額を撫でながら、溜息をついた。

「ああ、分かったよ」

OK。それじゃあ絶対こいよ。来なかつたら迎えに行くからな。

そう言っつて、松太郎は一方的に通話を切った。

なんでこんな気分るときに男なんかと飲み……。

夏目は再び、湿度百パーセントのため息を漏らした。

梅と竹彦はタクシーに乗り込んで思い出した。

「苦情の手紙出すの忘れてた」

梅がそう言っつて、竹彦も思い出した。

「私もすっかり忘れてたわ」

タクシーが走り出す。

二人はポストのある場所を駅前しか知らなかった。タクシーは交番の前を通った。

「携帯で電話してる。職務中なのに」

梅の漏らした言葉。

竹彦も同調して頷いた。

竹彦は駅に引き返してもらおうと、運転席に身を乗り出したとき、タクシードライバーが言った。

「ああ、あんた覚えてるよ。あのピンクのけばけば財布を落としていったオカマさんだろ？」

「は？」

「昨日、夜の十時くらいタクシーに乗っただろう？ あの財布、俺のタクシーにあっただ」

「ああ、おじさんが届けてくれたの。一割の謝礼を渡さなくちゃいけないかったのよね」

「要らないよ。だって俺は財布を警察に届けたりしてないからな。謝礼を払えなんてお巡りさんに言われなかったろ？」

確かに。

「じゃあ、どうして私の財布が見つかったの？」

「そりゃあ、お巡りさんが駅前のタクシーひとつひとつ調べてまわったんだよ。何度も調べてまわってるから、同じタクシーを調べようとしてドライバーに罵られたりしてさ」

「なにそれ。本当なの？」

「ああ本当だ。あれだね、最近のお巡りさんは財布探しまでしてくれるんだね。俺の時代のお巡りと言ったら、自分が特別な人間だとも言いたげに偉そうにしてたもんだけどなあ」

竹彦と梅は顔を見合わせる。

しばし、そのまま硬直する。

「それに知ってるかい？ 公園での連続強盗事件。えらく事件の事を聞きまわってる熱心な警官がいるって話しなんだが、多分、昨日のお巡りさんの事じゃねーかなーって思うんだよね。若そうに見えるから、きつとそれだけ熱心なんだよ」

竹彦は、呆然としながら言った。

「おじさん、でたらめ言ってるんじゃないの？」

「何ででたらめなんか言うんだよ」

再び顔を見合わせる竹彦と梅。

しばらくそのまましていると、タクシーはマンションの前に着いた。タクシーに料金を払い、二人は無言のままマンションに入っていく。

部屋に入ると、ようやく竹彦が口を開いた。

「この苦情の手紙、どうする？」

「どうするって、なにがよ」

「なにして、どうすんのよ」

「竹彦が出すって言ったんでしょ？」

「そうだけど、ねえ、梅、あんたが出してきてよ」

「何で私が」

沈黙。

先に口を開くのは竹彦。

「梅に任せるわ」

「だから、何で私なのよ。あんたが責任持ってよ」

「梅が書いたんでしょ？」

「出すって言ったのは竹彦でしょ」

「梅だつて乗り気だつたじゃない」

「私は別に……」

流れる沈黙。

自分は悪者になりたくない、という女の不思議な心理戦は夜まで続く。

「猿轡の王女様」という不思議な名前のレストランバーに入ると、薄暗い雰囲気ながらとてもにぎやかな店だった。外から見たよりも随分広い屋内で客入りもいろいろだった。

店員に促され、二人はほぼ中央に近いテーブルに案内された。

夏目と松太郎は最初のうち、メニューを睨み付けながら沈黙を守っていたが、店員に注文を付けると、松太郎がそろそろ口を開いた。「なあ夏目、高校卒業してから、どついう経緯で警察官なんてなったんだ？」

「いいだろ、そんなことは」

「それじゃあ会話にならないだろ。積もる話しを始めるには、まずは現在の状況の生い立ちから始めるもんだ」

「別に大した理由じゃないよ。親戚に県警の刑事が居るんだよ。その人の紹介だ」

「うん？ そついえば、お前、医者になるんじゃないやつけ？」

「医者？ なんで俺が医者になるんだよ」

松太郎が「あれ？」と言いなから、首をかしげる。

「あれえ。お前じゃなかつたつけ、医者になるつて言ったの」

「医者になりたいなんていったことはないぞ。人違いじゃないのか？」

「うーん、それもそうだなあ。おかしいなあ。なんでそう思ったんだろ」

「それより俺は、お前がバイク便なんてやってるのが不思議だよ。数学博士か弁護士か、裁判官になるもんだと思つてたよ」

「弁護士免許は持つてるし、大学で数学の博士号は取得したよ。裁判官？ 俺は裁判官になんかなりたくないぞ」

今度は夏目が首をかしげる。

「お前、裁判官になりたいつて言つてなかつたつけ？」

「なんでそう思つんだ？」

「なんでつて……なんでだろつ……」

夏目はこめかみに手を当てて考え込むが、結局分からなかつた。

「別にどつちでもいい」

「なんで弁護士はやつてないんだ？ せつかく免許とつたんだろ？」

「なんか、弁護士つてそぐわないんだ。俺は中立の立場で居たいんだけど、弁護士つて偏つてるだろ？」

「弁護士って中立の立場の人間じゃないのか？」

「違うよ」

「数学の道は？」

「あんなのは遊びだ。数学なんて、ただのクイズを解くのと一緒だ。娯楽だよ娯楽」

数学をただの娯楽だと言い放った松太郎は、不意に真顔になって言った。

「弁護士辞めてバイク便始めたのだから、桜子さんにお近づきになるためだし」

「桜子さん？ なんなんだよ、お前は。そんな女に苦労するような奴じゃないだろ」

「そうさ、俺はモテモテな男だ。だけど、駄目なんだよ」  
急に自信なさげに肩を落とす松太郎。

「何が駄目なの？」

「桜子さんさ。俺はあの人を前にすると、すべての口説き文句が吹き飛んでしまうんだ。そんな女は初めてだ。何度も声を掛けようとしたけど、何も口に付いて出てこなくなるんだ」

「何であんな女がいいんだ？」

「あんな女とは何だ。あの人は俺の天使様だぞ」

「お前が女を天使だなんて言うなんて」

「そうなんだよ。俺もわからない。なんか、桜子さんとは初めて会った気がしないんだ。たぶん、俺達は運命的な糸で結ばれてるんだよ。きっと前世でも結ばれてたんだ」

「馬鹿か、お前は。それにあの子は子供がいるぞ」

「さぞ、可愛いんだろうなあ」

「気にならないのか？」

「俺、子供、大好き」

ビールが届く。

「とりあえず」と言いながら、とりあえず乾杯した。

ビールをぐびぐびと喉に通す。五臓六腑に染み渡る、とまでは言

われないが、そこそこ幸せな瞬間。

「どこで桜子さんを知ったんだ？」

夏目が訪ねると、松太郎は思い起こすように虚空を見詰め話し始める。

「あれは去年の冬だった。俺は彼女のオフィスのあるビルの正面にある喫茶店から外を眺めてた。北風が吹き荒れて、新聞紙が舞っていた。そんな中、帰宅途中の彼女がビルから出てくるのが見えた。俺は最初、何気なくそれを眺めていたけど、彼女が北風に肩を竦める態度や、風に押されながらよろめいて歩くその姿に、胸の締め付けられるような切なさを覚えたんだ」

沈黙する松太郎。

松太郎の話しは完結した。

やっぱり。

昔からそうだ。自己完結して終わる奴だった。

「それから、どうやって現在に至るんだ？」

「俺は毎日、彼女が出勤する時間、朝食を摂る時間、帰る時間を、その喫茶店で待ってたんだ。彼女は朝、八時四十七分にビルに入り、十二時十一分に朝食を摂る為にビルから出てくる。昼は必ずイタリアンレストランの日替わりランチメニューを頼むんだ。けどランチにきのこが入っている時だけは、ミートスパゲティを頼む。けどスパゲティを食べるとき、彼女はうまくフォークにパスタを巻かず、いつも時間がなくなつて食べ残してしまう。十二時四十分から四十五分の間にレストランを後にして、帰りに必ず古本屋による。

でも、必ず何も買わないで出てくるんだ。そして通行人に何度も肩をぶつけないながら、ビルに戻っていく。帰りは十八時三十分から、遅くても十九時前にビルを後にして、帰りにおもちゃ屋に寄る。でも、やっぱり何も買わない。もう一回本屋による。昼間に選んでおいたんだらうね。そこで毎日一冊の本を買うんだ。ロマンチックな恋愛小説だ。俺も読んだ。涙無しには読まれないすばらしい本だ」

「このストーリーカー野郎が」

「何だと！」

「最近はそのいうのをストーキングと言っただよ」

「人を変態みたいに言っつな！」

「……」

ストーカーは、自分はストーカーではないと主張するって聞いてたけど、まさか本当だったなんて……。

松太郎は再びうつとりすると話しを続ける。

「彼女が好きな色は黄色だ。だって、会社にスーツを着ていくときも、必ず黄色のワンポイントを入れるんだ。スカートだったり、髪留めだったり。俺はそのうち遠くで見ているだけじゃ堪えられなくなって、もつと傍で彼女を見たくなくて、弁護士を辞めてバイク便になったんだ。いや、本当の事を言っつと、弁護士はクビになっつちゃったんだだけ」

「それで、まだ一度も声を掛けてないのか？」

「そうだよ。話しがしたいよう」

急に弱気になる松太郎。

「お前はどんなんだよ、夏目。結婚は？」

「まだだよ」

「めばしい女は？」

「うーん、そうだなあ。心に決めた人はいるんだけど」

「誰？」

「お前に言っつたっつて分からないよ」

「どんな女？ ねえ、どんな女？」

「美しい女だ。ちょっとわがままだけど、そこも可愛いんだ」

「おお！」

「いつも突然電話を掛けてきて、会いたっつて駄々をこねるんだ」

「おお！！」

松太郎が目を輝かせて感動する。

「いいなあ。お前はラブラブなんだな」

「まあな」

「見てみたいなあ。なあ、そこで相談なんだけど。俺もラブラブに  
なりたいたんだ。桜子ちゃんに声を掛けたい。でも、きっかけが無い」  
「お前らしくないよな、ほんと」

「そこで、お前に協力を願いたいんだ」

「なにが？」

「桜子さんを襲った犯人を俺の手で捕まえる」

「馬鹿な事を言うな」

「お前も協力してくれよ。俺が犯人を捕まえたら、お前が桜子さん  
のところへ犯人が捕まったって報告しに行つてさ、その時、この人  
が捕まえてくれたんだって、俺を桜子さんに紹介してくれよ」

「お前の頭脳はもつと高度な作戦を思い付かないのか？」

「他に何かあるって言うんだよ」

「とにかく駄目だよ。一般人が犯人を捕まえようとしたって、法の  
傘がないんだから、下手すりゃ犯罪行為にもなりかねないよ」

「そこをどうにか」

「駄目だつて。他に方法なんていくらでもあるだろ？」

「たとえば？」

「たとえば、桜子さんの目の前でぱったり倒れて急病を装って、介  
抱してもらつとか」

「お前の脳みそは腐つてんのか」

「なんだと！」

「そんなことして親しくなれるわけないだろ。自分が弱いところを  
見せたつてしょうがない。もつと他にはないのかよ」

「直接話し掛けられないんじゃない？ 手紙を書いたら？」

「却下。手紙は確かに強力だけど、顔見知りじゃなければ気持ち悪  
がられるだけだ」

「それじゃあ、周りから攻めるっていうのは？ 桜子さんに声を掛  
けられないんなら、桜子さんの友達に声を掛けて紹介してもらつと  
か」

「俺がそんなこと思い付かないとでも思ってるのか、この馬鹿」

「てめえ、国家権力に喧嘩売ってんのか」

「だから桜子さんは友達がいらないんだ。だから、その作戦は駄目なんだよ。もつと他には？」

もつと飴をちようだい、とねだる子供のように訪ねてくる松太郎。よほどせつぱ詰まっているらしい。この男はどんなことがあっても、他人に答えを求めない人間だった。

「じゃあ、桜子さんが男に絡まれているところを助けるとか……」

夏目はそう言っただけで後悔した。それは、松太郎が掲げる作戦と何ら変わりが無いからだ。

「そうなんだよ。結局そこに行きつくんだ。分かるだろ？ 俺だつてちゃんと考えてるんだ」

直接話し掛ける事が出来ない、となると確かにそれしかなくなる、気はするが、あまりにも幼稚な……。

だからって、おかしな事に手を貸すわけには行かないし。

二人の男は、それから二時間ほど口論しあって、結局何の結論も導き出せなかった。

男二人は熱の入った口論を繰り広げながら奇特な名前のレストラバーを後にする。

人の少なくなつた駅前を、激しくなじりあいながら歩いていくと、夏目は驚愕して立ち止まった。その様子に松太郎が不審そうに夏目を睨んだ。

「どうしたんだ？ 夏目」

夏目は一点を見詰めていた。

松太郎は夏目の視線を追ってみる。

そこには二人いた。

女二人。

いや、片方は女じゃない。

駅前のポストの前で、何やら押し問答していた。

女と化け物の二人は、呆然としている松太郎と夏目に気づいた。

「あ……！」

女のほうで声を上げた。

松太郎は夏目に向けた声だと気づいて振返る。

夏目は慥然と二人の元へ歩いて行った。

「なんだよ、まだなんか文句あるのか。俺は今日プライベートだから困っても助けてやらないぞ」

そう言いながら、二人に詰め寄っていく夏目。

「困ってなんかいないわよ」

うるたえながら反抗する梅。

夏目の警官レーダーに「不審」と引つかかった。

「何かやましい事でもしてたんじゃないのか？」

「してるわけ無いじゃない。手紙を出しに来ただけよ」

「手紙？」

「まあ、まあ、まあ、まあ」

松太郎が体裁に入ってきた。弁護士根性だ。

「何がどうなってるのか分からないけど、喧嘩はよしませう」

「け、喧嘩なんてしてないわよ」

梅が強く否定する。

「君は手紙を出しに来た。僕らは通りかかった。それだけ。何も無し」

「そうよ、何も無いよ」

だが、不満な夏目が口を挟む。

「怪しいぞ。何か隠してるんじゃないのか？」

梅が顎を突き出しながら、突っぱねるように言った。

「ただの苦情の手紙をポストに入れようとしてるだけよ。交番で受けた不愉快な思いを書き綴ってあるんだ。あんたの名前も書いておいたからね」

「物騒だな」

松太郎が言う。

「苦情つて、何をされたの？」

「あんたには関係ないでしょ？」

「僕は弁護士。もし警察の対応に不正があったのなら、僕が良い方法を教えてあげよう。手紙なんかより、もっと効果的な方法」

「いいわよ、別に。あなたには関係ない」

突っぱねられて玉砕する松太郎。そもそも松太郎は真剣に仲裁する気などない。面白半分に参加してきただけだ。

「苦情の手紙なら出しても無駄だよ」

夏目がそう言った。

「なにが無駄なのよ」

「出せば分かるよ」

「それじゃあ、出してもいいのね？」

「俺が駄目だつて言えば、出さないのか？」

「だ、出すわよ」

「いいよ。その手紙が警察に届いて、交番に厳重注意が下れば、後で君の家に上司と謝罪に行くよ。このたびの怠慢をどうかお許しくださいって」

「何が言いたいのよ」

「理不尽」

「え？」

「何でもないよ。いくらでも謝つてやるから、早くその手紙をポストに放り込めよ」

梅は口を尖らせて、背後の竹彦を見た。

竹彦は少し離れたところで知らん顔していた。

「なにしてるのよ、竹彦！」

「な、なにつて？」

とぼえる竹彦。梅には竹彦が何を考えてるか分からない。

しかし、夏目が気づいた。

「あんたは、ピンクのけばけば財布の人じゃないか。受取書に「サ

「り」なんて書いてちゃ駄目だろ。本名を書かなくちゃ」

夏目がそう言うと、竹彦は白々しく言った。

「ああ、あの時のお巡りさん？ あの節はどうも梅がむすつとする。」

「ちよつと竹彦、どういうつもりよ」

「この手紙、梅が独断で書いたのよ。私は関係ないからね」

「なんでよ、竹彦が書けつていったんでしょ。竹彦が苦情を書くて言い出したんじゃない」

「さあ、知らないわ。そんなこと言ったっけ？」

「なにとぼけてるのよ」

「いつ？ どこで？ なんで？ どうして？ 私がそんなことを言つた？」

「桜子が酷い目にあつたから、書くつていったんでしょ」

「だあれ？ それえ」

啞然と成り行きを眺める夏目。

しかし、その脇ではふつふつと松太郎が野心を燃やしていた。松太郎の頭脳は、かつて無いほどにフル回転していた。

松太郎は聞き逃さなかつた。

梅から発せられた「さくらこ」の四文字を。

松太郎がでしゃばつた。

「まあ、話しはどうやら複雑のようだ。どうです、もう少し落ち着いた場所で話し合つと言つのは。何なら、弁護士の方が無料で相談に乗りますよ」

「いやよ、わたしは」

「いいわね。そうしましょ。何処かその辺に店にはいりましょ」

梅は突っぱねたが、竹彦が受け入れた。

分かつた！

梅は悟る。

竹彦はこの弁護士がちよつといい男だからって澄ましてるんだ。

## 第七幕 【 それでは猿轡の女王様で逢いましょう 】

四人は「猿轡の女王様」のとなりにあった店「亀甲縛りの女王様」という店に入った。

入るなり、松太郎が物陰まで夏目を引つ張つてきて耳打ちした。

「松太郎一生のお願い。どうかしてあの二人に、俺を桜子さんに会わせてくれるように仕向けてくれ。理由は何でもいいから、俺と桜子さんをこの世で巡り合わせてくれ」

「やだよ」

「なんだよ、俺の恩を忘れたのか？ あれは中学生のとき、俺は」

「分かったよ！ 努力するから。でも成功するとは限らないからな」  
そう言つと、夏目は松太郎に抱きしめられて、全身に鳥肌を立てた。

何を二人でこそこそしてるんだと、不審そうに待っていた二人の元にのところにもどる。

明るい店で、フランス料理店のような上品な様相がある。それほど大きな店ではなく、独りで来てカウンターで二、三杯飲んで帰るような店だ。

四人は窓際の席に案内されると、男と女（一人は若干中性）に別れて向かい合うように座った。

竹彦の正面に座った松太郎が口を開く。

「飲み物はビールでいいですか？」

「いらない」

梅が間髪入れずそう答える。

「私はいただくわ。おビールでいいわよ」

竹彦がそう言った。

いつもと様子が違うぞ、裏切り者め。

梅の敵は自分以外の三人だ。梅は気を引き締めた。

「それじゃあ、梅ちゃんは何を飲むの？」

松太郎にそう訊かれ「梅ちゃん」と馴れ馴れしく呼ばれた事に腹を立てる。

「私はお水でいい」

「お水？ そんなものより僕が素敵な飲み物を頼んであげよう」

「お酒は飲めないの」

「いいから、いいから」

松太郎がかまわず店員を呼び、注文を言いつけた。

梅の飲み物を注文するときだけ、メニューを指差し、声に出さなかつた。

竹彦が何のフォローもしない。完全に敵に回った。梅は確信した。確かに精神は女だ、と納得もした。

「そつちの子は、なんて名前なの？」

松太郎が竹彦に向かって聞いた。

女の子扱いされて、すっかり舞い上がった竹彦が「サリーよ。さすらいのシンガー、サリー」と、言葉はいつも通りだが、少し声が高い。

「サリーちゃん、梅ちゃんとはどんな関係なの？」

「ただのルームメイトよ」

「ルームメイト！」

意味も無く、松太郎が驚いてみせる。

「いいな、なんか楽しそうで」

「そんなことないわよ。この子ったらやめてって言うのに、私の目の前でストリップ始めるし、いびきはうるさいし」

「な、何ですって！」

梅が絶叫を上げる。

「ストリップ？ 本当に？」

松太郎がそこにこだわった。

「服を脱ぎ出して、突然踊り出すの」

「そんなことしないでしょ」

「分かってるよ」

やさしげにそう言ったのは松太郎。

「サリーちゃんは盛り上げようとしてくれてるんだよね」

「そんな所」

恥ずかしそうに笑う竹彦。

オカマから攻めるのか。

頬杖を突きながら漠然とそう思う夏目。

松太郎が桜子に会う為に、必死に状況を作り上げている。

夏目の出番はもう少し先。

「あなたのお名前はなんて言うの？」

竹彦が松太郎に聞いた。「松太郎です」と答えると、竹彦がうつりと松太郎を眺めた。その視線に耐えた松太郎は続いて夏目を紹介した。

「こっちは夏目。知ってるんでしょ？ こいつに何されたの？ サリーちゃん」

「別に、私は何もされてないのよ。梅が勝手に騒いでるだけで」  
「またそんなことを……！」

梅がちらりと夏目を見た。夏目がいぶかしげに梅を見ていた。

梅は不本意にも慌てて目をそらしてしまった。

その時、ビールが届いた。

テーブルに置かれる三つのビールとピンク色の液体が入ったグラス一つ。

松太郎がそれを梅に渡そうとすると、梅が「いらない」と断った。

「それは、天然水にピーチとパイヤとブドウのエキスを滴らしたカクテルだよ。アルコールは入ってない。この店で水といたらそれだよ。安心して」

松太郎がそっけなくそう言った。

梅は松太郎の憎めない気遣いに苛立った。

「それじゃあ出会いを祝して、サリーちゃん」

松太郎が名指しで乾杯の音頭を取った。

竹彦と松太郎以外は、やる気の無い乾杯を交わし、それぞれが一

口含んだ。

おいし。

梅はそう思つて、顔がうつとりするのを慌てて隠した。

「松太郎は、そっちのお巡りさんとどんな関係なの？」

竹彦が興味津々に訪ねてくる。

「夏目とは小学と中学と高校の同級生なんだ。こいつは俺のおかげで大学にも受かったし、彼女も出来たし、それに俺はこいつの命の恩人でもあるんだ」

「命の恩人？」

「そう。中学二年のとき、こいつさあ」

テーブルの下で、松太郎のすねに蹴りを入れる夏目。松太郎は口をつぐんだ。

「いやあ、こいつが大学を受けたいって言ったときは、さすがの僕も、この世には不可能な事があるんだって夏目を説得したんだけどさ。僕の講師で三ヶ月みっちり勉強を教えてやったら、三流大学に滑り込みセーフ」

「松太郎は受験勉強しなくて良かったの？」

「僕に受験勉強なんて必要ないよ」

「あら、自信家ね」

「まあね」

「頭がいいんだ」

「いいよ、かなりね」

平然と言い放つ松太郎。

梅も竹彦も気圧されるものがあった。

松太郎が言うど、なぜか嫌味に聞こえないという現象が起こる。自信のなせる業か。

「サリーちゃん、彼氏いるの？」

と、松太郎が真顔でそう聞いている。

「凄いい奴だ。と夏目が感心していると、竹彦が頬を赤らめながら「いないわ」と答え「嘘だあ、いそうだよ」と言った松太郎に、尊敬

の念まで感じた。

「梅ちゃんは？」

梅ちゃん、と呼ばれる事に抵抗を感じながら「関係ないでしょ」と突っぱねた。

「そうだ、関係ない。」

梅は本来の目的を思い出した。

「そもそも私たちは何を話してるの？ 苦情の手紙の事でしょ。」

「それはあなたに任せるって。」

場に水を差すな、という口調の竹彦。

「私、帰る。」

梅が腹を立てて席を立とうとすると、松太郎が止めるより早く竹彦が止めた。

「わかったって。まあ座って。あなたはお巡りさんと話ししてなさいよ。」

その道の人間だ。と松太郎は思った。

場のバランスを保とうとする習性を持つ人間は、水商売の人間だ。竹彦にとって梅はこの場に必要だった。何も喋らなくても言いから、置物のようにそこに座っていて欲しかった。

「話しなんか無いわよ。」

梅が言うと、松太郎がテーブルの下で夏目に蹴りを入れてきた。

お前が引き止める。

「そう言っている。」

そう言われても、気の利いた台詞の浮かばない夏目。仕方なく松太郎が言った。

「ねえ梅ちゃん。梅ちゃんはつまり、夏目の警察官としての怠慢に疑問を感じているわけだ。交番の対応に問題があると指摘して、それを改善させて欲しいんでしょ？」

「……そう、よ。」

「でも、俺は学生時代から夏目と友達だけど、夏目がそんな怠慢を働くような奴には思えないんだよね。頭は悪いけど実直って言うか

さあ。とにかく、夏目と話してみてもよ」

「この人だけの問題じゃないんだから。交番全体の話しでしょ?」

「その苦情の手紙が警察署に届いたら、夏目は減棒三ヶ月くらい食らうかな。警察官の安月給知ってる?」

「私に関係ない」

「その手紙には夏目の事を名指しで批判してるんでしょ? せめて夏目と話し合つて、夏目のところだけでも書き直してよ。勘違いがあつたら、とても残酷な事をする事になるんだよ、梅ちゃん」

残酷な事?

嫌な人間にはなりたくない、という心理をついた松太郎の言葉。

梅は何も言い返す言葉も浮かばず、不機嫌に腰を下ろした。

「さあさあ、飲みましょ」

無理な作り笑いをして、竹彦が流れを押し戻した。

竹彦と松太郎が乾杯をしているのをよそに、梅は口を尖らせて窓の外を眺めていた。

夏目の出番がやってくる。

しかしこの雰囲気の中、一体どうやって桜子の話しを切り出せばいいのだろうか。

隣で会話に花を咲かせる松太郎を見るが、まるきりこちらは気に留めていない。

夏目は深呼吸をしてから言った。

「梅さん、その後、どう?」

「その呼び名はやめて」

止る会話。

「犯人は?」

梅がそう尋ねた。

「犯人は、まだ特定されてない」

「いつになったら捕まえてくれるの? 桜子だって、あの道通るの恐がつてるんだから」

桜子の名前が出てくる。間違いなく、松太郎の耳にも入っただろ

うが、竹彦との会話に集中したままだ。

「桜子さんと親しくなっただんですか？」

梅は窓の外から視線を変えずに答える。

「ちよくちよく、家に来るようになった。わたし、暇だし」

「ああ、無職だからね」

と夏目が思わず口ずさむと、梅に憎しみの一瞥を食らった。

慌てて夏目が言った。

「いや、しかし梅さんが竹彦さんと一緒に住んでたなんて、驚きだなあ。俺が財布を届に行ったとき、顔を出してくれれば良かったのに」

「おかしい」

「え？」

「口調がおかしい。わざとらしさに溢れてるじゃない。何か企んでるの？」

「いや、なにも……」

妙に鋭いな。

「苦情の手紙の話でしょ。あなたは私に苦情の手紙を出されたくないんですよ？」

「出せばいい」

む、として梅が夏目を睨む。

「あなたが何を考えてるか分からない」

「俺の考えなんか関係ないだろ。警察官一人の怠慢は、警察全体の信用問題なんだ。梅さんが不愉快に思っただんなら手紙を出せばいい」

「梅さんはやめて。それにいいの？ 減棒三ヶ月」

そんなの食らうわけ無いだろ。せいぜい県警から注意の電話が入るくらいだ。

「俺が決める事じゃないんだよ。梅さんが決めることだろ」

「わ、わたしだって」

梅は口をつぐむ。

「まったたく、やーねえ」

竹彦がそう言った。

「この重たい雰囲気、たまんないわ。ねえ松太郎。あっちのカウンターで二人で飲まない？」

竹彦の申し出。

松太郎は、これをチャンスと見たらしい。

「いいよ。おいしいカクテルをご馳走するよ」

「まあ、嬉しかったらありゃしない」

二人が席を立とうとした。

梅が戸惑ったように竹彦を見上げるが無視をされた。

松太郎が夏目を見る。

しっかり頼むぞ。

心の声が、聞きたくなくても聞こえてきた。

「ちよっと！」

梅が声を上げたが、二人はカウンターに歩いて行って、一度も振り返らなかった。

梅はちらりと夏目を見た。

夏目がぼんやり梅を眺めていた。

「なによ」

「いいや」

そう言っつてビールを口に運ぶ夏目。

「言いたい事があるなら、言っつてよ」

「何も無いよ」

「苦情の手紙、出しているの？」

「どうして何度も同じコト聞くんだ？ 出したきゃ勝手に出せばいいだろ」

言葉が出ない梅。

これじゃあ、立場が逆じゃないか。

いらいらとストレスを感じる梅。

竹彦と松太郎の場面。

松太郎が「ラヴジュース」というカクテルを頼むと、バーテンダーがシェイカーを振り回し、二人の前に置かれた小さなグラスに注いだ。

小さく乾杯すると、上品な仕草でグラスに口に付ける。

「ねえ、私の店に来てよ。サービスするわよ」

「どこにあるの？」

「新宿よ」

「ああ、いくよ。なんてお店？」

「『チーズの香り』っていうお店。あなたがきたら安くしちゃうわ」

「うれしいなあ」  
そう言いながら、松太郎はテーブルに残してきた夏目のほうを見る。

二人に会話らしいものは見受けられなかった。

何してるんだ、夏目。

「気になるの？ あの二人」

「いいや、案外似合いのカップルかなって思ったただだよ」

「似合い？」

「うん」

「無理よ」

「無理？」

竹彦が真顔になって言った。

「梅には亡霊が取り憑いてるもの。少なくとも、あの男に亡霊は被えない」

「亡霊って、男の事を言ってるの？」

「察しがいいのね。そうよ、梅は昔の男に取り憑かれて払拭できないでいるの」

「へえ、よっぽどいい男だったんだろうね」

「いい男だったわ。お金持ちで優しく、力強くて顔も良かった」

「なんで別れたの？」

「さあ、知らない」

「気になるなあ」

「いいじゃない、他の女の事なんて。私たちの事を話しましょ。ねえ」

松太郎は微笑む。

夏目。どうやら長期戦は無理そうだ。早く勝負を付けてくれ。

松太郎は仮面が、端から剥がれていく音を聞いた。

「ねえ、松太郎。わたし、あなたにずばり訊きたいわ」

そう言つて、体を寄せてくる竹彦。

竹彦の貪欲な瞳が松太郎を金縛りにする。

「ほ、ほら、次に何を飲む？ 素敵なカクテルがあるんだ」

「ごまかさないで。私だつて女よ」

「はい……、よく分かつてますよ」

「ねえ」

竹彦の顔面が近づいてくる。

分厚い唇も同時に近づいてくる。

ああ、どうしよう。

竹彦の目が薄めになった。

鳥肌が立つ松太郎。

君に会う為には、このくらいの犠牲は必要なのか！ ゆるし

てくれ、桜子さん！

松太郎が意を決した。

目をつむる。

「一体何を企んでるの？」

竹彦が突然そう口を開いた。

眼を開くと、目前に竹彦の顔面。

「私だつて馬鹿じゃないわ。あんたが何かを企んでるのだって察しが付いてる。私はオカマだからね。あんたみたいな男に言い寄られるときは、たいてい何か企んでるときよ。さあ、言いなさい、何を

企んでいるの？ 言わないとキスしちゃうわよ」

「どうしよう。」

松太郎は「すみませんでした」と頭を下げると、洗いざらいぶちまけた。

桜子に会いたい、その一心だったと。

竹彦は、分かっていても傷つく。

あともう少しで本気になりかけていた。

ふう、と溜め息を吐く竹彦。

「ごめんなさい」

「いいわよ。別に」

ラヴジュースを一気に飲み干すと、竹彦は言った。

「分かったわ。私が桜子ちゃんに会わせてあげる。そんなことなら最初から言ってくればいいのに。まったくオカマって損な役回りね」

「本当に？」

「もちろんよ」

「ああ、神様」

「なによ、神様じゃなくて私のおかげよ。その代わり男を紹介してよね。いい男。弁護士のお金持ち」

松太郎は竹彦の手を取って涙目で言った。

「ああ、もちろん。最高級の男を紹介するよ。君が気に入るまで何度でも」

「まじで!？」

竹彦の瞳もうるうるとした。

「当たり前じゃないか！ まずは何にがいい？ 弁護士じゃなくても会計士や歯医者、何でもあるぞ」

「まあ、彩りみどり！ サリー感激!!」

「すっかり仲良しね。本気かしら」  
梅が呟いた。

夏目も松太郎のほうを見る。二人は手を取り合って、お伽の国に舞い込んだように、花の咲いた世界を作り出ししていた。

「ねえ、お巡りさん」

梅が二人のほうを眺めながら言った。

「わたし、本当にこの手紙、出しちゃうよ。困らない？」

「困る」

「出して欲しい？」

「欲しくない」

「あなたが本当に分からない。じゃあ、出すなって言えばいいのに」

「ねえ、梅さん」

「梅さんはやめてっていつてるでしょ」

「じゃあ、梅ちゃん」

やめて、といわれると思ったが、言われなかったもので、そのまま続けた。

「もしさ、もしだけど。間違っても怒るなよ」

「なに？」

「もしかしてさ、その手紙、出したくないの？ 俺に出すなって言っ  
ってほしいの？」

「なんでよ」

「だって、そう聞こえるんだもん」

「そんな訳ないでしょ」

「あ、そう」

沈黙。

梅は竹彦と松太郎のほうを、夏目は窓の外を眺めている。

梅が言った。

「ねえ、どうして反論しないの？」

「反論？」

「怠慢なんかしてないとか」

「なんで？」

「だって」

梅はそれ以上言えない。

タクシードライバーに聞いた話しが梅の頭の中に渦巻いている。タクシーひとつひとつを確認して、罵られながらも財布を見つけた。

国立公園で、事件解決の為に捜索しまわってる。

それって、あなたの事でしょ？

なんでそう言わないの？

梅が視線をテーブルに戻すと、夏目がじっと梅の事を見ていた。

「やっぱり、俺に手紙を出すなって言っただけでしょ？」

「よおおお、楽しくやってるか？」

「あん、もう、梅ったら暗い顔してえ」

陽気に二人がテーブルに戻ってきた。

妙に上機嫌だ。

梅と夏目が無気味に思っていると、松太郎が夏目に耳打ちした。

「もう、大丈夫だ。すべてOKだ」

松太郎が小声で言うのをよそに、竹彦が梅に耳打ちしていた。

「もういいのよ梅。万時うまくいったわ」

「何がうまくいったのよ」

「だから何もかもよ。心配しないで。ふふふ」

怪しく笑う竹彦。

一体カウンター席で何をしてきたんだ。

「僕の言った通り、夏目はあんまり悪い人間じゃないだろ？ 梅ち

ゃん」

松太郎が言った。

そっぽを向いて、何も答えない梅。

「私、もう、帰る」

梅がそう言つて立ち上がった。

止めるものはもういない。

「俺達も帰るか、夏目」

一人帰れば、みんな帰る。これがバランスだ。

四人はばらばらと席を立ちはじめ、上機嫌な松太郎が「ご馳走するつて約束だったからね」と言つて、会計を済ませた。梅だけは金を払おうとしたが、松太郎が丁重に断つた。

それでも無理矢理お金を払おうと松太郎の後を付け回したが受け取らず、最後には竹彦になだめられて仕方なく受け入れた。

タクシー乗り場に来ると、かなり長い列が出来ていた。

「歩いて帰ろうか？」

竹彦が梅に言つた。次に竹彦は梅に耳打ちして「少しぐらいの運動は必要なんですよ？」と言つた。確かにそうだったが、何も今運動する事はない。

「送つていくよ。最近この辺物騒なんだろう？」

「要らない」

松太郎の申し出に、二つ返事の梅。ボディガードなら竹彦で十分だ。

申し出を丁重に断り、梅と竹彦は二人で帰る事にした。

その折、梅はバックの中から苦情の手紙を取り出した。

それを夏目に差し出す。

夏目が戸惑つたように梅を見た。

すましたような態度で梅が言つた。

「おごつてもらつたお礼。減棒、三ヶ月なんですよ？」

夏目が手紙を受け取ると、梅は表情一つ変えず「じゃあね」と言つて背中を見せた。

そのまま竹彦の腕に手を回して歩いていった。竹彦が一度振返つて、笑顔を振り撒きながら手を振つた以外は、そのまま通りの角を曲がって見えなくなつた。

松太郎が呆然とする夏目の肩に手を置いて「よかったな、俺のおかげだからな」と言った。

竹彦と梅の帰り道。

「何で手紙を渡したの？」

「何でって、かわいそうじゃない、減棒三ヶ月」

竹彦が目を丸くしていった。

「嘘よあんなの。苦情の手紙くらいで三ヶ月も減棒食らうわけ無いでしょ」

梅が眉間に皺を寄せた。

「だって言ってたじゃない、あの松太郎が」

「だから嘘だって。せいぜい交番に注意の電話が入って、私んちにすみませんでした」って謝罪の電話か手紙が届くくらいじゃない？」

「家に直接来て、謝る事になるとも言っていたよ」

「そんな事にはならないって」

「なんですって！」

梅はようやく悟った。夏目が出したければ出せって言っていたのは、手紙を出したくらいじゃ、たいした事にはならないと分かっていたからだ。

腹の底から湧き出てくる憤怒。

夏目から手紙を奪いかえそうと踵を返した梅を、竹彦が慌てて止める。

「いいじゃない別に。あんまり怒ると心臓に悪いわよお」

「竹彦も竹彦よ。今日はあんたって人が分かったわ。その辺の女と一緒に」

「あら、ありがとう。最高の誉め言葉だわ。やっと私を女と認めたのね」

「ああ、もう！ むかつくう。手紙、書き直してやる」

「あんまり興奮しないでさ。それに、いい話もあるのよ」

「いい話して？」

「そんなの、会計士に弁護士に歯医者さんよ」

「は？」

「約束しちゃった。紹介してくれるんだって。あなたにもお零れあげるからさ」

「なによ、それ」

「桜子ちゃんを紹介してくれて松太郎に頼まれちゃった。桜子ちゃんを松太郎に会わせるとき、一緒に会計士か弁護士か歯医者さんを連れてきてくれるんだって」

「なんなの一体、その話しは？」

「だから松太郎が桜子ちゃんの事を好きで、それで私に紹介してくれて」

「何でそんな勝手な事を一人で決めちゃうの？ それにもしかして、あの二人は最初からその目的で私たちを誘ったわけ？」

「当たり前じゃない。やーね、梅ったら」

口を手を当てて、おほほほ、と笑う竹彦。

怒るな、梅。落ち着け。

自分に言い聞かせる。

「じゃあ、苦情の手紙の話は何だったの？」

「えさ」

「えさあ！？」

「んもー。いいじゃない、そんなことは。それより会計士に弁護士に歯医者さんでしょ？ 私のおかげよ。男よ、お金よ、玉の輿よ」

「冗談じゃない」

梅はきっぱり言った。

「そんなやつらに桜子を紹介できる訳が無いでしょ。諦めなさい、竹彦」

竹彦がむくれて言った。

「やーよ。それに決めるのは桜子でしょ？」

「桜子が知らない男と会ったりする訳無いわ」

ぎくり、と肩を震わせる竹彦。確かにそのとおりだと思ったのだらう。

「どうしよう、梅」

「私に聞かないでよ」

「あああ、会計士に弁護士に歯医者さんがあ」

竹彦は絶望的な声を上げる。

「諦めないわ。どうにかして、二人を巡り合わせてやる」

男の声で竹彦は決意を誓った。

## 第八幕 【警官もいないのに犯人の追跡劇なんて】

「よし、国立公園にいくぞ、夏目」

松太郎が言った。

「なんだよ、桜子ちゃんに会える事になったんだろ。なら、犯人探しはもういいじゃねーか」

夏目がそう言うのと松太郎が指を振って、ちっちっち、と舌を鳴らした。

「無理だよ。桜子ちゃんは知らない人間と会おうなんて、軽い子じゃないんだ。とりあえず、俺と桜子ちゃんのつながりが出来ただけだ。後は桜子ちゃんが俺に会わなければならぬ既成事実を作らなくちゃならないんだよ。俺が犯人を捕まえる。そして捕まえたのが俺だと知ると、桜子ちゃんはずいぶん俺にお礼が言いたいとデートを承諾してくれるはずだ」

夏目はふーんと鼻を鳴らしたただけだった。

「犯人逮捕に協力してくれよ」

「俺は今、勤務中じゃないんだよ。それに本当に危険なんだよ」

「桜子ちゃんの為なら、そのくらいの危険なんてへでもないよ」

「警察に任せろって」

「俺は警察が頼りないっていつてるんじゃないんだよ。警察より早く捕まえたいんだ」

「駄目だって」

そう言いながらも、足は着実に国立公園に進んでいる。

松太郎も夏目も、住まいは別の町だ。

夏目は梅から受け取った苦情の手紙を開いてみた。

それを読む。

「何でそんなにダメダメ言うんだよ」

「警察官だからだよ」

「学生時代の数々の恩を忘れたのかよ」

「覚えてるよ。だから止めるんだ。お前を危険な目には合わせたくないって言う俺の優しさだよ」

「嘘付け」

「嘘だよ」

「何だと」

「警察官はうそつきなんだよ」

黙り込む松太郎。

また何か考えている。夏目を説得する台詞を頭に描いているのだ。

「何だよ」

そう呟いたのは夏目だ。

松太郎はじつと夏目の顔を眺めながら考え込んでいる。

「たしか事件の内容は……」

松太郎がつぶやきながら、考えをめぐらせている。

夏目は放っておく事にし、梅から受け取った手紙を読んだ。

一通り読み終わると「なんだよ、これ」と夏目がぼやく。

松太郎が夏目をみる。夏目が手紙を読みながら頭を掻いていた。

「どうした？」

松太郎が訪ねると、夏目は仏頂面で言った。

「これ、俺の名前なんてどこにも書かれてないんだよ。うそつきやがった」

松太郎が首を傾げると、少し後に言った。

「それって、こういうことだろ。梅ちゃんが言うには夏目の減棒三ヶ月がかわいそうだから、その苦情の手紙をお前に渡したってことだった。だけど最初からお前の名前がなかったってことは、お前の減棒がかわいそうだからって理由は違うってことだ。じゃあ、なんで渡したか。それは、つまり警察の怠慢の事は、お前に任せるってことだよ。県警に苦情を出すんじゃないやなくて、直接交番に苦情を出したわけだ。それをお前に渡したのは、お前に読めってことだよ。一般市民が憤りを感じてるから、お前にどうにかしろって伝えたかったんだよ。怠慢を働いた交番の人間にその手紙を見せるか見せない

か、お前に任せる、そういうことだな」

「ふーん」

「それより犯人の事だろ」

「だから諦めろって」

「諦められるわけないだろ。俺の生死が懸かってるんだ」

「生死？」

「桜子さんに会えなかったら、俺、死ぬ」

「迷惑な奴だ。どうせなら餓死しろ。山奥で餓死すれば、誰にも迷惑がかからないよ」

「ひどいな、さつきは俺の身体を案じてくれてたじゃないか」

「とにかく、駄目」

「何でそんなにダメダメ言うんだよ」

「警察官だからだよ！」

夏目がそう怒鳴ると、松太郎は顎に手を当てて、再びしばらく考え込んだ。

また、よからぬ事を考えている。

答えが導かれる前に何か言ってやろうとしたが、松太郎が結論を出すほうが早かった。

言葉を吐こうとした夏目の目の前に、松太郎は指でVサインを出してみせた。

「二時間。今夜二時間だけ付き合ってくれ。それで犯人が見つからなかったら、俺も他の方法を考える」

何を企んでる？

松太郎は、次の次の次ぐらいを常に考えている奴だ。絶対に何か企んでいるのは間違いない。

「何を考えてるんだ？」

夏目がそう言うと、松太郎が首を横に振る。

「今回は何も企んでないよ。本当に二時間だけ付き合ってもらって、それでも駄目なら諦める」

真剣な眼差しの松太郎。

「何でいさぎいいんだよ。もしかして二時間で犯人を捕まえる算段でもあるんじゃないか？」

「なんだよ。付き合ってくれないのか？」

夏目は思い悩んだ。

「本当に二時間だけか？」

「ああ、本当」

「それで諦めるんだな？」

「犯人を捕まえるのは諦める」

「よし、いいよ」

「俺に協力してくれるってことだよな？」

「そうだよ」

何を考えてるか分からないが、今から二時間じゃ、犯人なんか捕まえられるわけが無い。警官が警戒態勢で何日も見回りしてて見つからないものに、たった二時間でどうにかなるものじゃない。

いい加減、夏目も連続勤務で疲れているが二時間くらいならいいだろう。

「じゃあ、タクシー乗ろう」

タクシーを乗って、やってきたのは国立公園ではなかった。

そこはタクシー代三千円の距離にある松太郎の家だった。

独身のくせに一戸建てを建てて住んでいる。「何のつもりだよ」

と言う夏目を「まあまあ」と言っ、家に招きいれた。

でかい家だ。

「この家、お前のなんだろう？ 弁護士はそんなに儲かるのか？」

「いや、弁護士数年やっただけで家は建てられないよ。特許を五つ持つてるから」

「特許？ 何の特許だよ」

「新種の蛋白質と、光ファイバー構造の一部分。それとあれだ。一

番でかいのは業務用OSソフト。あれはでかい。ほとんど俺が設計したから、じゃんじゃん金が入って来る」

何を言っているか夏目には理解できない。

家に案内されると、三十畳はありそうな居間に案内された。

「並んでる絵画は俺の趣味だ。触れるなよ。うん百万はするからな」

呆然とする夏目をよそに、松太郎がおもむろに絨毯を剥がした。

夏目が眺めていると、松太郎はテーブルの上においてあったリモコンを手に取り、ボタンを押すと、何と床が盛り上がりはじめた。

「なんだ、これは」

「人を入れるのは初めてだ。ここは俺の仕事部屋。頼まれて、ここでコンピュータソフトを作ったり、難しいプログラムのデバックをやってる。それと、あれだ。情報操作。おまえ、警官だけど、俺を逮捕したりするなよ。友達だからな」

訳の分からない事を口ずさんでいると、開いた床の下に階段が出現した。松太郎はその階段を下り、地下室の電気を点けた。

松太郎に付いていくと、大きな鉄の箱が縦列しているのが見えた。それに広い。

窮屈そうに羅列している鉄の箱のせいで光が行き届かず薄暗い。

「なんだよ、これ」

「演算機とか高速プリンターとかサーバーとか、まあ説明しても分からないよ」

その地下の奥に机が見え、その上にぼんやりと光を放っているディスプレイがあつた。松太郎はそこまで行くと椅子に座り、映っていたスクリーンセイバーを解除した。その後、真っ黒な画面に「パスワード入力」と文字が現れ、カタカタと松太郎がなにかを打ち込んだ。

その後を訪れた画面は、見た事のあるOS画面。

松太郎は煙草をくわえ、画面を操作しはじめた。

「何をやるつもりだよ」

「ハッキング」

松太郎はそう呟くと、手慣れた操作で次々にウィンドウを開いていく。

「夏目。協力してくれるって言ったよな」

「うん」

「それじゃあ、桜子さんの盗られたものって何？」

「そんなの言えるわけがないだろ」

「別にいいよ。県警のデータベースにハッキングするだけだから」

「じよ、冗談はやめろよ。犯罪だぞ」

「じゃあ、教えてくれよ」

「それも犯罪だ」

「じゃあ、ハッキングする」

県警のデータベースをハッキング。つまり逆探知され、この場所がばれる。夏目が犯罪に荷担した事がばれる。懲戒免職。

「……分かったよ。財布だ。それだけ」

「中身は？」

「……そんなの覚えてないよ」

「とぼけるな。覚えてるはずだ」

「なんでだよ」

「桜子さんの事件をきっかけに、夏目は国立公園の巡回を増やしたんだ。俺を捕まえたときも、明らかに強盗犯を狙って、張ってたんだろ？ ならば印象が深かったはず」

「……確か、ビデオレンタルのカードに商店街のポイントカード。」

それから三千円に、子供の写真」

「子供の写真か」

「それがどうした？」

「……可愛いんだろうなあ」

松太郎はそう言って、画面を操作した。

「なあ、夏目。桜子さんの事件、おかしいと思わないか？」

「なにがだよ」

「だって桜子さんが襲われた場所って、公園の入り口から十五メー

トルのところ。そんな所で悠長に後ろから羽交い締めにして、本人に財布を出させたりするかなあ。それに桜子さんが襲われたのは外灯の真下だった。公園の入り口前には国道が通ってるし、そんな所でのもんびり襲っていたら、公園の外を通る通行人に丸見えじゃなか「  
「どういうことだよ」

「まだあるんだよ。確か犯人は桜子さんを羽交い絞めにして敬語を使ったんだろ？ それに不適に笑いもした」

「それがなんだ？」

「不自然」

「犯罪に自然も不自然もあるか」

「あるんだよ。やり慣れた強盗は自然に仕事をこなす。つまり、入り口付近で外灯の下で桜子さんを襲うとしたら、有無を言わずふんだくるはずだ。突然現れてバツクを掴み、そのまま走り去る」

「アマチュアだって言いたいのか？ だとしたら何だって言うんだよ」

「俺の勘だと犯人はアマチュアであるが、顔見知りだ。明らかに桜子さんと知って犯行に及んだんだ。暗い夜道、犯人は外灯の下まで来て、明かりの元、初めて桜子さんの顔を確認する。あるいは桜子さんと確認したかった。間違えたくなかったからだ。桜子さんは外灯の下で転んだ。なかなか立たない。犯人は犯行に及ぶ。桜子さんのおしとやかな人格を知っているから恐れはなかった。ナイフを突き付ければ黙っていると思った。だから、ふんだくるんじゃない。ナイフを突き付けて、黙らせてから確実に財布をゲットした。それに敬語を使うなんておかしいじゃないか。もしかしたら、桜子さんと仕事の付き合いなんかがあるのかもしれない。それに不適に笑ったのも、リラックスしてた証拠だ。いつも会っている相手だから緊張感もそれほどなかったんだ。笑う余裕があった」

「お前は犯罪心理捜査官か」

「だから、そういう科学的根拠があるわけじゃなくて、ただの印象だよ。見当はずれかもしれないし、当たってるかもしれない」

「顔見知りだとしたら、なにが目的で？」

「……それを調べる」

「どうやって？」

「ごめん桜子さん。許してくれ。君を守る為だ」

そう言いながら、悲痛そうに松太郎はキーボードを叩いた。

「なにしてるんだよ」

「桜子さんの個人情報をハッキングしてる」

「ばか、お前、犯罪じゃないか！」

「分かってるよ」

「やめろって」

「大丈夫だよ。ハッキングする相手も犯罪者だ」

「どういうことだよ」

「個人情報を取ってる専門の裏サイトがあるんだ。正規にアクセスすると馬鹿高い料金を取られる。だからハッキングしてる」

「ハッキングって、どうやってやるんだ？」

「簡単だよ。専用ソフトを起動してボタンを押せばいい。後は勝手にやってくれる」

「個人情報を取ってるサイトって？」

「警察関係者だって興信所だって大企業だって役所だって、私腹の為に個人情報売り飛ばしてるんだ。それを買ってる組織。ネット上で売買してる」

「そんなの警察が放っておいてるのか？」

「警察が一番頼りにならないのがネット上だ。今のところ法整備が後手後手。イタチの追いかけっ子」

鈴の音があった。

それはこのコンピュータからの電子音で、ハッキングが成功した事を知らせていた。

「と言っても、たいした情報は引き出せないし、運がなければ情報は存在しないかもしれない。分かったとしてもせいぜい電話番号と住所、勤務先くらい」

「恐いな。俺の情報も漏れてるのか？」

「誰も夏目の個人情報なんて知りたがらないよ。第一、素人じゃ大した事は出来ない。それに電話番号くらいなら、郵便受けから電話料の請求を持つてくれればいいだけだ」

松太郎は画面を操作し続ける。

「今度は勤務先をハッキングする」

「本当にはれないのか？」

「無数に中継するし、丁寧にログも消してる。気づかれて逆探知を受けても、その頃にはアクセスを切り離してる。さあ開いたぞ」

会社のデータベース。

縦横にマスが引かれ、中に無数の文字や数字が書かれている。

「何を調べるんだ？」

「雇用調査の依頼先。興信所を突き止めて今度はそこにハッキングする。最初からそれが目的だ」

「雇用調査？」

「人を雇うとき履歴書が事実かどうか、大手の企業ならそのくらい調べたりする。履歴書をそのままうのみにして、暴力団やスパイなんて雇ってみる。えらい被害を被るし、一度入社させてしまったら理由も無くクビになんて出来ないんだよ」

松太郎は雇用調査の依頼先の情報を手に入れると、いよいよ興信所にハッキングした。

「ここがきわどい。データとして興信所がコンピュータに保存しているかどうか。ここに桜子さんの情報があるとすれば、かなりの事が分かる」

松太郎がハッキングソフトを起動した。

夏目は緊張しながら待った。

鈴の音になる。ハッキングが成功した。

松太郎は「伊集院桜子」の名前で検索をかけ、見事桜子の情報を入手した。直ちに情報をハードディスクに落としアクセスを切った。「興信所なんて違法行為の雨霞だ。罪悪感があるなら悪徳興信所の

実態を暴いて逮捕しな」

「それで何が分かるんだよ」

「不動産とか預金残高。つまり財産だよ」

「それで何が分かる？」

「……すげえ……」

松太郎が驚愕の声を上げた。

「どうした？」

「桜子さん、とんでもない大金持だ。ユニオン・システムズの会長のお嬢さんだ。……なんてこった。俺はそんな人に手を出そうとしたたのか？」

呆然とする松太郎に「そんな大金持なのか？」と訊くと、目を剥いて松太郎が言った。

「ユニオン・システムズは世界規模のソフト開発企業だ。俺もいくつかそこから依頼を受けて開発に参画してるけど。とにかく見てくれ、この登記簿の数々。いったい、どれだけの土地を持つてるんだ。見てくれ、桜子さんのお父様は「窓」でおなじみのあの会社の株券まで持ってやがる。うわ！ なんだってんだ、この途方も無い金額は。なに？ 災害募金？ なんだと、こいつ毎年十億も募金してるつていうのか！？」

「松太郎、それより犯人はどうなんだよ。犯人がそれで分かるのか？」

「いや。分からない。いたとしても、多分殺されてるんじゃないか？ ユニオン・システムズのお嬢さんに手を出して、ただで済むわけがない。……ん？ 何か変だぞ。ユニオン・システムズのお嬢さんがこんなマンションに一人暮らし？ 月八万のマンションだ。やっぱり。そういうことか。夏目。大体分かってきたぜ」

夏目が無言で説明を促すと、松太郎が話しはじめた。

「桜子さんは自立したかったんだ。おそらく子供を身ごもったのを契機に。こんな金持ちのお嬢さんがマンションを買わずに借りてるなんておかしいし、預金はたったの二十万だ」

「うん」

「だからもう一つ覗いてみる必要が有りそうだ。今度は大手探偵社だ。自分の可愛い娘が子供と二人暮らししてたら、親心に気になるはずだ。なら探偵に桜子さんの素行調査くらい依頼してるかもしれない」

「もう、いいんじゃないか？」

「まだ、二時間経ってない」

「そもそも、俺に何をしろって言うんだ。俺は何もしてないぞ」

「待って。そろそろだから。うーん、ユニオン・システムズが依頼しそうな探偵社は……」

松太郎は思い悩んだ後、一つの探偵社を選んだ。

ハッキングソフトを起動して、その探偵社にアクセスした。

「株式会社、日本データバンク。あそこしか考えられない。だけど、むずかしいなあ。そんな所にハッキング出来るかなあ」

コンピュータからガラスが割れる音がした。ハッキング失敗を知らせていた。

「やっぱり駄目だ」

松太郎は、CDドライブからディスクを取り出し、新しいCDROMをセットした。

ハッキングを開始し、まもなくガラスの割れる音。

「ちくしょう。やっぱりセキュリティが難しいな。それじゃあ、とっておきだ」

そう言ってカギのかかった机の引き出しから、新たなCDROMを取り出した。

「まだ制作途中だけど、これで駄目ならお手上げだ」

夏目は聞き逃さなかった。

「制作途中ってどういうことだよ。もしかして」

「俺が作ってるハッキングソフト。売る気はないよ。そもそもウィルス撃退ソフトとか、ハッキングのセキュリティソフトの開発依頼で試験的に使うソフトだからね。実際に使うのは初めて」

そう言って、ソフトを起動した。  
今度はしばらく時間がかった。

いいのかなあ、こんなことしてて。

夏目が不安に思ったとき、コンピューターから鈴の音が聞こえた。  
「やった、成功だ」

直ちにデータをハードディスクに落とす。

画面上にデータを書き込む残り時間のゲージが現れた。

「時間がかかりそうだな。サーバーを経由しすぎてパフォーマンスが落ちてる。これなら直接覗いてプリントしたほうが早かったかな」

その時、コンピュータ画面が突然、真っ暗になった。

そして警告音となり、画面上に無数のウィンドウが現れた。

「やばい！　なんてこった。ウイルスが仕掛けられてた！」

松太郎が弾かれたように立ち上がると、猛然と部屋の奥まで走っていつてブレーカーを落とした。がくんと音がして、すべての電気が切れた。全てが真っ暗になる。

「ちくしょう！　俺の作り上げたコンピュータが少しでも壊れてたら、日本データバンクのシステム全部破壊してやる！」

暗闇の中でそう怒鳴ると、松太郎が再びブレーカーを上げた。明かりの点く地下。

コンピュータが再起動する。

まるで乳児を扱う手つきでキーボードを叩くと、しばらく経って松太郎が胸をなで下ろしてため息を漏らした。

「異常無し。被害ゼロだ。俺の対応が早かったな」

「おまえ、いつも一人でこんなに騒いでんのか？」

「一人で騒ぐわけないだろ」

「それで？　データは入手できたの？」

「出来たみたいだ。名字が伊集院で助かった」

「なんでだよ」

「名前の順で個人データを検索かけたからだよ。 이행は最初のほうにあるだろ？」

松太郎が桜子の個人情報を読み出した。

「これは、調査報告書。　　凄いな。五年分の報告書だ。確かに、これをハードディスクに落とすには時間がかかったはずだ。見てくれ、月に十五日の調査だ。洒落にならない調査料だな。へでもないか、ユニオン・システムズの社長の資金力じゃ」

独り言のように呟きながら、画面に表示された報告書を舐めていく。

しばらく経って、松太郎の動きが止った。

「ビンゴだ、夏目。犯人が分かったぜ」

「分かったのか？」

「ああ。でも駄目だ」

「何が駄目なんだよ」

「使い物にならないよ。これじゃあ俺が犯人捕まえられないじゃないか」

松太郎が桜子の情報をめくる。

「桜子さん、苦勞してるなあ。見てよ、デパートの特売に並んでる写真がある。うふ、プリントアウトしておこ」

「自己完結するな。俺に犯人を教えろ」

「まず、調査依頼は桜子さんの子供のお父さん。桜子さんは四年前結婚詐欺にあつてる。その際、五千万騙し取られた。もちろん桜子さんの父親はその男を探したけど、全く見つからなかった。そして海外に逃げていたその男が日本に舞い戻ってきた。桜子さんの財布を奪ったのはその男だろう。のこのこ桜子さんの前に顔を見せたら桜子さんの父親に殺されると思ったから、桜子さんの財布を狙ってクレジットカードなどから大金をせしめようとした」

「何でそんな事が分かるんだよ」

「調査報告書に、その男のものもあつた。安藤桃平、三十二歳。結婚詐欺師。所在不明。三月六日に帰国したとの情報。桜子さんが被害に遭ったのは三月六日の夜。しかも犯罪行為が桜子さんの知り合いつつていう俺の見解が正しいとすると、つじつまが合っちゃうんだ

よな。たぶん探偵社も安藤桃平を必死に探してると思うよ。」

「証拠が無いか」

「そのとおり。それにたぶん、安藤は桜子さんのおやじさんに消される運命だよ」

「おまえ随分淡々と話すんだな。良く考えてみるよ。桜子さんの子供の父親ってことになるだろ」

「そんなこと分かってるよ。桜子さんは安藤と結婚の約束を交わして、子供が出来たから自分の力で生活しようと思ったんだ。一緒に安藤と生きていこうと決めたんだ。だけど裏切られた。桜子さんは一人で会社勤めをしながら子供を育ててる。しかも午後十五時から午後二十時までベビーシッターも雇ってる。それを自分の収入でまかなってるんだ。そんな中、貯金だっしててる。かなり苦しい暮らしのはずなのに」

冷たい口調の松太郎。

夏目は思い出す。

松太郎は冷たくなるとき、それは怒りを燃やするときだ。

「おまえ何を考えてるんだ？ もうこれ以上首を突っ込むなよ」

「いやだ」

「何する気だよ」

松太郎は口を尖らせて考え込んだ。

「本当はここで犯人を暴いて、夏目と一緒に犯人逮捕に行こうと思っただけど、予定が狂っちゃったよ」

「下手な事をするなよ。もういいだろ、この辺で。俺が犯人の情報をおそれなく県警に流すから心配するな。桜子さんと会いたいなら俺がなんでも協力するから」

「ありがとう。でも駄目だ」

「あくまでも安藤を捕まえる気なのか？ 証拠がないんだろ？ 無理だっつて」

「逆だよ」

松太郎が夏目の目を真っ直ぐ見据えて言った。

逆転のカプリッチョ！

「安藤を守る。桜子さんのお子さんの父親だろ？俺が守ってやる」

## 第九幕 「はたして彼女のナイトさまは如何に」

明くる日、交番に出勤した夏目は、昨日渡された苦情の手紙を交番内の掲示板に張り出した。

掲示板は誰もが確認するから、この手紙にも目を通すはずだ。

その手紙をいち早く発見した藤本巡査長が声を上げた。

「誰だあ。これ張ったの」

夏目が無言で手を挙げた。

「こんなの張っちゃいかなだろう。いつ届いたんだ？」

「俺が直接受け取りました。この間の強盗事件の被害者からです」

「分かつてるが、なにも張り出す事はないだろう。取るぞ？」

「読んだんですか？」

「読んだよ」

そう言つて手紙を剥がす巡査長。

昼飯を食つていた立川巡査が言った。

「いちいち気にしてられんだろ。捜査は上の人間がやってるんだ。

俺達に言われたつて、どうこうなる問題じゃない。俺達は俺達の仕事をした。気にするな夏目巡査」

藤本巡査長は手紙をくしゃくしゃ丸めると、それをごみ箱に放り込んだ。

梅ちゃんの悲痛な訴えはごみ箱の中だ。

漠然とそう思いながら、夏目巡査は交番を出て立番をした。

目の前を様々な人間が通りすぎて行く。

しかし、話しが妙な展開になってきたな。

なだらかな陽気の午後、夏目はぼんやりそんなことを考えていた。

俺はどうすればいいんだろう。

それが一番の疑問だ。強盗犯人を知ってしまったし、松太郎が言うには、その犯人は桜子の父親に消されるらしい。そんな物騒な話

しを見なかった聞かなかった事にしてしまった方がいいのだろうか。

なんでこんなことに……。

思い悩んでいると携帯電話がなった。

「もしもし？」

不機嫌に電話に出ると、電話の向こうで栗子の声がした。

「く、栗子ちゃん！？ どうしたの？ 迎えは無理だよ、勤務中だから。え？ 俺の家の前に来てる？ 何で！？ 家出した？ 待つてどういうこと！？ なに？ 居ないなら、別の家に行く？ ちよつと待つて、それって男の家じゃないだろうね？ 関係ない？ あ

ー

通話が切れる。

慌てて掛け直す夏目。

通じない。

なんてこった。家に栗子ちゃんを連れ込める最大のチャンスだったのに！ 何で日曜日に俺はこんな所に突っ立ってるんだ。何で警察官なんてやってるんだろう。

手首を切る人達の気持ちが理解できそうになった。

それから夕暮れになり、退勤時間が近づいてきた頃、交番の前を通った梅が夏目に睨みを利かしていった以外は、何の事件も無かった。時々、市民に道を聞かれる程度で、交番の仕事なんてほとんど無い。

幸せって何？

夏目は、真つ赤な夕日にそう尋ねてみた。

夕日はそんな夏目を無視して、遠くの彼方に沈んでいった。

交番にオカマの竹彦が訪れたのは、そんな頃だった。

夕暮れ時に桜子が梅の部屋に遊びに来た。

事件以来、桜子はたびたび梅の部屋に遊びに来るようになってい

た。

「竹彦さんは？」

桜子は必ず最初にそう聞いてくる。いない、と言えば安堵するし、いる、と言えば少し不安そうにするだけだ。

そして今日、桜子は不安げに部屋に上がった。

「あーんら、桜子ちゃん、お元気？」

大福に食らいついていたすっぴんの竹彦が挨拶した。

竹彦にいつもの元気が無い。

梅に、松太郎を紹介する話しは絶対するなと釘をさされていた竹彦は、夕べからずっとこの調子だった。

桜子と一緒に訪れた八潮は梅にすっかり懐いて、梅を見ると呼び捨てにして抱きついてくる。

「うめ、うめ」と名前を呼ぶ八潮は確かにかわいらしかった。

同時につらくもあった。

八潮を見るたび、避けて通れない現実が胸の中に渦巻く。

「苦情の手紙、どうしたの梅ちゃん」

桜子にそう訊かれ、梅は忘れていた腹立たしさを思い出した。

梅は思わず、夕べの出来事を愚痴にして桜子にぶちまけそうになった。夕べの事を話せば、同時に松太郎の話しをする事になる。梅が口をつぐむと、入れ替わりに竹彦がにやりと笑って、話しはじめた。

「実はね、桜子ちゃん。夕べ偶然、例のお巡りさんに会ってさ。苦情の手紙に付いて話し合ったのよ」

「へえ」

桜子が興味を持った。

どういふつもりだ、竹彦。

油断なく竹彦の言動に注意を払う梅。

「それでなぜか、梅がそのお巡りさんに手紙を渡しちゃったのよ。

それってどういう事分かる？ 手紙を処分するのも、交番の人に見せるのも、あなたに任せるってこと」

「へえ、そんなことがあったんだ。でも、どうして渡したの？ 夏目さんだっけ？」

「どうなのかなあ。どうして渡しちゃったの？ 梅」

竹彦に突然振られ、慌てて答える梅。

「減棒三ヶ月がかわいそうだからよ」

「でも、手紙には夏目さんの事なんて書いてなかったわよね。それじゃあ、減棒三ヶ月がかわいそうだからって理由にはならないじゃない」

そう言つと、雰囲気を悟つてか桜子が言った。

「もしかして梅ちゃん、夏目さんの事、いい人だつて思ったの？」

「冗談じゃない。渡した事を後悔してるの。だつて減棒三ヶ月なんて嘘だつたのよ。手紙はきつと丸められてごみ箱の中に行つてしまつたのよ」

「それは手紙を渡した理由になつてないじゃない。手紙を渡したときは、いい人だと思つたの？」

竹彦が突つ込んできた。

梅は戸惑いながら答える。

「わ、わかんないよ。ただ、あの人はちゃんと捜査してたみたいだつたし……。竹彦だつて分かつてるでしょ」

「分かつてるけど、怠慢を働いた事は事実よ」

「何が言いたいのか？ 竹彦」

竹彦がいやらしく笑つて言った。

「すこし気に掛かつてるんじゃないの？ あの夏目くんに」

「気に掛かつてないわ」

あっさりと否定する梅の様子に、桜子は残念そうな顔をした。

「なんだ、そういう展開になるんだと思つて期待しちゃった」

「何を期待してるって？」

「梅ちゃんと夏目さん」

「どうしてそうなるのよ」

竹彦が更に嫌らしい顔をして言った。

「二人でテーブル挟んでいい感じだったじゃない。なに話してたの？」

「何も話してない」

桜子も竹彦に同調して言った。

「悪い人じゃないと思うよ、あの人。うふふふ」

「何が言いたいの、桜子！最後の含み笑いは何!？」

「むきになっちゃって」

竹彦がからかうようにそう言ってくる。

桜子までにたにたしている。

「デートしちやえば？」

と竹彦。桜子も「しちやえ」と同調する。

「そうよ、これでトリプルデート成立よ」

あ！

梅は竹彦のたくらみを理解した。

そうはなるものかと、梅は身を乗り出して言った。

「竹彦の策略は読めたわ。馬鹿にしないでくれる」

竹彦はとぼけて言った。

「なに？ 策略って？ ねえ桜子ちゃん。私たち何か企んでたっけ？」

さあ、と首をかしげる桜子。

「トリプルデートとか言ってたわね。私を巻き込んで、どさくさで桜子と松太郎を会わせる気なんでしょ？」

「やーね、私はそんな浅はかじゃないわ。あなたが夏目君とくっつくなんて思うわけ無いじゃない。むしろ有り得ないわね。梅の好みは誰よりも良く知ってるわ」

「じゃあ、何だって言うのよ」

「自分の胸に訪ねてみたら？」

「自分の胸？」

梅は口を尖らせながら、自分の胸に訪ねてみる。

「何だって言うのよ」

梅がそう言うと、次に桜子が言った。

「私と松太郎を会わせるって、どういうこと？」

桜子の言葉で理解した。

ああ、この竹彦……！

「それはね、桜子ちゃん」

「やめなさい！ 竹彦！」

説明しようとした竹彦の口を押え込む梅。

あからさまに怪しい。

桜子が気になって訊いた。

「私と、その松太郎って人が、なんか関係があるの？」

梅の手を振り解くと、竹彦が言った。

「梅が自分でばらしたんでしょ」

うつつ。

梅は言い返せない。

「説明するだけよ、説明するだけ」

竹彦がそう言いながら、口の端を釣り上げている。

「余計な事は言わないでよ」

梅の釘差しを無視して、竹彦が話した。

「夕べ、夏目君と一緒に松太郎くんていう子がいたのね。実はその

子があなたの事を好きらしいのよ」

「え？」

桜子が素っ頓狂な顔をする。

「わたし、そんな人知りません」

「知らないわよね。だけど向こうは知ってるの。バイク便をやって

て、あなたの会社にも時々便箋を届けるらしいわ。その時、あなた

を見て好きになったんだって」

「バイク便？」

「私たちと桜子が知り合いなんて、彼、最初は知らなくて、桜子の話題が出た時、松太郎がどうしても桜子ちゃんを紹介してくれって言われたの」

「ええ！？」

大袈裟に驚く桜子。

「わたし、そんな知らない人なのに……」

「初めは誰もが知らない人同士よ。そんなことは問題じゃない」

梅はじつと二人の会話に傍耳を立てる。少しでも会うことを薦めようとしたら、梅は蹴りを打ち出す準備が出来ていた。

「バイク便……？」

桜子はそう呟いて、じつと考え込んだ。

「そう、バイク便の人。もしかしたら顔くらい知ってるんじゃない？」

「あ！」

桜子が声を上げた。

「もしかして、あの人じゃあ……」

「どの人？」

「身長が百七十センチくらいで、細身で、あと、えーと、思い出せない。どんな顔だっけ」

「ええ！ その人よ！」

竹彦がそう言う。

慌てた梅が言った。

「身長百七十で細身の男ってくらいでなんで松太郎って分かるのよ！ 顔が分からないって言うてるじゃない」

「ニュアンスで分かるのよ」

「ニュアンスって、あんだ」

「その人、あのロー」

桜子が思い起こすように話しはじめたので、梅は口をつぐむ。

「風が強かった日。私、資料を抱えて隣のビルに行ったの。その時、人と肩をぶつけて資料をばらまいちゃったの。資料は風で飛んでいくし、誰も助けしてくれないし、泣きそうになってたとき助けてくれた人がいるの」

「それが松太郎よ！」と勝手に決め付ける竹彦に「何で分かるのよ

！」と咎める梅。

「それでー」

竹彦と梅をよそに桜子が話しを続ける。

「私が資料を必死で拾い集めると、その人はそこから中を駆けずり回って資料を拾ってくれたの。遠くまで飛んでった資料をバイクで追いかけて拾ってくれたし、車道に飛んだ資料も車に轢かれそうになりながら拾ってくれたし、突風で吹き飛んだ資料も追いかけてったりして。ちよっとおかしかったけど、資料を拾い終わると、そのまま無言で立ち去ってしまったの」

「あなたのナイト様って訳ね」

「ナイト様は大袈裟でしょ」

海と竹彦の攻防など気にも留めない桜子。

「お礼が言いたくて、いつか会社に便箋を届けてきたときにお礼を言おうと思ってたんだけど、すっかり忘れてた」

「わ、忘れてたの？」

「あああ、どうしよう。思い出したら急に罪悪感が……。だって資料を拾ってくれたときから、何度かあの人、うちの会社に配達に来てたのに、わたしお礼も言っていない」

いけない展開だわ。

梅の中枢神経が危険信号を発した。早急に話題を変えろとの命令が下る。

「あのさ、おなか空かない？」

無理があつた。

あつさり無視をされて、竹彦が言った。

「お礼が言いたい？ 私が特別にお礼を言わせてあげてもいいわよ」  
「本当？」

「駄目よ！」

梅がどうにか、竹彦と桜子の間に入る。

「どんな人間かも分からないのよ。そんな人間に桜子を紹介できないでしょ」

「どんな人間か一番分かってるのは桜子よねえ？」

「……うん」

「だからって……」

言葉が出ない。

自分の口下手が恨めしい梅。

梅には世の中の中のしくみが理解できない。

「じゃあ決まりね。桜子、私が松太郎に会わせてあげる。いい？」

「よろしくお願いします」

と深深と頭を下げる桜子。

「でも、桜子？」

「梅ちゃん大丈夫。私、松太郎さんの気持ちはうれしいけど、それはお断りするつもりですから」

桜子はきっぱりと言った。

竹彦は一瞬、ドキリとした。

落ち着いて。大丈夫よ。断ったとしても、会わせたことには間違いないんだから約束は守られるはずだわ。

竹彦の思考を読んでか、梅が不審そうに言った。

「竹彦、あんたー」

「私、ちよつと出掛けてきまあーす」

と梅の言葉を遮って竹彦が立ち上がった。

「どこ行くのよ」

「どこだっていいでしょ」

そう言い残して部屋を出ていってしまう竹彦。

残った桜子が言った。

「梅ちゃんの心配は分かっているの。でも私、まだあの人を待ってなくちゃだから」

あの人。

梅は思い出した。

八潮の父親の事だ。

でも、それは。

梅は戸惑った。桜子はまだ信じている。騙された事に気づいてないんじゃない。気づいていながら八潮の父親の帰りを待っているのだ。

そんな気持ちを理解して、梅は何も言えなくなった。あるいは、桜子には新しい恋が必要なのではないか。

交番を訪れた竹彦は、夏目が立番しているのを発見すると、嬉しそうに腰をくねらせて走ってきた。夏目は思わず引け腰になって逃げ出したい衝動にかられた。

「夏目ちゃん、いい知らせ。松太郎ちゃんは居る？」

「い、居るわけ無いでしょ。交番ですよ、ここは」

「なんだあ。じゃあ電話番号教えて」

「勤務中ですから、後で」

「市民が困ってるのよ？ どうかしてよ」

夏目が交番内を振り返ると、不思議そうにこちらを見ている立川巡查と藤本巡査長が見えた。夏目は慌てて竹彦を交番内から見えない位置に引っ張ってくる。

「どういっつもりですか！」

「だって電話番号分からないし、住んでる場所も分からないし、ここにすれば夏目ちゃんが居ると思って」

「分かりましたよ」

夏目は携帯電話を取り出し、竹彦に手渡した。

「その中に松太郎の携帯番号があるから、メモってってください。俺は立番してなきゃならないんです」

そう言っつて、立番に戻る夏目。

竹彦は松太郎の名前を探した。

なんだっつてんだ、ちくしょう。

夏目が心の中で悪態を吐いているとなりで、竹彦が夏目の携帯電

話から直接、電話を掛けていた。

「ハロー、もしもし、栗子ちゃん？ 元気？」

夏目はぎよっとした。

「どこに電話してるんですか！」

慌てて携帯電話を取り出すと「もしもし！ ごめんね」と言ったが、通話はずながっていなかった。

夏目が竹彦を睨み付けると、竹彦は妙な仕草でポーズを取っていた。意味の無いポーズだ。

「冗談よ、冗談。だれ？ 栗子ちゃんって。あんたのこれ？」

と言つて小指を突き立ててみせる。

「関係ないでしょう」

「冷たい。別にいいわよ、松太郎の電話番号は分かったから」

「なら、もう帰ってください」

そう言い放つ夏目の顔を、竹彦が覗き込んだ。

「あなた、時々、本当に冷たい顔をするのね。それが原因ね」

「何の原因ですか？」

「もっと言い訳すればいいのに。言い訳しないのが男の美学だとも思ってるの？」

「なにを言ってるんですか。俺がどうして言い訳をしなくちゃいけないんですか？」

むすつとして夏目が訪ねると、気取った風に竹彦は言った。

「さあね」

竹彦はつまらなそうな顔を見ると、夏目に背を向けた。

頭に来るオカマだ。

梅に夏目ちゃんをぶつけられたら、とても都合が良かったんだけど、あれじゃあ無理だなあ。まあ、別にいいか。

そう思いながら帰り道、携帯電話から松太郎に電話を掛けた。

何度目かの呼び出し音のあと、眠たそうな松太郎が電話に出た。

「もしもし松太郎？ 私よ、サリーよ」

サリーちゃん！？

「桜子ちゃんの件、上手くいったわよ。会わせてあげるから、来週あたり予定空けときなさいよ」

まじで！？

「その代わり、弁護士に会計士に歯医者に若社長の話しは大丈夫よね？」

OKだよ。ばっちり任せて。

「うふふふふふふ。あんたもやるわね。桜子が資料をぶちまけたとき拾ってあげたんだって？ 彼女、あんたの事、覚えてたわよ」

え？ 資料？

「風の強い日、彼女が会社の前で資料をばら撒いたとき、バイクで資料を追い掛け回したんでしょ？」

……なにが？

「なにがって……」

竹彦は、ぞっとした。

「まさか、あんたじゃないの？」

だから、なにが？

竹彦はその場で腰砕けになりそうだった。

どうしよう！

「ま、まあ、いいわそんなこと。とにかく、そういうことだから、じゃあね」

あ、ちよつと

強引に通話を切った。

大丈夫よ、サリー。勘違いってことで会わせてしまえばいいのよ。会わせたもん勝ち。万時順調。これに乗れれば、お金持ち男盛りだくさん。

竹彦の中の悪魔が「くくくく」と笑った。

竹彦はスキップを踏んで帰っていった。

桜子が息を切らせて、梅の部屋に飛び込んできたのはそれから数日後。

すっかりうるたえた桜子は「泥棒に入られた！」と叫びながら、梅を掴んできた。

「ちよつと落ち着いてよ。泥棒って？ なに盗られたの？」

「わかんない！」

やってきた竹彦を振返る梅。

「私がない昼間に、誰かが勝手に部屋に入ったみたいなの！ なんか家具とか位置がずれてる気がするの！」

「それでなんでうちに来るのよ。まずは警察でしょ？」

「だって……あ、そうか」

納得する桜子。

「とりあえず警察に連絡して、なくなったものが無いか調べるのよ」  
竹彦が言った。

こくこくこくと、桜子は三回頷くと、梅の手を引っ張って桜子が部屋を出て言った。

「ちよつと、わたし、この格好じゃ！」

強引になった桜子は、かまわず梅を連れ去った。

残された竹彦は一人ごちる。

「私はお化粧してから行くからね」

まもなく警察が訪れた。

また夏目がいる。

梅は不審そうに夏目を見た。夏目はベランダのほうを覗いている。他の警官が桜子に事情を聞いている横で、梅は何をしていいかわ

からずただ立っていた。

「被害は？ お金とか下着とか」

「いえ、何も……」

「何も無い？ お金はどこに？」

「預金通帳や印鑑はあの棚の中に」

桜子は電話の横にある棚を指差す。

「失礼して覗かせてもらってもいいですか？」

桜子が頷くと、警官は白い手袋をした手で棚を開いてみる。

「確かにありますね。それでは下着は？」

それを聞かれて桜子が戸惑った。

「場所だけ聞かせてください。覗いたりしませんから」

「収納の中にあるたんすに……」

「なるほど」

その警官が首を傾げる。

「被害はない。ならば犯人は何であなたの部屋に忍び込んだんです

かねえ」

「さあ」

桜子が首をひねる。

「あなたが部屋にはいられたときは、カギがかかってたんですよね

？ 空き巣に入られたつていう理由は何ですか？」

「はい、なんだか家具やテーブルの位置がずれてる気がするんです」

「気がする？ それに被害はない？ それでなんで空き巣が入った

なんて分かるんです？」

「だからテーブルやティッシュの箱が……」

「あのね、お嬢さん。警察はボランティアじゃないんだ。「気がする

」とか「かもしれない」で呼び付けないでください」

「だ、だって……。すみません」

その警官は桜子に背を向けると、部屋にいた二人の警官に呼びかけた。

「もついいぞ、引き上げだ」

「ちょっと待ってください」

梅が声を上げる。

「この子が空き巣に入られたって言うてるんですから、もっとよく調べてください」

「うちとしても、何も起こってない、と判断するしかないんですよ。もし次に何かあったら、ご連絡ください」

「それじゃあ遅いじゃないですか。なにかあってからなんて」

「もちろん事件を未然に防ぐ為に、このあたりに地域警察官が巡回してまわっています」

「それで桜子に何かあったら、どうするつもりなの？」

「我々は出来ることをしています。桜子さんが自分自身、気を付けてもらわなければ、私どもにはどうすることも出来ません。戸締まりを厳重にして、誰か忍び込んでくる気配があったらまた通報してください」

「でも」

梅は警官達を止めようとしたが、そろそろと玄関を出ていく。

桜子が不安そうにうめくが、警官達はためらいがない。

「夏目さん」

桜子が名前を呼んだ。

夏目が振返る。

「わたし、どうしたら」

夏目は先に出ていった警官を振り返り、再び桜子に向き直ると言った。

「確かに、これじゃあ警察は動きません。とにかく戸締まりを厳重にすることです」

梅が口を挟んだ。

「だからっておかしいじゃない。桜子のうちには無言電話も多いのよ。ストーカーの作業かもしれないじゃない」

「かもしれないじゃ動けません。どうしてもというのなら探偵を雇うのが一番早いです」

「そんなの無理よ。探偵がいくらかかると思ってるの？」  
「分かってます」

夏目の背後から、「早くこい」と声上がる。  
「ちよつとまって。桜子がこんなに不安がってるじゃない。どうして、そんな子を置いてっっちゃうの？」

梅が悲痛そうに訴える。

夏目は返事をしない。

夏目は背を向ける。

「夏目さん」

桜子がもう一度声を掛けたが、夏目は振返らなかった。

梅と桜子が夏目を玄関まで追いかけていくと、立ちはだかったのは別の警官だった。

「それでは何かあったら、すぐに通報してください」

そう言つて、敬礼すると警官三人はマンションを出て行った。

「なんて奴等なの！」

梅はやりどころ内怒りを爆発させていた。部屋の中をぐるぐるしながら頭から湯気を立てている。

「桜子が、空き巣に入られたつて言っただから、ちゃんと調べればいいのに！」

「う、梅ちゃん。もういいから、おち」

「夏目も夏目よ！ 結局、お上には逆らえないんだ。今度こそ、苦情の手紙を出してやる。今度こそ名指しで批判してやる」

その頃、ようやく竹彦が現れた。

「にぎやかねえ」

といいながら桜子の部屋に入つて来る。

「八潮ちゃんは？」

「ベビーシッターと出掛けてもらってます。こんな状況だから」

「そう、それで？ 梅が憤怒してる理由は？」

梅が肩を怒らせながら言った。

「また怠慢よ。何も調べないで帰っちゃったの！ 夏目の奴だってちよつとは顔見知りなのに、知らんぷりなのよ！」

「心臓に悪いわよ。あんた怒った顔で死ぬのは嫌でしょ？ 落ち着いて」

言葉は冗談めかしていたが、表情は真剣に心配していた。梅はようやく自分を落ち着かせた。

「なんで警察は帰っちゃったの？ だって空き巣に入られたんですよ？」

「証拠が無いって。何も盗まれてないし、カギもかかってたし、かもしれない、じゃ何もしてくれないんだって」

「うーん、まあ、それじゃあ警察は動けないわねえ。どうせなら嘘付いちやえば良かったのに。下着が無いとか、お金が無いとか」

「そんなこと……」  
そう声を上げたのは桜子。

「とにかく、いよいよ許せない。なんか私、やる気出てきた」  
梅が何かを決意した。

交番に戻った三人は、やれやれと椅子に腰を下ろす。

「藤本巡査長」

夏目が声を掛けた。

藤本巡査長は眉だけを釣り上げて夏目を見た。

「さっきの空き巣の件ですが」  
「ん？」

「無言電話が頻繁にあるらしいです。それに先日の強盗事件。彼女、ストーリーカーに狙われてるんじゃないんでしょうか？」

「ストーリーカー？」

「はい。彼女の父親はユニオン・システムズという企業の会長らしくて、まあ、つまりお金持ちです」

「そりゃ凄い」

「つまり、お金目当てのストーカーではないかと」

「夏目巡査」

藤本巡査長が腰を上げ、お茶を入れながら言った。

「強盗事件は県警が捜査してる。関連性があるとしても、俺達の出番じゃない」

「なら、あの辺の巡回を強化するとか」

「お前、彼女と親しくなつたみたいだな」

巡査長がお茶をすすする。

夏目は答えない。

「個人的な感情を差し込むな」

「しかし巡査長」

「黙れ！」

そう怒鳴つたのは立川巡査だった。

「半年の新人がでしゃばるな！ 警察は愚直な捜査が基本だ。管轄内の市民は彼女だけじゃない。言わなくても分かつてるだろう！ ぐちゃぐちゃ言つな！」

夏目に怒鳴り散らす立川巡査。

分かつてる。

夏目は黙った。

梅はいつまでも腹を立てていたが、苦情の手紙を書き出すと黙り込んだ。

「最近、怒つてばかりだわ、梅ったら」

竹彦はそう言つと、桜子に向いてにやりと笑った。

「不安なところ悪いけど、松太郎の話しね。いいかしら」

「あ、はい」

竹彦はずいっと桜子に詰め寄って言った。

「来週の日曜。空けときなさい」

「はい」

「場所は遊園地よ」

「ゆ、遊園地？ お礼を言うだけなのに」

「お礼は頭を下げるだけじゃ駄目なのよ。相手を楽しませなくっちゃ」

「楽しませる？」

「そう。別に気にしないでいいのよ。ただ行ってお礼を言って、すこし遊んでくればいいだけだから。それで終わり」

「は、はあ」

「じゃ、決まりね？ 日曜日の朝に、私が迎えに来るわ。おめかしして待つててね？」

「竹彦さんが迎えに来るんですか？ 梅ちゃんは？」

「なに言ってるのよ。二人で行くのよ。私と二人で遊園地。そこで松太郎が待つてるから、合流して遊んで帰ってくるの」

「ええ！？」

桜子がそう声を上げた。

「なに、その、ええ、は」

「だって、私と竹彦さんで？」

「何か不満があるわけ？」

「いや、そういうわけじゃあ、ないんですけど」

「私と二人じゃ不安？」

「いえ、あの、だって本当に二人？」

「イヤだっていうの？」

「いえ、ああ、梅ちゃああん」

桜子が梅に助けを求めた。苦情の手紙にのめり込んでいた梅は、何事かと顔を上げた。

「なに？ なに桜子。どうしたの？」

「梅ちゃん、日曜日、一緒に行こう？」

「日曜日？ どこに？」

「梅は駄目よ！」

竹彦が言い放った。

「遊園地なのよ。梅が行ったら死んじゃうじゃない」

「行くだけなら死なないよね？ 梅ちゃん」

「人のこと死ぬ死なないとか言わないでよ。なに？ なんなの？」

私がなんなの？」

桜子が事情を梅に説明する。

竹彦緊張の一瞬だった。

「嫌よ、私」

そういう梅の返答に、竹彦は胸をなで下ろす。

「なんでえ？ 一緒に行こうよお」

桜子が梅の腕を掴んでゆする。

桜子は必死だ。この竹彦と二人で出掛けるなど桜子には想像が来ない。何かとんでもないことが起こりそうで、桜子は不安でしうがなかった。

「私はいいよ。だって桜子のデートでしょ？ 私が付いていってどうするの？」

「私のそばにいて」

「私は桜子の彼氏じゃないの」

竹彦が割り込んでくる。

「そつよ。行きたくないって言ってるんだからいいじゃない。二人でいきましょう」

竹彦が恐れていたのは、梅が付いてきたら男が梅に寄っていつてしまうのではないかという危惧だった。桜子以外が自分だけでなければ、自分がちやほやされなくなる。

「お願い梅ちゃん。一緒に来て」

「何でそんなに付いてきて欲しいの？」

「だって竹彦さんと二人じゃ」

「私と二人だとなんなの？」

竹彦に睨みを利かされて体を震わせる桜子。

「ご、ごめんなさい。わたし、この話しなかったことに……」

「なんですって!!」

声を上げた竹彦に恐れをなして、部屋の隅まで桜子が逃げた。

「そんなのってないわ！ 今更断るなんて、桜子ちゃん考え直して！」

部屋の隅から、じつと警戒する桜子。

「わたし、梅ちゃんが行かないんなら行きません」

「うっ」

なんてこと……！ 竹彦最大の選択肢だわ。

梅を連れて行かない 話しがおじゃん。

梅を連れて行く 竹彦の男を梅に取られる危険性。

ああああ！

「わ、分かったわ……。梅も連れて行く」

「私は行くななんていってないでしょ」

竹彦の頭脳は、もはや「連れて行かない」から「どうしても連れて行く」に移り変わった。

「いくのよ」

「やーよ」

竹彦が真顔で言った。

「……ホント言うかね。最初から梅を誘うつもりだったのよ」

「うそつけ」

「本当よ。だって最近、梅ってば怒ってばかりでしょ。少しくらい男と遊んだほうがいいと思って」

「私はいいの。家でお留守番してる」

「梅」

竹彦は梅の正面に座って、真剣な眼差しで言った。

「少し気を抜いたほうがいいわ。最近の梅、張り詰めてる気がする

し。別に男と話しをしるなんて言わないから、少し開放的な場所で生き抜きをしたほうがいいと思う」

「……竹彦……」

「確かに色々あったわね。でも本当にあなたの身体が心配。とりあえず騙されたと思って行ってみなよ。気に入らなきゃ帰ればいいだけだし。ちよつと散歩のつもりでさ」

「……竹彦……」

梅が桜子に振返る。

借りてきた猫みたいにこちらを見ている。

「桜子。あなたに付いて行ってあげる。乗り物には乗れないけど」

「本当？」

「本当」

桜子が安堵のため息を漏らした。

「それじゃあ三人ね。話しを進めちゃうわよ」

竹彦の腹の中に渦巻く黒い影が「ひひひひ」と笑った。

さあ、ちよつと予定は狂ったけど、金持ち美男子よ。取って

置きの香水を使おう。

そうして夜は更けていく。

第十幕 【遊園地にて普通の女の子になりました】

松太郎は地下に入り浸りの日々が続いていた。

安藤桃平の行方を追うが全くつかめない。帰国したと同時に姿をくらませているらしい。といっても日本データバンクからの情報を頂戴しているだけなので詳しいことは分からない。桜子の付近に現れたことは確かだし、もしかしたら桜子の自宅の前で張っているのが一番手っ取り早いのもかもしれない。

その時、電話が鳴った。

ここは地下なので居間に置かれた携帯が転送されて、このパソコンにつながった。

松太郎はイヤホンをはめると「もしもし？」と言った。

もしもし？ 松ちゃん？

竹彦だった。いつのまにか呼び名が「松ちゃん」になっているのが気になったが、松太郎は「どうだった？」と訊ねた。

ばっちりよ。日曜日、遊園地にレッツゴー。でもね、ちょっとだけ、ちよつとだけ問題があつてえ。

「なに？」

梅が来ることになっちゃったの？ だからもう一人、お堅い人連れてきてくれない？

「もう一人？」

そう。

「無理だつて。だって日曜日って明後日じゃん。そんな急に呼べないよ」

そこをどうにか。何だったらお堅い人じゃなくてもいいのよ。梅の相手なんだから。

「……ひどいな」

とにかく、そういうことだからよろしくー。

通話が切れた。

いつも勝手な切り方しやがって。

とりあえず松太郎にはやることがある。

安藤桃平の行方を掴まなければユニオン・システムズと日本デー  
タバंकに先を越されてしまう。

相手はでかい。

もしかしたら安藤桃平もすでに捕まった後かもしれない。

言えることは、これは警察にも手が出せないということだ。大手  
企業が二つも関係していても、国の法すら通用しないかもしれない。

どこにいる安藤。

土曜日の日勤の日、松太郎から夏目の元に電話が入った。

巡回中だったので夏目は自転車を止めて、いかにも仕事の電話か  
の様に装った。

夏目、安藤の居場所が分からない。警察の動きを教えてください。  
犯人は特定されたのか？

そんなこと教えられるか。

答えられる部分だけ答えた。

「具体的なことは分からないし教えられない。捜査はお上が行って  
るから、証拠か確信がなければ俺のところまで情報が下りてくるこ  
とはないよ」

桜子さんの様子は？ 安藤が現れたようなことはないのか？

夏目は一瞬迷った。空き巣に入られたと桜子から通報があった件  
をしゃべってよいものか。

「俺に桜子さんの様子が分かるわけがないだろ。おまえ、何してる  
んだ？ 地下にこもりっぱなしなのか？」

安藤を探しに出かける以外は籠りっぱなしだよ。もう仕事を  
三日間休んで安藤を追ってるけど、どこを探しても見つからない。

安藤の奴、多分宿も取らずにその辺を放浪してるんだ。

「深追いするなよ。危険になったら俺に電話しろよ。国家権力が付いてるからな」

ああ、大丈夫だ。それにしても、そろそろ日の光を浴びたくなつたよ。あ、そうだ。もう一つ用事があったんだ。

その時、夏目の電話にキャッチが入った。

「ちよつと待って」

いや、すぐ終わるから。おまえ明日の日曜、暇？

「何か用か？」

うん、遊びにいこうかと思って。

「勤務は入ってない」

夏目はキャッチが気になる。栗子ちゃんかもしれない。そう思うと一刻も早く変わりたい。

じゃあ明日予定空けとけよ。あした朝の九時に駅前だ。

「早いな」

忘れるなよ。

「分かった。それだけ？」

それだけ。

「よし、じゃあ切るぞ」

あ！それから

夏目は通話を切った。

キャッチをとる。

すでに切れていた。

留守電から確認すると、栗子の怒りの声が録音されていた。

「あああ……」

絶望的な思いで電話を掛け直すと話し中だった。

ちくしょう……。

他の男に電話してるのだろうか。デートのお誘いの電話だったらどうしよう。今、電話に出なかつたせいで他の男に栗子ちゃんを取られたらどうしよう。

そんな心配事を抱えながら夏目は巡回を再開した。

心なしか、ふらふらと自転車を蛇行運転させながら。

日曜日、夏目は駅前で松太郎を待っていた。

一体こんな朝早くから一体何の用だろうか。

夏目は駅前でぼんやりしていると、隣に立っている男がやたらに気にかかった。

夏目の右側に、スーツを着込んで髪をオールバックに固めている長身の男がいた。色男だということは間違いないが、インテリ風で立ち方も気取っている。常時、鏡を気にしているところは男としては煙たい存在だ。

夏目の左側にいる男はやはりスーツを着込だ長身で、右側のオールバックの男と雰囲気は似ているが、決定的に違うのがさらにインテリに磨きがかかっている所だ。

右側の男はネクタイを締め、小奇麗にまとめているのに対して、左側の男はラフな格好だ。素肌にスーツのジャケットを着込み、色黒の胸元には金のネックレスが揺れている。指には大きな宝石の付いた指輪の縦列が光沢を放ち、タレント気取りのサングラスをしている。

その中央に挟まれた夏目は居心地の悪さを感じて脇へよけようとしたが、遠くからスポーツカーで現れた松太郎が手を振ってきたので、夏目は手を挙げて答えた。

ん？

両脇の男も、笑みをたたえながら夏目と同じような仕草をしている。

車を降りてきた松太郎に近寄っていくと、両脇の男と肩をぶつけた。

あれ？

松太郎が満面の笑みで言った。

「待った？ 三人とも」

三人とも？

スポーツカーに乗り込んだ三人は挨拶を交わした。

「私は新宿で弁護士事務所を開いてる柳沢と言うものです」

オールバックの男がサングラスの男にそう言った。サングラスの男はにこつと笑って、「僕は公認会計士をやってます、榊と申します」

助手席に乗った柳沢と、後部座席に乗った榊は握手を交わした。

二人の視線が夏目に集中する。

これは自己紹介しなければならぬということだろうか。

「け、警察官をやってます、夏目です」

握手するのかと思って手を出すと、まず柳沢が顔を渋らせた。

「警察官は嫌いだ。検察官はもっと嫌いだ」

次に榊が言った。

「税金高すぎ」

俺に関係あるのか？

二人は夏目からそっぽを向いた。

浮いてる。

夏目には、まだそれを自覚するだけの理性は持っていた。

車の中では口を開きにくかったので、車から駐車場に降りてから松太郎に聞いた。

「おい、遊園地なんかきて、男四人で遊ぶつもりなのか？」

松太郎が満面の笑みで言った。

「ばかだなあ。そんなわけないだろ。俺と桜子ちゃんがデートする

約束を忘れたのか？」

「なんだ？　それが今日だっていうのか？」

「そうだよ」

「じゃあ、何で俺まで来なくちゃいけないんだ？」

「なんでって人数あわせだよ」

「人数あわせ？　よくもまあ本人の前でぬけぬけと」

「じゃあ、影で言われたほうが良かったのか？」

夏目が文句を言っつてやろうと腕まくりしたところ、松太郎が「あ！」と声を上げた。

遠くを見ている松太郎の視線を追っていくと、夏目もそれを発見した。

広い駐車場に羅列する車の数々の向こうに桜子の姿があった。

というよりは、一番最初に目に入ったのは竹彦の姿だった。

あれは何だ？　フィステイバルの踊り子か？

松太郎は、よくこの距離で桜子を発見したものだ。夏目も同じだが。

遠くにくねって走るジェットコースターや、ゆっくりと回転する観覧車が見えた。

四人の男達は、そろそろと駐車場を横切つていき、轟音を立てて乗り物が走りまわる音や、子供や女の悲鳴と歓声が聞こえる切符売場までやってきた。

この頃になると相手の姿が良く分かった。

あ。

夏目は、思わず身を隠したくなった。

あ。

梅は、おもむろに眉間に皺を寄せた。

ああ！

松太郎は桜子を間近で見たことに感動を受けた。

あああ……。

竹彦は色男を目にして、腰砕けになりそうだった。

誰が松太郎さんだろう。

桜子がそう疑問に思った頃、男女の間に流れた沈黙を打ち破ろうと、柳沢、榊のコンビが前に出た。

「こんにちは。今日はよろしく」

「遊園地なんて久しぶりだあ」

笑みを浮かべる二人。

松太郎は夏目の陰に隠れる。

「なにやってるんだよ、松太郎」

「だって、桜子ちゃんがあんなに近くに……」

夏目は松太郎の肩を掴んで、桜子前線の真っ只中に放り出した。

松太郎は戸惑いながら桜子の前に立つ。

桜子の視線を受けた松太郎が顔を真っ赤にして、そのまま姿勢正しく夏目の元に旋回してきた。

「なにしてるんだよ、お前の為に集まったんだろ」

「だって、だってよお……。俺どうしたらいいんだよお」

松太郎が顔を真っ赤にさせるのも、こんなに戸惑っているのも、夏目は初めて見た。

柳沢と榊が前線に乗り込んで、会話に花を咲かせはじめた。

竹彦の声が、良く聞こえて来る。

柳沢と榊が引き返してきて松太郎に言った。

「あの真ん中の子がお前の目当てだろ？ あれに手を出さなければいいんだな？」

「それよりあのでかい女は何だ？ 明らかにオカマじゃねーか。あんなの聞いてないぞ」

夏目は戸惑いながら言った。

「とりあえず中に入ろう。切符を買ってくる」

「いかないでくれよう。俺を一人にしないでよう、夏目」

「分かったから」

松太郎の手を引っ張って入場券を買いにいった。後ろから桜子が付いてきた。

「夏目さん」

桜子が夏目に声を掛ける。

松太郎が飛び上がった、夏目の陰に隠れた。

「夏目さんもいらしたんですね。誰も知らない人だったら、どうしようかと思った」

にこやかに声を掛けてくる桜子。

夏目は桜子に対しても気まずい。

「この間のことなら気にしないでください。私は気にしてませんから」

あ。

夏目は、この間の空き巣事件は松太郎に話ししていない。

「いいんだ。それより入場券は？」

「もう、買いました」

「そう」

「わたし、それより松太郎さんって方がどなたなのか分からなくて……」

「ああ、松太郎なら いて！」

松太郎が後ろから尻をつねった。

どういっつもりだ！

不思議そうに見ている桜子に愛想笑いを浮かべながら、とりあえず入場券を買いにいった。

「いってえな、松太郎。紹介しようとしただけじゃねーか」

「まだ心の準備が出来てないんだよ」

夏目は四人分の入場券を購入すると、柳沢と榊のところに戻って手渡した。

会話に夢中な二人はそれをおざなりに受け取ると、再び会話に戻った。

「おい、金」

不機嫌そうに夏目が言うと「ああ、そうか」と二人は金を払った。竹彦が上機嫌に梅と柳沢と榊と、四人で先に入園していった。

一人であたふたしている桜子に、夏目が「行ってやれ」と松太郎に訴えても首を横に振っているので、夏目が「入ろうか」と桜子の声を掛け、遅れて三人が入場した。  
入場すると、ものすごい人盛り。先に入った四人はすぐに姿が見えなくなつた。

夏目は引つ付いてくる松太郎と、うろたえる桜子をどうやって対面させて、このプレッシャーから逃れるか、そればかりを考えていた。

竹彦は終始上機嫌だつた。

「ねえ、歳は幾つなの？」

柳沢が梅にそう聞いた。

「二十三」

「私は、は・た・ち。た・べ・ご・ろ。うふ」

「ああそう。それで？ 梅ちゃん、仕事は何やってるの？」

「無職」

「無職？ じゃあ彼氏に食べさせてもらってるの？」

「私が食べさせてるのよ。私が」

竹彦が筋肉質な胸を張つた。梅が食べさせてもらっているなど、もちろん事実無根だ。

竹彦が肩に掛けたスカーフをひらめかせながら訊いた。

「あなたたちは、何をなさってる方なのかしら？」

「僕は弁護士をやってます」

「僕は公認会計士」

ああ、お金持ち美男子だね。まだ若いから、もう少し時間がかかりそうかしら。

「梅ちゃんって、あんまり喋らないね。人見知りするの？」

「うん」

「じゃあ乗り物のつて、大声上げちゃおうよ。きゃーってさ。そしてたら、きつとすつきりするんじゃない」

「わたし、乗り物は乗らない」

「ええ、もしかしてジェットコースターとか怖いタイプ？」

「そう」

「私は全然平気よ。乗りましようか」

竹彦がそう言うと、柳沢と榊がにらみ合った。

「柳沢、お前この人と乗ってこいよ」

「お前が乗ってこいよ」

「ああ、私を取り合わないで」

柳沢と榊の間に火花が散った。

「じゃんけんで勝負だ」

「望むところだ」

「ああん、どっちでもOKよ」

二人は拳を振って、じゃんけんをした。

結果は柳沢の敗北。

柳沢は涙を流しながら、竹彦に拉致されていった。

榊は薄く微笑みながら、梅に向き直った。

「梅ちゃん、乗り物は全部駄目なの？」

「なんなのこれは。全然、開放的じゃない。」

海はいつの間にかいなくなった桜子を探しながら言った。

「乗り物は乗らない。ちよつと休みたい」

「それじゃあ喫茶店に寄ろうか。アイスクリーム食う？」

「お水が欲しい」

「お水？ OK」

榊は梅の肩を抱いて、近くの喫茶店に入った。

中では子供が駆けずり回っている。

その一人が梅のひざに体当たりして転んだ。

梅は慌てて、子供を抱き上げる。

「大丈夫？」

声を掛けると、女の子は済まなそうに俯きながら「ごめんなさい」と謝った。梅はにこりと笑って、頭をなでてやった。

席に就くと榊は烏龍茶を頼み、梅は水を頼んだ。

「君は笑わないの？」

突然、榊にそう訊かれ、梅は榊を見る。

「なんか悩んでるの？ 君が子供を抱き起こしたとき、笑ったよね。あんな笑顔は俺には見せてくれないの？」

梅はそう言われ、不覚にもドキリとした。

「笑うよ。おかしければ」

「違うよ。優しく笑ったりしないのかって聞いてるんだよ。正直に言うよ。嫌味に聞こえるかもしれないけど、俺はそれなりに女の子にも相手にされるんだ。みんなよく笑うし、よく話す女の子ばかりだけど、君が子供を抱き上げたときのように笑わなかったなあって思ってたさ」

「嫌味に聞こえた」

梅はそう言っただけでにこりと笑った。

榊は嬉しそうに笑うと言った。

「遊園地なんて、高校の遠足以来だ」

「あれ？ 高校に遠足なんてあったっけ？」

「あるある。俺達はデイズニーランドに行ったけど、梅ちゃんは？」

そう聞かれて、梅は思い出した。

遠足はなかったんじゃないかと、梅は行かなかったんだ。

忘れよう。今日は、竹彦の言う通り、気を楽しんでいるよ。

「榊さん、だっけ？ 歳は幾つなの？」

「二十八だよ。今年二十八の二十八」

「へえ、若く見えるね」

「ありがとう。君は二十三だっけ？」

「今年二十四の二十三」

「誕生日は？」

「もうすぐ。三月十八日」

「へえ。それじゃあ、その日は彼氏と一緒に？」

「彼氏、いないもん」

「え！ うっそ！」

大袈裟に驚いてみせる榊。

「ホントだって」

「いつからいないの？」

「三年くらいかな」

さらに大袈裟に驚いてみせる榊。

その仕草に、可笑しさが込み上げてきた。

本当に嫌味のない男だった。遊び人だということを前面に出しながら、悪い印象を受けない。

「そうか、じゃあ俺にもチャンスがあっというわけだ」

「会ったばかりでしょ」

「あ、そうだったっけ？ なんだか同級生と話してるみたいだよ」とぼけてみせる榊。

くだらない会話。でも、楽しい。

「じゃあ、その誕生日会、俺が開いてあげようか。大勢呼んで」

「いいよ。竹彦と桜子とでやるから」

「たくさんの方がいいって。いい店知ってるんだから任せてよ。」

伊達にプレイボーイやってないよ」

胸を張ってみせる榊。

いい店とは、飲み屋のことだろう。

梅はそんなところに行っても、お酒も飲めないし、食事も出来ない。い。

でも目の前の男は、そんなことは全く知らない。

今日は心臓なんて忘れよう。

普通の子でいよう。

少しだけ。

夏目は桜子と松太郎に挟まれて、騒がしい人盛りの合間を、沈黙を守って歩いていた。

その沈黙を埋めようと、桜子が時々話し掛けてくる。  
「遊園地なんて久しぶり。わたし、あのくるくる回るのに乗れないの」

「ああ観覧車の早いバージョンか」

「夏目さんは乗れるの？」

「乗れるよ。大抵どれでも。でも、あれは駄目だ。バイキング。あれ以外なら何でもいけるよ」

「へえ……」

会話しながらも、どうしても松太郎の存在が気に懸かり、結局会話が続かない。

夏目は面倒になつてきたので言った。

「桜子ちゃん。ここにるのが松太郎」

「ええ！ あなたが!？」

桜子が、夏目の陰に隠れる松太郎を見ようとすると、巧みに顔を隠した。

昔はこんな奴じゃなかったのに。

「わたし、お礼を言わないと、あの……」

「ほら松太郎。桜子ちゃんがお前にお礼を言いたいんだって。ちゃんと聞けよ」

「お礼？ 一体、何のお礼？」

桜子が説明した。

「あの、あの風の強い日、風に飛ばされた書類、拾ってくださいありがとうございました。拾っていただけに、お礼を言いそびれてしまつて……」

「俺が？ 書類を拾つた？」

「はい。でも、すぐにいなくなつてしまつて、お礼を言いそびれて」

なんだよ、松太郎。やるところでやつてんじゃないか。

夏目はそう思ったが、松太郎は首を傾げていた。

「なあ松太郎。俺、いなくなってもいいかなあ。なんか窮屈でさ」  
「だめだよ、夏目。いてくれよ」

「どうしろって言うんだよ」

夏目はそう言って閃いた。

歩いているから悪い。話しにくい。そう結論した。

「じゃあ、どこかその辺の店に入ろう」

座って落ち着けば、会話が出来る。

返事も聞かず、夏目は二人を喫茶店に引っ張り込んだ。

喫茶店に入ると、子供が走りまわっていた。

そこで気づいた。

「桜子ちゃん、今日、お子さんは？」

「親戚の家です」

「親戚の家？ 両親の家じゃなくて？」

「両親は忙しいから……」

そうか、ユニオン・システムズの会長だっけ。

「遊園地に来たがらなかったの？」

「私は一緒に来るように言ったんだけど、八潮はおじさんお婆さんが大好きだから、どっちがいい？ って聞いたら、親戚の家がいいって言われたの。私は一緒に来たかったのに……」

残念そうな桜子。

夏目の腕を掴む松太郎の手に力がこもる。見ると、松太郎は切なそうな顔をしていた。

席に座ると、みんな一様に烏龍茶を頼んだ。

松太郎は、決して桜子に向かい合うようには座らなかつた。四人用のテーブルで、夏目と桜子が向かい合って座り、夏目の隣に松太郎が座った。

「二人は仲がいいんですね。いつもぴったりくっついて」

そう桜子に言われて、引きつった笑みを浮かべながら、張り付いてくる松太郎を引き剥がした。

「離れるよ」

と夏目が小声で訴えても、松太郎は夏目の肩口に顔を隠すようにして全く離れない。

桜子がおかしそうに笑った。

「どうしたんですか、松太郎さん」

名前を呼ばただけで、松太郎が飛び上がった。

自分で会わせてくれって言ったんだろ。

「だめだ、夏目。おれ、失神しそうだ。やっぱり無理だよ」

小声で呟く松太郎。

「何で俺がおまえらの面倒を見なくちゃいけないんだよ」

「あ、梅ちゃんだ」

夏目が松太郎を引き剥がそうと押し問答している脇で、桜子が声を上げた。

「見て、夏目さん。梅ちゃんが笑ってる」

夏目が桜子の指差す先を見た。

そこには柳沢だか、榊だかと会話する梅の姿が見えた。

確かに笑ってる。楽しそうに会話をしている。

「あ、ぼんやりしてる！」

桜子がおもむろに夏目を指差して声を上げた。

「梅ちゃんのほう、ぼんやり見てた」

桜子が楽しそうに言った。

「嫉妬してるんでしょう」

「嫉妬してるんでしょう」

桜子に同調して、松太郎までそう言った。

「何で俺が嫉妬するんだよ」

「知ってるんだから」

「知ってるんだから」

松太郎が桜子の言葉を復唱する。

「だからなんでだよ。みんなして、あのオカマと同じことを言いやがって」

「だって竹彦さんが、そうやって梅をからかっているから、私も同じように……」

「からかおうって腹だったのか！」

「桜子さんに大きな声を上げるな！」

松太郎が夏目に怒鳴る。

「ご、ごめんなさい、私、そんなつもりでは。ただ楽しいかなって……」

「楽しいかな!？」

「桜子さんに大きな声を上げるな！」

ぎゃあぎゃあ騒いでいると、いつのまにか注目を浴びていた。

それに気づいた三人は気まずそうに黙り込んだ。

「桜子さんに大きな声を出すな」

松太郎が今度は小声でそう念を押した。

梅が桜子のほうに気づいて、ぼんやり眺めていた。

何さわいでるのかしら。

「あれ、松太郎の気に入ってるって女の子だろ？」

榊が言った。

「松太郎の趣味も変わったよな」

「変わったって？」

「松太郎は高級な女にしか手を出さないんだ。おっと、こういう言い方は女性に失礼かもしれないけど。つまり女社長とか、銀座のママとか、そういう女」

「それじゃあ、どうして桜子が好きになったのかな」

「さあね。あの桜子ちゃんが凄いいお金持ちとかだったら納得できる

「ただけどなあ」

「凄いお金持ち？」

「それって松太郎がお金目当てで近づいたってこと？」

「いや、あくまでも、あの桜子ちゃんがお金持ちだったらっていう話しだからさ」

桜子はお金持ちだ。

梅が不審そうに、松太郎を眺めた。

夏目が邪魔で良く見えない。

「そもそも、何である男が一緒に付いてきたの？ 夏目も桜子の金を狙う、松太郎の一味ってこと？」

「な、なんか梅ちゃん、目が据わってるけど、どうしたの？」  
うるたえた榊がそう言った。

はっと我に返って、慌てて表情を笑みにした。

「いえ、目が悪くて、遠くを見るとときこんな顔になっちゃうの」  
「なあんだ」

二人の間に和やかな笑い。

出し抜けに、喫茶店内がどよめいた。

子供が悲鳴を上げながら逃げ惑いはじめた。

何事かと夏目が入り口付近を見ると、理由が分かった。

「化け物が入ってきた。」

「いや、竹彦だ。」

片手には柳沢だか榊だかが掴まれている。

男のほうは、やけにげっそりとして気分が悪そうだ。

「一步一步、竹彦が喫茶店に入って来るにつれ、まるで竹彦が絶望を運んできたかのように、子供が泣き叫んで逃げる。」

「だらしないわね、観覧車で気分が悪くなるなんて」

「な、なに言ってるんですか。あんたがキスをしようなんてしなけ

れば」

「さあ、座るわよ」

竹彦が歩くと、人の群れがささーと分かれていく。

竹彦の元に店員が現われ、震える手でオーダーを聞いた。

「何か、みんな集まっちゃったね」

「集まったっていうのかなあ」

夏目はそう言いながら、張り付いてくる松太郎を必死に引き剥がしていた。

「松太郎さんって、いつもそんな感じなんですか？」

松太郎は答えない。

「松太郎、聞いてるぞ。答えてくれないのか？」

答えない。

桜子も困っている。

夏目も逃げ出したい。

そこで、夏目は一つ考案した。

「俺、ちよつとトイレ」

そう言っただけ席を立とうとすると、松太郎が腕を引っ張った。命乞いするように夏目を見上げている。

「トイレだよ。すぐ戻ってくるから。桜子ちゃんを独りには出来ないだろ？」

そう言うと、松太郎は手を放した。

ようやく呪縛から解放放たれる。このままいなくなるう。

夏目はトイレに歩きはじめ、途中で振り返ると、松太郎がじつと夏目のことを見詰めていた。

トイレの入り口に立っただけもう一度振り返ると、やはりまだこちらを見つめていた。

仕方なくトイレに入った。

トイレに入ると、トイレの個室で柳沢か榊のどちらかが便器に向かつて吐いていた。

松太郎と桜子の間には重い沈黙があった。

二人とも、目の前の烏龍茶を念力で割ろうとしているかのように押し黙っている。

「松太郎さん？」

桜子が声を上げる。

松太郎は更に俯く。

「松太郎さん、私、書類を拾ってくれたご厚意には本当に感謝します。あの時は、本当に嬉しかったし、お礼を言いたかった。でも、あの、お気持ちには、私はお応えすることが……」

「お、お気持ち？」

「あ、はい。あの、私、八潮っていう子供もいますし、それに好いてくれるのはとってもうれしいんですけど……」

ああ！

松太郎は悟ったが、言葉は出なかった。

「お付き合いとなると、そんな時間はないっていうか、八潮で精一杯っていうか……」

「い、いいんです。た、た、たし、確かに、僕はあなたがす、す、す……ですけど。今日会ってもらえただけで、もう……」

嘘だ。

「ごめんなさい」

「いえ……」

沈黙が流れ、そして子供の悲鳴が間近で聞こえた。

二人が睨み付けるテーブルに大きな影が現われた。

何だろうと二人が面を上げると、そこには仁王立ちしている竹彦が立っていた。

ものすごく不機嫌そうだった。

桜子は逃げ出そうと腰を引いた。

「苛々するわ。歯がゆいっていうか、もどかしいっていうか、まどろっこしいっていうか。どうして私みたいに積極的になれないの？」

竹彦がどかっとなんかの隣に越しかける。

桜子が悲鳴を上げた。

「どいつもこいつも昔の男ばかりにとらわれて。なんて言うか、前向きじゃないわ。桜子、どうでもいいから、この男と付き合ってみなさいって。嫌いじゃないんでしょ」

「で、でも……」

「松太郎もよ。あんた、今日はまだ始まったばかりなんだから頑張らなさい」

「は、はあ」

「返事は良くないけど、まあいいわ。あんた達、ちょっと私に付いてきなさい」

竹彦が立ち上がる。

付近にいた子供が悲鳴を上げて逃げ惑った。

「さあ、立って」

恐る恐る立ち上がる松太郎と桜子。

一体、何をされるんだろう。

二人は同じ不安を感じた。

「ねえ、こういう乗り物なら大丈夫なの？」

榊にそう訊かれ、梅は「そうだなあ、ゆっくり動くものなら」と答えると、榊が立ち上がった。

「それじゃあ行くこうか。どうせ遊園地に来たなら楽しまなくちゃ」

「どこに？」

「いい乗り物があるよ」

「観覧車は駄目だよ」

「違うよ」

梅は立ち上がった。

「ねえ、どこに行くの？」

「行けば分かるって。楽しみにすれば？」

夏目がトイレから出てくると誰もいなくなっていた。

一瞬の間に、謀ったように皆いなくなった。

会計はどうしたんだろうと思ったら、テーブルの上にレシートが残っていた。

俺に払えと？

仕方なく、夏目は烏龍茶三杯の料金を支払って店を出た。

店を出るとにぎやかだった。頭上をジェットコースターが轟音を立てて通りすぎて行く。

本当に遊園地なんかに来てるんだな、俺。

漠然と思う。

独りでぼちぼち歩いていると、遊園地は一人出歩くものじゃないと悟った。

することがないので、ベンチに座ってぼんやりしていると、目の前を竹彦が通った。

「竹彦さん」

夏目が声を掛けると、明らかに不機嫌そうな竹彦がこちらを見た。

「夏目ちゃん、なにやっての？」

いつのまにか、呼び名が夏目ちゃんになっていたことは脇に置いておいて「竹彦さんこそ、なにやってるんですか？」と訪ねると「サリーと呼んで」といいながら、夏目の隣に座った。

「松太郎がのんびりやってるから、あの観覧車が早く回ってるみたいな乗り物に放り込んできてやったの。桜子なんか、ぎゃーぎゃー

抵抗してたけど無理矢理押し込んできてやったわ」

むごいな。

「あの乗り物、密着するから松太郎は顔を真っ赤にしてたよ。可愛  
いもんね。あんたはそんなところで何してるのよ」

「俺は、松太郎の御守りに付き合わされたんですよ。逃げ出して一  
息ついてるんです」

「あ、そう。まったく、柳沢はダウンしちゃうし、榊は梅に付きっ  
きりだし、サリーつまんなあーい」

この人は、自分が男に相手にされると本気で思っただこまで  
来てるのだろうか。

「夏目ちゃんは、いいの？ 梅を持っていかれちゃうよ、あのイン  
テリ男に」

「なんで？」

「好きなんですよ？ って何度も言われてたら本当に好きになっ  
ちやた、っていうのを狙ってるんだけど。好きにならない？」

「俺は、思春期の中学生じゃないんですよ」

竹彦は筋肉質な足を前に投げ出して「あー、なんかいいことねー  
かなー」と、男の声で言った。

「松太郎には、一瞬本気にさせられたわ。松太郎が本気だったらな  
あ」

「あながち嘘じゃないですよ。あいつ、おかしいから」

「嘘じゃないっていうのは嬉しいけど、おかしいから、っていうの  
は聞き捨てならないわね。おかしくない私と私の相手は出来ない？」

「ええ」

むか、と竹彦は一瞬だけ頭に来た。だけど一瞬だけだ。

「あんた、本当に梅のこと気に入ってない？」

「シッコイっすね」

そう言つと、竹彦は口を尖らせてそっぽを向いた。

しばらくそのままぼんやりしていると竹彦が言った。

「梅、時間止っちゃってんのよ。昔、梅が大好きになった男がいて、

男も梅のことを大好きになったの。二人は本当に仲が良かったし、絶対に結婚すると思った。だけど、別れちゃってね。梅、振られちゃったのよ。それからというもの梅はその男に捕らわれて、新しい恋をしないのよねえ」

「そんな話し、俺に聞かせてどうするんですか？」

「どうもしないわ。ただ酷い男だったって言いたかっただけ」

「梅ちゃん、他の男と歩いてましたよ。仲良さげに」

「ばかね、梅だって分かってるわよ。今日だけよ、今日だけ」

「どうして？ 遊びなんですか？」

「遊びじゃないわよ。遊びさえ出来ないんだから」

「遊びさえ出来ない？」

「そうよ。ねえ、夏目ちゃん。ちょっと松太郎と桜子の様子見てこようよ。それで、ついでにからかってこよう」

この化け物を暇にすると、ろくなことを考えなそうだ。

しかし、夏目も退屈だったことは変わらず、二人きりになった松太郎と桜子がどんな雰囲気になっているのかも気になった。

「行きましよう」

「ああん夏目ちゃん、乗り乗りねえ。やる気がみなぎってきたわ」

榊が梅を連れてきたのは逆バンジーだった。高い位置にあるレーンの先からゴムを引っ張って、それを地上の乗り物に結びつけ、それに乗った二人が勢い良く上方に引っ張り上げられるものだった。

「駄目だって！ わたし、これ乗れない！」

「大丈夫だって。これ一瞬だし、高いところから見た風景は絶対キレイだって！」

「ヤダ！」

引き返そうとした梅の腕を榊が掴んだ。

「無理矢理乗せちゃうよ」

榊は冗談のつもりだったのだろう。

本気で嫌がるのなら、別に無理矢理にのせる気もなかったのだろう。

そうだとしても梅にとっては生死を意味している。

「放して！」

梅が榊の腕を振り解くと、榊が慌てて言った。

「ごめん！ そんなに嫌がると思わなかったんだ。ちょっとふざけただけなんだよ」

「もういい！ わたし、帰る！」

歩き出した梅を追いかけて、榊は梅の正面に回った。

「本当にごめん。謝るよ。俺、こんなことで君と終わりにしたくない。正直、君ともっと話したいんだよ」

梅の心が揺らいだ。

「でも、乗り物には乗れない」

「いいんだよ。じゃあ、話しよう。俺も、その方が楽しい」

話しているほうが楽しい。

何よりも、梅の心を動かした。

しかし不動のものがある。

目の前の男は知らないのだ。

梅の抱えた爆弾を。

梅は最後に試してみた。

「私はもう帰りたい。そこを退いて」

「退かない。退いたら、俺は絶対後悔するんだから」

本気かな。

梅は目の前の男を見る。

真剣な顔して、梅のことを見ている。

本気かな。

「やっぱり……」

梅がそう呟く。

だめだよ竹彦。今日だけ普通でいるなんて、逆に苦しい。

「今日は帰る。でも、また今度」  
「なんだよ」

突然、榊がうんざりしたように言った。

「俺が誘ってるんだぜ？ 俺をなんだと思ってんだよ。取り巻きの男の一部か？ 俺だってプライドがあるんだよ」

「私、そんなこと言ってるじゃない」

「そんなこと言ってるじゃない？」

この男は怒ってる？

「お前は充分、俺を傷つけてるんだよ。すかしてるとか、お高くとまってるとか、お前みたいな奴のことをいうんだよ。自分じゃ気づかないだろうけど」

「なんで？ どうしてそんなことを言うの？ 私、そんなつもりないよ」

「もういいよ。俺も帰る。冷めた」

冷めた？

「女は自分が悪者になるのを嫌うんだ。だから悪者にされそうになると、他人のせいにしたり、相手を否定したりするんだ。いつまでもそうしてりゃいい。俺は帰る」

背を向ける榊。

それを止めようと一瞬梅の手が前に出て、ためらった。

ためらった。

それが、今の梅を物語っている。

ためらい。

梅は呆然と、遠ざかる男の背中を眺めていた。

第十一幕 【 警官と天才の昔話はただの逸話にすぎませんが 】

夏目と竹彦は観覧車待ちする松太郎と桜子を発見した。

「見てよ。観覧車に乗る気よ。あんなのじゃ刺激が少ないわ。レールの上をぐるぐる回るやつじゃないと」

「刺激が強すぎますよ。観覧車くらいが中学生同士みたいなカップルには丁度いいんですよ」

「丁度いいとか、適当とか、いい加減とか、そういうあいまいな言葉が嫌いなよ。世の中、刺激よ。びんびん感じる刺激よ。ちよつと私、ジェットコースターに二人を詰め込んでくるわ」

そう言つて、二人の所に行こうとした竹彦を慌てて止める夏目。

「観覧車から出てきてからにしましょう。それまでアイスでもしゃぶつてましようよ」

「しゃぶるなら違うものがいいわ。太くて硬いやつ」

「トイレで柳沢がグロッキーになつてるから、今のうちに襲つてきたらどうですか？」

「……あんだ、警官のくせに結構な毒を吐くのね」

「とにかく、あの二人は少し放っておきましょうよ」

竹彦が思いとどまると、丁度二人が観覧車に入り込むところだった。

松太郎が桜子の手を取つて観覧車に乗せた。

手を振れた。

ちよつと冷たくて柔らかい手。

松太郎は動悸がして鼻息が荒くなった。

観覧車の扉が閉まる。

密室になった。

桜子と同じ空気を共有している。

それだけで、松太郎は失神しそうだった。

「わ、みて、松太郎さん。あんな所に夏目さんと竹彦さんが」

桜子が目ざとく二人を発見した。

松太郎が下を見下ろすと、確かに観覧車の下で何かを話す二人が見えた。

それが徐々に小さくなってくる。

下界からの隔離。

桜子と二人。

向かい合って座り、膝が触れそうだ。

桜子の香りがする。

ぐるぐる回る。

「松太郎さん」

桜子が言った。

松太郎が桜子を見ると、目が合って慌ててそらした。

「私、松太郎さんとってもいい人だと思います」

心臓が高鳴る。

幻聴じゃない？ ああ、神様。

「だけど」

だけど？

一抹の不安。

「私、心に決めた人がいるんです。その人は私の子供の父親で、今、海外でお仕事してます。私やっぱり、その人を待ってないといけな  
いんです。ごめんなさい」

桜子が頭を下げた。

頭を上げた。

桜子は愕然とうな垂れて、虚空を眺める松太郎を発見する。

慌てて近寄って肩を揺らした。

「ま、松太郎さん？ 大丈夫ですか？」

桜子が目の前にいる。

その事実には驚いて、松太郎は背筋を伸ばした。

「だ、大丈夫です」

心配そうな桜子が、そのまま松太郎の隣に座る。

急接近する桜子との距離。

脇を見ると、すぐそこに桜子の顔があった。

「さ、桜子さん？」

「はい？」

「ぼくは、あなたに待っている人がいるのを知ってたし、お子さんがいることも知ってました。あなたが僕なんか、振り向いてくれないことも分かかってました」

「そ、そんなことない」

「だけど、これだけは自信を持って言えます。声を大にして言います」

松太郎は大きく息を吸い込んだ。

目の前に桜子の顔があり、一瞬躊躇したが言い放った。

「僕はあなたを想う気持ちはだれにも負けません」

桜子が目を真ん丸くすると赤面した。

ああ、言ってしまった。何だろう、この充実感。生まれて始めてだ。

「あ、あの風の強い日、書類を拾ったのは、確かに僕ですけど、でも、あれは格好悪かった。突然桜子さんの書類が風に飛ばされて、僕は大慌てだったから、なんだか駆けずり回って無様な格好を見せちゃって……。覚えてて欲しくなかつたんですけど……」

桜子は何も言わない。

「さ、桜子さん。桜子さんを初めて見たのは、桜子さんが働くビルの前にある喫茶店からでした。そこから出てきた桜子さんは大きな書類を背負って、人と肩をぶつけたときにそれをばら撒いてしまった。突風に煽られて書類が飛んでいく姿を見て放っておけなかった。拾っているとき、初めてあなたのことを間近で見て、すぐに好

きになった。なんだか初めて会った気がしなかった。それからも、あなたのことは何度か目にしていた。バイク便で書類を届けたときもあなたが真剣な顔でコンピューターの画面に向かってるのを見ました。あなたが恋愛小説を読んでも知ってます。ストーリーカーと言われようとかまいません。僕はあなたが大好きです。何があっても変わりません」

「そんなこと、言わないで」

桜子が両手で顔を抑えながら、泣き出した。

松太郎はひどい罪悪感を抱き、何度も「ごめんなさい、もう言いません」と言ったが、桜子は言葉にならないように首を何度も横に振った。

「違うの。違うの、松太郎さん。ごめんなさい。私、そんなに誰かに好きって言われたことないから」

松太郎は言葉を失った。

松太郎はなぜか冷静になれた。  
いつもの明晰な頭脳が、不幸にも蘇ってくる。

だめなのか。

「本当にごめんなさい」

桜子が涙ながらに訴えた。

松太郎にこれ以上何も言えるわけがない。いくら気持ちを伝えたくて、断り続けなければならぬ桜子を苦しめ続けるだけだからだ。

「ごめんなさい」

桜子は、そればかりを言った。

観覧車が終わるまで、桜子は顔を上げることはなかった。

梅が疲れて一人でベンチに座っていた。

どれくらい座っていたらう。

そろそろ夕暮れが近かった。客足は途絶えないが、帰り時を感じ

ていた。

本当にここに来て良かったのか。

梅はそんなことを考える。

梅は一人でぼんやり考えながら竹彦が通るのを待っていたが、前を通ったのは竹彦でなく夏目だった。

目が合う。

夏目は通り過ぎようとしたが、少し行ったところで立ち止まると、少し考えてから引き返してきた。

梅の隣に座る。

その様子を梅が眺めていると、夏目は梅のほづを見ようとせず話しはじめる。

「梅ちゃん、の苦情の手紙は捨てられたよ。巡査長が丸めて、ごみ箱に放り込んだ」

梅は答えなかった。

「拾っておいたけど、どうする？」

「夏目がそう言ったが、やはり梅は答えない。

人が目の前を無数に通るすぎた。

子供は疲れを感じているのか、昼時の元気はない。

「用はそれだけ？」

梅が言った。

「べ、別に他に用はないけど」

「じゃあ、何でそこにいるの？」

夏目はむっとした。

そして立ち上がると言った。

「ちょっと話してもしようとしたただけだろ。嫌ならもういいよ」

短気。

梅もむすつとする。

夏目は悪態を吐きながら、梅に背を向けた。

梅は立ち上がった。

「ちょ、ちょっと待って」

梅が戸惑いがちにそう言うと、夏目が振返った。

「ちよっとくらいなら、話ししてあげてもいいよ」

その言い方に夏目は少し腹を立てたが、引き返すことにした。再びベンチに座る二人。

「苦情の手紙だっけ？」

梅が尋ねる。

「苦情の手紙、本当は出して欲しかったんだ」

夏目が話しはじめる。

「自分の居場所を、自分で悪く言うのも嫌なんだけど、あそこの交番は梅ちゃんが手紙に記した通りだ」

「謝ってくれるの？」

「謝ってほしいのか？」

「ほしくない」

二人は一切目を合わさず話しをした。

梅が言った。

「新しいの書いてるから、今度はそれを出すよ」

「うん」

轟音を立てて二人の頭上をコースターが走り去っていく。

「一緒にいた男はどうしたんだよ。仲良さそうだったじゃんか」

「帰った」

「帰った？　なんで？」

それには答えない梅。

「最初から思ってたんだけど、梅ちゃん、俺のことが嫌いなのか？」

「なんで？」

「何でって、睨み付いたり、苦情の手紙書いたり、その他もろもろ」

「そう。嫌い」

「……そう」

再び、通り過ぎるジェットコースター。

梅が言う。

「あなたは、私のことを嫌い？」

「……」

黙る夏目。

「な、なんで黙るの？ 深く考えないでよ」

「女が男に言うのと、男が女に言うのとは違うんだよ。ノーコメント」

「それって、嫌いってこと？」

騒がしい子供の集団が目の前を通りすぎた。

「彼氏作らないの？」

「余計なお世話」

「言いたくないけど、梅ちゃん、可愛いと思うよ」

「言いたくないなら言わないで」

「会話にならないじゃんか。さっきの男とはちゃんと話してただろ」

「じゃあ、ちゃんとした話しをしてよ」

「ちゃ、ちゃんとした話し？」

うーんと悩む夏目。

たまりかねた梅が質問した。

「松太郎に命を救われたって言うてたでしょ？ あれって、何のこと？」

「ああ、あれか。あれを話せば、まともな話しなんだな」

夏目は額に手を当てて思い返すように話しはじめた。

「たいした話しじゃないけど、むかし、松太郎と海に行った時の話し。海に行つて、松太郎はボートに乗つて、俺は泳いで、沖にあつた島まで競争したんだ。ボートと泳ぎ、どっちのほうが早いかな。綺麗な海で、海の底まで見えるんだ。そこを泳いでいつて、負けたほうが缶ジュース一本。それで最初のうち俺が勝つてただけど、真ん中辺から思うように泳げなくなつたんだ」

「おぼれたの？」

「うん、結論からするとそうなんだけど、ちょっと変わってる溺れ方をして、ちょっと変わった助けられ方をしたんだよ」

「どんな？」

「上手く泳げなくなったのは、ちよつと疲れただけだと思って、浮かんで休んだ。綺麗な海だったから、何気なく水中を見たんだ。その時、水の底に佇んでる女の人がいた。海の底のほうに沈んでる女が見えたんだ」

「ゆ、幽霊の話し?」

「そう。俺は幽霊だと思つて悲鳴を上げたんだ。海で幽霊を見たら、足を引つ張られて海底に引きずり込まれるっていう話を友達から聞かされて、それを真に受けた俺は溺れたんだ。泳ぎは得意なんだけど、なぜか泳げなくなった。その時、追いついてきた松太郎がボートの上から叫んだ」

「叫んだ?」

「『どうした!?』つて訊くから、俺は『お化けに吸い込まれる』つて叫んだらしい。俺は覚えてないんだけど。それで、ばしゃばしゃ、溺れてる俺を見て松太郎は冷静に聞くんだ。『どんな姿形をしてるんだ?』つて。俺は溺れてるから助けて欲しいのに、そんなことを聞かれてもこたえられない。でも松太郎が言うには、しっかり答えてたんだつて。『女の幽霊が海底にいる』つて」

ジエツトコースターが頭上を通った。

それが通り過ぎるのを待つて話しを続けた。

「俺は助けて欲しいのに、松太郎は俺のほうにボートを近づけようとしななんだ。助けてくれつて叫んでるのに、松太郎は『それはお前の幻覚だ。しっかりしろ』つて言うんだ。そんなこと言われてもパニックになつてるから分からない。松太郎は『深呼吸して、よく見るんだ』つて叫んだけど、溺れてるのに深呼吸なんて出来ないよな?」

梅が少し笑つて頷いた。

「『幽霊なんていないんだ。息を止めて身体を動かすな。塩分の関係でお前の体は浮くんだから』つていう声が聞こえて、凄く苦しかつただけど、俺は息を止めて、体の動きも止めたんだ。『幽霊なんて存在しない。科学で半分くらい説明できるから大丈夫だ』つて

訳の分からないことをいわれたけど、確かにそれで少し冷静になつて体が浮いてきた。水面に顔が出て、一生懸命息を吸って自分を落ち着かせた。松太郎が船の上からにこりと笑つて言った。『ほらな、俺の言う通りにしたら助かつたろ？』つていうんだ」

梅がクスリと笑つた。

「結果的に松太郎がいなかったら俺は死んでたかもしれないけど、松太郎が手かオールを差し出してくれれば、俺は苦しまずにすんだんだ」

「どうして、そうしなかつたの？」

「あいつは幽霊が恐いんだ。ものすごく頭が良くて、数学の博士号や弁護士免許を十代のうちに取つたけど、その割には幽霊を怖がるんだ。科学で説明できないものを、ものすごく怖がるやつなんだ」

うふふ、と梅は笑つたが、慌てて無表情に戻した。

「松太郎は昔とんでもない事をやらかした事がある」

「なに？ 犯罪？」

「不幸の手紙つて知ってる？」

「うん」

「昔、あいつのところ不幸の手紙が届いたんだ。内容はありふれたやつで、この手紙がといたら五人に同じ手紙を出さないと、呪われるつていうやつ。あいつ、それが送られてきて、人前では「くだらない」つて顔してたけど、あいつ、その手紙を持って大学の研究所に忍び込んだんだ。その紙の材質とか、書かれたペンの種類とか調べ上げて、科学的に呪いなんてないつて証明しようとしたんだ」

うんうん、と梅が頷く。

「あいつ忍び込んだ大学で見つかつて、警察に連れて行かれたんだ。動機を聞かれて、呪いの手紙を科学的に検証していたつて答えたもんだから、次の日から学校で笑い者にされるし、最後には新聞まで乗ったんだ。俺は今でもその新聞を持つてる。「高校生、呪いの手紙の真否を科学的に検証を試みたが大学研究所であえなく御用」つて見出して、その話しをすると、松太郎は今でも顔を真っ赤にして

激怒する。機会があつたら言ってみれば？ 呪いの手紙を科学的に検証で言つと、あいつ目を丸くして驚くから」

「おかしい人だね」

「ほら天才と何とかは紙一重つて言つだろ。だから桜子ちゃんもお似合いかもしれない」

「なにそれ、桜子もおかしいつてこと？」

「あ、いや、そんな意味じゃないんだけど」

「別にいいよ。だって桜子もおかしいもん。あれでも、私の一つ年上なんだよ。まるで子供みたい」

「それじゃあ、俺とたいして歳は変わらないのか」

「なんか可愛くて、妹みたい」

「梅ちゃんは兄弟いないの？」

「兄弟は……」

口籠もる梅。

いけない質問だったのかと思つて、違う質問をしようとしたが、梅は全く違う事を言った。

「なんか、変な感じ」

「変な感じ？」

梅は首を傾げながら夏目を見た。

夏目も不思議そうに梅を見返す。

「なんだよ、変な感じつて」

「わかんない。なんか変な感じ。今の光景、前に夢で見た気がする」

「夢？ そうか？」

夏目は周りを見渡してみる。

見渡した所で、梅の見た夢を夏目が思い出すわけでもない。

「別にいいや。デジャヴつてやつでしょ。脳の誤作用」

梅はそう言つて完結した。

それから沈黙が続いたので夏目が口を開いた。

「ずっと彼氏いないの？」

男はすぐそういう話題を持ち出してくる。

そう思いながらも梅は答えた。

「うん、三年くらい」

「仲良かったんだろ？ 竹彦さんが言ってたぞ」

た、竹彦め……。

梅は拳を作る。

後で殴ってやる。

「酷い男だったって」

夏目はそう言って後悔した。余計な一言だった。

「酷くなんか無い。凄くいい人だった」

「そ、そうだよな。うん」

「なに？ あなたは彼女いないの？」

「うーん」

夏目は悩んでしまった。果たして栗子は彼女と呼べるのだろうか。

「まあ、もてなくても心配するなよ。世の中、お見合いとか色々あるからさ」

なんで慰められてるんだ、俺。

その時、夏目の携帯電話がなった。

夏目は携帯の液晶を見る。

非通知だ。非通知で電話を掛けてくるのは、松太郎か栗子。

どっちだ。

「取らないの？」

と梅に言われ、夏目はおそろおそろ電話を取った。

おい、夏目。どこにいるんだ。探してるんだけど。

夏目は安堵する。

「出口に近いところにある、噴水の前のベンチ」

後、ここには柳沢とサリーと桜子さんはいるんだけど、榊と梅ちゃんがいないんだ。梅ちゃんは携帯持ってないから探さないと。

「榊なら、もう帰ったってよ」

帰った？ 一人で？

「それに梅ちゃんなら、ここに」

夏目はそう言って、ベンチに座っていた梅のほうを見た。梅がベンチにうな垂れていた。

大量の汗をかいて、顔も手も屍体のように真っ白だった。

夏目は驚愕とした。

「梅ちゃん!？」

夏目は梅に近寄って、うな垂れる梅を抱き起こした。力無く首を垂れる梅。意識が無い。

持病？ 発作？ 貧血？ 癲癇？

夏目？ どうした？

「梅ちゃんが倒れた!」

ええ!？

夏目は梅の名前を呼んだ。

返事はない。

なんで、こんな白い顔に……。

夏目は梅の胸に耳を当てる。

「馬鹿な! なんで!」

心臓が止っている。

「誰か救急車!」

夏目は怒鳴った。

「くそ!」

夏目は、ベンチに梅を横たわらせ、心臓マッサージをした。

警察の新人研修でしかやったことのない心肺蘇生処置だ。

すぐに夏目の周りに人盛りが出来る。半径二メートルの距離を正

確に守って取り巻いている。

「誰か! 救急車!」

夏目はもう一度怒鳴る。

騒然としてくる周囲。

梅の胸に耳を当て、鼓動を確認する。

まだ動かない。

「いち! に! さん! し! し!」

心臓マッサージを続ける。

果たして、このやり方で良かったのだろうか。

一体、どうしてこんなことに……！

「救急車はまだか！」

「どうしました!？」

ようやく遊園地の従業員らしき人間が現れた。

「救急車を！」

従業員は驚愕の表情で頷くと、人込みを引き返していった。

汗だくになりながら心臓マッサージを続ける。

梅の胸に耳を当てる。

心音は聞こえない。

もう一度心臓マッサージをしようとしたとき、変化を感じた。

かすかに胸が上下している。

もう一度、胸に耳を当てる。

かすかに聞こえる心音。

夏目はいつから息を止めていたのか、一年ぶりくらいの安堵のため息を漏らした。

「だけど、心音が弱い。」

夏目は上着を脱ぐと梅に巻く。

「救急車はまだかよ……」

一体どうしたのか、夏目は頭が混乱して理解ができない。

梅には何かの持病があったのだろうか。

急に心臓が停止するなんて持病があるのか？

その時、驚愕の表情を携えた松太郎と竹彦と桜子が人ごみから飛び込んできた。

その蒼白な顔を見るなり、竹彦がものすごい目で夏目を睨んだ。

「あんだ、一体この子に何をしたの!! 何をしたのよ!!」

え？

これは自分のせいなのか？

夏目はぞっとした。

竹彦は後に夏目に謝った。

「気が動転してたの。あなたが梅を助けてくれたのに、本当にごめんなさい。」

夏目は別に腹は立っていなかった。

緊急に入院した梅の病状は、狭心症の重い発作。危険な発作で、次にこんなことが起きたら、命の保証は出来ないと言う。

今は眠っているが、明日には目を覚ますだろうという話した。とにかく今回は命に別状はなかった。数日の入院で退院できるということだ。

しかし説明する医師の表情は重かった。難しいことを説明されたが理解できない。

早急に手術が必要なのは分かった。

その手術を、梅が拒み続けていることも知った。

救急処置が早かった為、心臓停止状態であっても、脳への損傷は有り得ないだろうということだった。

まだ目を覚まさない梅。

桜子は子供を迎えに行かなければならず、いったん家に帰り、松太郎はそれを送っていった。

薄暗い病室のろうかの椅子に竹彦が静かに座っていた。

夏目が近寄っていった。

「わたしね」

竹彦が話しはじめる。

「梅が倒れてるのを見たとき思ったの。私が無理に遊園地なんか連れてきたせいだつて。梅が死んだら私のせいだつて。だから思わず、そばにいた夏目ちゃんに罪を擦り付けようとしちゃった」

夏目は黙って聞いていた。

「梅はたくさんの場面で心臓発作に見舞われた。時には大事な人の

前で、自分の心臓病を知られたくない人の前で心臓発作を起こした。それは大したことなくて、ニトログリセリンを飲めばすぐにおさまる発作よ。梅は自分の病気を誰にも知られたくなかったの。発作を起こして心臓を患っていることを知ると、人は梅に優しくなるんだって。でも、人は優しくし続けることが無理なんだって。だから梅のもとを離れる。夏目ちゃん、わかる？ 梅は誰にも分からない孤独の中にいるのよ」

竹彦は目の前の廊下を睨みつけながら話す。

夏目にかけてやる言葉はなく、静かに聞いていた。

「梅は誰にも心を開かない。心を閉ざすことに慣れてしまった梅は、私でさえ覗くことが出来ないの。もう梅は駄目なのかな。梅を幸せに出来るのは楓だけなのかな。梅が心臓病だって知って梅のことを捨てた男を、いつまでも引きずってる。誰にもあの亡霊は払えないの？ このままじゃ梅、死んじゃうわ」

竹彦が求めるような視線で夏目を見る。

楓。

それが梅の中に巣食っている亡霊。

「梅ちゃんが……」

夏目が無表情に口を開く。

「梅ちゃんが絶望しないのは、竹彦さんがいるからだろ」

夏目にはそれしか言えなかった。

後は何も浮かばない。

夏目は立ち上がると、梅の病室に入った。

鼻や腕に管を通してある梅がベットに横たわっていた。

……。

心の中でさえ、言葉は浮かばない。

「俺、夜勤があるからもう行くよ」

梅にそう伝えて夏目は病室を後にした。

## 第十二幕 「素人の探偵ごっこは意外に大変でした」

数日後、梅が退院したという知らせは受けたが、夏目はあれから一度も見舞いに行かなかつたし、電話も入れなかつた。

梅が会いたくないのではないか。

漠然とそう感じ、病院には足を向ける気にはならなかつた。

事件が起きたのは海の退院より数日後。

まず最初に起こつたのは、桜子の前に八潮の父親、安藤桃平が姿を現したことだつた。

その事実が明らかになつたのは、松太郎が桜子に電話したとき。

もう会うことも、電話することも出来ないと言われ、桜子に言われた松太郎が、必死に問い正したところ、桜子が「安藤桃平が帰つてきた」と松太郎に伝えた。そのまま夏目の元に松太郎から連絡があつただ。

桜子さんのマンション周囲の巡回に重点を置いて欲しい。

松太郎の訴え。

それを受け入れるか受け入れないかは答えなかつたが、夏目は自分の巡回の時だけは桜子のマンション周辺の巡回を増やすつもりでいた。

松太郎が本格的に動き出した。

夏目は最後まで反対したが、松太郎は聞かなかつた。

安藤が桜子の元に姿を見せたと言うことは、安藤の目的が何にしろ、桜子の父親にも情報が行くはずだ。

それから松太郎は携帯に電話しても出ず、家に出向いてもずっと留守にしていた。

松太郎は、誰にも知られることなく動く必要があった。まず、航空券の入手。

安藤に、すぐさま海外に逃亡する手続きを取らせなくてはならない。

手当たり次第のキャンセル待ちを、架空の名前で入れた。

航空券は大丈夫だろう。

問題はどうかやって安藤に接触するか。安藤は桜子の家にこもっているかもしれない。

もちろん松太郎に嫉妬はあった。桜子の家に安藤がいると思うとはらわたが煮え繰り返る思いだった。

それを押え込むのは、松太郎にとっては造作も無いこと。

頭脳と感情を切り離せばいいのだ。

松太郎は安藤に接触する方法を考えた。

昼間うち、桜子が家にいない間にマンションに行くしかない。

安藤は忍び寄る桜子の父親の影に気づいているのだろうか。気づいていれば警戒していて接触は難しい。気づいてないのならば安藤はただの馬鹿だが、接触はたやすい。

とにかく時間の勝負だ。日本データバンクとユニオン・システムズ相手に追いかけてこをするのだ。何しろ相手が巨大だ。こっちが勝っているのは個人という、小回りが利くことだけ。巨大な組織は急な判断や機転に弱い。団体になって図体がでかくなれば、反応速度もそれなりに鈍るといふことだ。

桜子が出勤して子供も幼稚園に行っている時間帯を狙って、松太郎は桜子の家に出向いた。

なかなか緊張するな。

松太郎はマンションに入り、玄関前から桜子の部屋のインターホンを鳴らした。

しばらく誰もでない。しかし、桜子の部屋の内線電話は、来客を知らせる音を鳴らし続けているはず。

いないのか……。下調べ不足だな。時間が無かったからな。

しばらく待ったが誰も出てこない。もしかしたら警戒しているのかもしれない。

マンション前で張る、それしかなさそうだ。最悪の場合、桜子さんを張って桃平との接触を待つしかないが、できるならそんな悠長なことはしたくなかった。

松太郎は、マンションを出ようとした。

その時、入れ替わりに入って来る男がいた。

松太郎は驚愕した。

コンビニの袋を持ったそいつは、間違いなく安藤桃平だった。

やっぱり馬鹿だ。こいつ、ユニオン・システムズに目を付けられていることを分かっていない。のこのことコンビニなんて行っていたら、拉致してくれといっているようなものだ。

「安藤桃平さん？」

松太郎は玄関前でオートロックを解除しようとしていた松太郎に声を掛けた。

だらしのない顔を松太郎に向ける。

こんな男に桜子さんは……。

男は無精ひげを蓄え、やつれたように頬がこけている。ぎらついた目、瞳孔の開いた瞳は明らかに麻薬常用者のそれだった。

松太郎は下唇をかむ。

「私、スパイラル・アイ・エージェンシーのエージェント、燕子花木と申します。失礼ですが、安藤桃平さんで間違いないですね？」

松太郎がそう訊くと、安藤の瞳に警戒の色が見られた。

「スパイラル・アイ・エージェンシーは、つまり探偵社です。私は探偵で、ある調査依頼者から依頼を受けて、ここにいます」

「……依頼者？」

安藤の声は震えていた。

「依頼者のことはお教えできませんが、私はあなたを助ける為に現れたと思って頂いても結構です。こんなところではお話できません。部屋に入れていただいてもよろしいですか？ それが無理なら、私

の車の中でもいいんですか」

松太郎は見ず知らずの男の車よりも、桜子のマンションを選んだ。とりあえず逃げ出したり、知らん振りするような選択を選ばなかったことは安藤にとっても幸運だった。

「ちなみに、同居者の方は？」

「今、仕事に行つて留守です」

安藤はそう言うと、部屋に案内された。

このマンションには、たしか梅や竹彦が住んでいたと思うが、二人に会つてしまうことだけは細心の注意を払った。

部屋に通されると、お茶を用意しようとした安藤を制してソファに座らせた。

「とにかく急を要する用件です。一刻を争います。安藤さん、あなたは「ユニオン・システムズ」という会社をご存知ですね？」

安藤が警戒した。

「私の依頼者は「ユニオン・システムズ」ではありません。とりあえず話しておきますが、私は五年前、あなたが桜子さんに結婚詐欺を働いたことも、五千万の金を持ち逃げしたことも知っています」

「馬鹿な……！ 俺はそんなことをした覚えはない。それに、こつやつて俺は帰つてきた」

「そんな言い訳は通用しませんよ。とくに「ユニオン・システムズ」には。結論から申しますと、あなたはユニオン・システムズに

狙われています。早急にこの場を離れなければなりません。もちろん行き先は桜子さんにも、肉親にも喋つてはいけません。あなたはどうして戻ってきたんですか？」

「そんなの桜子とやり直す為だ」

やり直す為？ 五年も待たせたんだぞ！

「残念ですけど、ユニオン・システムズに対して桜子さんは何の傘にもなりませんよ。とにかく逃亡の準備は整っています。今から三十分以内に準備をしてください」

「ちよつと待てよ。どうも胡散臭いぜ。お前が本当に探偵なのかだ

って怪しい。そのユニオン・システムズのまわし者かもしれないだろ」

「冗談は止めてください。私だってユニオン・システムズ相手にするのは恐ろしいんです。こんな依頼は断りたかった。だけどあなたを死なせたくないという依頼者からの依頼を、私どもは断れなかった」

「依頼者……」

「大体見当が付いてるんじゃないんですか？ 依頼者のこと」

「お、おふくろ……？」

「詳しいことは言えません。とにかく依頼者から、十分暮らせるだけの金を預かってます」

「本当なんだろうな。本当におふくろなんだろうな？」

松太郎は答えない。探偵を装っている以上、頷いたり出来ない。「せめて最後に桜子に挨拶がしたい。俺は確かに五年前、桜子から金を奪って逃げたよ。でも俺は心を入れ替えたんだ。心を入れ替えて、桜子とやり直そうって決めたんだ。でも確かにあなたの言う通りなんだよ。俺はこんな所に戻ってくる資格なんてないんだ。でも桜子は何も言わず、俺を受け入れてくれた」

がつくりと肩を落とす安藤桃平。

「分かっているんだよ。でもどうしようもなかった。俺は桜子の優しさに甘えただけだ。すぐに桜子の前から姿を消すべきだとは分かっていた。俺も悩んだんだ……」

なにが悩んだ、だ。このくそつたれめ。

松太郎は感情と裏腹に、無表情を崩さなかった。

「桜子に迷惑が掛かるって言うのなら俺は出て行くよ。だけど桜子に謝りたいんだ。せめて最後に桜子と話をさせてくれ」

松太郎は冷静に言った。

「桜子さんも、ようやく訪れたあなたがいなくなるのは悲しいと思います。だけど別れは言えません。そうですね、空港までの車の中で手紙を書いてください。私が桜子さんにそれを渡します。そ

れでいいですね？」

「……分かった」

「本当に時間が無いんです。ユニオン・システムズはもう、すぐそこまで来てるかもしれない。すぐに用意して！」

安藤桃平が腰を上げた。準備を始める。

たいした準備は要らないはずだ。

桜子さんは会社か……。突然帰って来たりしないよな……。

安藤は居間にあつた棚を開けた。その中に手を突っ込んだが、一瞬迷つて棚の中のものから手を放した。

「せつかく桜子に会えたのに、もう別れなくちゃならないなんて……」

安藤は呟いた。

「せめて桜子と子供の写真が欲しい。八潮の写真が欲しい」

「アルバムから抜いていくといいでしょう」

松太郎は優しくそう言った。

安藤が本心から写真が欲しいと言っているのか、うわべだけなのかは分からないが、本当に時間が惜しかった。

松太郎も、あまりこういう追い立てられるような緊張は味わったことが無い。

その時、部屋の玄関を、ガチャガチャといじる音が聞こえてきた。

桜子さん！？

松太郎は身体を緊張させた。

夏目は気になって、いても立ってもいられなかった。

松太郎がどこへ行ったのか分からない。

夏目は巡回中、桜子のマンションを通る。

そして発見した。

松太郎の車だ。

やはりここにいた。

夏目は自転車を止め、マンションに入り込んだ。オートロックの自動ドアはキーを使うか、中から開けてもらわなければ開かない。

国家権力を使って管理人に開いてもらう手もあるが、令状はないので後々問題になりそうだった。

桜子の部屋に松太郎がいるとしても、インターホンを鳴らして果たして出るだろうか。

夏目は桜子の部屋番号を押し、インターホンを鳴らしてみた。

誰もでない。

何度か鳴らすと玄関に管理人が通った。

制服姿の警官がいたので、管理人は不審に思って声を掛けてきた。

「どうされました？」

「いや、巡回連絡中です。異常はないですか？」

「ああ、はいはい。問題はないですよ」

管理人は、人懐こい笑顔を浮かべそう言った。

夏目は敬礼をし、仕方なくマンションを出ようとしたとき、入ってくる人間を見て夏目は足を止めた。

入ってきたのは竹彦だ。手に買い物袋を携えている。

「夏目ちゃん。どうしてここに？ どうかした？」

「巡回連絡中です」

夏目はそう答えた。

管理人が、ゴミ捨て場の掃除にでも向かうのか、ほうきとちりとりを持って玄関を出ていき、竹彦がオートロックの自動ドアを開いた頃、夏目が竹彦に声を掛けた。

「竹彦さん、俺を中に入れてくれませんか？」

「……やっぱり何かあったの？ それとも梅に会いに来たの？ 梅に会いに来たんなら、ごめんね、あの子、多分会わないわ」

「桜子さんに会いに来ました」

「桜子？ インターホンならした？」

「鳴りましたが誰も出ません」

「じゃあ、留守なんじゃないの？」

夏目は歯がゆくなつた。目の前の竹彦に全部説明すればきつと通してくれるだろうが、そんな事は出来ない。

「悪いけど、入れてあげない」

「緊急事態なんです」

夏目は訴えた。この言葉で悟つて欲しい。説明は出来ないが悟つて欲しい。

「夏目ちゃんさ、梅が入院してたとき、なんで見舞いに来なかったの？」

竹彦が全く違うことを聞いてきた。

竹彦は夏目をじつと見詰める。

「今日は桜子さんに用があつてきました」

夏目がそう答えると、竹彦は「ふーん」と笑つて自動ドアを開いた。

「入れば、不法侵入で」

竹彦がそう言うと、夏目はマンション内に足を踏み入れた。

竹彦と一緒にエレベータに乗り、桜子の部屋がある四階で下りた。

五階のはずの竹彦まで一緒に下りてくる。

「竹彦さん、部屋に戻ってください」

「別にいいじゃない。私のマンションなんだから。あんたこそ不法侵入なんだからね」

夏目は仕方なく同行を承諾した。

桜子のマンション前に来て、改めてインターホンを鳴らす。

応答はない。

「どうして誰もでないんだ？」

夏目は呟きながら、インターホンを鳴らす。

試しにドアノブをまわしてみた。

開いた。

「カギがかかってない」

夏目は言い知れぬ不安を感じた。

後ろには竹彦が控えている。このままドアを開いて、中を覗いてみるわけには行かない。

「不用心ね、桜子ったら」

竹彦が言った。

「竹彦さん、俺は今からこのドアを開きます。もちろん家宅捜査令状なんてないし、違法行為ですけど、別に見逃してくれなくてもいいですから」

「あら、そう。好きにしたら」

夏目はドアを開いた。

中を覗く。

玄関しか見えない。玄関の靴を見た。男物の靴は見当たらなかった。

夏目は部屋に立ち入り、居間のドアを開いた。

誰もいない。

「どこへ行ったんだ」

夏目が呟くと竹彦が言った。

「桜子ちゃんならいないわよ。だって私んちにいるんだもん」

「あなたの家？」

「そつよ。だから誰もいない」

夏目は思考を巡らせた。

「桜子さん、仕事は？」

「都合で休んでる」

「都合とは？」

「そんなことまで言わないといけないの？ お巡りさん」

松太郎……。どこに行ったんだ……。

「とにかく不法侵入ね。これは桜子に報告して、彼女の判断に任せらるわ」

「竹彦さん。桜子さんに会わせてください」

「は？」

竹彦ははにかんだような顔を見せる。

「桜子さんに会わせてください」

竹彦はうんざりしたようなかをする。「冗談じゃないわ。もう出てってよ」と言い放つ。

夏目は意を決した。

車があるのに、松太郎がいない。

それにカギの開いたドア。

全く確信はないが、この言い知れぬ不安は……。

夏目は決意して言った。

「安藤桃平さんが帰ってきた。だから桜子さんは相談しにあなたの部屋に行った。そうですね？」

竹彦がそれを聞いて目を剥いた。

「な、何でそれを……？」

「桜子さんに会わせてください。今は何が起こってるのか分からないけど、何かがおかしいことは確かです」

夏目がそう言った。

竹彦は言葉を失っていた。

夏目が訪れるより少し前の出来事。

桜子の部屋の玄関が音を立てているのに気づいて、桜子の帰宅かと警戒した松太郎の予想はしたたかに裏切られた。

玄関を押し入って入った来たのは、物騒な男の集団だった。

暴力団！？

明らかにそれと分かる風貌。

松太郎が驚愕していると、無断で押し入ってきた男達は有無を言わず松太郎を押し込んだ。松太郎は抵抗は無駄だと悟り、おとなしく捕らえられた。

男達は隣の部屋に押し入り、同じように安藤を取り押さえてきた。

安藤は情けない悲鳴を上げながら、二人の男に引きずられてくる。

「やられた……。」

松太郎は頭を抱える。

「おとなしくしていれば、手を出さない。黙って付いてくるんだ」  
男はどすの聞いた声でそう言った。

安藤が助けを求めるような顔で松太郎を見つめてくる。

心配するな。

松太郎はそう頷いてみせてやる。

今は言う通りにするしかない。

実は松太郎にも確信がなかった。

本当に安藤桃平はユニオン・システムズに狙われているのか。

これでようやく確信に変わったのだ。

松太郎も本気になれる。

安藤と松太郎は腕を掴まれながら、部屋を後にし裏口から連れ出された。そこには大きな黒塗りのバンが止められており、安藤と松太郎はそこに詰め込まれた。

恐ろしく危機的状況だ。

松太郎は漠然と思う。

松太郎の頭脳は恐ろしく冷静で思考を巡らせていた。

松太郎は、こんなこともあるのかと準備はしていた。

危険はつきものだと理解している。

車が発進し、終始無言の男達に挟まれながら松太郎は目だけを動かして、車の中を見回した。

ただの暴力団らしい。ユニオン・システムズと交流のある暴力団だろう。いや、おそらくは日本データバンクで拉致や誘拐を専門とする部門の人間。

最後部座席に安藤を挟むように座る男二人。

その前の後部座席には窓際に松太郎、左に男。

運転席に一人、助手席に男一人。

良かった。用意しておいて。

こつそり松太郎は上着のポケットに手を入れる。  
車に捕らわれたとき、助かる方法がある。

ぼけつとに忍び込ませていた煙ダマに火を付けた。花火の煙ダマだ。火が点ると大量の煙を巻き上げる。

火を付けた煙ダマを最後部座席のほうに転がせると、松太郎は息を止めた。

そして、その時が来るのを待つ。

「なんか、音がしないか？」

誰かがそう呟いた。

「だんだよ、この臭い」

次の瞬間、後部座席から煙が上がった。

煙はたちまち車の中を蔓延し、運転席まで侵食した。  
慌てた運転手は車を止める。

隣にいた男が立ちあがったとき、松太郎はチャンスと違って男を突き飛ばすと、男は車の側面に頭をぶつけてうめいた。

ほとんど煙で視界が無くなる。

松太郎は後部座席のドアを開いた。

「あ！ 待てこら！」

松太郎は車を這い出した。

一目散に逃げ出し、振返る。

蒸せ込んだ男達が車から這い出して松太郎のほうを見ていた。車は窓から煙を噴き出している。

男達に松太郎を追ってくるような気配はない。

安藤は逃げ出せなかったようだ。

煙ダマが車から投げ出され、男達は車の中に戻っていくと車が発進した。

松太郎はナンバーを記憶した。

煙を噴きながら遠ざかっていく黒塗りのバン。

松太郎は額をなでながらうな垂れた。

とりあえずユニオン・システムズと日本データバンクが安藤

桃平を狙っていたって言う事実は明らかになった訳だ。そうしたら危機感を覚えた安藤も、俺の言うことを素直に聞いてくれるはず。

おとなしく待ってるよ、安藤。

「竹彦さん、遅いねえ」

桜子が呟いた。

竹彦が買い物をする、帰りが遅くなることを知っていた梅は頷いただけだった。

「ごめんね、梅ちゃん。こんな時にお邪魔して……」

「いいよ、気にしてない」

梅は答える。梅はソファーに静かに腰を掛けていた。

「でも、本当にやり直そうなんて信じてるの？ 桜子」

「うん……」

静かに頷く、桜子。

桜子は知っている。五年前に結婚詐欺にあったことを理解している。だが、その相手を今でも信じて「やり直そう」という言葉をけなげに信じていた。

どうしてだろう。

梅には理解できない。

いや、できる。

もし梅の、今でも心に燻るあの人が、もう一度やり直そうと言ってきたら、私はその言葉を信じるだろう。

梅を捨てたあの人でも、やり直そうと言われたらそれを断る自信が無い。

そういうものなのか、人を好きになるといふことは。

「松太郎はどうするの？」

梅がそう訊くと、桜子は一層に落ち込んだ顔をした。

「分からない。松太郎さん、許してくれないだろうなあ……」

別に松太郎ときちんと付き合ったわけではない。桜子は松太郎の好意をきちんと断ったのだし、謝る必要も許される必要も無い。

ただ、桜子はいまいにした。付き合わなかったにしろ、電話はしたし会って話しもした。それは松太郎に希望をもたらししていたわけだし、桜子はそれを裏切った。

桜子はそれに罪悪感を抱いている。

桜子は松太郎が嫌いではなかった。むしろ好意を抱いていただろう。

安藤が現れなかったら、あるいは松太郎との距離は急速に狭まっていたかもしれない。

その時、竹彦が帰ってきた。

食料品を買って帰ってきた。

居間に現れる竹彦。しかしその背後から現れた男に、梅は驚愕とした。

夏目だ。

「夏目さん……、なんで？」

桜子が呆然と口を開いた。

夏目は制服姿だった。

明らかに不穏な雰囲気。

夏目が口を開いた。

「桜子さん。安藤桃平の居場所を聞きに来ました」

夏目がそう言つと、桜子が青ざめた。

松太郎はそこから自宅に直行した。

地下に入ると、黒塗りのバンのナンバーから持ち主を割り出し、持ち主の勤める会社を割り当てた。

榎木組だ。建設業者。ユニオン・システムズとの関係は分からないが、二つが結びついていることは間違いない。暴力団かと思つた

がただの大工だった。

安藤桃平がいるとしたら、この建設事務所だろうか。それとももつと他の場所か。工場跡地などの人の近づかないようなところ。

松太郎はまず、榎木組事務所付近の廃屋や工場跡地を洗い出してリストアップしてみた。

かなりの数に登った。

これを一つ一つ調べていく時間はない。

榎木組にゆかりのある施設を調べてみると、榎木組が持っているアパート、分譲マンションも少なくなかった。

安藤を処分したら自分のテリトリーだ。

松太郎は榎木組が携わる建設予定地を洗い出し、リストにまとめた。

可能性の問題だが、これのどこかで処分が行われる可能性が高い。松太郎が車を降ろされたとき、確かに車は榎木組事務所のある方面へ走っていた。

今はまだ榎木事務所にいるかもしれない。

松太郎はすぐに行動する。

車庫には車が後三台あって、その中の黒いスポーツカーに乗り込んだ。

勢い良く発進すると、松太郎は榎木事務所に向かう。

向かってどうする？

それが疑問だ。

どうやって安藤を取り返すか。

話して分かるような相手じゃない。

まずは安藤が事務所にいることを祈るだけだ。所在がつかめればどうにかなる。

松太郎はアクセルを踏んだ。

桜子は嫌な予感を隠せなかった。

安藤は結婚詐欺師。夏目は警官だ。

安藤を逮捕に来た。

桜子は短絡的にそう思った。

梅もそう思った。

桜子が梅に近寄って言った。

「し、知らない、そんな人」

桜子とはぼけたが、夏目は落ち着いて言った。

「教えてくれ、桜子ちゃん」

梅にしがみつく桜子。

梅は桜子の肩を抱いた。

分かってる。桜子の男は結婚詐欺師。だからって……。

梅は桜子を守った。

「安藤って誰？ いきなり人のうちに押しかけて、なんなのよあんなは」

夏目はひるまず言った。

「安藤を探してる。早く探さないと大変なことになるんだ」

「そんな人はいない。警官だからって、人の家に勝手に入ってきていいことはないんだから、出ていって！」

梅が怒鳴った。

そこで夏目がひるんだ。

梅の心臓のことを思い出した。

だが、夏目は引き下がるわけには行かない。

「安藤が桜子ちゃんのところに来てるのは知ってる」

梅も引き下がらない。

「捜査令状とか、そういうのは持ってるの？」

「持ってない」

「じゃあ帰ってよ」

「緊急事態なんだよ。桜子ちゃん、分かってくれ。安藤はどこにい

る

梅が立ち上がった。桜子の前に立ちはだかる。

「知らないって言ってるでしょ」

夏目は黙った。

やっぱり、話さなくちゃならないのか。

梅は夏目の肩を小突いた。

「早く帰って！」

桜子を苦しめないで！

梅は悲痛そうにした。

夏目は、梅の気持ちが少し理解できる。

「梅ちゃん、退いてくれ。桜子ちゃんと話をさせてくれ」

梅は頑固として退かない。

「帰らないのなら、あなたのこと訴えるわ。警察官の越権行為で」

「ああ、くそ！」

夏目が苛立ちを口にした。

「大きな声を上げたって駄目よ」

夏目は自分の帽子を掴むと床に叩き付けた。

戦いて後ずさりする梅。

「俺は警察だから来たんじゃない」

そう言って、警察の上着を脱ぎはじめる。

梅が何事かと驚愕した。

上着を抜いて、やはり床に叩き付けると夏目は言った。

「言いたくなかったけど、安藤は「ユニオン・システムズ」に追わ

れてるんだ。俺は安藤が結婚詐欺師だって知ってるし、麻薬常用者

だって知ってる。だけど俺は安藤を逮捕しに来たんじゃない。助け

に来たんだ。桜子ちゃん、安藤はどこにいる。大変なことになるぞ」

夏目がそうまくしたてた。

桜子が不安そうに夏目を見上げている。

「も、桃平さんは、部屋にいます」

桜子がそう言った。梅が振り返って桜子を見た。

「桜子、信用しないで。あなたは黙ってて」

「部屋にはいなかった。悪いけど力ギが開いてたんで、中を覗いた。だけど誰もいなかった」

「え!？」

桜子が勢い良く立ち上がった。

走り出す桜子。

「桜子！」

梅が叫ぶ。

「なんなのよ！ そっとしておいてよ！」

梅が夏目に怒鳴ったが、それより早く夏目は桜子を追いかけた。それを追いかけてよとした梅を竹彦が止める。

「おとなしくしてなさい。退院したばかりなんだから」

「だって、桜子が……」

「自分の部屋に戻っただけだから心配ない」

「それより、何であいつを家に入れたのよ。そのおかげで桜子が何で入れちゃいけなかったの？ どうして？」

「どうしてって、桜子が……」

「桜子がなに？ 桜子がどうだって言うの？」

「桜子が……」

「桜子が傷つく？ 馬鹿馬鹿しいわ」

「た、竹彦……」

「桜子の彼氏が逮捕されるなら、私はその方がいいと思うのよね。桜子はずらいかもしれないし、八潮ちゃんも前科のある父親を持つことになるわね。でも今のままじゃ、桜子どんどん悪いほうに進んでいくと思わない？」

梅は口籠もる。

しかし言った。

「それでも、私、桜子を守らなくっちゃ。だって桜子、本気で安藤のことを好きなのよ」

「……梅、あんたは桜子の保護者じゃないのよ。あんた、桜子に自

分を見てるんじゃない？ 桜子に自分の心を見てるのよ。桜子が傷つくことが自分の傷にもなるって勘違いしてる。桜子は桜子よ。私たちが口を出す問題じゃない」

「分かってるよ、そんなこと。だからって桜子の目の前で、桜子の好きな人を……。そんなの酷いじゃない。やり方がおかしいよ」

竹彦は梅の肩を掴んで、ソファーに座らせる。

「少し、桜子に時間をあげたっていいじゃない。再会したばかりなのに、すぐに別れるなんて」

「分かってる。分かってるから。でも梅、良く考えて。夏目ちゃんは独断でここまで来たのよ」

「だから何？ あいつは警察官じゃない」

「梅……」

梅はムキになってる。梅は自分と桜子を照らし合わせることで、深い同情をしまっている。

竹彦はそう思った。

第十三幕 「泥沼にはまっっていく予感はとりあえず忘れて」

榎木事務所の前には黒塗りのバンが止っていた。

安藤がいる。間に合った。

松太郎はシートにうな垂れた。とりあえず安藤の所在は分かった。次にどうするか。

策はない。

どうしたらあの中から、安藤を連れて出せるのだろうか。

いや、連れて出すより、あの中から安藤が連れて出されるのを待ったほうがいい。

これは松太郎の予想であるが、これだけ大掛かりに拉致をしたからには、しかるべき場所で安藤を処分するか、もしかしたら海外に労働者として売り飛ばすかもしれない。とにかく、この社員が密集している事務所でなにかをする、ということはないだろう。

安藤が出てくるのを待つ。それしかなさそうだ。

松太郎は辛抱強く待つことにした。

松太郎の予想通り、安藤はそれから二時間後、数人の男に囲まれながら事務所を出てきた。

黒塗りのバンに乗り込むと走り出した。

松太郎は体を起こして、エンジンを掛けると追いかける。

松太郎は、この二時間の間に色々考えた。

どんな事体にも対処できるように、頭の中に無数に分岐するプランを立てシミュレーションを繰り返した。

この二時間で、安藤の行き先は大体見当を付けた。

さきほど自宅で作った榎木組の関わっている建設予定地を洗い出したリストのうちどれかだ。桜子を妊娠させて、五千万を持ち逃げした男は、どう考えても隠密に処分されるとしか考えられない。間違っても日本データバンクやユニオン・システムズの会長のところ

に行ったりもしないだろう。

細心の注意を払って、誰も目にも触れないように隠密に処分。何の形跡も証拠も残さない。建物の建設予定地の真下に埋めれば、屍体が上がってくることはない。

安藤が処分されるとしたらそんなところだ。

安藤を助け出せるとしたら、その時だ。

松太郎の手が震える。

さすがの俺も恐怖してる。

松太郎はにやけながらそう思った。

やっぱり、こんなの怖いよなあ。

松太郎が黒塗りのバンを追っていくと、予想通りバンは建設予定地に入り込んで行った。

多分、まだ何も起こらない。とりあえず奴等は事務所から安藤を離しただけだ。実行はおそらく夜だろう。

だが、そう確信が持てるわけでもなく、車の中で待っているわけにも行かず、車を降りると松太郎も建設予定地の中に忍び込んだ。

桜子が自分の部屋に入ると、そこには誰もいなかった。

「どこかに出掛けたのかもしれない」

桜子がそう言った。だが、次には驚愕とする。

「荷物をまとめた後が……」

桜子がそう言って指を差したので、そちらのほうを見ると、確かに荷物をまとめた後がある。しかし、この荷物をまとめた本人であるう安藤の姿はない。

荷物をまとめた、ということは、安藤はこの部屋を後にしようとしていた、ということだ。

なぜ来たばかりの桜子の部屋をすぐに出ていこうとしたか。

それは松太郎がここにやってきて、危険が迫っているから逃げる

と安藤に忠告したに違いない。

だが、荷物は残ってる。それに松太郎の車も残っている。

やっぱりトラブルだ。何かあったな、松太郎。

「桜子さん、教えてくれ、安藤の居場所に心当たりは？」

「分からない」

桜子は首を横に振った。

本当に分からない。そんな様子だった。

やはり、もう黙っているわけにはいかない。夏目は桜子に事情を話す決心をした。

「さつきも話したように、安藤を狙っているのは桜子さんのお父さんの会社、ユニオン・システムズだ。何で安藤が狙われているか、桜子さん、説明しなくても分かるよね」

桜子は青ざめている。唇をわななかせながら言った。

「桃平さんは？ どうなるんですか？」

「分からない」

「……夏目さんはなんで桃平さんを探してるんですか？ 逮捕するんですか？」

「俺は警察の仕事できたんじゃない」

「じゃあなんでですか？ なんでわざわざ桃平さんを探しにここまで来たんですか？」

全てを話さないといけないのだろうか。

松太郎のことも話さないといけないのだろうか。

「松太郎が関係してるんです」

「松太郎さん？」

「それ以上は言えません。友達が関係してるから、俺はそれを助けていただけ。桜子さん、どうか安藤の居場所に心当たりがあったら教えてください」

「……松太郎さんが……？ どうして……？」

夏目は桜子の肩を掴んで、真っ直ぐに桜子を見つめた。

「時間が無いんだ。教えてくれ。もし、あなたのお父さんが安藤を

連れて行くとしたら、どこに連れて行く？ 安藤も松太郎も全く行方が分からない。桜子さんに聞くしかないんだ」

「分からない。どこに行つたなんて、私には分からない」

桜子さんにも分からないのか……！

夏目は頭をかきむしる。

松太郎の言うには相手は大きな組織だ。もし捕らえられたりなんかしたら、ただでは済まないのではないか。

しかし何も起きてない。

安藤は今のところ指名手配もされてないし、ユニオン・システムズが安藤をさらっていったという証拠も無い。

警察は動かない。

夏目は言った。

「桜子さん、ありがとう。でも、どうか心配しないで待っていて欲しい。警察にも連絡を入れないで、おとなしく待っていて欲しい。俺が安藤と松太郎はどうにかするから、君は梅ちゃんや竹彦さんと一緒にいてくれ。いいかい？」

「でも……」

「まだ何も起きてないし、何も分かってない。君に俺から連絡を入れるまで待っていて欲しいんだ」

「桃平さんと松太郎さんに何かあったら……」

「何も無い。俺は警官だ。分かるか？ 信用してくれ」

「私のお父様が二人をどうにかしようとしてるんでしょ？ 私がお父様に直訴してきます。ね？ そうすれば二人は大丈夫でしょ？」

「だめだ。まずは事体を明らかにして、それからしかるべき処置を取る」

要するにまだ何も分かっていないということ。本当に実の娘が産んだ子供の父親を抹殺しようとなってるのか。ただ、脅して追っ払うだけかもしれないし、すぐに戻ってくるかもしれない。

それに桜子が父親に連絡を取って、こちらの動向が相手に知れたら本格的に隠蔽される。そうしたらもう松太郎と桃平を見つけ出す

手立てもなくなる。

「それじゃあ、私も夏目さんに付いていく」

桜子が思い切ったことを言った。

「だ、だめだよ」

「だって、二人とも私のせいなんですよ？ 私のせいで大変なことになってるんでしょ？ 私も行く。絶対に行く」

夏目は桜子の迫力に押された。

「でも」

危険だ。

そう言おうとして、口籠もった。

危険だと分かれば、桜子は更に行きたがるだろう。

「付いてきても意味が無い」

「お父様のことは私が一番良く知ってます。それに、私はあなたがたの防波堤です。お父様は私の言うことは聞いてくれないかもしれないけど、私があなただのそばにいれば、あなたには危害を加えない」

桜子は分かっていたのか？ 自分の父親が危険な存在だということを。

夏目は頷いた。

「分かった。じゃあ一緒に来てもらう。本当にいいの？」

「はい」

桜子がしつかりと返事をする。

いいのか、本当にこれで。

夏目は不安を覚えるが、もう、こうなった以上は仕方が無い。

「行くう」

そう言って夏目は部屋を出た。

マンションを出ると、松太郎の車が止っている。

夏目はカギがかかっていることを確認する。

「何してるんですか？」

桜子が訪ねてきた。

「これは松太郎の車だ。ちょっと借りる。松太郎の車だから、別に

盗難にはならない」

そう言って、運転席のドアを掛けた。

「ど、どうやって開けたんですか？」

「車のドアの鍵くらいは、すぐに開きます」

夏目は運転席の足元に身体を入れて、ハンドル脇のキー部分をいじった。ものの十数秒でエンジンがかかる。

「キーもないのに……」

「秘密ですよ」

そう言って、桜子を助手席に座るように促した。

「実は警察の新人教習で車の盗難の実習があるんです。もし、災害時などに車をどかしたりする為に、キー無しでもエンジンを掛けられるように教えられるんです」

適当に言って夏目は車を発進させた。

「お巡りさんに車を止められたら、どうするんですか？」

「その時は、終わりです」

それだけ言った。

「どこに？」

桜子は不安そうに訪ねる。

「まずは、松太郎の家に行きます。手がかりがあるかも」

松太郎は建設予定地に入り込むと、黒塗りのバンを探した。

建設予定地には、まだ下地しか敷かれていない。ところどころ穴が掘られ、これから基礎を作るのだ。

穴を掘ってコンクリーを流し込む。

その中に安藤の屍体。

松太郎は黒塗りのバンを発見した。

そばに小さなプレハブの建物があった。おそらく、この建設現場の事務所であろう。事務員がお茶をすすったり、現場監督が設計書

を開いたりするところだ。

そこに榎木組員の男達と安藤がいる。

夜になるのを待っている。

松太郎はとりあえず時間が出来て、安藤を助け出す最善の方法を  
思案した。

警察に止められることも無く、夏目と桜子は松太郎の家に着いた。

「凄いや……」

桜子が声を上げた。

「松太郎さんって、お金持ちなんですか？」

「うん、まあ、そうだね」

玄関を調べたが、鍵がかかっている。

二人は裏口に回り、開いていた車庫から屋内に侵入した。

「いいんですか？ 勝手に入って」

「いいよ、松太郎の家だから」

そう言って居間まで行くと、地下への床は開いていた。

夏目は迷わず地下に入っていく。後を付いてくる桜子。

「ここは……？」

「松太郎の仕事場です」

夏目は地下の部屋の一番奥にあるコンピューターの傍まで来た。

机に置かれた紙を手にとって眺めた。

「榎木組事務所？」

夏目は呟く。

その声に桜子が反応した。

「榎木？」

「知ってるのか？」

「私のおじさんです。建築業者をやっているひとです」

「建築？」

夏目は一瞬、暴力団だと思ったが、確かに榎木組などという暴力団は聞いたことが無い。

なぜ、それを示す紙がここにあるのか。

夏目は他にも探してみると、何やら建設予定地、廃屋などをまとめたリストがあった。

これが何を意味しているか分からない。

これの何処かに、安藤と松太郎がいるというのだろうか。

「桜子さんはパソコンをいじれる？」

「いえ、私、機械はまるでだめで……」

パソコンを操作するのは無理そうだ。夏目にも分からない。

桜子の親戚の建設業。それは桜子の父親とこの建設業者が関係していると言うことだ。

「ここにある榎木組が関わっている建設予定地は、全部で二十箇所くらい示してる。桜子さん、これを見て、なにか分からないかな」

桜子はそのリストを覗いてみた。

首を横に振って「分からない」と答えた。

このリストの一件一件を調べていく時間はない。

「こんな建設予定地なんて調べて、どうしようとしてたんだろう」

桜子が呟いた。

確かにそうだ。

どうして松太郎は建設予定地なんかを調べたんだ？

「夏目さん、見てください」

桜子が夏目に紙を見せた。

「ほら、この端のところ。印刷した時間が載ってる。三月十三日、十四時三十九分」

「本当だ。今日印刷したものか」

夏目は時計を見た。

「十五時三十分。これを印刷して、また一時間も経ってない」

「さっきまで松太郎さんはここにいたんだ」

「一足違いか」

松太郎は、間違いなく桜子の部屋に安藤と一緒にいたはずだ。そこからいなくなった二人。安藤は荷物を置いていったままいなくなり、松太郎はここに来た。

ここに来たとき、安藤は一緒にいたのだろうか。多分、いない。

安藤はここには一緒に来なかった。安藤は、桜子の部屋で何者かに連れ去られた。どうにか逃げた松太郎は、安藤の所在を探す為に色々調べた挙げ句、このリストの中のどれかだと結論した。

自分の推理にはあまり自信が無い。だが、そうだとしか考えられない。

安藤を連れていったのは榎木組。そして榎木組が関わる建設現場を洗い出した。

安藤が建設現場で処分されるという話を物語っているのだろうか。安藤を殺して、屍体はコンクリートの基礎の中。そう予想した松太郎は、このリストのどこかの建設現場に向かった。

それでいいのか松太郎。

ならば松太郎はまだ安藤を見つけていない可能性だってある。

「夏目さん、これは？」

桜子が新しい紙を提示した。

「航空券のキャンセル待ち……。誰かの名前で五箇所もキャンセル待ちを予約してる」

間違いない。松太郎は安藤を海外へ逃がそうとした。

その松太郎の居場所は分からない。

榎木組事務所へ行くか。行ったとして何が分かる？ のこのご受付に松太郎や安藤のことを訊いたって答えてくれるとは思えない。

せめて犯罪がかかっていることが分かれば応援を呼べるんだ。でも何の形跡も無い。

なんで一人で勝手に動くんだよ。

夏目は歯ぎしりをした。

歯がゆい。

松太郎が夏目に何も言わず一人で動いたのは、安藤を海外へ逃がしたかったからだ。夏目が関われば、それはすなわち警察の介入を意味し、安藤が警察に捕まることになるからだ。

だからって自分を危険な目に合わせるなんて……。

夏目はそばにいる桜子を見た。

桜子が不安そうに夏目を見返す。

そんなに心底惚れたのか。女の為に、そんな一生懸命になれるなんて……。

「行こう、桜子さん」

「どこに？」

「風潰しです。もう、それしかない。一つ一つ調べていくしか方法は残ってない。幸い、俺は警官だから国家権力がある」

「でも、あんまり無茶すると、夏目さんの立場が」

「大丈夫」

夏目がそう言った。

大丈夫なわけ無いか。

そう思いながら、松太郎の家を後にした。

夏目は「榎木組事務所」から、死角になるような位置に車を止め、身だしなみを整えると車を止めた。

「どうするんですか？」

桜子は不安そうに聞いた。

「すぐ戻ってきます」

そう言って車を降りる。

この付近は最近、発砲事件のあったところだな。

夏目は真っ直ぐ榎木組事務所に近いところに行く。

四階建てのビルを構える榎木組は、ビルに入り込むと美人の受付がいた。

夏目は平静を装って受付嬢に挨拶した。

「どうも、南町交番のものですが、責任者の方はいらっしゃいますか？」

受付嬢は口調は事務的だが、眉は不審そうに歪めながら訊いた。

「どんな御用でしょうか？」

「ええ、さつき交番に、このビルの前に不審な車が止ってるという通報が、市民から入りましてね、ちよっとお話を伺いにまいった次第です。なに、ほんの少しだけお話を伺うだけなんで」

そう言つと、受付嬢は「少々お待ちください」といって、内線電話を手を取った。

「今、責任者のほうがまいりますので、あちらの待合室でお待ちください」

そう言われて、玄関ホールに設けられたソファアに座る。

まもなく責任者らしい男が姿を現して、夏目に会釈をした。

夏目は敬礼すると言った。

「お忙しいところすみません。実は、このビルの前に不審車両が止っていたという通報が入りまして、お伺いしたわけなんですけど、何かありましたか？」

責任者の男は七三に髪を分け、黒ぶちのめがねをしていて、いかにも卑屈そうに首を傾げた。

「いやあ、そう言えばさつき、ビルの前にバンが停まっていたようですが、うちには関係ないように思いますよ」

「バン？」

「ええ黒塗りのバンです。確かに停まっていたんですが、ほんの一瞬でしたし」

「いやあ、そうですね。いちおうお伺いして、何も異常が無ければ問題ないんですよ。ただ念のため、ちよっとお伺いしたいんですが、その黒塗りのバンからは誰か下りてきましたか？」

「さあ、ちよっと分かりかねますが……」

「それでは、どのくらい停まっていたかななどは？」

「数分だと思えます。多分、隣のビルにでも用事があつたんじゃないですか？」

「車の中から悲鳴のようなものが聞こえたと聞いてるんですが、本当ですか？」

「悲鳴……？　そうですね、確かにそんな声がした気もしますが、私どもには関係ありません」

「……そうですか」

気になっていたのか、今度は責任者の男が夏目に訊いた。

「通報されたのはどなたで？」

誰が通報したのか、それをこの男は気に掛けている。

「いやいや、あまり気になさらないでください。最近この辺、発砲事件があつたでしょう？　住民も少し神経質になつてるんで、こんなくだらない通報が増えてるんです。まあ、何の異常も無いとおっしゃられるんなら、私はこの辺でおいとまします」

にこやかにそう言うと、男は「わざわざご苦勞様です」といって、出口まで夏目を見送った。夏目は敬礼をしてビルを出ると、そのまま車に戻っていった。

「どうでした？」

桜子が聞いてくる。

「釜をかけたら、案の定、安藤はここに来たらしい。あの態度は間違いない。まだ事務所内にいるのか、どうかは分からない。ただ、見渡す限りに松太郎の車が無い。松太郎は近くにいないってことだから、もしかしたら安藤は他の場所かもしれない」

「松太郎さんが、どうしてこの件に関係してるんですか？」

「……松太郎本人に聞いてくれ」

夏目は車を発進させる。

どういふ結果になるか分からないが、リストにある建設予定地を回ってみるしかない。

夜になった。

松太郎は建設機材の影に忍びながら隙を待っていた。安藤があこのプレハブの事務所にいることは確認した。しかし三人以上の人間は、必ず安藤のそばにいて助け出す隙はなかった。

松太郎はただ夜を待っていたわけではない。様々な下調べを終えていた。

作戦は次のように立てた。

いよいよ安藤が処理されようと事務所を出てきたタイミングで、付近に停めてある黒塗りのバンを奪うのだ。

黒塗りのバンにはキーが挿しっぱなしになっていたのは確認した。建設予定地を歩く安藤と男達。そこに車を走らせた松太郎が現われ、車をおお暴れさせる計画。慌てふためいた男達が散らばったら安藤を車に収容して、そのまま走り去って空港に行く。

何の問題も無い。

車の運転なら自信があるし、奴等のバンを奪っているわけだから追っ手も無い。

松太郎は興奮気味に作戦実行のときを待った。

腹が減ったな。

と松太郎が思ったとき、事務所内が動きを見せた。時計を見た一人がおもむろに腰を上げるのが見えた。

暗くなってから、明るい事務所内が良く伺えるようになった。一人立ち上がると、ばらばらと事務所内の人間が立ち上がり、安藤も立ち上がらせた。

安藤は口にガムテープをされ、腕を後ろで縛られている。

怯えきった安藤は首を必死に振って、連れて行かれることを拒んでいる。

抵抗空しく男四人と安藤は事務所を出てきた。

よし、作戦開始だ。

松太郎は緊張した。

事務所を出た合計五人は、ゆっくりと夜の建設現場を歩いていく。物音を立てないように、松太郎は黒塗りのバンまで忍び寄って行った。

確かにキーは付いていたし、車中には誰もいない。

ここまでは順調。

松太郎は黒塗りのバンに乗り込んだ。

問題はエンジンを掛けるタイミング。

エンジン音を轟かせるとき、それは奴等に自分の存在を知らせることになる。

ここからは時間の勝負だ。絶対にミスは許されない。

絶対にミスは許されない状況こそ、松太郎にとって本領発揮の場所だった。

頭が冷やされたみたいに冷静になる。

エンジンを掛けた。

重低音の排気音が車をしびらせた。

いよいよだ。

ヘッドライトを上げ、車を発進させる。

タイヤが後方に砂利を吹き飛ばしながら前進した。

やがて、ヘッドライトの向こうに歩く五人の姿を発見した。

松太郎は目を剥きながら笑った。

緊張感が内臓を震わせる。

その五人の元に車を突っ込ませると、五人は左右に分かれて躲した。

「おい、見たか、奴等のあの顔！」

誰に言うわけでもなく、松太郎はそう歓喜した。

ホイールスピンをさせて、その場で車体を百八十度回転させた。

ヘッドライトの前に現れる男達の姿。

やめろ！

誰かが叫んでいる。

「やめるわけないだろ」

松太郎は声を上げて車を発進させた。逃げ出す男達。松太郎はそれを追いかけた。

脇によけようものならハンドルを切って執拗に追いかけた。

ひとしきり追い掛け回し、相手が体力を喪失したところを見計らって、安藤が愕然と座り込む場所で車を停めた。

松太郎は運転席から顔を出して叫んだ。

「安藤！ 車にの  
乗れ。」

最後まで叫べなかった。

銃声がした。

銃！？

「反則だ！」

松太郎は叫びながら頭を引っ込める。

安藤はがくがくと震えながら腰を抜かしている。

「ちくしょう、動けよ安藤」

松太郎は悪態を吐きながら、仕方なく安藤をその場に残して車を発進させた。

その時、ビシッ、と音を立ててフロントガラスに穴が空いた。

松太郎はぞつとした。

「洒落にならない！」

安藤は！？

車を再び百八十と回転させた。

ヘッドライトの先には三人の男が見える。

そのうちの一人がこちらに向かって銃を構えている。

その銃口が光ったのと、松太郎が身をかがめたのは同時だった。

ビシッ、と音がした。

松太郎は顔を上げると、運転席側のフロントガラスに蜘蛛の巣状

の穴が空いている。

座席の背もたれにも穴が空いていた。

伏せていなかったら……！

想像して恐ろしくなった。

逃げるか？

そう思ったとき、脳裏に横切る桜子の顔。

「桜子さんの為だ！」

そう言っつて自分を奮い立たせる。

身をかがめながらアクセルを踏んだ。

目に見えない高速の銃弾が、車体の何処かに当たる。

それが松太郎に当たらないなんて保証はどこにも無い。

「轢かれて死んでも知らないぞ」

目の前の男が、車を避けようと左右に分かれる。

その時だった。

ハンドルの取られる感触。

パンクか！

銃弾がタイヤに当たったのだ。

松太郎はブレーキを踏み込んだ。

地面は砂利だ。

車は横滑りした。

松太郎は最悪なものを見た。

助手席側から横滑りしていく、その助手席の窓から建設機械が見

えた。

突っ込んでいく。

松太郎は天に身を任せた。

ゆっくりと目を開ける。

強い衝撃があったが、目をつむっていたのでどうなったか分から

ない。

痛みはどこにも無い。

死ぬ間際は痛みを感じないというから、もしかしたら鉄筋が腹に刺さっていたりするかもしれない。そう思うと目を閉じていたかった。

勇気を振り絞って面を上げる。

目の前に突きつけられた銃口に気づいたのはそのときだった。

「お前、洒落にならないんだよ」

銃を持った男は、ぜいぜいと息を付きながらそう言った。

松太郎は両手を万歳させた。

第十四幕 【ドラマティックな展開はテレビだけの話です】

銃声？

それは夏目がある建設現場で、松太郎の車を発見したときに聞こえた。

全身の毛が総立ちになる思い。

「今の音は？」

桜子が、この世の終わりに直面したような顔で夏目を見ている。

「分からない」

そう言った時、再び銃声がした。

ばんばんばん、と立て続けに三度聞こえた。

「なに？ なに？ 何の音？」

桜子がパニックになった。

間違いない、銃声だ。

今の銃声が、安藤や松太郎が撃たれたものでないことを祈るばかりだ。

「桜子さん、動かないでね」

夏目はそう言っつて、無線機を手にとった。

腰につけた無線機が隣の交番に届くわけがない。乗っていた車もパトカーではないし、仕方なく電話するしかなかった。

携帯電話を手に取り、自分の交番に電話を掛けた。

電話に出たのは藤本巡査長。夏目が「夏目巡査です」と言った瞬間、藤本巡査部長の激昂が飛んだ。

馬鹿野郎！ てめえ、なにやってんだ！ 巡回しながらどこに消えやがったんだ！！

お叱りなら、後でいくらでも受ける。

「藤本巡査部長。発砲事件が発生しました。ここは南町の建設予定地」

夏目は建設現場前に立て掛けてある立て札を見た。

「南町4-6-1です。発砲事件発生。応援を頼みます」

　　応援を頼むって……おい、本当なのか？

「本当です。急いでください。南町4-6-1です。高層マンションの建設予定地。発砲音は建設現場の中からです」

　　了解。すぐに警官を向かわせる。夏目巡査はそこで待機。事情は分からんが、後で説明しろよ。ただの処分じゃ済まないぞ。

「了解」

　　電話の向こうで藤本巡査長の指示を送る声が聞こえてくる。交番にいる警官に応援要請の指示を与えているのだ。

　　再び電話に出た藤本巡査長が言った。

　　現状をなるべく細かく報告しろ。周囲に人は入るか？

「通行人がぼちぼち。少なくともはいです」

　　応援が来るまで、混乱の無いようにしろ。銃声は何発？

「聞こえた限りで四発です。先ほど三発連続で聞こえた後は、何も聞こえませんが」

　　分かった。お前はそこで待機し、野次が集まるようなら追っ

　　払え。とにかく待機だ。

「了解」

　　夏目は電話を切った。

「警察が来ます。桜子さんは車の中に  
　　言いかけて夏目は絶句した。」

　　桜子がいらない。

　　車の中を見た。

　　やはりいない。

「おい、まさか……」

　　建設現場の中に入ったのか！？

「そんな無茶をする女だったのかよ」

　　夏目は頭をかきむしった。

　　あたりを見渡す。

銃声に気づいて人が集まってくる様子はない。  
夏目は入るかはい入るまいか、その場で地団太を踏んだ。  
待機命令が出ているのだ。  
散々迷った拳げ句、結局入ることにした。

桜子は走った。

昔から自分は馬鹿だの間が抜けてるだの、とろいだの言われてきたが、さっきの音が銃声だということは分かった。

桜子は転ばなかった。

走ると転ぶからと、母親に何度も注意された。

だが今は転ばなかった。

それは、桜子に神が応援しているということだ。

この先に桃平さんと松太郎さんがいる！

そこにたどり着くまでに転ばなかったら、きっと二人を助けられる。

転んだら……。

桜子は悪い想像を頭から振り払って走った。

建設現場は広い。

どこに二人がいるかなんて分からない。

その時、何かの明かりが見えた。

桜子はそこまで走った。

喉が張り付くほど渴いている。

息が上手く吸い込めなくて、何度もむせ返った。

明かりの正体は車のヘッドライト。

建築車両に追突した黒塗りのバンがあった。

それが何を意味するかは、桜子には分からない。

走らないと

桜子は「走れ」という観念に襲われ、走り出した。

走れなかった。

桜子は突然後ろから羽交い締めにされた。

桜子は悲鳴を上げた。悲鳴を上げたせいで口を抑えられる。

「何で、女がこんなところに……」

口元に当てられた手を振り解くと、桜子は「放して！」と叫んだ。

「誰が放すか。一緒に来てもらうぜ」

男がそう言った。

桜子は走らなければならなかった。

こんなところで捕まってる暇など無い。

走らなくちゃ！

「その人を放せ」

別のところから声がした。

桜子はそれが夏目の声だとすぐに分かる。

「け、警官！？　なんで……！」

「その人を放せ」

「近寄るな」

男はナイフを取り出し、桜子の頬のあたりにあてがった。

「動くな。この女の頬を切るぞ。一生消えない傷になる」

夏目は銃を抜いた。

それを男に向ける。

「ば、馬鹿かお前！　日本の警官が銃なんて抜くか！」

「その人を放せって」

「下がれ！　銃を捨てろ！」

銃のゲキテツを降ろす夏目。

それを見た男は冷や汗を流した。

「てめえ！　狂ってんじゃねーか！？」

慌てふためいた男がそう怒鳴る。

愕然と目の前の夏目を見つめる桜子。

夏目は言った。

「俺は今日、警官でここにいるんじゃないんだよ。本当に撃つぞ」

「撃てるはずが無い」

夏目は銃口を男の額に向けながら、二人に踏み寄った。

「近づくなつて！ 俺を殺せても、この女は傷ものになるぞ！」

「その人はユニオン・システムズ会長の娘さんだ」

「え！？」

男が愕然としたとき、夏目の持った銃口は男の額一センチまで近づいていた。

「その人を傷付けたら、お前は生き地獄を味わうぞ」

男は目だけを動かして桜子を見る。

その男は桜子の顔を知っていたのだらう。瞬時に青ざめていくと桜子の呪縛を解いた。

夏目のほうに駆け寄り寄る桜子。

「まず、ナイフを捨てろ」

男は言われた通りナイフを足元に落とした。

「それから安藤と松太郎、二人のところに案内してもらおうか」  
大量の汗をかきながら男は何度も頷いた。

松太郎の視界はガムテープで塞がれて真っ暗だった。

沈黙を守る男達に促され、しばらく歩いた。

「よし、ここだ」

声がる。

「おまえら、そこに立ってる。絶対に動くなよ」  
ぞつとする言葉。

松太郎は足を縛られた。

これで走っては逃げられない。

遠ざかっていく数人の足音。

目が見えない。

何が起るのか、目に見えないことはこの上ない恐怖だった。

「……安藤、そこにいるのか？」

松太郎が小声でそう言った。  
もごもご、と声がする。

そうか、口をふさがれてるのか。

「俺は、お前と心中することになっちまった。まったく冗談じゃない」

安藤は口をふさがれながら、もごもごとうめき声を上げている。

「ここまできたら堂堂としてろよ。情けない声を上げるな」

そう言っても、うめき声を止めるわけが無い安藤。

「桜子さんの為に命を張ったんだ。俺は後悔してない」

それは安藤に言ったというよりも、自分に語り掛けた言葉だった。  
「ちくしょう。悔しいけど体が震える。声まで震えてる。俺はこんなに臆病者だったのか」

遠くのほうで何かを相談する声が聞こえてくる。耳を澄ませても、何を話しているか分からない。

「ああ、桜子さん……」

遠くから声がする。

大きめな声もする。

男達は口喧嘩でも始めたのだろうか。

「桜子さん。僕はあなたと一緒に手をつないで、ショッピングとかしたかった」

なんだか涙が出てくる。

死ぬ瞬間が分からないから、どれが最後の言葉になるか分からない。

松太郎は死ぬまでに、出来るだけ多くの言葉を吐いておこうと思  
った。

声がしなくなる。

その時、足音が近づいてきた。

「桜子さん、僕はあなたとキスをしたかった」  
足音が近くで止る。

死期が近い。

「一緒に犬の散歩とかしたり、カラオケ行ったり」

まだまだ、言い足りない。

まだ言わせてくれ。

「桜子さんと一緒に暮らしたりして、一緒に料理作ったりして、たまにキスしたりして」

足音は近くで止ったまま動かない。

まだあるぞ。

「桜子さんと……」

桜子は、目隠しをされて立ちすくんでいる松太郎の前に立っていた。

男達は夏目に銃を向けられ、ひざまずいている。

あとは応援が来るのを待つだけだった。

桜子は、安藤と松太郎を助けに来た。

ロープを解こうと近寄って来ていた。

桜子はそれをしなかった。

松太郎の目前で、松太郎が呟く言葉を聞いて動けなくなった。

目隠しをされたままの松太郎が言う。

「桜子さんとテレビとか見て、あのタレントが好きとか嫌いとか話したりしなかった。それに温泉とかに旅行行ったりして、浴衣でお茶をすすったりして、ときどきキスとかもして」

桜子は胸が苦しくなった。

目から熱いものが込み上げてくる。

震える松太郎は更に言う。

「観覧車は……この間乗ったから、今度は動物園だ。キリン見たりカバ見て驚いたり、ライオン見たりして、桜子さんが僕にしがみついてきたりして。そういうのがいいな。あと乗馬とかもして、ウサ

ギなでて、それか、芝生の上とかで、桜子さんの作った弁当広げて  
桜子は唇がわななく。

どうして自分なんかを、こんなに好きになつてくれるのだろうか。  
あなたを裏切るうとしたのに。

「仕事して帰ると桜子さんがいて、お帰りつてキスをしてくれて。  
暖かい手料理があつて、あと子供……。八潮君が笑つてて、あと、  
あと……。」

松太郎は声がしわがれてくる。

ほとんど泣き声のようになりながらも、さらに松太郎は口を開き  
続ける。

「一生、仲良く暮らして、じいちゃんばあちゃんになつても仲が良  
くて、縁側でお茶をすすりながら昔話して、やっぱりキスをして」  
桜子は必死に涙をぬぐつた。

子供みたいに顔を歪めて歯を食いしばつた。

「……桜子さん……会いたいよ」

「ごめんなさい」

桜子が言った。

松太郎が動きを止める。

機械仕掛けのように体を硬直させた。

「さ、桜子さん!？」

目の見えない松太郎は慌てふためくしかない。

「犯人は逮捕されました。もう大丈夫です」

「さ、さ桜子さん、なんで!？」

桜子は答えない。

「いや、僕は……なんで桜子さんが……」

「松太郎さんのお気持ちは、よく分かりました」

松太郎は恥ずかしくて、いても立つても入られない。あれほど取  
つて欲しかった目隠しも絶対とつて欲しくなくなった。

「いや、ごめん。安藤は隣にいると思うんだけど」

桜子は涙をぬぐつた。

今度こそ涙を止めようとしたが、止らなかった。

「俺はいいから、安藤を」

安藤を助けてやって。

松太郎の言葉は、途中で止められた。

松太郎は数々の願いや夢を言葉にしたが、そのうちの一つだけはこの時に叶うことになった。

松太郎の唇に、蓋をするように柔らかいものが触れた。

松太郎の首に腕が回る。

松太郎は石のように硬直した。

唇に触れるものが何か、理解した瞬間ショートして、生命活動が停止するのではないかと思った。

どれほど、二つの唇が触れ合っていたのか。

やがてそれは離れた。

離れていく足音。

「さ、桜子さん？」

声を上げると、桜子の足音は早足になって急激に遠ざかっていた。

松太郎は戸惑いながら何度も桜子の名前を呼んだ。

背を向けて頭に手を置き、ひざまずく男三人を見張っていた夏目は、引き返してきた桜子を見て呆然とした。

呆然としたのは、桜子が戻ってきたのに、二十メートルほど離れる松太郎と安藤はまだ手足を縛られて、目隠しをされたままだったからだ。

「桜子ちゃん。何で戻ってきたの？」

桜子が夏目の背後に回って、必死に顔を見られないようにした。

「だ、だって」

夏目は桜子の顔を見ようとしたが、桜子は夏目の背後に回るようにして姿を隠している。

「なんで縄を解いてあげないの？」

「だって……、私には、そんなこと、無理」

林檎のように顔を赤くする桜子。

なにが無理なのか分からないが、遠くのほうでは松太郎が桜子の名前を寂しそうに呼んでいる。なにが無理なのか全く分からない。

「安藤もいいの？」

「だって」

なにが「だって」なのだろうか。

応援がくれば、縄などすぐに解いてくれるだろうけど。

夏目は桜子に対しミステリーを感じながらも、油断無く銃を構えていた。

応援がやってきて、榎木組の男達はお縄となった。

夏目が縛られた松太郎の傍に行くと、相変わらず小鳥のような声で「桜子さん、桜子さん」と心細そうに鳴いていた。

「ガムテープ取るぞ」

と夏目が言つと「夏目！？　なんでここに！」と驚愕していた。

説明するのが面倒なので、黙ってガムテープを剥がそうとすると「眉毛が無くなる！」と叫んだ松太郎を無視して一気に剥がした。

目をぱちくりさせる松太郎。

剥がしてやった夏目には目もくれず、松太郎は首を振りまわして桜子を探した。

「桜子さんは！？」

「警官が保護してどこかに行った」

次に松太郎は安藤を見た。

「安藤も無事か」

果たして精神のほうは無事なのか、怪しい様子であったが、とりあえず生きていた。

「……安藤はどうなる？」

「連行される。証拠はないけど、桜子さんから財布を奪ったのと、空き巣に入った容疑がかかってたみたいだからな」

「そうか……」

松太郎は急に元気を無くした。

夏目は手足に縛られたロープを外しながら言った。

「無茶しやがって。殺されかけてたんだぞ。本当にきわどいタイミングだった。後一分でも遅かったら、お前の脳みそに穴が空いてたぞ」

「俺の頭は穴が空いたくらいが丁度いいと思ったんだよ」

皮肉を言う松太郎。

「安藤のことは気に病むな。仕方なかった」

安藤は警官に肩を抱かれながら連行されている。

「逮捕されたら、桜子さん、悲しむだろうな」

「まあ仕方が無いよ」

ロープを解き終わる。

松太郎は縛られていた手首をさすりながら言った。

「桜子さん、許してくれるかな」

「なにを？」

「内緒で桜子さんの周りを動き回ってたこと」

夏目には分からないことだった。

桜子の心は夏目には理解できない。

理解できない点では、松太郎も同じだ。

制服警官が二人の前に現れて「署まで御同行願いたいんですが」

と言われ、松太郎は素直に従った。

後は俺の進退か。

夏目は急に胃のあたりが重くなった。

新人が職場放棄したら、どんな処分が降るんだろう。クビかな。

夏目はため息を吐く。

なんて迷惑な友人を持ったんだらう。

その場でぼんやりしていると警察署まで連れて行かれそうだったので、夏目はこっそり現場を抜け出した。

夏目は近くにいた警官に「夏目巡査は残った職務を済ませて出頭する」と伝えてくれと言っておいた。

松太郎が建設現場から外に出て、桜子のマンションの前においておいたはずの車があったんじよで声を上げていたが、夏目は知らん振りをしてその車に乗って桜子のマンションに向かった。

そこにおいてきた自転車に乗って、交番に帰らなければならない。交番に帰ったら大目玉だ。

怒るだろうなあ。藤本巡査長。

マンションの前まで来て、夏目は梅のところによるべきかどうか迷った。

桜子は警察署に行っているはずだから、梅は心配して待っているはずだった。

あまり会いたくないのが本音だ。

夏目はマンションに入り、インターホンを押した。

はい？ どなた？

竹彦の声がした。

「夏目です」

名を名乗ると、一拍の間があつて、ガチャリ、と受話器を置く音が聞こえてきた。

ロックが解かれ、開く自動ドア。

夏目は五階の竹彦と梅の部屋に向かった。

部屋の前でインターホンを鳴らすと、竹彦が迎えてくれた。

「見つかったの？ 安藤は」

「はい」

竹彦が少し床を見つめて、それから部屋に入るように促した。

夏目は迷ったが部屋に入ることにした。

そこにはソファ―に腰掛ける梅が夏目を見ていた。

なんだか想像と違う雰囲気。

顔を見た瞬間、梅にまくしたてられると思っていた夏目は、おとなしい梅の反応に拍子抜けしていた。

「安藤さんは？」

梅がそう尋ねてきた。

「警察に連行された」

梅の表情は変わらない。

「なんで、もっと早く連絡くれなかったの？ 桜子が心配で気が狂いそうだった」

梅がそう言うと、竹彦が「さっき桜子から電話があったのよ」と言った。

桜子から連絡があったから、少し落ち着いていたのか。

夏目は納得する。

「すみません」

夏目が謝る。

「安藤さん、捕まるの？」

梅の問いに「はい」と答える夏目。梅が顔を伏せた。

「何でこうなるの」

「仕方なかった」

「何が仕方ない、よ。警察のくせに。このサラリーマン刑事」

「なんで、この子はいつも俺に攻撃的なのだろう。」

「と思いながら言った。」

「とにかくみんな無事です。ショックも少ないし、桜子さんもすぐに帰ってきます」

夏目が腰を上げようとしたとき、梅が声を掛けた。

「松太郎が関係してたんでしょ？ 安藤と一緒に松太郎がいたって桜子が言ってた」

「はい」

「何でまた松太郎なの？ なんかおかしいよ。安藤と松太郎が一緒にいるなんて。松太郎が関係してたから、あなたも単独で動いたの？」

「そうです」

「やっぱり」

梅が言った。

「やっぱり、桜子のお金目当てだったの？ 松太郎は桜子のお金目当てに近寄ったんでしょ？ それで、近づいてきた安藤を追っ払おうとしてたから、松太郎と安藤は一緒にいたんだ」

「梅、言いすぎよ」

竹彦が咎めたが、梅は黙らなかつた。

「だって、そうでしょ？ なんで松太郎が安藤と一緒にいるのよ。松太郎から安藤に近づいたんでしょ？ 桜子から安藤が帰ってきたことを聞いた松太郎は、邪魔者の安藤を追っ払おうとして、なんかの事件に巻き込まれたんだ」

「いいかげんにしてくれ」

夏目が無表情に言った。

「松太郎はそんな奴じゃない」

「そんな凄みを利かせたって駄目だからね」

「松太郎が桜子ちゃんの金目当てで近寄ってきたって？ 彼女が金持ちなんて松太郎は最近まで知らなかつた。それに松太郎は充分金持ちだ。松太郎は本気で桜子ちゃんのことを好きなんだよ」

「本気本気って、信用できない。桜子が騙されるの、目の前で指をくわえて見てるわけにはいかないの。お願い、もう桜子に近寄らないで」

夏目はむっとした。

口を尖らせると、ずいっと身を乗り出して梅を睨んだ。

「桜子ちゃんを騙そうとしたのは安藤だ。それに松太郎は安藤を追っ払いたくって近づいたんじゃない。安藤を助けようとしたんだ」「助ける？」

「安藤は五年前、桜子ちゃんに結婚の約束をして五千万の金を借りた。つまり結婚詐欺を働いた。そのせいで安藤はユニオン・システムズという、桜子ちゃんの父親の会社から命を狙われてたんだ。だけど海外に逃亡して難を逃れてたのに、安藤はこのこと桜子の前に姿を現した。それはすぐにユニオン・システムズに気づかれた」

梅がむすりとしながら話しを聞いている。

「もちろん桜子の父親は安藤を浚いに来る。だから松太郎は安藤の元に訪れて、逃げる手伝いをしたんだ。松太郎だって、桜子ちゃんに詐欺を働いて、子供まで生ませて海外に逃げた安藤が憎かった。

松太郎が安藤を助けようとしたのは、何より桜子ちゃんが安藤をまだ愛してるからだったし、八潮君のお父さんだったからだ。警察に言えば、安藤が逮捕されてしまうから俺にだって内緒で動いてた。

「だけど結局、松太郎は安藤を逃がすことがでいなくて、挙げ句の果てには安藤と一緒に殺されかけたんだ」

夏目はそう話して立ち上がった。

梅が後ろめたそうに、テーブルを眺めている。

「全部、桜子ちゃんの為に松太郎がしたことだよ。もう松太郎のことを悪く言ったりするな」

夏目はそう言い残して、部屋を出て行った。

夏目のいなくなった部屋で、沈黙が続いていた。

竹彦にとつても意外な事実だった。そんな話しが、自分の知らない所で蠢いているなんて想像できない。

「梅……」

梅はぼんやり窓の外にひろがる夜の闇を眺めている。その表情には何の感情も見受けられない。

梅がいま何を考えているのか竹彦は分からなかった。

「なに考えてんのよ」

梅は窓の外を眺めたまま返事はしなかった。

その目は何を映しているのか。

人を信用できなくなった女は、外の闇に何を見ているのか。

竹彦は前に梅に対して言った言葉があった。

桜子に自分を照らし合わせているだけだ。

そんなのは間違いだった。

竹彦は思う。

梅は人を純粹に信じてた桜子が羨ましかっただけだ。

桜子に嫉妬していただけ。

自分自身に歯がゆさを感じている。

最近はこの梅、見たこと無かった。

それが、いいことなのかどうかは分からなかった。

いいことであって欲しかった。

「なんかさ」

梅が言った。

「なんか、最近おかしいのよね」

「なにが？」

「わかんないけど、喉に刺さった魚の骨が取れないって言うか、何か大事な事を忘れてる気がする」

竹彦は黙った。

実は竹彦も同じ思いだったからだ。

「なんか、もやもやしてるんだよね。夏目は私の命の恩人なのに、私お礼も言わなかった。どんどん私が嫌な女になっていく」

竹彦は少し笑って「馬鹿ね」と言った。

## 第十五幕 【とりあえず平和な誕生日会での出来事】

夏目は巡回中に職務を放棄した処分で、謹慎二週間と減棒二ヶ月を食らい、そして発砲事件を解決に導いたことで特赦を受け、謹慎の解除と金一封をもらい受けた。つまり処分が報酬と相殺されて、夏目は結局、何も無かったのと同じ生活を送っていた。

安藤は結婚詐欺と麻薬不法所持の事実を認めて逮捕された。

安藤と松太郎が殺されかけた事件についてユニオン・システムズとの関係は一切、持ち出されることはなかった。

逮捕された榎木組の男達は「調子に乗った結婚詐欺師」を殺そうとしただけで、別にどこからか依頼を受けたわけではないと主張したのだ。結局、男達とユニオン・システムズとの関係は明らかにならず、事件はあいまいのままに幕を閉じた。

事件から数日後、竹彦は松太郎と桜子のギクシャクしたまどろっこしい関係や、梅の元気の無さを払拭しようと、梅の誕生パーティーの開催を予定した。

誕生パーティーの招待状は桜子と松太郎の元に届き、さらに夏目の元にも届いた。

夏目はどうして自分の元にも届くのか理解が出来なかった。

竹彦は松太郎の招待状だけに「一人、お堅い男を連れてきて」とメモ書きすることを忘れなかった。

事件以来、桜子と会っておらず電話さえしていなかった松太郎から、何度も戸惑いの電話が夏目の元にかかってきた。

暗闇の中、梅の顔だけがぼんやりと光っていた。

その周りには無数の人影。

歌を歌っている。

竹彦が指揮を執りながらの合唱だ。

「ハッピーバースデー、トウ、ユウー」

一人、歌を歌っていない梅はニヤニヤしながら頭を掻いた。

「ハッピーバースデー、ディヤ、うーめえ。ハッピーバースデー、トウ、ユウー」

松太郎があまり上手ではないビブラートを利かす。

梅が息を吸い込んで、ケーキに立てられた蝋燭の火を吹き消した。無理は出来ず、二本ずつくらい、少しずつ消した。

「誕生日、おめでとう！！」

竹彦の言葉を合図に、一斉にクラッカーを鳴らした。

梅の頭上にたくさんの紙が振ってきた。

梅は照れくさそうに鼻を掻く。

松太郎が明かりを点けた。紙を浴びて、色鮮やかなカツラをかぶったみたいな梅が手を叩いていた。

「夏目ちゃん、音痴い」

竹彦がそう言ったので「別にいいでしょ」と夏目が恥ずかしそうに言った。

松太郎と桜子が離れて座っているのが気になる竹彦は、持ち前の図々しさで松太郎の襟首を掴むと、桜子の隣に座らせた。

顔を背ける二人。

何をそんなに意識してるんだ？

夏目がそう思うよそで、竹彦が八分したケーキを配っている。

「私はちよつとでいいからね」

梅がそう言った。

そうか、あまり食べられないのか。

夏目はそう思う。

「なんか、おかしくないか？」

誰かがそう言った。

誰かとは、新参者のことだ。

松太郎が連れてきたお堅い職の男。

名前は燕子花杉貴という。

燕子花の言葉はあっさり無視をされて、パーティが進行する。

「さあ三対三の合コンみたいだけど、梅の誕生日パーティだから、一応、誕生日おめでとうでかんぱーい」

竹彦がそう言うってシャンパンの入ったグラスを掲げた。

みんながグラスをぶつけ合い、口々に「おめでとう」と言った。

「俺は女が三人居るって聞いたぞ」

燕子花がそう言ったが、誰も聞いていない。

そっぽを向いて、全く口を利かない松太郎と桜子。適当にテーブルの上のものをつついてる夏目。水をちびちびやっている梅。一人でハイテンションなオカマ。

なんか、おかしいじゃないか。それになにより俺は自己紹介してないぞ。だれも俺のことを気に掛けてくれないのか！

燕子花の心の叫びは誰にも届かない。

「梅は今日、二十四になりましたー」

「歳のことと言わないで」

「お肌の曲がり角だね」

と夏目が言うと、梅が睨み付けてきた。

竹彦が、隣で沈黙する桜子と松太郎に痺れを切らし、二人の頭を掴むとお互いの頬を擦り合わせた。すると二人とも顔を真っ赤にして俯いてしまった。

その反応にそれなりに満足そうな竹彦。

竹彦にはあんまり近寄らないようにしよう。

夏目はそう思った。

「二十四じゃ、結婚もやばい年頃よね」

竹彦がそう言うって「まだ、大丈夫よ。そんなこと言ったら世間の二十四が怒るよ」と反論した。

「油断していると、すぐに三十だよ」

と夏目が言うと、梅が睨み付けてくる。

どうして俺が言うと睨んでくるんだ。

理不尽に思う夏目。

「このケーキおいしいね。どこの店のケーキ？」

と燕子花が訊ねたが、誰も答えなかった。

すねてケーキをつつく燕子花。

「今日くらい心臓のことは忘れて飲んだら？ 梅」

「忘れたって、心臓は良くならないの」

「少しくらいは健康に良いって言うじゃない」

「少しだけならね。でも飲まない」

つまらなそうにする竹彦。

つまらなそうにさせてはいけない人間だ。

竹彦はあたりを見渡し、ターゲットを捜す。

やはり標的は桜子と松太郎だった。

「ねえ、もう二人はヤツたの？」

そう尋ねられ、無邪気に「なにが？」と聞き返す桜子。

「いやあね、処女じゃないんだから聞き返さないですよ。もちろんエ

ッチのことよ。男と女の夜の営み」

「あ、あたし、ちちちよつとトイレ」

そう言って、立ち上がる桜子。

ふらふらと部屋を出て行った。

悪い人間だ。

つくづくそう思う夏目。

残った松太郎にターゲットが変わる。

「あんた、今夜くらいに決めたら？ 男だろ？ 性欲あんだろ？」

「俺と桜子さんはプラトニックな関係なんだ。一緒に犬の散歩した

り、公園でお話したり」

「今時、中学生でもそんなこと言わないぞ。おっ立てて、穴に突っ

込まなくちゃ男じゃねーだろ」

「ああ……」

失神しそうになる松太郎。

それでも不満気な竹彦。

悪魔の目を泳がせて、その瞳が夏目を映し出した。ぎくり、と肩を震わせる夏目。

竹彦が悪魔の笑みを浮かべた。

夏目は慌てて言った。

「梅ちゃん、飲もうよ。ちよつとくらい平気なんだろう？」

「でも、飲めるお酒が無いから」

「何なら飲めるの？」

「カクテルとか」

「買ってくる」

夏目は逃げ道を発見して立ち上がった。

「え、いいって。今日は飲まないから」

「いや、いいんだ。買ってくる」

そう言つて部屋を出て行くと、玄関に桜子がいた。

桜子が胸に手を当てて、深呼吸をしている。

「どうしたの、桜子ちゃん」

「あ、夏目さん」

「なんか、うんちを我慢してる子供みたいだよ」

あ、失礼だったか？

しかし桜子はクスと笑った。

「大丈夫です。なんだか緊張しちゃって」

「何で？ 松太郎となんかあった？」

桜子は顔を背けて何も言わなかった。

この子は一体どうやって子供を産んだんだろう。

疑問になる。

「なんか、こつ胸が……。桃平さんのときとはなんか違う、なんて言うか」

夏目は桜子の肩をぽんぽんと叩いた。

「心配ないよ。松太郎はいつもと一緒だよ」

「そ、そうですか？ そうですよね」

桃平のことは気にしていないようだった。

「どこか行くんですか？」

「ああ、ちよつと買い出し。梅ちゃんのお酒を買いに行く」  
「行ってらっしゃい。気を付けて」

そう言つて桜子が手を振る。

夏目は笑顔で返事をした。

靴を履いていると、まだ後ろに立っていた桜子が言った。

「夏目さん、梅ちゃんに優しくしてね」

夏目は振返る。

桜子は真顔だった。

からかつている様子はない。

「分かったよ」

夏目は返事をした。

そのまま玄関を出た。

「帰ってきたわね、桜子」

竹彦が言った。

一瞬凍り付く桜子。

また、何をされるか分からない。

桜子は梅の隣に座つて引つ付いた。こうしていれば竹彦が自分に手を出しにくくなることを、ここ数日で覚えていた。

「梅ちゃん。夏目さんがいま出ていったよ。梅ちゃんのお酒を買いだつて」

「うん、要らないって言つただけど」

「なんか悪くない？ 独りで行かせてかわいそうじゃない？」

「うーん、そうねえ」

「一人で寂しがってるかな？ 今ごろマンションの前くらいかな？」

「……何が言いたいのか？ 桜子」

とぼけてそつぽを向く桜子。

「一緒に行ったら？」

そう言ったのは竹彦だ。

「あんた、謝ることがあるんじゃないの？ こういうタイミングを逃すと謝れなくなるものよ。自分が悪者のままで良いわけ？ 良い女になりたかったら謝るところできつちりと謝る」

「そうよ。梅ちゃんのお酒を買いに行ってくれてるのよ。謝らなくちゃ。謝る？ 何を謝るの？ 梅ちゃん」

「もう、うるさいなあ。私の誕生会なんだから、好きにさせてよ」  
桜子がじつと梅のことを見詰めてくる。

そのまっすぐな視線は、ものすごく居心地が悪くなる。桜子はそれを知っていて見つめてくるのだ。

「命の恩人だよ」

それを言われると何も言えなくなる梅。

「夏目は言い訳しないから誤解されるんだよ。昔から」

松太郎がそう言った。

「な、なによ、みんなして。それは、私に行けって言ってるの？」

三人が同時に頷いた。

梅はどうすることも出来なかった。

夏目がマンションを出て、どちらに行けば酒が売っている店があるのかと思案している頃、梅がマンションを出てきた。

梅は不機嫌だった。

「どうしたの？」

夏目がそう尋ねると、梅は「そっちこそ」と言った。

「酒が売ってる店がどこにあるかわからないんだよ」

「こっち」

梅が指差した。

「あ、ありがとう」

「頼りないから、付いて行ってあげる」

「あ、ありがとう」

梅と夏目は一緒に歩いた。

一緒に歩いていったものの、酒を売っているコンビニでカクテルを数本買って店を出るまでは、二人とも口を利かなかった。

コンビニからの帰り道、公園の前を通りかかったときだった。

「あ、猫」

と夏目が声を上げた。

夏目が「猫お〜」と声を上げながら、ぶらんこのほうに一人で走っていくと、警戒した猫にあっさり逃げられた。

「男のくせに、猫なんて追っかけないでよ」

「猫好きなんだよ」

むくれてそういう夏目。

梅はブランコを見た。

懐かしいな。

ブランコの鎖を触ってみる。ひんやり冷たい。

「ブランコなんて珍しくないだろ」

「私はほとんど乗ったこと無いの」

「なんで？」

そう聞いて夏目は後悔する。

梅は気にしていないようで話しはじめる。

「お母さんに駄目って言われてたから乗らなかったの。このくらいなら大丈夫って言ったけど、遠心力が心臓に負担を掛けるから乗っちゃ駄目だって。他の遊具もそう。シーソーも、滑り台も駄目って言われてた」

梅はブランコに座ってみる。

感触を確かめるように。

「何で、私、心臓病なんだろう」

梅が呟く。

何気なく呟いた言葉だった。

誰の前でも、そんなことを言ったことが無いことに梅自身も気づいていない。

「乗ったら？ 後ろからこいでやるつか？」

「え？ 遠慮しとくよ。確かに心臓に悪いかもしれないし」

「ここに母親は居ないよ。好きにすれば良いんだ。乗りたければ乗れよ」

「やだよ。こんな所で発作なんて起こしたくない」

「誰も居ないよ。狭心症の発作はニトログリセリンを飲めば止むんだろ？ それに死にそうになったら、また生き返らせてやるよ。この命の恩人が」

梅は首を横に振る。

夏目は言った。

「別に、やりたくないんなら良いけどね」

「自分でこぐ」

そう言って梅は地面を蹴った。

驚いて、数歩あとずさる夏目。

勢い良くブランコをこぐ梅。

梅の髪がなびく。

「死にそうになったら助けてよね」

「あ、うん。でも、あんまり無茶するなよ」

「自分が乗れって言ったくせに」

梅は無理をしなかった。

少ししてブランコをこぐのを止めた。

「カクテルちょうだい」

梅が夏目に手を伸ばしてくる。

その手の上にビンのカクテルを置いた。

ふたを開けると、少し口に含む梅。

「まずい」

そう言いながら、もう一口呑んだ。

夏目は梅の隣のブランコに座り、ビールの口を開けた。

「テレビとかでマラソンしてる人見るとさあ、みんな苦しそうな顔をしてるんだけど、でも、気持ち良さそうなんだよね」

梅が矛盾したことを言った。

夏目はビールを飲む。

「スポーツ選手とかも大変なのに、楽しそうなんだよ。それにアクション映画を見て緊張したり、ホラー映画を見て驚いたり、恋愛映画見て感動したり。それってみんな気持ち良いことだよ」

「うん」

「人って心臓を動かさないと生きてる気がしないんだよ。普段は鼓動なんて感じない心臓を、どきどき動かしてるときだけ生きてるんだなあって思うから、マラソンしたり映画を見たりして、心臓を動かすんだなって思うんだ」

「うん」

「ドキドキしないと、心臓がどこにあるかわから無くなっちゃうんだよ。確かに胸の中に心臓があるはずなのに、それがどこにあるかわから無くなっちゃうんだよ。だからどきどきして、生きてるって感じる 때가幸せのとき」

「うん」

「それだけ」

「……うん」

夏目はビールを飲んだ。

梅もカクテルを飲む。

夏目はビールをもう一口飲んで言った。

「この前、梅ちゃん遊園地で言ったろ？」

「なんて？」

「俺と話してて、なんだかデジャヴを感じたって。実は俺もなんだよね。なんだか昔見た夢でも、こうやって誰かと話してた気がする」

「ふーん……」

梅はカクテルを口に含む。

「三年前に別れた彼氏って、梅ちゃんの心臓のせいだったの？」

突然夏目がそう訊いた。

梅はすぐには答えなかったが、一口カクテルを飲んでから頷いて見せた。

「そう」

「まだ好きなのか？」

「うん」

夏目はまたビールを飲む。

ビールが空になった。

夏目はビニール袋から新しいビールを取り出すと、ふたを開けた。

「忘れようとは思わないのか？」

「思わない」

梅はカクテルを一口飲む。

目の前を野良猫が横切った。

「心臓病を知って梅ちゃんを捨てた男なんだから」

「そう」

「どうして、まだ引きずってるんだ？」

「それでも好きだから」

野良猫が夏目のことを見て「にやあ」と鳴いた。

夏目を見て鳴いたくせに、その猫は梅のほうに近寄ってきた。

梅は野良猫の頭をなでた。

気持ちよさそうに目を細める野良猫。

「酷い男だったと思ってる？」

「思ってる」

「どうして、いつまでも酷い男を想ってるんだよ」

梅が夏目を見た。

夏目は視線に気づいたが、梅のほうは見なかった。

梅は視線を猫に戻すと言った。

「なんでそんなことばかり訊くの？」

夏目は答えなかった。

すると、しばらく猫を撫でていた梅が話を始めた。

「本当はひどい人だなんて思ってたない。何かの勘違いだったんだって思ってる。私から離れていったのは心臓病のせいじゃなくて、もっと他の仕方ない事情だったんだって」

「……なんで信じれるんだよ、何年も」

「私、弟がいたの。あすなろっていう名前の弟」

梅が猫を抱き上げ、膝の上に置いた。

「弟は私が二十歳のとき死んだの」

会話の内容など全く知らないはずの猫は、梅を見上げると慰めるように鳴いた。

「病気と分かってから半年しか生きなかった。でも、その半年はものすごく大切だったし、何よりも濃密だった。弟は最初のうち入院を繰り返していたけど、病状が悪くなって、もうほとんど病院で余生を過ごしてた。弟は日に日にやつれていって、私が見舞いに行っても、とろんとした目で私を見つめるだけで、もう笑いかけてもくれなくなった。もう駄目なんだな、って思ったら悲しくて毎日泣いた。ものすごく明るかった弟は、もうベットからも起き上がれなくなつて、食事も出来なくなつた。あと数日の命。誰もそんなこと言わなかったけど、みんなそう理解してた」

夏目はちらりと梅を見る。

梅は無表情だった。

「弟は楓のことが大好きだった。お兄ちゃんお兄ちゃん、っていつもくっついて、実の兄みたいに慕ってた。でも楓が見舞いに来て、弟はもうその瞳にすら何も映さなかった。親戚の人とかは葬式の話もするようになってた。棺桶は上等なものにしてあげようとか、墓石はどこよりも立派なものにしようとか。私はそれが堪えられなかった。だってまだ生きてる。弟はまだ死んでないんだから、そんな話しは聞きたくなかった」

猫が不意に何かに気づいたように顔を上げた。

梅の元を走り去る。

何処かに走っていく猫を眺めながら、梅は話しを続ける。

「明日か明後日までには死ぬ。医者からもそういう言葉が出た。でも、でもね。弟は、それから一ヶ月も生きたの」

夏目はビールを口に運ぶことはなかった。

じつと話しに聞き入っていた。

「もう二三日の命。そう言われたとき、楓がお土産を持ってやってきた。おもちゃだった。銃のおもちゃ。日曜日の朝にやつてる大人気だった特撮番組で、活躍するスーパーヒーロー五人組が持つてる銃。その銃にね、サインが書いてあったの。登場人物で赤色のリーダーのサイン。もちろん、もう弟に意識はないから、そんなの見ても分からないと思った。でも何より、楓がまだ弟に希望を持たせようとしてくれることが嬉しかった。みんな死んだ後の相談ばかりしてるのに、楓だけは弟に生きようとさせてくれた。そして次の日にもおもちゃを持ってきた。今度はおもちゃのナイフ。それは黄色のヒーローの武器だった。それにもサインが書かれてた。本物かどうかは分からないけど、本物だって信じてる」

遠くに二匹の野良猫が見えた。ゆっくりと公園内を横切っている。ある日、私が病室に行くと、弟が意識を取り戻してた。もう意識を取り戻すことなんて無いって言われてた弟が、目を覚ましたの。弟は必死に手を伸ばして、楓の持ってきてくれたおもちゃの銃を取ろうとした。私は慌てて弟に銃を持たせた。そしたら、そしたら……弟がにっこりと笑ったの。信じられなかった。もう何日も意識が無かったのに、にっこりと笑ったのよ。楓はスーパーヒーロー五人の武器、全部を持ってきた。全部にサインが入ってた。どうやってサインをもらったのか、私は知らないけど、きっと弟の為に一生懸命お願いして書いてもらったんだと思う。何日かすると弟は喋れるようになった。片言だったけど確かに「お姉ちゃん」って言ったの。奇跡なんて信じてなかったけど、有り得るんだって思った」

梅は両手を額のあたりにあて、必死に込み上げてくるものをこらえた。

唾を飲み込み、話しを続ける。

「それから弟は、ベットから上半身を起こせるようになった。先生は奇跡だつて言つてた。私も、もしかしたらこのまま病気が治るんじゃないかと思って思ったほど、弟は元気になつていったの。日曜の朝になるとスーパーヒーロー番組を見て、悪者が出てくるとスーパーヒーロー達と武器で一緒に戦うのよ。スーパーヒーローがピンチになると、弟が変わつて戦つた。武器を変えながら登場人物達と一緒に悪者をやっつけるの」

うう、と梅がうめく。

感情的になると心臓が悪い。そんな事は分かつてる。だからつて、そう簡単に感情を落ち着かせられるものではない。

「本当に治るんだと思つた。楓が病室にやつてくるたび、彼が弟に命を吹き込んでみたいだつた。弟が死ぬ何日か前、楓は今までで最高のプレゼントを持ってきた。一つのビデオカセット。本当はいけないんだけど、病室にビデオデッキを持ってきてもらつて家族みんなと楓でそのビデオを見た。そのビデオは、スーパーヒーロー達が勢揃いして、弟の為に作ったビデオレターだつた。スーパーヒーロー達が一人一人、弟に「あるなる、負けるな」「あすなる、がんばれ」「あすなる、やっつける」「あすなる、戦え」「あすなる、勇気だ」つて声を掛けていったの」

一呼吸置く梅。何度か息をついてから再び話し出す。

「弟はスーパーヒーローたちに声をかけられ、何度も返事をしながら見てた。私は嬉しくて嬉しくて涙が止らなかつた。ビデオは最後にスーパーヒーロー達が勢揃いして、合成で作つた弟も登場して、一緒に悪者をやっつけるの。楓が弟を撮つたビデオを持ち込んで、特別に作つてもらつたんだつて。弟はそれから毎日のように、そのビデオばかり見てた。スーパーヒーロー達が弟に声を掛けるとポーズを決めて「おお」つて返事してた」

鼻をすする梅。

夏目はビールの缶を握り潰しているのも気づかなかつた。

「弟は最後の一ヶ月間、確かに生きていた。誰もが諦めてたのに、

楓だけが弟を救おうとしてくれた。弟は死ぬ間際まで、そのビデオを見続けた。最後、弟の手は硬く握られてた。スーパーヒーローの励ましにこたえるように、弟は最後まで戦ったのよ。弟に時間を与えてくれたのは楓。戦う気持ちとか勇気とか、教えてくれたのは楓なのよ。私は楓が好き。楓は決してひどい男なんかじゃない」

そう話し終えた後、梅はしばらく涙をこらえるように地面を見詰めていた。

夏目も地面を見つめていた。

手に持っていた缶が潰れていたことに気づき、中身を一気に飲み干すと、胃袋にアルコールが染みるのを感じながら、ぼんやりと地面を見つめた。

梅と夏目が部屋に戻ると、泣きながら桜子が梅に抱き着いてきた。「どうしたの？」

と梅が訊ねると「竹彦さんがあ……」と、きつく抱きついてくる。リビングに行くのと、竹彦が裸で躍っていた。

啞然とする梅と夏目。

楽しそうな松太郎の姿も見えた。

「近所の迷惑でしょ！ 服を着なさい、竹彦！」

「あんら梅。遅かったじゃない？ どうだった？ 一発やってきたんでしょ？」

「ば、馬鹿なことを言わないで！」

「竹彦さん、それは目に公害だ。服を着てください」

夏目がそう言うと、楽しそうな松太郎が「まあまああ」と言った。なにが「まあまああ」なのかは分からないが、夏目は本当に服を着て欲しかった。

その隣で燕子花が悲痛そうに言った。

「おかしいんですよ。俺はね、三対三って訊いたから来たのに、ど

「考えたって四対二ですよね？」

「言いながら竹彦の股間を指差す。」

「とにかく服を着て！」

梅が怒鳴ると、つまらなそうに竹彦は口を尖らせて服を着だした。松太郎が一人でへらへらと笑っている。

「松太郎まで、そんなに飲んで」

松太郎が酔うなんてよほどのことだ。桜子との久々の再会に酒の量を誤ったのだろうか。

梅の誕生会パーティーは、早くも酔っ払いの宴に成り果てた。

二時間後には、誰もがいびきを掻いて眠っていた。

竹彦ははずかしげも無く、大股を開いて眠っており、誰だか分からないが新参の男が竹彦の股を枕にして眠っている。

部屋の隅のほうで丸くなって眠っているのは松太郎で、ソファーに横になっているのは泣き付かれた桜子だ。

「お酒は平気なのか？」

夏目が梅に訊いた。

梅は台所で洗い物をしている。

「少し酔ったけど、あれくらいなら大丈夫」

夏目は残り物をつつきながら一人ビールを呷っている。

良くあれだけ騒いで、苦情の一つも来なかったもんだ。

我慢強い住人に感心しながら、夏目は柿ピーを口に放り込む。柿

ピーには親近感があって夏目の大好物だ。

「なあ、梅ちゃん」

「なあに？」

「前にさ、古代遺跡品展覧会で会ったでしょ。覚えてる？」

「ああ、うん。覚えてる」

「あの時さ。覚えてると思うけど」

「なに？」

「うん、だからさ……泣いてただろ？ 逆転の……何とかを見てて梅がエプロン姿で居間に来て、食器を抱える。」

「逆転の聖水」

梅がそう言っただけで台所に引き返して行った。

夏目は柿ピーを口に放り込む。何度か噛んでビールで喉に流し込んだ。

竹彦のいびきがうるさい。

「何で泣いてたんだ？」

夏目が訊いた。

「気になる？」

梅が訊いてきたので「気になる」と答え、「何で気になるの？」と再び訊かれた。

「なんとなく」

夏目がそう答えると「私のことが好きになっちゃった？」と言われ、夏目は柿ピーを吹き出した。

「汚いなあ。テーブル拭いたばかりなんだから汚さないですよ」

なら、へんなこと言うなよ。

夏目は柿ピー吹き飛ばしたテーブルを拭いた。

そんな時、梅が言った。

「逆転の聖水っていうのは伝説があるの。ほら、あの遺跡品展って遺跡品一つ一つに伝説があるじゃない。逆転の聖水にも伝説があるの」

「どんな？」

「むかしむかし、弥生時代のお話。卑弥呼が邪馬台国の王として君臨していた頃」

「いきなり胡散臭いな」

「いいでしょ。伝説なんだから」

「……それで？」

「ある田舎町の農民の男は、お姫様と恋に落ちたの。農民の男は働

き者で、誰からも好かれてた。そんな人柄にお姫様も惹かれて、お姫様とこっさり密会するようになったの。幸せな日々を送ってた。お姫様も幸せだった。いつまでもこんな毎日が続くと思っていたけど、ある日、王様はお姫様に許婚を決めてしまった。農民の男なんでもっての外。お姫様にはそれなりに似合う近隣国の王子様を許婚としてしまったの。農民の男は、どうしても姫と一緒になりたかった。そこで男は思い出した。森に住む妖精の話。妖精は「逆転の聖水」というなんでも逆転させてしまう聖水を持ってたの。農民の男は、その水を王様に飲ませれば、きつと考えが逆転して、農民の男とお姫様の結婚を許してくれると思っただ」

夏目は柿ピーをかじりながら話しを聞いていた。

「そこで精霊が住むという森の中に入ってた農民の男は、三日三晩森の中にさ迷って、ようやく妖精達を見つけた。そして、それからまた三日三晩妖精達にお願いして、これが最初で最後と約束と「逆転の聖水」を貰い受けた。そのとき男は二つの条件を告げられた。ひとつは「逆転の聖水」は一度に全部飲ませないと効果がないということ。もうひとつは逆転させることができるのはたったひとつだということ。「逆転の聖水」を使うときには何を逆転させるのか、きちんと思い描かないと駄目なの。農民の男は浮かれて村に戻り、王様にこれを飲ませる作戦を立てた。もちろん、農民の男の望みは反対されていた結婚を逆転させて賛成させること」

洗い物をしている梅は、その手を休めることなく話し続けた。

夏目は柿ピーをかじりながら黙って話を聞く。

「でもその頃、お姫様が病に倒れたの。もう治らない病気。農民の男は絶望した。一体何の為に「逆転の聖水」を取ってきた分らない。悲しみの果て農民の男は思い立った。この「逆転の聖水」をお姫様に飲ませれば、きつと悪い病気が逆転して治るのではないか。でも、そうしたら王様に飲ませる「逆転の聖水」が無くなってしまふ。「逆転の聖水」はもう貰えない。「逆転の聖水」を王様に飲ませたらお姫様は助からないし、お姫様に飲ませたら結婚は出来ない。

農民の男は迷った挙げ句、やはりお姫様の命を救うことにした。お姫様は元どおり元気になったけど、農民の男はお姫様とは結婚できなかったの。でも農民の男はそれで良かった。だって何よりも大切なお姫様の命が助かったんだから」

「それに感動したの？」

梅は「ううん」と言っつて首を横に振った。

「この聖水を弟に飲ませたら、弟は死なずに済んだのかなって思ったら涙出た」

弟か。

夏目は柿ピーを口に放り込む。それが最後の柿ピーだった。

夏目はしばらくぼんやりしていた。

窓の外を眺めていると、洗い物を終えた梅が居間に戻ってきて、倒れ込んでいる肉の固まり全員に毛布を掛けて回った。

夏目は立ち上がる。

「俺、そろそろ帰る」

「あ、うん。大丈夫？」

「なにが？」

「結構飲んだみたいだから」

「大丈夫」

夏目はそう言っつて腰を上げた。

玄関まで行くと梅が見送りに来た。

靴を履いて立ち上がっつて振返る。

梅が立っている。

夏目は梅を見た。

「……なに？」

梅が不思議そうに言った。

夏目は少し考えてから「いいや」と言っつて玄関を開いた。

扉が閉まる間際、かすかに梅が手を振った。

扉が閉まる。

夏目は少しの間、玄関の扉の前でぼんやり立っていた。

脳天がかゆくなったので、ぱりぱりと搔いてから家路に向かって歩き出した。

数日後、夏目は交番で書類の整理をしていると、立川巡査が話し掛けてきた。

「おい、問題児」

夏目は無表情に振返る。あの事件以来、夏目の扱いはとても悪い。「お前の助けた結婚詐欺師、伊集院桜子の国立公園での強奪と空き巣の件を否定してるらしいぞ」

「そうですか」

立川巡査はあくびをしながら交番を歩き回り「ったく、新人が事件を解決すると、こうだから嫌だよ」と言った。

一体なにが「こうだから」なのかは不明だが、夏目は気にしなかった。

「古代遺跡品展覧会、爆発騒ぎがあったらしいぜ。夜中で客は居なかったから被害者はないけど、どうやら予定より早めに店仕舞いするらしいよ。夏目、どうだ？ 爆破騒ぎもお前が解決したら？」

夏目は答えず書類整理を続けた。

逆転のカプリッチョ！

お昼時、竹彦が映画のチケットを取って帰ってくると、梅が食事の用意をして待っていた。

「いい匂い」

竹彦が鼻をひくひくさせながら入って来ると、エプロン姿の梅が迎えた。

「チケット取れた？」

「大丈夫よ。明後日のロードショーよ。全く、大変だったんだから

ね。人脈駆使して手に入れたわ。ちょっと高く付いたからね」

「ねえ、本当に竹彦いかないの？」

「レイトショーだから、私、仕事よ。桜子と行ってらっしゃい」

「そうする」

梅はテーブルに料理を用意した。

「随分豪勢ね。何かあったの？」

「なにがあつたつて、チケットを取ってきてくれたお礼だよ」

「ふーん。どうせだから桜子も呼ぼうか」

「桜子は仕事だよ」

「そうか、あの子ちゃんと働いてるのよね。梅もそろそろ就職しないと」

「入れてくれる会社があつたらね」

「毎日のように就職活動しても見つからないものなの？」

「騙せないのよ。面接のとき、きちんと説明しておかないと就職してから大変だからね」

「アルバイトすれば？ ファーストフード店でスマイルすれば？」

「アルバイトは重労働だから。それより用意できたから食べてよ」

竹彦は食卓に付いて、料理の数々を眺めた。

これだけの料理を用意した梅だが、本人はほとんど口を付けない。

いただきます、と言って食事を始める二人。

「おいし。これだけ出来れば、すぐにでもお嫁に行けるのにね」

「誕生日を越えてから結婚、結婚つてうるさいわよ」

「あんたは結婚できるからいいけど、私は出来ないのよ」

「女とすればいいじゃん」

「冗談じゃないわ。恐ろしいことを言わないで」

梅が思い出したように席を立った。棚のほうに行くとき引き出しを開き、何かを手にとった。

「そう言えば、今朝、桜子が写真持ってきたの。誕生会の写真。あんまり食事に見るような写真じゃないから、後で見てね」

と言った梅だが、竹彦はかまわず写真を取り出してめくった。

「あらあら私だったらはしたない。この寝姿を取ったのは誰？」

「私。みんな寝ちゃって退屈だったから、竹彦の寝相を取ったの」

「どれもこれも写真屋さんにも気の毒なものばかりね」

「いくつか現像してくれなかったのよ。裸踊りの写真とか」

「なんだ、あの写真、マンシヨンの掲示板に貼り出そうと思ったのに」

「御近所の迷惑になるようなことはやめて」

二人はしばらく黙って食事を取った。テレビからのBGMが聞こえて、梅がその映像を眺めていると竹彦が言った。

「松太郎と桜子のツーショットがないわ。たしか撮ったはずなのに

……」

「いつ？」

「あんだと夏目ちゃんがお酒を買いに行ってる時」

「きっと竹彦にからかわれると思って持ってこなかったのよ」

「あら勘が良くなったわね、桜子」

「あんまり苛めないでよね。あの子泣いてばかりだったじゃない」

「だって可愛いんだもん」

写真をすべてみ終わった竹彦は、それをテーブルの上において言った。

「夏目ちゃんと梅のツーショットも無かったわよ」

「そう？」

「思春期の少女みたい、梅ったら」

「なんでよ」

「惹かれ合うほど距離を置く二人」

「そんなことばかり言うのね」

「ねえ梅。二人でお酒買いに行ってるとき、なにしてたの？ 遅か

ったじゃない」

「別に何もしてないよ」

「嘘付け。だって遅かったのは本当なんだから、話しは結構したん

でしょ？」

「した、かな」

「何話したの？」

「たいしたことは話してないよ」

「私にも内緒なのね」

「なにも内緒にしてないって」

「じゃあ、私たちが眠っちゃってから二人だけ起きてるとき、何を話したの？」

「別に、なにも話してないよ。すぐ帰ったし」

「じゃあ、あの「逆転の聖水」の話は何だったの？」

「き、聞いてたのね？」

「聞いてたよ。弟のこともちよっと話してたよね。夏目ちゃんに弟のことを話したの？」

「もう！ いいじゃない！」

梅がむくれてきたので、竹彦は「ふふん」と笑って訊くのをやめた。

第十六幕 「 燻ってる火種はいずれ大火事を招きます 」

土曜日になって、管轄地域巡回中だった夏目の携帯電話がなった。非通知。

非通知で電話をしてくるのは栗子か松太郎だ。

栗子であることを願って電話を取ると、掛けてきたのは松太郎だった。

「なんだよ、松太郎か」

夏目が暗い声を出すと、松太郎が真剣な口調で言った。

「なんだじゃないよ夏目。ちよつとおかしいんだよ。」

「なにが？ 俺、巡回中なんだけど後に出来ないか？」

今聞いてくれ。もしかしたら緊急事態かもしれない。

「なんだよ」

この間の事件のとき、安藤が俺に言った台詞があるんだよ。それが、ちよつと気になってさ。お前に聞きたいことがあるんだ。「何？」

夏目は人目を気にして、あくまで仕事の電話だということを装いながらそう聞いた。

安藤の奴、強盗と空き巣の容疑を否定してるんだろ？

「何でそれを？」

俺は何でも知ってる。それで聞きたいんだけど、桜子さんが国立公園で盗られた財布にはなにが入ってたっけ？

「もう覚えてないよ。ちよつとのお金と、ビデオレンタルのカードとか、子供の写真じゃなかった？」

「やっぱりそうか。」

「なにが、やっぱりそうなんだよ」

松太郎は少しの間を空けて言った。

安藤は俺にこう言ったんだよ。「せめて桜子の写真と八潮の写真が欲しい」って。それでアルバムを開いてたんだ。

「八潮君の？」

財布を盗んだのなら、写真を持つてるはずだ。欲しいのなら取っておくはずだ。それにあの場面で「子供の写真が欲しい」なんて嘘を付くには何とも不自然だし……夏目、どう思う？

「強盗と空き巣の犯人は別にいるっていうのか？」

それと犯人の不適な笑いと敬語。

「敬語だからなんだよ」

安藤が敬語を使う理由はない。それに安藤なら声で桜古参に安藤だとばれるはず。

確かに。

少し調べてみた。日本データバンクの調査依頼書のデータをハッキングしたときの資料を見てみたら、桜子さんが強盗に遭った日、空き巣に入られた日は、ことごとく調査がされていない。月の半分は尾行調査してるのに、被害に遭っているときだけは探偵が尾行してないんだよ。その偶然は怪しい。だから桜子の素行調査を担当している調査員を探し当てた。沢村桂介、三十二歳。もしかしたら、そいつが調査日以外の日に桜子さんの財布を狙ったり、空き巣に入った張本人かもしれない。

「……本当か？」

確信はない。でも、自分のお客の娘を調査しているってことで、財布を盗むとき敬語を思わず使ってしまったんじゃないかと思うんだ。その辺は夏目の管轄地域だろ？ だから頼む。桜子さんのマンション周囲の巡回を強化してくれ。俺はなるべく桜子さんと一緒に居て、沢村桂介をもっと調べてみるから。

「……容疑がかかってなければ警察は動けない。だけど最善は尽くすよ、俺の巡回のときはマンション周囲の巡回を増やすよ」

ありがとう。時々、桜子ちゃんの様子を見に行っちゃってくれ。

「お前の役目だろ」

だ、だって……。

桜子のことになると、急に卑屈になる松太郎。

もう一つ、話しがあるんだよ。

「なんだよ」

それがさ、さっき桜子ちゃんから電話があったんだ。

「なんだよ」

桜子ちゃんが、お前に頼みごと。

「俺？ 桜子ちゃんが俺になんの頼みごと？」

お前の携帯番号を知りたいんだってさ。

「何で桜子ちゃんが？」

梅ちゃんに教えるんだって。

「梅ちゃんに？」

そう、そうだよ。それがさ……。

夜になって梅から桜子に電話をすると、なんとも心細そうな声で桜子が電話に出た。

桜子を映画に誘おうと思っていた梅は、最初に「どうしたの？」と声を掛けた。

ああ、梅ちゃん。良かった……。

「何が良かったの？」

無言電話がたくさんかかってくるの。

「無言電話？」

うん。八潮は寝ちゃったし、なんだか恐くて……。

「だって安藤は……」

そう言っつて梅は口をつぐんだ。安藤の話題はこれまで一度もしていなかった。

でも大丈夫。もう今夜は無言電話、無くなったから。それで、どうしたの梅ちゃん。

「ああ、そうそう。桜子、明後日の土曜日、空いてる？」

明後日？ あさって、あさって……。

そう呟きながら、桜子は思い出しているようだった。

あ、その日は駄目。

「ええー！ 駄目なの？」

うん、その日は、ちょっと……。

「なんでえ！？」

松太郎さんと……。

男か！

「なんだあ、一緒に映画見ようと思ってたのに」

映画？ 何の映画？

「今度やる「愛と友情と未来のその先に」って映画」

え！？

桜子が声を上げた。

「なに？ なんかへん？」

私たちもその映画を見に行くの？ ねえ何時から？ レイト

シヨウ？

「九時からのレイトシヨウ」

一緒だ！ そうかあ。それじゃあ一緒に行こうか、梅ちゃん。

「やだよ、二人で行きなさい」

だって、独りで行くの？

「独りで行くしかないでしょ」

竹彦さんは？

「仕事」

夏目さんは？

「知らない」

じゃあ、夏目さんに電話してみたら？

「なんで？ なんで、夏目なの？」

なんで？ 夏目さんじゃ嫌？

「……嫌じゃないけど……」

四人で行こうか？

「あなたたちは二人で行きなさいよ」

「じゃあ梅ちゃんは夏目さんと。」

「私は独りで行く」

夏目さんと一緒に行ったらいいのに。

「第一、夏目さんの電話番号だって知らないし」

あ、そうか。

「そうよ」

それじゃあ、私が松太郎さんに聞いてあげる。ちょっと待っててね。

「別にいいって」

話も聞かず通話が切れる。

呆然と受話器を見つめる梅。

余計なことを。

実際余計なことだと思った。

梅は今度の映画を、女友達と一緒に見たかった。映画を見終わった後のおしゃべりが楽しみだったりもするのだ。男とだとそうもいかない。

しばらくして電話が鳴った。

電話に出ると桜子で、妙に浮かれた口調だった。

梅ちゃん？ ねえ、電話番号きいたよ。それにね、それにね。

映画も行くって夏目さん。

「え!？」

誘っちゃった。うふ。

「ふざけるな桜子」

……怒った？

「何で勝手に誘っちゃうのよ」

だって、時間短縮。

「私が誘うなんて言っていないじゃない!」

……怒ってる……。

「当たり前でしょ!」

「じゃあ、どうする？ 誘っちゃった。」

「どうするって、もう、どうするのよ。」

「仕方ないから、一緒に行くとか。」

「私は男と行きたくないの。」

夏目さんなら大丈夫だよ。梅の命の恩人じゃない。お礼しなくちゃ。」

「……そうだけど……。」

「お礼だよ、お礼。そう考えればいいんだよ。」

「……せっかく、落ち着いてみたかった映画なのに。」

「夏目さんと一緒に居ると落ち着かないの？」

「どうしてみんなして私と夏目のこととかやく言つの？」

「なんでだろう……。なんとなくそうじゃなきゃいけない気がする。」

「……もう後は私に任せてよね。もう勝手に決めないですよ。」

「ごめんなさい。」

「じゃあ、電話番号教えて。」

桜子が落ち込んだ声で番号を言った。

メモを取る梅。

「梅ちゃん、ごめんねー。映画館で会ったら声かけてねー。」

「そう言っつて、桜子が電話を切った。」

「はあ、とため息を吐いて頬杖を突く梅。」

「夏目ちゃんと行くことになったの？」

「振返ると竹彦が居た。」

「い、いつからそこに居たのよ。」

「最初から居たわよ。やーね、気づかなかったの？」

「竹彦はそう言っつて、梅に顔を近づけるともう一度言った。」

「夏目ちゃんと行くことになったの？」

「わかんないよ。」

「行きなさいよ。」

「何でみんなして、私と夏目さんをくっ付けようとするの？」

竹彦が体を起こした。  
薄く微笑むと、優しい声で言った。  
「それは夏目ちゃんが、梅のことを好だからだよ」

仕事帰り、電車に乗りながら乗客を眺めている夏目。

席は埋まっているが、立ち客はほとんど無い。

右斜め前に座るカッパル。若いが落ち着いた雰囲気の二人。ここまでは聞こえないくらいの声で会話をしていた。

どうして男女が引き付け合うのか、考えても夏目には分からない。その両脇に座って、沈黙を守る会社員。たいていは読書中だが、眠っているものも少なくない。会社員達も、当然、胸を高鳴らせるような出会いを経ているはずだ。

夏目は好きな黒人ブルースを聞きながら、ぼんやりしていた。

電車が止り、新たな客が入ってくる。

十代くらいの男女。「今風」とは若者だけに許された言葉。砕けた言葉で会話する二人の行き先は、夏目には想像も付かない。

電車を降りれば別れて歩き、永遠に会うこともないだろう。

人の出会いはただの偶然だ。そこに運命も因果も無い。

出会う方に決まりも規則も無い。

なのに、人は出会いに理由と運命を感じる。

心臓が織り成す鼓動という信号は、人に生きる意味を知らせて、出会った理由を教える。

心臓が確かに胸の中になる。そんな風を感じるときだけ、人は生きてるって感じる。

梅が言った言葉。

今更ながら夏目の頭の中に反芻される。

心臓がどこにあるかわから無くなったら　なんて考えても想像が付かない。鼓動を感じないことは、確かに不安になるかもしれない

い。

映画なんていつ以来だろうか。

今までにだって、映画には数回しか行ったことがない。ビデオさえ見ない夏目は、映画のことは全く分からない。明日見に行く映画だって、どんな映画だなんて全く分からなかった。

夏目の自宅の駅で電車が止った。

夏目は電車を降りる。

この駅で電車を降りる客は少ない。夏目を合わせてプラットホームには数人の影しかなかった。

夏目の脇をゆっくり走り出す電車。

なんだか、夏目は孤独を感じていた。

息の詰まりそうな孤独。

たくさんの人がいても感じる孤独。

苛立ちに似た感情が湧きあがってくる。

夜空を見上げて星は出ていない。

家路に向かって歩く。

もう少し夜風に当たりたいと思って、遠回りして帰った。

梅は電話を切った後、夜風に当たりたいと思い、テラスに出た。まだ夜になると肌寒い。それが今は心地よかった。

冷たい風に当たると心臓に良くないわよ。

部屋の中から竹彦が声を掛ける。

梅は「うん」と返事をしただけだった。

前の通りに車や人が通る。

あの人たちも私のように心があって、悩んだり興奮したり、悲しんだりしている。

そう思うと梅の心拍数が少し上がった。

夜空を見上げると、曇っているのか星は見えなかった。それを残

念に思いながら遠くを眺めた。

夏目ちゃんが梅のことを好きだからよ。

竹彦の声がした気がして部屋を振返る。

そこには誰も居ない。

気のせいかな。

梅は再び夜の町を見る。

なんで夏目が私のことを好きだなんて分かるんだ。だいいち、  
そうだとしても、まるっきり私の意志は無視じゃないか。

クラクションの音、アスファルトとタイヤが擦れる音。人の声。  
いま見える風景の中に、知っている人は一体何人いるのだろう。

楓……。

梅は楓を想った。楓を想い続けるのは、梅にとって不幸なことな  
のかも知れないが、楓を想い続けている限り梅の心臓はとくん、と  
くんと信号を鳴らす。

自分は生きている。

そう感じさせてくれるのは楓だけだ。

会いたい……。

すこし涙が出た。

それが零れ落ちることはなく、梅は部屋に戻った。

日曜日の朝に、梅の元に桜子から電話が入った。

電話に出ると、桜子が慌てたように言った。

梅ちゃん？

「どうしたの？」

あのね、梅ちゃん、私、さつき八潮を親戚のうちに預けてき  
ただんだけど、帰ってきたらね。なんか家具が動いている気がするの。

「また？ それで？ 鍵は？」

掛かってた。玄関も窓も、全部。盗まれたものも無い。わた

し、恐いよ。

「警察には連絡したの？」

「だって警察は……。」

桜子が萎れるようにそう言った。

警察は来てくれない。来てくれたとしても、何も解決してくれない。それは前回のことで分かっていた。

梅ちゃん、今夜映画行くまで一緒に居てくれない？ 私、一人じゃ心細くて。

梅はちょうどシャワーを浴びて出てきた竹彦を振返る。

竹彦が頭を拭きながら、梅の表情を見て不審そうにした。

「桜子の家に、また空き巣が入ったらしいの」

竹彦がタオルを肩に掛けながら言った。

「だって安藤は捕まったんでしょ？」

「そうなんだけど、無言電話も鳴り止まないみたいだし」

さすがに心配そうにする竹彦。

梅は電話越しの桜子に言った。

「松太郎君には電話した？」

「してない。」

「じゃあ松太郎君に来てもらいなよ。すぐ来てくれるよ、きっと。」

私もすぐ行くから」

うん。そうする。

「すぐ電話するのよ」

分かった。

梅は電話を切った。竹彦に振返る。

「竹彦……」

「大丈夫、私も行くよ。なんか物騒だね。夏目ちゃんにも連絡する

？ 一応警察官だし。どうせあんた達、今夜一緒に映画行くんでし

よ？」

「そうだけど……」

確かに110番するよりは、親身になってくれるかもしれないな

い。

「私が電話するから、あんた早く桜子のところに行ってきなよ」

「うん、そうする」

「私は夏目ちゃんに電話して、それから化粧もしていくから」

化粧なんていいよ。そう思ったが口にはしなかった。

桜子は気味が悪くて、この部屋に居たくなかった。

ものすごく嫌な予感がするのだ。

松太郎に電話をしなくてはならない。でも一刻もこの場所にいるのが嫌だった。誰も居ない無人島に夜中一人残されたら、こんな気持ちになるかもしれない。

確か玄関ホールに公衆電話があった。そこから松太郎さんに電話すればいい。

桜子はそう思い当たった。

桜子は追い立てられるように部屋を出た。

その際、慌てていた桜子は子供の靴を蹴り飛ばしたことに気づかなかった。

そして戸締まりを確認しなかったことが、この事件を最悪な方向へと導いた。

梅はエレベーターを降り、桜子の部屋のある四階に来た。まだ午前中だが、部屋の前の通路には誰も居ない。

梅は桜子の部屋に行くと異変を感じた。

部屋の玄関が半開きになっている。

見ると子供の靴がドアに挟まっていた。

梅は言い知れぬ不安を覚えた。

「桜子？」

梅は声をかけながら、そろそろと玄関を開ける。

がた。

中から音がした。

桜子は居るはずだ。ならば桜子の立てた音だろうか。

そうだとしたら、どうして呼びかけに返事をしない？

梅は不安になりながらも「桜子？」と声を上げながら、部屋に入っていく。

居間の戸を開いた。

居間の戸を開いたとき、梅の目に飛び込んできたのは男の後ろ姿だった。

「だ、だれ!？」

梅は声を上げる。

居間の窓を開け、テラスから身を乗り出していたその男は弾かれたように振返る。

顔には目と口と鼻の部分だけに穴の開いたマスクをかぶっていた。その風貌は間違いなく桜子の部屋に入った空き巣に間違いなかった。

男はうろたえた。

桜子が突然帰宅し、逃げるに逃げられなかった男は、居間の隣の部屋にある収納に身を潜めていたのだ。じつと逃げるチャンスをつかかっており、桜子が部屋を出たことを知ると男はテラスから逃げようとした。

そんな時、梅が現れた。

男は焦った。今まで空き巣で見つかった経験など無かった。

未体験の現状に慌てふためいた。

ところが男を発見した梅は、驚愕して言葉を失っている。目を真

ん丸に見開いて、悲鳴すら上げられないで居る。

相手は女だ。

男は一瞬うるたえたものの、向こうは自分を見て恐れている事に気づく。

気持ち的に優位になった男は、にやり、と笑った。

ぼけっとからナイフを取り出す。

梅は口を開いて悲鳴を上げようとしたが、口から出てくるのは空気がばかり。

男がナイフを掴みながらふみよっていく。同時にあどさる梅。

「動くな」

重低音の声。

言われた通り、金縛りに遭う梅。

次の瞬間、男が手を伸ばした。

男が掴んだのは梅の髪の毛。

掴んだまま、男は梅を自分のほうに引き寄せると、梅の口元を力強く抑えた。

「悲鳴を上げるな。刺すぞ」

刺すぞと言われて、梅はそれを信じた。

心臓が一度、ドクン、と鼓動した。

梅は胸全体に、掻き毟られるような痛みを感じた。

発作の予感。

こんな時に…。

「大人くしろ」

男の声は、何処か遠くでする。

息が出来ない。

胸全体に広がる漠然とした痛み。

薬を……！

男の腕は石のように頑固だった。

自分の体温が、急激に下がっていくのが分かる。  
力が抜けて立っていられなくなる。

「おい、なんだよ……」

男は呆然と言った。

はなして……！

声には出せない。

苦しい。

心臓に通じる血管が縮小し、血液の循環を止めている。ニトログリセリンを口に含むことによって、ニトロの血管を広げる作用で発作を抑えられる。

薬はバツクの中だった。

気が遠くなる。

男はいよいよおかしいと思った。女が力無く体重を自分に預けている。

梅を掴んでいた手を放すと、梅はごろりと床に転がった。胸を抑えながらうめき声を上げ、床の上で蠢いた。

男は戸惑ったが、何より自分が逃げることのほうが先だ。

男は爪先を玄関に向ける。

男は女を振りかえった。

胸を抑え必死に息を付く女がいる。本当に生きているのが不思議なくらい顔を蒼白としている。

梅は必死に手を伸ばし、離れたところに落ちたバツクを掴もうとした。

それを見た男は思った。

この女は、バツクを守ろうとしている。

男にとって、苦しみながらもバツクを守ろうとする梅のその行動

は『バックには大事なものが入っている』ということを意味していた。大切なものとは、つまり高価なもの。

梅がバックを掴むより早く、男は梅のバックを拾い上げた。

「貰っていくよ」

男はそう言つて、玄関から出ていった。

「ま、待つて……！ それを……！」

去つていく男の背中に手を伸ばす。

ぼんやりとかすれてきた視界の中、男は一度も振りかえることはなかった。

がんと心臓がなる。

胸を突き破つてきそうだ。

全身が寒くなり、力が入らない。

こんなに苦しい発作は初めてだ。

竹彦……桜子……。

必死に声を出そうとするが、喉から出てくるのはやはり空気だけ。息を吸い込むと、激しい激痛。短く息をする。

梅は立とうとした。せめて玄関まで出ようとした。

そこから数センチも進むことは出来なかった。

梅にもう意識はない。

思うことも感じることも無い。

呼吸は弱く、短い。

呼吸の感覚が短くなってくる。

やがて呼吸が止つた。

瞬間、すべての力が抜け、梅は冷たい床の上にな垂れると、ぴくりとも動かなくなった。

その部屋に、外から公園で騒ぐ子供の歓声以外、何も聞こえてくるものはなかった。

## 第十七幕 【ピエロはもうどつていいか分かりませんでした】

桜子の事件で初めて私服の刑事が姿を見せた。階級はおそらく巡查部長以上のクラスの間人だ。

現場検証をする制服姿の警官と、私服姿の警官。

手帳を吐きながら、泣きじゃくる桜子に話しを聞いていた。桜子に寄り添うように松太郎も居る。

竹彦も居る。

「梅はバツクを持って出掛けました」

竹彦がそう言った。

私服の警官は、竹彦の言葉を手帳に書き綴った。

制服の警官が桜子の部屋を徘徊し、テーブルや窓の縁、テラスの手すりなどから指紋を採取している。

玄関先からは、野次馬根性を発揮した近所の住人が顔を並べている。警官に注意されるものの、散らばる気配はない。

管理人の男が説明をくれと外で叫んでいた。

桜子、竹彦、松太郎、夏目がこの現場に現れたときは、すでに警官が集まっていた後だった。

まず、救急車がマンションにやってきた。玄関ロビーで電話をかけていた桜子は驚いたが、まさか梅の為に来たものとは思わなかった。次に警察が来た。梅が担架で運び出されるのを見た桜子は病院に同行しようとしたが「事情説明が欲しい」と言われ、警官に止められた。

そのうち松太郎が現われ、次に竹彦、最後に夏目だ。

戸惑ったまま事情を聞き、四人は愕然とする。

「君は？」

ぼんやりとしていた夏目に、制服の警官がそう聞いていた。

夏目は答える。

「わたしは駅前交番の夏目巡査です」

「巡查？ 今日是非番かい？ どうしてここへ？」

「知り合いです。呼ばれてきたら、こんなことに……」

夏目はそう訊かれても話しに集中できなかつた。部屋の中を仕切りに見回している。

桜子が声を上げて泣いていた。悲痛そうに慰める松太郎の姿。二人も質問を受けている。

竹彦だけ落ち着いた様子だった。警官の質問に忠実に答えている。初動捜査が肝心だ。

竹彦は理解している。

息をしない梅を発見したのは、桜子でも竹彦でも松太郎でも夏目でもない。この部屋の前を通りかかった、近所の中年主婦だ。

扉が開いていることを不審に感じ、覗いてみたら倒れている梅を発見した。

今、玄関のほうで、その主婦が質問を受け、興奮気味に答えている。

「私のせい……！ 私のせいなの！ 私が部屋を離れたから！ 私の代わりに、梅ちゃん……！」

桜子が悲鳴のようにそう言った。

事情徴収は無理と悟り、警官が促して玄関のほうへ歩いて行った。ふと夏目は竹彦と目が合う。

竹彦は無言のまま、ゆっくりと目をそらす。

何を思っているんだろう。一番そばに居て、一番梅のことを知っている人間。責任を感じているのだろうか。

夏目は「聞いてますか？」と制服警官に言われ、我に返る。

「あ、はい。聞いてます」

「あなたは、被害者とどのような関係なんですか？」

被害者。

山田梅。

「友達です」

そう言いながら竹彦が気にかかり、そちらを見た。

「それじゃあ、住人の伊集院桜子さんとも友人関係にあったんですか？」

「ああ、はい」

竹彦の様子が変だ。

夏目はそう思った。

肩が揺れている。

夏目から見て竹彦は背中しか見えないが、その背中が左右にゆらゆらと揺れている。

そばに居る警官達に、竹彦の異変に気づいたものは居ない。

夏目は竹彦の元に歩き出した。

「あ、ちよつと」

後ろで警官が声を上げたが無視をした。

「竹彦さん？」

夏目が竹彦の後ろからそう声を掛けると、突然、竹彦は膝から崩れ落ちた。

慌てて抱き留める夏目。

周囲に居た警官も慌てて集まってきて竹彦を支えた。

竹彦は真っ青になって意識が無い。

「多分貧血だ」

そう言つて、私服警官が竹彦の頬を叩く。

薄目を開く竹彦。

「あ、ああ、ごめんなさい」

額に手を当てながら立ち上がるつとする竹彦。

「無理しないで」

夏目が制して竹彦をソファアの上に座らせる。

夏目は竹彦に付き添いながら言った。

「病院に行きましょう。事情徴収に付き合つ必要はない」

「でも……」

弱々しく言う竹彦。

「気分が良くなつたら、梅ちゃんのところに行きましょう」

竹彦は頷いた。

総合病院に付くと、受付に梅の病室を聞いた。

竹彦とともに病室の前に行くと、廊下に松太郎と桜子の姿があった。

松太郎は夏目の姿を見とめると手を挙げた。

二人のところに行くと言った。

「一命は取りとめたけど、危ない状態らしい」

竹彦がふたついた。

肩を抱きながら、ろうかのソファに座らせる。

桜子が顔を両手で抑えて嗚咽している。

「……いま説明しないほうがいいか？」

松太郎が気遣った言葉を言った。

夏目は迷ったが「説明してくれ」と言った。

松太郎が頷いてから、話しはじめた。

「梅ちゃんは発作に見舞われた。重い発作で、この間の遊園地みたいに心臓が止つたんだ。ただ今回は止つていた時間が長かった。数分間止つていたらしい。息を吹き返したけど……」

松太郎は、その先を夏目に耳打ちした。

夏目は頷いた。

松太郎も頷く。

そして言った。

「今、病室に両親が居て入れない」

病室内から、言い争うような声が聞こえてくる。

殺気立った雰囲気。

夏目は松太郎に耳打ちする。

「桜子ちゃんを、どこかで休ませてあげてくれ」

松太郎は察しがいい。

夏目が何を言っているか即座に理解し、桜子の肩を抱きながら病室前から居なくなつた。

事件は桜子の部屋で起きている。そして桜子を目的とした犯人に梅は被害に遭つた。

この事実には、両親は桜子を責め立てるかもしれない。もちろん桜子に責任はない。しかし理屈通りにはいかないのが両親の心情だ。

桜子も自分の招いた事態だと、責任を感じている。この上いざこざを起したら、みんなが嫌な思いをするだけだつた。

夏目は一人座る竹彦の隣に座つた。

「大丈夫ですか？」

竹彦は、しつかりとした様子で頷く。

「梅は？ どうなの？」

竹彦が聞いてくる。

話すべきか夏目は迷つたが、誰よりも親しい竹彦に黙っているのはおかしかつた。

「心臓は一度停止したけど、どうにか息を吹き替えしたつて。発見が早かつた。それでも数分間心臓が停止してて、もしかしたら……。大丈夫？」

「大丈夫。話して」

「心臓が長い間止つてると、脳に障害が残る可能性がある。まだ、きちんと検査したわけではないけど、その危険があるつて」

そう言つと竹彦は初めて涙を見せた。

「私のせい、私のせいよお。御両親になんて言つたら……」

夏目は竹彦の肩を抱く。

竹彦は肩を丸めて泣いた。

夏目は梅の居る病室のドアを見つめた。

脳に障害が残る……。

もう目覚めないかもしれない。目が覚めても以前の梅は戻つてこないかもしれない。

……そんなの冗談じゃない。

全く時間の感覚が失われていた。

実際、夏目と竹彦がそこに座り続けて三時間が経っていた。

不意に病室のドアが開く。

夏目と竹彦が顔を上げた。

病室から両親が出てきた。

どうこくしていた母親が竹彦を見るなり、つかみ掛つてきた。

あなたのせいよ！

男のような声でそう言った。

あなたが付いてたから梅の一人暮らしを許したのに！

父親が母親を引き剥がしてなだめた。

竹彦はひた謝っていた。お経のように「ごめんなさい」を繰り返  
し、顔を上げることはなかった。

すまない。ちょっと取り乱してるだけなんだ、気にしないで

くれ、竹彦君。

父親がそう言った。

君には感謝している。

父親はそう言って、泣き叫ぶ母親を連れて廊下の奥に消えていっ  
た。

竹彦も夏目も病室に入る勇氣はなかった。

二人の前を、何人もの人間が行ったり来たりした。

医師やナースが何度か梅の病室を出入りする。

時々、父親が様子を見にやってきたが、母親の姿はなかった。

二人は一言も口を利かず、ソファーに座り続けた。

やがて約束の時間。

今夜、梅と夏目が行くはずだった映画の時間。  
レイトシヨウ。

映画なんて、俺は見ても分からない。

やがてナースが現われ、面会時間が過ぎたことを知らせた。それほど強制はしないが、できるだけ早く帰れということだった。

病院内が消灯された。

廊下はしんと静まり返り、少ない明かりが廊下に反射していた。

かすかに聞こえる機械音。

かすかな音が、より静けさを強調する。

「梅は……」

竹彦がおもむろに口を開いた。

ずっと黙っていた為か、声がかすれていた。

「梅は自分の心臓を気遣う為に、感情を抑えることを覚えた。怒ったり悲しんだり、大笑いしたりすることも梅は我慢しなくちゃならなかった。だから冷たく見えたり、無関心に見えたりするけど、梅は心ではずっと求めてた。もっと、お腹が張り裂けそうなほど大笑いしたかったし、喉が張り裂けるほど大泣きしたかった。でも梅はその全てを押し込んで生きてきた」

夏目は黙って聞いていた。

「あの子は、普通の女の子が当然のように得られる幸せのほとんどを奪われてた。あの子にとっては恋愛のドキドキも毒なのよ。もちろんセックスなんて出来ない。あの子は処女。分かる？ 大好きな人が居ながら、あの子はその人と結ばれることができないのよ。大好きな人との子供も作れない。それでも楓は梅を愛した。梅のことも梅の周りのことも、すべて愛した。結ばれることは出来ない。でも抱き合っていれば、梅は幸せだった」

夏目は梅の病室のドアを眺めながら話しを聞いた。

「でも、あんなに優しい楓も、梅に優しくし続けることが出来なかった。あれほど梅を愛した男でも、梅と一緒に居続けることが出来なかった。楓は梅の心臓病を理由に梅と別れた。最後は手紙だった。

手紙には　あなたと生きていく自信がなくなった　それだけ書かれてた。あれほど仲の良かった二人は、たった一行の文章で二度と会うことはなくなつたの。あれほどの時間を過ごした梅を、たった一行の文章で捨てたのよ」

夏目はぴくりとも動かなかつた。まるで眠っているかのように佇んでいた。

「梅は感情を押え込んだ。微笑んだり、むっとしたりはするけど、それ以上はない。楓と付き合つてた頃だつて、感情を表に出すことはなかつた。でも夏目ちゃんが現れてから、梅、違つたのよ。梅、大声上げたり怒つたりだけど、少しずつ感情が芽生えてきて、私、嬉しかつたの。梅に感情が戻ってきて、なんだか嬉しくて、何度も夏目ちゃんに会わせようとした。梅が夏目ちゃんのことを好きじゃなくてもいい。でも夏目ちゃんは、梅を感情的にさせられる、たった一人の男だから」

竹彦が夏目を見た。

「梅を助けてあげて。私には出来ない。お願い、梅を助けて」

梅ちゃんを助ける？

「……梅ちゃんを助けるのは、医者の仕事だよ」

夏目がそう言つと、竹彦は首を横に振つた。

「違つわ。医者に梅を助けることは出来ない。心臓は直せたって、梅の心は直せないよ」

「そんなの俺にだつてできないよ」

「私にはもつとできない」

夏目は床を見た。自分の足が見える。

竹彦が言つた。

「ねえ、正直に答えて」

夏目は初めて竹彦を見る。

竹彦は涙で化粧を溶かし、真っ黒な顔をしていた。

しかし、真剣な眼差しで言つ。

「梅のこと、好き？」

夏目は答えなかった。

夏目は立ち上がる。

「夏目ちゃん。答えて」

ぼんやりと、病室のドアを見る夏目。

「男だろ。はっきりしろよ」

竹彦が男の声で言った。

夏目は、次には歩き出していた。

「夏目ちゃん！」

竹彦が声を掛けたが、夏目は答えず廊下の奥へ消えていった。

消灯され、薄暗い玄関ホールに行くと、一人、待合室でテレビを眺めていた松太郎がいた。テレビの明かりで松太郎の顔が色鮮やかに光っている。

かすかに聞こえる、テレビからの歓声。

夏目は松太郎に気づいて立ち止まる。

ゆつくりと、松太郎が夏目を見た。

「準備はいい？」

松太郎が静かにそう訊いてくる。

「いいよ。待たせたな」

夏目が答える。

松太郎が立ち上がってテレビを消した。

「絶対に犯人の居場所を洗い出してやるよ」

松太郎がそう言うと、夏目は薄く笑った。

「頼むぞ、お前だけが便りだ」

「行くぞ」

松太郎がそう言って歩き出した。

夏目も後を追った。

飛び込むように、松太郎が車庫に車を放り込んだ。

弾かれたように車の両脇から飛び出してくる、松太郎と夏目。

そのまま二人は口を利かず、早歩きで家の中に入った。明かりも点けず地下に入り込む二人。松太郎は地下の奥にあるコンピュータの電源を入れた。

「沢村桂介といったっけな」

夏目が興奮気味に言った。

やはり、興奮気味な松太郎が答える。

「ああ、日本データバンクの調査員だ。桜子さん専属と言っている。月の半分は桜子さんの尾行をしてる」

「そいつの住んでる場所は分かるか？」

「探してみるよ」

起動したコンピュータを高速で操作して、ウィンドウを開いている。この間ハッキングしてハードディスクに保存しておいたデータを参照する。

「この間、ハッキングしてから日本データバンクのセキュリティが強化されて、侵入しづらくなってる。もう一度データベースに張り込むのは不可能に近い。これが機材の弱点だ。方法が無くなると八方塞になる」

「そんなこと言ってないで、どうにか住所を割り出してくれ」

「方法は中継を変える事。ものすごく恐ろしいことだけど、やってみる？」

「何でもやってくれ」

「そうは言っても俺のコンピューターが破壊されるかどうかの瀬戸際なんだよね。まあ梅ちゃんの為だ。こんなもん捨ててやる」

「中継を変えるってどういう事？」

「この間、日本データバンクにハッキングするのに、日本データバンクとオンラインでつながる支店から侵入した。でも、セキュリティ

イが強化されて、そこからの侵入が出来なくなった。だから、日本データバンクとオンラインでつながる、他の場所からの侵入を試みるしかない」

「そんな所があるのか？」

「全く思い付かない。金融系なら強いんだけど、探偵社じゃ想像も付かない」

「じゃあ、駄目じゃないか」

「だけど、一つだけあるんだよ」

竹彦が興奮した眼差しを夏目に向けた。

「ユニオン・システムズだ」

「出来るのか？ そんなことが。だって、ソフト開発企業だろ？

そんなところ簡単にハッキングできるほど甘くないだろう」

「なにも最高機密のデータベースに侵入するわけじゃない。あくまでも中継地点。多分、大丈夫でしょう。だけど見つかったとき大変なことになる。こちらのコンピュータが破壊され、三分後にはパトカー百台が家を囲んでる」

「なんだ、それくらいなら別にいいぞ」

「良くないけどな」

松太郎は画面を操作しはじめた。

ソフトが起動する。

画面上に、いくつものメッセージが現れては消える。読む暇などはない。

「成功」

コンピュータから、鐘の音が流れた。

「でも、ユニオン・システムズの取引先や、提携会社からラインをつなげただけだから、まだ日本データバンクには侵入してない。ここからは時間との勝負。アクセスを切られる前にどこまで覗けるか」

やがて、鐘の鳴る音。

「行くぞ。社員名簿から、沢村桂介の名前を検索」

画面に嵐が吹き荒れたかがごとく、移り変わっていくウィンドウ。

目が回りそうだった。

「来た！ 取り込むぞ」

夏目は固唾を飲んで見守った。

その時、画面が突然赤くなった。

「なんだ！？」

夏目が声を上げると「慌てるな」と松太郎が言った。

その赤い画面に文字が点滅した。その文字を松太郎が読む。

「『あなたは不正にデータにアクセスしています。この回線は強制切断されます』か」

「大丈夫なのか？」

「大丈夫だ。日本データバンクのデータベースから追い出されるだけ。でも沢村桂介一人のデータだから、多分、取り込みは成功したはず。しかも今度は固有名詞を名指してアクセスしたから、俺が侵入した目的が沢村桂介だって、向こうも知ったはずだ」

「教えてどうすんだよ」

「沢村がこれで動くかもしれない。動けば目立つから、発見もしやすくなる。まあ保険だよ、保険」

そう言っただけで強制的に切断され、いつもの画面に戻ったコンピュータを操作する。

「出るぞ。沢村桂介の情報だ」

そこに現れたのは履歴書、経歴書、健康診断書、免許証、その他もろもろ。

「東京渋谷区？ 東京に住んでるのか？」

免許書を見た夏目がそう言った。

「……そうらしいね。そもそも日本データバンクの本店は新宿にある」

「どうする？ 押しかけて吐かせるか？」

「物騒だな、それが警官の言う台詞か。まあ、落ち着けよ。もっと良く調べようぜ」

夏目は画面を凝視した。

そのとき、夏目は違和感を感じた。

「なあ松太郎。この契約書ってなんだ？ 何の契約書？」

「ん？ ああ、これは入居の契約書だ」

「でも、他人の契約書じゃないんじゃないか？ 名前も住所も違うだろ？」

「え？ 本当だ。沢木桂？」

松太郎は顎に手を当てて考え込んだ。

沢村桂介と沢木桂。同一人物だ。間違いない。偽名を使って入居の契約をした。

しかし、なんで？

その時、夏目が恐ろしいことに気づいた。

「お、おい、松太郎、この住所見てみる」

松太郎はそう言われ、住所を呼んでみる。

「あ、これって！」

「梅ちゃんや桜子とおんなじマンションだろ！？ しかも部屋は「409」号室」

「桜子ちゃんの部屋の隣……？」

「隣の部屋に居やがったのか……！」

松太郎が驚愕した。

しかし、驚愕している暇などない。

夏目は松太郎の肩に手を置く。

松太郎が気づいたように夏目を見た。

松太郎が立ち上がった。

「行くか」

松太郎が言った。

「俺は桜子ちゃんの為、夏目は梅ちゃんの為」  
夏目は頷いた。

弾丸のように車をかつ飛ばして、一瞬で問題のマンションにやってくる。

有無を言わずマンションに駆け込んだ二人は最初の壁にぶち当たる。

オートロックの自動ドア。鍵が無ければ入れない。

しかも桜子、梅、竹彦はマンションに居ない。

松太郎は少し迷った後、ぽけっとから鍵を取り出した。

「何で鍵を持ってるんだよ」

「野暮なことを聞くなよ」

そう言って二人はマンションに入っていった。

エレベーターに入り四階を押すと、夏目が言った。

「お前、桜子ちゃんから合鍵をもらうほど、親密になってたのか？」

松太郎は答えなかったが、赤面したので答えは分かった。

四階に付く。

夏目は一目散に、沢村桂介の部屋「409号室」を指して歩き出すと、松太郎に止められた。

「そっちじゃない」

松太郎はそう言っていると、桜子の部屋の鍵を開けた。

部屋を開くと暗闇の中から、つんときな臭い臭いがした。昼間き

た警察官が証拠集めに薬をばら撒いたせいだ。

入っていくと松太郎は明かりを点けなかった。

「静かにしろよ。隣の部屋で盗聴してるかもしれない」

松太郎の言う通り、忍び足で部屋に入っていく。

松太郎がテラスに出た。

「夏目はここにいろよ。お前は警察官なんだから、あんまりやばいことすると問題がでかくなる」

小声で言った松太郎に「何するんだよ」と訊くと「ベランダから侵入する」と答えた。

犯罪だ。

そう思ったが、今回ばかりは止める気にならない夏目。

松太郎はベランダ越しに隣の「409号室」を覗いた。

「明かりは点いてない。いないかもしれないけどカーテンがかかっているから分からない」

松太郎はベランダから身を乗り出し、手すりに足を掛けた。

「大丈夫かよ、おい」

「なかなか緊張するよ」

そうは言うもののベランダの手すりに乗ると、身軽に隣の部屋のベランダに乗り移った松太郎。何をさせても器用な奴だった。

窓を開こうとしたが、当たり前のように鍵がかかっている。

松太郎は窓を必死に覗いて、カーテンの隙間から中を覗いた。

隣の部屋とこちらの部屋を隔てる壁から顔を出して、松太郎が言った。

「分からない。留守かもしれないし、ちょっと早い就寝かもしれない。お前、ちょっと玄関に回って、インターホンならしてきてよ。何だったら、ドアどンドン叩いてもいいからさ」

「……分かったよ」

夏目は言われた通りにした。

「409号室」の前に立つと、インターホンを鳴らした。

確かに鳴ったが、誰かが出てくる様子はない。何度かインターホンを鳴らして、次にどんどんと玄関を叩いてみた。

やはり出てこない。

「やっぱり、留守なんじゃないか？」

そう思って玄関の取っ手をまわしてみると玄関が開いた。

夏目は呆然したが、気を取り直して、玄関に入り込んだ。

真っ暗だ。何も見えない。

見つかつたら懲戒免職。

それが頭の中にぐるぐる回る。

部屋に物はないのは分かった。

全く無い。まるで、まだ誰も借りてない空き家のようだった。

夏目は恐る恐る歩いて、居間のベランダがある窓のところまで行った。

鍵を開けると窓を開いた。

窓を開いて一番最初に見えたのは、逃げようとベランダの手すりによじ登っていた松太郎の背中だった。

「おい、松太郎。中には誰も居ないみたいだ」

そう言つと、松太郎が振り返り、啞然とした顔を向けた。

「なんで、お前が」

「玄関の鍵が開いてたんだよ」

そう言つと松太郎はベランダの手すりから下りて「ん、ん」と咳払いしてから、改めて部屋に入つて行った。

「何を調べるんだ？」

「証拠だ。何でもいい。一つでも証拠が拳がれば、どうにでもなる」

「電気を点けよう」

「駄目だ。見つかる恐れがある」

夏目はそれを無視して電気を点けた。

明るくなる室内。

「馬鹿野郎！」

松太郎が声を上げたが、気にしなかった。

あたりを見渡す夏目。

「まるで空き家だな。何も無い」

「そうだよ。桜子さんの部屋に侵入する為だけに用意された部屋だ。

住むわけじゃない」

「証拠なんて……」

夏目がそう言いかけたとき発見した。

隣の部屋に、中身のばらかまれたバツクがあった。

「これは梅ちゃんのパックなのか？」

松太郎が落ちているバツクの内容物を確認した。

「これは二トログリセリンの錠剤だ。間違いない。梅ちゃんのものだ」

見つけたぞ。

夏目は胸の中で、そう言った。

「十分だ。行こう夏目」

「行くつて、バックをこのままにしておくのか？」

「そうだよ。あ、そうだ。夏目の手の触れた電気のスイッチと窓の縁と玄関のノブの指紋を拭いておかないと」

松太郎に促され、夏目は触れたものをハンカチで拭き取った。

「部屋を出るぞ」

二人は、玄関から部屋を後にする。

通路に出た松太郎が言った。

「夏目、これを」

松太郎が何かを夏目に手渡した。

「沢村の情報が入ったディスクだ。それを県警に持ってけ。それだけの情報があれば、すぐに家宅搜索令状を取れる。そうしたらあのバックを発見して、沢村は見事指名手配だ」

「松太郎、お前はとうするんだ」

「俺は桜子ちゃんの部屋で、沢村が戻つてこないかどうか見張つてる。戻つてきて証拠を隠滅されたらたまらないからな」

松太郎は更に車のキーも手渡した。

「お互い、今夜のデートがおしゃんになっちゃったな。でも、まあいいよな。俺達ほど、いい男はいないと思わないか？ だって女を守る為にこれほど一生懸命になれる奴等は他に居ないぜ」

松太郎がそう言った。

夏目はにこりと笑う。

「俺は一生かけて、桜子ちゃんを守っていくんだ。それが俺の存在意義だ。夏目、お前だって本当は梅ちゃんのこと好きなんだろ？」

「好きだよ」

「え？」

「じゃあ、車ありがとう。後は俺に任せてくれ」

そう言って背中を向ける夏目。

残された松太郎は、啞然としていた。

友達として「好き」ってという意味かな。

松太郎は漠然とそう思った。

夏目は県警に出向いた。

夏目は受け付けなどには口を利かず、そのまま警察内に入っていた。

捜査一課に直行すると、一課のオフィスを覗いた。

目当ての人を発見する。

夏目は名前を呼んだ。

「柘警部！」

夏目が声を上げると、書類整理をしていた男が夏目のほうを見た。中年の小太り警官で、実は夏目の親戚の叔父でもある。警官の職を紹介してくれたのも彼だった。

「おお、柿丸。どうしたんだ？」

そう言って、禿げ上がった脳天をなでながら近寄ってくる。

夏目は敬礼をすると、柘警部が手をぱたぱたさせて「敬礼はいいよ。それより、何？」と訊ねてきた。

「はい、実はある情報を手に入れました。実はあまり合法的に手に入れた情報ではないので、御相談に伺ったんですが」

「何だ？ とりあえず話してみる。こっちこい」

柘警部が夏目を取調室までいざなった。

「いいんですか、取調室なんか使っても」

「空いてるんだから別にいいよ。それより、情報って？」

「実は、もう知っていると思いますけど、伊集院桜子の事件」

「あの発砲事件か。あの時は、お前の大変だったな。ひやひやした

ぞ。お前に殉職されたら妹に申し訳が立たない」

柘は夏目の母親の兄である。

「あの事件で逮捕された安藤。空き巣と強盗の件を否定してるらしいですね」

「ああ。それで？」

「安藤は、確かに空き巣と強盗はやっていませんでした。今日の山田梅の事件も含め、犯人は沢村桂介。日本データバンクの調査員です」

柘警部の目付きが変わる。

間違いない、目の前の男は警官だった。

夏目は説明を続ける。

「このディスクの中に、捜査令状を取れるだけの証拠が入ってます。ただ、これはあまり正式に入手したものではありませんので、柘警部に御相談したわけです」

「もともと捜査一課の情報集めに、合法的なものなんてほとんど無い。気になるな。ただ、どういうことだ？ どこで情報を手に入れたんだ？ 心配するな。俺だってやましい情報源の一つや二つは抱えている」

「いえ、それは言えません。ただ、かなり有力な情報だということ  
は確かです」

「……そうか」

夏目はそのディスクを柘警部に差し出した。

「お願いします。時間がありません。証拠が隠滅される恐れがあります。犯人の手がかりは伊集院桜子の隣の部屋、「409号室」にあります」

「分かった」

柘警部はディスクを受け取る。

「しかしな。お前はまだ半年の新人警官だ。こういう事は、これで最後にしとけよ」

「はい、そうします」

夏目は立ち上がると一礼し、その後敬礼して、柘警部の元を後にした。

夏目の居なくなった捜査一課で、直ちにディスクの参照が行われ、裁判所に令状を求める資料を作り出した。

どこから手に入れたんだ、こんな情報。  
柘は首を傾げた。

翌日。

立川巡査に賄賂を贈って勤務を交代してもらうと、朝早く家を出た。

夏目はまだ行くところがある。

ユニオン・システムズ。

おそらく今回も、沢村桂介が逮捕されようとも、ユニオン・システムズとの関連は実証できないであろう。

沢村桂介の独断の犯行。

それで幕を閉じるだろう。

日本データバンクも、ユニオン・システムズも、知らぬ存ぜぬで通し、沢村桂介が何も喋らなければ事件は再び闇の中だ。

夏目は、新宿にあるユニオン・システムズの本社にやってきた。都庁の並びに存在する背の高いビル。

夏目は立ち入った。

受付に真っ直ぐ歩いていくと、受付嬢に言った。

「会長の伊集院梨男に会いたい。通してくれ」

夏目がそう言うと「アポはございますか？」と聞いてきた。

「ありません。夏目柿丸です。そう言えば分かるはずです」

受付嬢は直ちに言った。

「会長はただいま、海外に出張中でございます。アポイントをおとりになって改めて起こしになってください」

「居るはずだ。昨日、伊集院梨男の自宅に連絡を取って確かめた。通してくれ」

「お帰りにならないのなら、警備員を呼ぶことになりましたが」

「俺は警官だ。いいから、その電話で夏目柿丸っていう男が来たけど、どうするか聞いてみる」

二人の受付嬢は、不審そうに顔を向け合った。

受付嬢は受話器を取ると、内線で何処かに連絡を取った。少し話した後、顔を上げて夏目を見る。

「ただいま、担当の者が来ますので、あちらのソファアでお待ちください」

また、担当の者が。

仕方なく、巨大なホールの中にある無数のソファアの一つに腰を掛けた。

十分ほど待った。

やってきた男は、長身の中年だった。ただ、それなりに気品があり、紳士的な雰囲気纏っていた。

「夏目様でございますか？」

夏目が頷くと、その男はにこりと頷いて「会長がお会いになられるそうです。こちらへどうぞ」と促した。

会長は夏目の名前を知っているはずだ。桜子の周りに居る人間、松太郎、梅、竹彦のこと事も事細かに調べられて居るはずだった。

しかし夏目は、こんなふうに行くとは思っていない。会長がお会いになられるそうです。

嘘だ。俺などに会うわけが無い。

最初から会長に会えるなんて思ってない。ただ夏目がやってきたことを示せばそれでいい。

長身の男に付いていくと、エレベーターに乗せられた。

油断はならない。

この企業は、人をゴミのように殺す人間がいる。安藤や松太郎が殺されそうになったように、夏目もここに踏み入れた以上、安全だとは言えない。

「小僧、お前は一体何者だ？」

紳士的だった長身の男が突然豹変した。

「お前なんかの来るところじゃない。今すぐ引き返せ」

据わった目でそう言った。

夏目はエレベーター内で長身の男と対峙する。

「何の目的か知らないが、お前が考えてるほどここは甘くないぞ」

「俺がやってきた目的は分かっているんだろ？ ただの一般市民相手なら、そんな台詞ははかない」

「……確かに知ってる。本当に命が要らないようだな。悪いが、この先に行けば、お前がこのビルから生きて出ることはない。最後の忠告だ。出て行け」

「出て行って欲しいなら、自分でエレベーターを止めて、襟首掴んで放り出せばいいじゃないか。あんたは誰かにそう言えって命令されてるんだろ。俺を脅して真意を確かめろって」

夏目がそう言うと、男はしばらく夏目のことを睨み付けていた。

ところが出し抜けに笑顔になると「そのとおりです」と言った。

「お察しがいいようですね。さすが、のこのこと恐れもせずこんな所に顔を出すことだけはありますな」

気味の悪い奴だ。

夏目がそう思うと、エレベーターが四十二階で止った。最上階だ。エレベーターが開くと、ただっぴろい空間。何も無い。窓しかない。「ここは、まだ使用されていないフロアです。それでは、ここでお待ちください」

そう言い残すと、長身の男はエレベーターに乗って一人引き返していった。

戸惑う夏目。こんな所に一人残してどうするつもりなのだろう。

確かに人知れず暗殺を行うには都合のいい場所だ。そう思ったとき、ちん、とエレベータがこの階に到着した音がした。

エレベータが開く。

出てきたのは一人の中年男。

顎に立派な髭を貯え、厚い胸板を張りながら優雅にエレベータを下りてきたのは、紛れも無く伊集院梨男、本人であった。

会長が口を開く。

「何を驚いてる。お前が私に会いたいと言ったのではなかったか？」

夏目は絶句して言葉が出なかった。

どうして……。

「私も忙しい。言いたいことがあるのなら手短かに頼む」

夏目は圧倒された。

予想外だ。本人が登場するなんて反則だ。

夏目のくびるは、わななくばかりで言葉を発しなかった。

伊集院梨男会長は、やれやれと口を開く。

「ここまで来るからには、どれほど度胸のある男かと楽しみにしてたんだがな。興ざめだな」

会長は夏目に背を向ける。

ま、待て。

声に出ない。

最後のチャンスだ。これを逃したら、二度とは会うことが出ないだろう。

「伊集院梨男会長」

かろうじて夏目がそう言った。

ゆっくりとした動作で振返る会長。

「俺は、ここに警官としてやってきたわけではありません」

そういう夏目を、物言わず見ている会長。

怯みそうだ。

ひれ伏しそうだ。

夏目は腹筋に力を入れて声を振り絞った。

「あなたが、日本データバンクを通じて、娘さんの素行調査をなさっているのも知っています。そして当然、私のことも存じていると思います」

会長は答えない。ただ、その場に構えて微動だにせず、眼光を夏目に向けている。気を抜けば、すぐにでも頭が真っ白になりそうだ。「あなたの身内である、建設業者の榎木組による安藤桃平と倉本松太郎の殺人未遂事件で、日本データバンクとユニオン・システムズの関連は明らかにされなかった。更に沢村桂介による伊集院桜子の国立公園での強盗と空き巣の事件でも、日本データバンクとユニオン・システムズとの関係は明らかにされることはないでしょう。だけれど俺は知っている。あなたとこの事件の関連性を知っている」

そこまで言うと、会長は初めて口を開いた。

「知っているからなんだ？ いつか私を逮捕するか？」

「……分かりません。正直、私にあなたを糾弾できるほどの力を持つことが出来るのかどうか。だけど、俺は許せません。俺の友人、松太郎を暗殺しようとし、それから山田梅を……」

会長は据わったままの目で言った。

「君は一体ここまで何をしに来たんだ？」

何をしに来た？

そうだ、俺は何をしに来たんだ？

そうだ。思いだした。

「俺はあんたをぶん殴りに来たんだ」

会長は、にやり、と笑った。

「私を殴る？ それは大きく出たもんだ」

「あなたは常軌を逸している。娘を月の半分も素行調査するなんていかれてる。娘さんだって一人の人間だ」

夏目は、一步前に出る。

「桜子さんは何も知らない。実の父親が自分の子供の父親を殺そうとしたことも、松太郎を殺そうとしたことも、梅ちゃんをあんな目に合わせたことも、何も知らないんだ。あんたはそれを娘に知られたとき、なんて答える気だ？　これが父親の愛だって言って利かせる気か？　娘を心配した結果だと、そう言うつもりか？」

「娘のことを、お前にとやかく言われたくないな」

「あんたは一体、沢村桂介に何をさせたかったんだ？　強盗や空き巣のようなまねをさせて、実の娘に対して何をしたかったんだよ」

「なんの話が分からないな」

「あんたは自分のやってることを、本当に正しいことだと思ってるのか？」

「正しいこと？　そんなくだらないことを言いに来たのか？」

「そうだ。あんたは間違ってると言いに来た」

「私は間違ったことをしてるとは思わない」

「そうだ。あんたはそういう人間だ。言っても分からない」

「だから殴って聞かせるか。なめられたもんだな」

「そうだ」

夏目は拳に力を込めた。

「一つ訊くが」

会長が言った。

「お前はここに来て、命の心配をしなかったのか？」

「命の心配？」

「警察官なら、この会社の裏側を知っているだろう。無事に帰れると思ったのか？」

「言っておきますが、俺は有力な情報を持っているし、ここに俺がやってきたことを知っている人間もいる。どうということなのか、分かりますよね」

「……呆れたヤツだ。やはりお前のは勇気じゃなくて無謀だ。何の策も無い。そんな脅しで、この伊集院梨男がひれ伏すとも思っ



夏目は驚愕とし、さらに喉が詰まってぐうの音もでなかった。

「私の妻は先代の娘でな。人脈で言えば私など足元にも及ばない。私は会社にとつてただのお飾りさ。つまり私になど、何の力もないんだよ。この会社を支えているのは間違いなく妻の力だ。分かるか？」

「つまり……ハッキングを助けたのは、あなただと？」

「わざわざ道を開いてやったんだ。もしかしたらおまえ達が妻を懲らしめてくれると思ってな。だが、やはりむずかしかったか。私も出来る限りで娘を守っているつもりでいるが、限界がある。松太郎君か。私は彼が嫌いではないよ」

伊集院梨男会長はそう言っつて背を向けた。

夏目は呆然とそれを見送る。

エレベータのボタンを押した会長は、最後にこう言った。

「もし、おまえ達がそれでも真相を暴くつもりがあるのなら、全力で努力するといい。きつとどこかの誰かが手助けしてくれるかもしれないからな」

エレベータが付く。

それに乗り込む伊集院梨男。

扉が閉じ、下降を始める。

やがて長身の男が現れて声を掛けられるまで、夏目はそのままその場に凍り付いていた。

夏目はその後、病院に訪れた。

梅の病室の前に来ると、昨日と同じ位置に竹彦の姿があった。ずっとそこに居たのだろうか。

病室には入っつていいのだろうか。

「今は誰も居ないよ。入りたきゃ入りな」  
竹彦がぼんやりとした顔でそう言った。

眠ってないのか。

夏目は病室をノックした。  
もちろん誰も返答しない。

病室に入ると、すぐに横たわる梅の姿が見えた。

梅は、いたるところに管を通されている。人工呼吸器は枕の脇に置かれていて、今は自力で呼吸をしているようだ。

「まだ目を覚まさない。詳しい検査は今日の夕方からやるんだって」  
振返ると竹彦が入り口に立っていた。目に隈を作っている。

「眠ってないんですか？」

「少し眠ったよ」

夏目は梅を見る。

眠っているかのような顔。血色は良く、少し肩をゆすれば、眠たそうに目を覚ましそうだった。

夏目の手がぴくり、と動く。おもわず髪の毛に触れそうになって、ためらったのだ。

苦しかったか？

夏目は胸の中でそう尋ねる。

梅は答えない。

目を覚まさないかもしれない。目を覚まして、前の梅は戻ってこないかもしれない。

夏目は居たたまれなくなった。

「もう帰るの？」

「様子を見に来ただけだから」

「もうちょっと居てあげればいいのに」

夏目は答えなかった。

梅を助けてあげて。

竹彦が昨夜にそう言った。

でも、俺にはどうしていいかわからない。

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1593f/>

---

逆転のカプリッチョ！

2009年7月4日06時00分発行